
その少女破門者につき

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その少女破門者につき

【Nコード】

N02700

【作者名】

友絵少尉

【あらすじ】

中学一年の達也は交通事故に遭ってしまい、不思議な異界“ゲルマティア”へと堕ちてくる。怪物に襲われていたところを謎の少女、アヌークに助けられる。達也は、アヌークに訴える。兄である川上徳人の絶望の未来を、この異界に来て見てしまったのだ、と。達也は彼女に徳人の未来を変えてほしい、そう懇願する。一方、川上徳人は現代の神奈川県の中二生として学校生活を送っていた。全寮制の学校だ。その夏、徳人は実家に帰省せず、男子寮に居残った。達也をいじめていた仇、一年坊主の柳本に復讐を果たす為である。

ある夜、アヌークが徳人に会いに来る。達也との“約束”を果たすために……。

1、異界（前書き）

このお話は、第18回電撃小説大賞に応募した作品に、続編を加筆、修正して掲載していくものです。初めての掲載は、2010年9月のこととなります。落選した作品ではありませんが、みなさまからのご感想をいただきたく、再度掲載させていただくかたちとなりました。ご感想などいただければ、筆者としては最高の喜びです。

1、異界

杉浦達也は、霧に煙る岸辺を逃げまどっていた。

左手には霧の立ちこめる大海が　水平線の彼方まで白いガスに覆われ　海風にあおられていた。よどんだ霧と、波の音がたゆたっていた。

右の内陸には、どこまでも廃墟の大都市がひろがっている。

それは古代ギリシャ神殿の列つらなりに見えた。

白い巨石でできた列柱の数々はさながら墓標だった。白い廃都、だった。

杉浦達也が廃墟の陰に隠れようとするたび、？そいつ？は遥か天空の高みから、脚をふりおろしては、達也を踏み殺そうとしてくる。列柱をなぎ倒す。

脚に蹴られた土砂と巨石が空に舞う。

脚は、太さのちがうふたつの骸骨で組まれていた。脚の裏は家一軒を潰せるおおきさだ。

その脚が六本、地面にゆっくり、交互に降りたつ。

そのたび砂浜に大地震がおこった。

達也の、中学一年の小柄な体が地響きの奔るたび、嫌でも飛びはね、翻弄される。

？宙そら高く、あまりにも長すぎる脚？だった。

高さは数百メートル？　見当もつかない。

そいつの本体は宙の白い雲から底面が見えた。骸骨の脚に支えられた宙の島、とでもいえばいいのか。宙にたれこむ雲をかきわけ、達也を追ってくる。島の表面にはいびつな突起物や動物の腸のような触手が垂れさがっていた。腐ってでもいるのか、つぎつぎと島から千切れ、落下してくる。

？ウオオオオオオオオオオオオウウウウウウオオオオオオオオオオオオンンンンンンンンッ？

動物の鳴き声とも、機械の発するハウリングともちがうなにか、異様な雄叫びが空に満ちる。

咆吼をあげながら、前脚を達也の真後ろに打ちおろしてきた。雷鳴の轟いたかのような、頭をつぶれそうな音に満たされる。

達也は聴覚がきかなくなった。

ただ悲鳴を上げていた。走る足が砂地のせいで思うように運ばない。

頭上、気配がした、巨石だ、脚に蹴りあげられた巨石のかけらが達也の眼前に落下してきた。

押しつぶされる寸前、身を翻し、なんとか避ける。勢いあまつて転倒した。そこへ。

人の声が聞こえてきた。

達也の名を呼ぶ声が。

声は近づき、次第に明瞭になってくる。

ギウラッ ツヤ・スギウラッ 廃墟のほうから聞こ

えてくる。

「 タツヤ・スギウライま助けるゆえ案ず

るなっ

た。 凜と響く声、少女のけれど猛々しい戦士の声音が空から降ってきた。

その少女は、蒼白い光り輝くオーラ？ 全身に光を帯びていた。

達也の眼前に舞い降りてくる。音もなく砂地に、ふわり、着地した。恐怖に体のすくんだ達也を抱きとめる。

骸骨の脚が、いまふたりを踏みつぶそうと関節をおおきく曲げ？

タメ？をつくる。

脚の裏についた砂がふたりに降りかかる。一気に脚を降ろしてきた。 た。

少女は、唱えた。瞳で巨大な脚を睨めつけながら未知の言語で

我、父祖の名に於いて汝等を浄霊せんと欲する者也
汝等、カルマに絡め取られしゲルマティアの子等
其の荒ぶる魂魄、其れ則ち英霊たる事を思いだせ
其は英霊也、其は英霊也、其の敗亡の英霊に幸いあれ

少女の肩までくらしいの髪が逆立つ。両の瞳に蒼い炎が宿り輝いた。ふたりの頭上、雲海に衝撃波が奔る。雲が逃げるように化け物の本体から退いてゆく、遙か宙の高みに舞いあがる、化け物の周囲にだけ雲海に穴が開く。直後、宙から真つ白い？光？が降りそそいできた。光が何百メートルもの化け物全体を包み込む。巨体に無数のひび割れが走つてゆき 上空の？島？は、ごそり、ついに真つ二つに割れた。海辺で子供等のつくった砂の城が、波に洗われ脆くも崩れゆくように、一挙に大地へ巨大な質量が崩落してくる。

達也は少女の腕の中、目をつぶり悲鳴を上げつつづけていた。

少女は、パニックになっている達也を軽くもちあげ、跳んだ。蒼白い光を足下に集中させて、ふわり、中空を優雅にスキップするかのよう跳んでゆく。

化け物をかたちづくる島の本体が崩れる、触手が千切れる、脚の骨組みが折れる、そのそばから砂塵となって、地上に降りそそいでくる。

少女の跳躍は自由落下になり、音もなく静かに廃墟の中に着地した。

列柱の巨石の陰に隠れ、砂の奔流をかるうじてやりすごした。

達也は少女に抱きしめられて、震えながら砂嵐の洪水を見ていた。食い入るように見ていた。

口の中に入った砂を吐きだす。抱きしめられたまま、時がすぎた。いった。

やがて、砂煙はやみ始めた。

……… タツヤ・スギウラよ……… 耳元で自分を呼んでる声がする。
でももうダメだ、もう、疲れちゃった………。
達也は眼を閉じ、意識を手放していった。

夢。達也は、いつしか夢のまどろみのなかにいた。

この異界を彷徨っていたときの。

この異界に落ちてきたときの記憶を。

車に轢かれた瞬間、気づくと自分は廃墟の列柱に寄りかかって
たのだった。

訳もわからず、どれくらい廃墟の中を徘徊したのだろうか。喉が
渴いてしょうがなかった。やっと海辺にたどりつくことができた。
海。潮水。かまわなかった。

手ですくって何度も飲みほした。

水は透きとおり冷たく、なんの味もなかった。

けれど、渴きは不思議なくらい、退いてくれた。

退いた瞬間、見えたのだった。

兄の、大好きな兄の未来が脳裡にくつきりと見えたのだった。
破滅の未来が。

達也は泣き叫んだ。泣いているうちにやがて、あの化け物が
。

「
」

達也はうなされ悪夢から目覚めた。

不思議と汗のひとしずくもかいてはいない。夢を見ていたのはほ
んのわずかの時間だったのか、わからない。この世界は時間が死
んで、そう思った。廃墟の石畳に寝かされていた。

すぐかたわらに少女が、ちょこん、と座っている。

達也は、見つめた。

少女はオーラを消した。その光は、すうつ、と少女の体に吸い込まれるように消えていった。静かにこちらを見つめ返してくる。歳は中一の自分とおなじくらいか？

白い肌、蒼い瞳　凜々しい瞳は、だからオーラの蒼い輝きを圧倒するほどにうつくしい。

「……………あの、ありがとうございました……………」

ニユーヨーク Yankees のキャップを脱いで頭を下げる。

T シャツの砂を手で払う。息も絶え絶えになんとか礼をいった。

「なに造作もない事よ、憐れな砂の塊を浄霊してやったまでのこと」

「砂……………かたまり……………」

「うむ、奴の名は？天を衝く脚長き者ども？その亡霊が砂で身を造つたに過ぎぬ、滅亡した種族だ、生きていたころの本物に出くわしておれば、我等は今頃無事ではなかったであろうな」

「ここはいつたい……………どこなんですか……………天国、地獄……………」

「いずれにも非ず、この世界の名は、異界？ゲルマティア？である」

少女は左手で耳元の髪を　白く輝くプラチナブロンドの髪の毛を　かき上げた。

「タツヤ・スギウラよ、貴様大海の水を飲んだのであろう」

「……………はい、喉が渴いて、飲んでいたら僕、見えたんです……………？未来？がっ」

「であろうな、大海の水には未来絵図を脳裡に呼びさます効能があるゆえ……………見たのだな？」

達也は、真実を語り出した。自分が七月の日本で車に轢かれて？この異界？にきたことを。

「貴様が事故に遭ったこと、わたしはすでに承知しておる、誰の未来を見たのであるか」

達也は、見たことすべてを話し始めた。

兄の未来になが起きるのかを。

少女は、ほそい腰にあてがっていたふたつの腕を、やがてゆたかな胸の前で組んだ。じっと、達也の話に聴きいていた。いくつか

質問をさしはさみ、ふむ、とうなずき、唇を切り結んだ。

「 斯様な下賤の男ども、断じて赦すわけにはゆかぬ、されど貴様の兄も相当な愚拳に打って出るとしかいいようがないぞ」

「はいっ、だからどうか、のり兄ちゃんの未来をかえてあげることはできませんかっ？」

「タツヤ・スギウラ、貴様はこの異界からは、亡霊となって現代のニッポンにもどるほか無いぞ、それもわたしに使役される亡霊となつてな、否やは赦されぬぞ」

達也は立ちあがった。

ありつたけの力をこめて、神々しい少女を見た。

「もどれるんなら、日本に、僕、なんでも、なんだつてしますっ」

そういつて、兄、徳人の未来をまた想いだしてしまっ、涙があふれだす。

Tシャツの裾で乱暴にぬぐった。

「……兄弟をして、憐れなるかな」

少女は、ぼつり、つぶやいた。

2、八月八日

ぶつ殺してやるぞ、そうともひとり残らずだ、みんなたたつ殺してやる、川上徳人は思かわかみのりとった。

ケータイの学校裏サイトには、自分はもとより弟への残酷な書きこみが集中していた。

《254 男子くん：川上の弟、一年坊主の、あのザマはねーわ》

《255 男子くん：だよ、エロ本万引きで植物人間とかありえないですよー》

《256 女子さん：先月の事件でしょ？ 店員ともみあいになって階段から落ちたつてのはマジ？》

《257 男子くん：あれはガセ、真相は店員に追っかけられて赤信号突入、車に跳ねられて今病院》

《258 男子くん：ヤナちゃんにいじめられてたッス、万引きもやらされてたッスw》

《259 男子くん：てめー一年か？ ヤナちゃんとか誰だ？》

《260 男子くん：こいつだよ柳本つて奴、デブヤナの息子》

早速携帯から撮った写真がアップされている。

徳人は睨みつけた。携帯に映る奴の顔を。父親の威光を盾に暴れる一年坊主を。

《261 女子さん：わー！ ふつーにイケメンなところが逆にムカつくんだけど》

《262 女子さん：背も高いし、格闘キックやってて成績もイイ、でも友達の話だと性格はキモいって》

《258：そーそー、どっかおかしっていうか、フツーじゃないッス、ワルッスよw》

《264 女子さん：そういえばデブヤナの息子が入学してきたつて聞いたことあつたなあ》

《258：俺ら一年のあいだでは噂ひろまってるッス、ヤナちゃん

の手下の坂野がさ、兄貴の徳人がショックで自殺しねーかなって学食で笑ってたらしいツス㍻

徳人の呼吸がだんだんと荒くなってくる。携帯をもつ手に震えが走り始めた。

《266 男子くん：ああ川上徳人ね、弱小野球部の万年ボロ負けエースだろ》

《267 男子くん：川上の奴はわりと背が高いし気が強いからな、その一年坊主と全面戦争だな》

《258：したら、デブヤナが黙っちゃいないツスよねー㍻》

《269 女子さん：話題かえるけど、あの兄弟さ、なんで名字がちがうのかなあ》

《258：親が離婚したツス、すげー金持ちツスよ、親権争いで名字がバラバラ㍻》

《271 男子くん：なに？ その絵に描いたような不幸臭》

川上徳人は深呼吸した。奇妙に落ちついた動作で携帯をベッドサイドに放り投げる。

徳人が中等部の男子寮にダシムシヨ寮生たちは刑務所に例えて呼んでいた。帰寮したのは、夜七時の門限ぎりぎりだった。寮監や教師たちから弟のことで気遣いの言葉をかけられた。

徳人は上の空で礼をいって、二年生の個室の並ぶ二階へと上がった。きたのだった。薄闇に包まれた、六畳ほどのフローリングの個室。出窓からは神奈川の丘陵地帯の澄んだ夜空が見えた。

ベッドの上に身を投げだしていた。

うつろな目で八月のカレンダーのほうを見る。

今年の実家に帰省はしない。あのひろい家に帰っても、ひとりつきりになってしまふからだ。両親は、忙しく仕事で海外を飛びまわっている。タツが事故に遭ったというのに、ふたりとも国際電話を寄こして、それからカネを徳人の口座に振り込んできただけだった。冷えきった、家族。

そして 一階にヤツが、柳本の野郎がいる。ヤツも徳人同様、

寮の居残り組だった。

居残り組は中等部男子全体でどのくらいだろうか。

十数人くらいだろうか？

周りに邪魔されない、またとない、復讐のチャンス、絶好のときじゃないか、徳人は思った。

ポケットから指にはめるリングタイプのおメダイを出した。杉浦達也のはめていたリングだった。おメダイとは、フランス語の記章メダールの訛ったものらしい。キリスト教徒の証だった。ミッションスクールではメジャーなマストアイテムだ。

神なんかいない、確信した、だから眠っているタツの指から外してやった。掌の中でリングをにぎりしめる。

携帯が鳴りだした。誰だろうか。ぐったりとした仕草で携帯の液晶表示を見る。

弟から。杉浦達也の携帯からの着信だった。

瞬時に体をおこす。

「タツッ？」

『のり 兄ちゃ っ 兄ちゃ 』

まちがいない、タツの声だ。

ノイズがひどい。どっから通話してきているのか。病院のはずだろっ当然。

意識が快復してくれたのか、タツ？ 徳人はこの瞬間、すべての怒りを忘れることができた。

「おまえ意識もどったのかっ？」

『心配かけ ごめ 、ご さい』

「バカ、おまえが謝ることなんてねーし、いま病院か？」

『ち うよ、いまそっち 向かっ 』

よかった、マジでよかった……徳人は心の底から叫びだしたい気持ちをおさえた。

「すぐ迎えにいくかな、待ってるっ、な？」

『だい よぶ、いま寮に っと着い 』

「マジかつ」

そのときだった。

部屋の天井が爆発したように穴が開く、木材が落下する、人ひとり、穴から木材といっしょに転がり落ちてくる。

衝撃でデスクの上に飾ってあった、一ノ一四四スケールのガンダムのモビルスーツのプラモデル？ガンイージ？がぶっ倒れた。

落ちてきた小柄な人物は、ベッドにいた徳人の上に馬乗りの格好となってしまうた。

少女、だった。蒼白い美しい光につつまれた少女。

聖ユリスモール学院女子部の夏の制服を着ている。薄い縞模様の入った上品なブラウス、あざやかなオレンジ色の紐状のクロス・タイが襟もとに、プリーツスカートの色はソフトグレイ。徳人が在籍する学院の女子部のほうの制服だった。神奈川県下でも有数の名門校だ。

ちなみに少女のひろげた両脚のあいだから見えたものは 徳人の目前にあるのは 清楚な白と青のしましま模様だった。

「っ……迂闊であつたわっ、空挺降下にこうも失敗するとはっ」

白人の女の子はそう怒鳴ると、両の太腿を 白くなめらかで無駄な肉のない、けれど見事な脚線美を 急ぎ閉じた。

「ノリト・カワカミよ、タツヤから貴様に電話であるぞ」

杉浦達也の携帯だった。

馬乗りの姿勢で、ぐい、と腕を突き出してきた。

徳人は受けとつた。清楚なしましまの残像を振り払い、訳もわからず耳にあてがう。

「もしもし……」

『のり兄ちゃんっ、時間ないから先にいうね、ごめんなさい、ぼくのせいでごめんなさいっ』

「……タツ、なあおいタツッ」

さっきよりもはるかに鮮明な声で通話が聞こえた。

徳人が上半身を跳ね起こしたせいで、乗っかっていた彼女が、こ

てん、とベッドから落ちた。

『のり兄ちゃん、アヌークの話聞いてあ、げて……お願い……おね、が……』

タツツ、おいタツツ、徳人は何度も弟の名前を叫んだ。

携帯は切れてしまった。

「おいアンタさ、いつたい、こりやなんなんだっ」

少女　アヌークという少女は白い光を体に吸収するようにして消した。

徳人を無視して、部屋の隅にある小型冷蔵庫を開けた。

ミネラルウォーターの五〇〇ミリボトルをとりだす。

「おい聞いてんのかよっ」

アヌークは、フローリングの床に水を撒きだした。

「ふんっ、これぐらい撒けばよろしかろう」

「てつめえ、いつたいなにやがんだっ」

「タツヤの魂はいま、？天界？に封印され眠っておる、招喚するためには水が必要なのだ」

「……………テンカイ？　たま、しい……………」

「いかにも、タツヤの魂を現世に甦らせる代償として、タツヤと使役の契約を交わしたのだ」

「……………どうゆう意味だよ？」

「うむ、いま見せてくれようぞ」

ペットボトルを下におくと、両の掌をお椀の形にする、徳人の目の前にさしだす。少女は、思念を集中して招喚の使役命令を発した。両掌の中で？光？が輝きだす。

それは蒼く、白く、うつくしく光り、瞬いた。さきほど少女の体をつつんでいたのとおなじ色だ、ちがうのは光る強さだ。圧倒的に澄んだ輝きだった。

暗がり沈んでいた部屋は、蒼く、白く、透きとおる幻想的なところとなった。それは野球のボールくらいのおおきさの、けれどテレビの宇宙特集で見たことのある超新星爆発の、天空に君臨する美

しさだった。

「これこそが我が使役霊の一種？守護霊シユルビ？と化したタツヤ・スギウラの魂である」

徳人は、目の前の光と、それに匹敵するうつくしさをたたえる少女の蒼い瞳を見比べた。

「……………女神様？」

ぼそりとつぶやいた。

「ええい、まっこと不愉快な、ヒト（人類）はおしなべて尋常ならざる怪異を目撃すれば、やれ神だの、悪魔だの、世迷い言に逃避するものよ」

アヌークは苛立ちもあらわにいった。

？……………っ？

それは、達也の声だった。心に響く、ちいさな声。

のり兄ちゃん、つらいだろうけど、アヌークといっしょに乗ってきてほしいんだ、僕も守護霊の力で助けるから……………いつも、いつでものり兄ちゃんの幸せを祈ってるから……………。

「タツ？ タツおまえ……………おまえはつらくねえのかよ？」

？ っ？

……………僕ならだいじょうぶだよっ、元気そうにそう答えてきた。

「心配無用、天界は天国と同義、しかも守護霊は、あらゆる苦痛も絶望も跳ねかえすゆえな」

徳人は、光に 達也の魂？ おずおずとふれてみた。

「なんだよ、すんげえあつたけえ」

光にふれた手の先から体がぬくもりに包まれた。

「であろうな、守護霊には肉体の損傷を治癒する力が宿るものなのだ、いまの貴様は疲れ果てておるゆえ、治癒の効果が働いておるのだ」

「なあ、タツと、タツとケータイで話をさせてくれよっ、これじゃ声がちつちえーしっ」

「無理を申すな、現世においてあれほど明瞭な会話を幾たびも交わ

せば、タツヤの霊力が瞬く間に衰えるゆえな、ではタツヤを封印し直すぞ」

達也の光は少女に？封印？されて消えた。

「タツのやつ、天国に？……じゃあタツの……病院にいる体のほうは……？」

そのとき、外の廊下から足音が聞こえてきた。あわてて走ってくる音だ。

少女が廊下を覗む。

足音は徳人の部屋のまえで止まった。

「川上くん、おるんかねえっ？」

寮監の声だ、ドアを激しくノックしてくる。

ドアの開かれる直前、アヌークが徳人の手を引いてベッドのなかに潜り込む。

「おい、どうしょ？」

「電気をつけさせるな」

ふたりはタオルケットのなか、密着してささやきあった。

ドアが開く。寮監がひとり、暗がりのなか突っ立っている。

「川上くん真っ暗だよ、電気つけるよっ」

寮監の老人は手探りで壁のスイッチを押そうとした。

「あ、あのおいちゃんっ、ごめんっ、いま彼女が部屋にきてるんだっ」

「っ、こ、このうつけめ、誰が貴様の彼女であるかつ」

アヌークが貌を真っ赤にする。

寮監のおいちゃんは、顎の外れたように口を開けた。

「川上くん、その、なんだ、寂しい気持ちもわからんではないがのう、寮の規則がのう……」

「……ごめん、おいちゃん」

タオルケットをかぶったまま、謝った。

「ま、まあとにかく、一大事じゃっ、達也くんが、弟くんが病院から消えたんじゃよっ」

「っ、マジかよっ」

この女神さまがタツの体をどうにかしたにちがいない、直感で思った。

「いま警察が捜しておるから、君は寮で待機してしてくれんかね」
寮監のおいちゃんが念を押した。薄い頭髪をなでながら、ドアを閉める。

廊下を歩きさる音が徐々に消えていった。

「なあアンタなにしたんだよっ？」

「よいから離れるこの色欲外道っ」

アヌークが、密着していた徳人をベッドから蹴りおとした。

「痛えっ」

彼女のほっぺたはまだ赤い。恥じらいを隠そうとしてか、態度がいつそう高飛車な感じだ。

「なあ女神さま、アンタの仕業なのかよっ？」

「うむいかにも、わたしは現世で己の肉体を喪い困っていた、そこへタツヤの交通事故に出くわしたのだ、わたしとタツヤの魂は？あの世？へと昇った。そこで契約を交わしたのであるぞ、交換条件だ、タツヤは我が守護霊となり現世にもどれる、その代償として病院の体をわたしに差しだすこと。わたしのこの体は、タツヤの体に乗っ取って造りあげたのであるぞ」

「……………そんな、ひでえよ、あんまりだ、ひどすぎるよっ」

「契約をせねば、タツヤは遷延性意識障害を患いつづけていた、回復の可能性はゼロであった」

「そんな、なんだよ千年意識障害って、人間千年も生きらんねーてっ」

「うつけめ、遷延……………もうよいわ」

徳人は体を震わせていた。やがて、意を決したようにアヌークに面と向かった。

「頼む女神様、俺の、俺の体をやっから、だからタツの魂と体を返してやってくれっ」

頼むっ、そういつて床に額をこすりつけ、渾身の土下座をした。

「無理であるノリト・カワカミよ、魂と体は相性の問題を避けては通れぬ、タツヤとの相性は最良であったが、貴様の体に乗っ取れば、たちどころに壊死が始まるであろうな」

「……なんだか知んねーけど、アンタ……女神様じゃねーんだな」
「うむいかにも」

「ならてめえはただの悪魔だっ、タツを返しやがれええっ」
アヌークにつかみかかった。

「ええいつ、なにをするか下郎めがっ」

小柄なアヌークがパンチ一発、徳人をダウンさせた。

3、八月九日

川上徳人はまどろみのなかにいた。心地よかった。

夢だ。昔の夢。自分とタツの幼いころの夢。オヤジもオフクロもまだ仲がよかったころ。

兄弟で遊んだ、ちいさな公園。夏の夕暮れ。

やさしくなでられていた 誰の手だ？ タツじゃないぞ、徳人はいぶかしんだ。それはちいさな、やわらかい手だった。とてもよい香りがする。

…… 会話をしてる、タツと女の子が。

「…… タツやだいじょうぶ？ ごめんね、うん、わたし絶対、約束は守ってみせるからね……」

女の子の、声。それも、悲痛な？ なんなんだろう？ ちいさな手をつかもうとした。

手は、すぐに引っこめられた。

ベッドのなかで徳人はおおきくのびをした。不思議なくらい爽快な気分。

なぜだ？ あれほどあつた殺意が、無い。

どいつもこいつも死んじまえ、そう思って自暴自棄になっていたのに…… 弟があんな事故に遭ってしまい、寝たきりの状態になってしまったのだ。

ところが突然女の子が。

ベッドから飛び起きた。寝ぼけ眼で周りを見る。

自分の寮の部屋だった。

少女がダークブルーのチェアにちょこんと正座していた。

デスクを、どかんつ、ど派手に後ろ脚で蹴っ飛ばして、チェアをくるりんと一回転させた。上質な椅子であるな、といってまたデスクの足蹴りでくるりん回転。

「やっと起きたか、自堕落な奴めが」

回転をとめて、威勢のよい声を張った。

徳人はじつとアヌークを見た。

きのうのこと、夢じゃ、無かったんだ、そう思う、タツの
声が脳裡をよぎる。

おい、悪魔、そういおうとして徳人は口ごもってしまった。

目の前で椅子に正座して、くるりん、とまわる少女は……超かわ
ゆかったからだ。

「なあ、おまえスクープ？　つつたっけ？」

「アヌークだっ、一字も合っておらぬわ、使役霊憑けるぞこのお
うつけめがっ」

しなやかなほそい足でデスクを一発、思いつきり蹴りつけた。彼
女は反動で何回もくるんくるん、椅子の上でまわりまわった。

「おまえ、タツを封印し直すとかいってたけど、あいつはいまどう
してるんだよっ」

「案ずるな、わたしの精神世界と通じた天界で安らかに眠っておる
ゆえな」

？　のり兄ちゃん、つらいだろうけど、アヌークといっしょに乗
りきってほしいんだ？

きのうの夜のタツの言葉を鮮明に思いだした。？のり兄ちゃんの
幸せを祈ってるから？……。

……この運命を受け入れろ、そういうことなのか？　達也は植物
状態のままか、この悪魔？　本人は否定しているけれど、こいつの
シエキレイ、とかいう幽霊の状態になるしかなかったってことらし
い。その幽霊は？　守護霊？　であって、タツのヤツ、いじめからも、
寝たつきりの状態からも、一切の苦痛からも、いまはもう、解放さ
れているってことになるのか？　。

「俺さ、アヌークに、礼をいわなきゃいけないのかな？」

ベッドサイドに座りなおした。

「なに、礼には及ばぬ、タツヤと契約したまでのことである」

「弟……達也を、救ってくれたって、思っくいんだよね？　俺、

これからいつでも会いたいときにタツに会えるのかな？ アヌーク、
会わせてくれるよな？」

彼女は、なんともいえない、いままでの傲岸不遜な表情からなにか、そう、あからさまにうるたえた、そんな表現のふさわしい表情をうかべた。

「アヌーク？」

「……うむ、案ずることはないぞ、いつでも会わしてくれようぞ」「よかった……」

心の落ち着きをひとまずはとりもどせた。

天井、天井のことを思いだした。アヌークが空から降ってきて、ぶつ壊された天井。

上を見ると、見事に復元されてあった。まっさらな状態になっている。

「天井が、なんでだっ？」

「うむ、感謝いたせ、我が使役霊の一種？サタノフアニ憑依霊？を使い修復させたのだ」

「スゲ、アンタそんなこともできちゃうのか、なんだってなおせちやうのかよっ」

「そうもゆかぬ、使役霊は決して万能ではないゆえな」

徳人は、まじまじと目の前の少女を見つめた。

「……あんた、悪魔でも天使でもなけりゃ、いったい何者なんだよ？」

アヌークが、街角を曲がったら、絶滅したはずの類人猿と出くわした、そんな表情になる。

「貴様っ……いや、そうか、うむ、まだ貴様にはなにも話してはおらんのだな」

椅子の上で精一杯つま先立ちになり、徳人を見下ろす。ほそい腰に両手をあてがう。

「我が？墓碑銘？はアヌーク、この世に生を受けし数多あまたいる？カルマびと？のうちがひとりっ、？父祖の戦列？序列第？列に序せられ

し者、以後見知りおけっ」

「えっと、なに？ 頭の悪いカルタの色とフツ素のセンベイの行列が全部で七枚？」

彼女が椅子から飛び降りて、ローキックをとばす。徳人はスネをかばって七転八倒した。

アヌークが、ふんっ、と勝ち誇ったとき、外から爆音が鳴り響いてきた。

「？……あれは大型バイクのエンジン音であるな」

？カルマびと？の研ぎ澄まされた聴覚で感じとった様子だ。空冷V型ツインエンジンの排気音の鼓動が地響きを立てて伝わってくる。徳人が全身を硬直させる。

出窓に寄った。窓からは中等部専用の駐車場が見渡せる。そこへ一台の大型バイク、ハーレー・ダビッドソンがゲートまえで停まった。

ドライバーは駐車場の守衛と挨拶を交わしていた。ハーレーの巨体に引けをとらない、肥満した中年男だった。駐車場の専用スペースに自分の愛車を停める。

爆音が止む。そのスペースには 柳本教諭専用 と記されたプレートが立てかけられてあった。肥満体は、のそりとハーレーから降りたって、ヘルメットを脱いだ。

眼のほそい相撲取りのようなふくれっ面。徳人は携帯で時刻を見た。朝六時過ぎ。いつもどおりのご出勤だ。柳本教諭、通称デブヤナだ。弟の仇の父親だった。

「ふむ、下衆の輩どもの親玉の登場であるな」

「知ってるのか」

「うむ、タツヤ・スギウラの記憶、しっかと読みとっておる、タツヤの仇敵、サイ・ヤナギモトの父親にして、この学舎まなびやの生活指導担当教員であるっ」

「話が早いぜアヌーク、デブヤナがバックについてるせいで、あの一年のガキやりたい放題やってやがるんだ」

こみあがる怒りで部屋を歩きまわる。ユリスモール学院初等部のときからの宝もの、きのうからぶっ倒れたまんまだったガンイージをもとにもどす。

「斯様な卑劣な輩断じて赦せぬ、貴様の望みを叶えてくれようぞノリト・カワカミよっ」

「助けてくれんのかっ」

「いかにも、タツヤ・スギウラと約束を交わしたのだ、貴様の復讐、私が始末をつけようぞっ」

「よっしやああつ、あのクソ親子そろって顔面に一発ぶちかましてやらなきや気がすまねえっ」

「なにをいうか、手ぬるいわっ」

「え、じゃあやっぱ半殺し？ アヌークの超能力で？」

アヌークは仁王立ちになって、徳人を睨みつけてくる。

「うつけ者っ、復讐の方法といえば唯ひとつではないかっ」

「アヌーク、じゃあ、やっぱり……」

殺してしまう？ それ以外に？

「うむっ、殺めるのだ、これしかあるまいてっ」

徳人は絶句した。

「……アヌーク、見損なつたよ、ふざけんなよ、俺はぜってえそんなのやだかなっ」

「なっ、貴様の弟の仇敵であるぞ、忘れたのか、ノリト・カワカミよっ」

徳人がアヌークの両肩をつかむ。ふたりは、身長差を超えて、睨みあった。

「アヌーク、俺はなにがあつても、ぜってえ謝らねえからな、そんなの男のすることちゃねえ」

「これは面妖な、ノリト・カワカミよ、殺めなければ、貴様の気持ち、収まらないであろうがっ、タツヤ・スギウラの無念、殺めることなくいかにして晴らす所存かっ」

「バカいつてんじゃねえよアヌーク、こっちが謝ってどうすんだよ

「つ」
アヌークが美しいおおきな瞳をさらに開く。あまりの怒りから瞳が不気味な輝きを放つ。

「……なんとという小心者か、もうよい、わたしがいまから殺めてきてくれるわっ」

「おまえが謝ってどうすんだよおっ」

「ええいもうよいわ、このおおうつけめがあっ」

デスクを蹴っ飛ばす。ガンイージが倒れた。

「アヌーク、ぜってえ謝んなよ、ぜってえだぞおっ」

ちいさな彼女の体を揺さぶった。

アヌークが徳人の腕をふり払う。すたすたと歩いてドアノブに手をかける。

「知らぬわっ、このド腐れオタンコナスめがあっ」

盛大なアカンベエをお見舞いしてきた。

「っ、てめ、なんだとおっ」

アヌークは部屋を飛びだして行ってしまった。

「あの女、なに考えて」

部屋のなかをイライラと歩き回った、ふと、鼻にしわをよせる。

あいつ、うちの女子部の制服を着て、夏休みのあいだどうするつもりなんだ？ 徳人は考えずにいられなかった。ユリスは男女別学の制度だ。今年の夏、女子は中、高等部とも全員が帰省しているはずだった。女子寮ジヨムシヨはたしか閉鎖されている。

「白人系の顔立ちだしどうするつもりなんだよ」

手にしたガンイージをもとにもどした。

男子寮にチャイムが鳴り響いた。六時半、起床時刻を告げるチャイムだった。

4、憑依靈々サタノファニア

中等部の学生食堂は、教職員棟や学校図書館など主立った施設が集まる敷地の一角を占めていた。対面式の長いカウンターの向かい側、厨房からトレイをもらうカフェテリア形式だ。

年の頃五、六十代の女性がひとり、朝食の準備に孤軍奮闘していた。

この夏のあいだ、居残り組のために学院に雇われた調理師である。名前を大谷しづゑという。

食べ盛りの男子院生、主に一年坊主たち十数人分と教職員のために、しづゑはフル回転で厨房のなかを小刻みに動きまわっていた。おっとりした、なんとも上品な容貌とは対照的だ。

スタッフ用の裏口の開く音がした。

「あら、どなたかしら」

しづゑがふりむく。

アヌークは、すでにすぐうしろに立っていた。

「オハヨーゴザマス、シツエ殿」

朗らかな笑顔をうかべて右手をさし出す。

「あらあら、かわいいお嬢さんだこと」

しづゑは条件反射的な仕草で握手に応じた。

アヌークの掌には、ちいさな憑依靈が緑色に光っていた。

ふたりの握手の瞬間、アヌークは、ふうっ、としづゑの胸元辺りに息を吹きかけた。

光が手の中で瞬く。

すっつ、としづゑの掌に吸収されていく。

しづゑの小柄な体が、びくん、と震えた。

「我が名は MARIA・エスターライヒ、オーストリアよりこの学舎へ来日した留学生である、先日のおなたとの面接で、厨房補助係アルバイトとして採用された、本日が初出勤である」

しづゑのやさしげな瞳がふわりと眠たげになった。催眠術でもか
けられたように。

「以上だ、よろしいか」

「……あらマリアちゃん、このまえはどうもね、待っていたわ」
自然な微笑みだ。

「よろしくお願い申しあげる、シヅ工殿」
アヌークもにっこり、笑顔で応じた。

5、弟の仇、柳本

朝七時。

朝食時間を告げるチャイムと同時に居残り組の院生たちが、だだっぴろい学食ホールになだれこんできた。

一年坊主たちは皆家庭の事情があつて、残らざるを得なくなった院生ばかりだった。

残りたくつて残った訳じゃない、皆の表情が物語っている。

誰もが不安げに体を揺すったり、唇の渴きを舌で舐めて潤しながら、カウンターまえに並んでいる。

川上徳人が遅れて西側ドアから入ってきた。アヌークを捜して校舎内をほつき歩いていたのであった。

一年生たちが、おどおどした仕草で、皆頭を下げて挨拶してきた。俺はすっかり有名な人だ、徳人は思った。

カウンターまえの列の最後尾に並ぶ。

学生服のポケットに手を突っこんで、厨房内をなんの気なしに見た。

アヌークがてきぱきと働いていた。

徳人は口をぽかん、と開けた。

彼女と目があう。眼力MAXで睨まれた。なんにもいうなよ、そう、瞳が告げている。

彼女は、厨房からカウンターにトレイを出していた。

受けとる一年生たちに自己紹介をしている。

オハヨーゴザマス、留学生のマリア・エスターライヒです、そういっている。

一年坊主たちは彼女を見ると、一瞬で不安げな表情をゆるませた。デレデレと美少女を見る思春期の子供の顔になっていった。

列が進んで、徳人がアヌークの正面に進んだ。厨房から彼女がトレイをさしだす。

「うまく潜りこんだな、シエキレイ催眠術バージョンか？」

「使役霊憑けるぞ、雑菌野郎」

とびきりの笑顔をうかべながら小声で悪口を浴びせてきた。

徳人は顔を引きつらせながら、トレイを無造作に奪いとる。スーブがすこしこぼれた。

「なあ、ぜつてえ謝んなよ、弟のカタキは俺が討つ」

「ふふつ、貴様がタツヤの仇を？ 貴様が？ 貴様が？ せいぜい不幸の手紙でも書いておれ」

アヌークはそういつて、紙ナプキンにサインペンで 死ぬ と書いて徳人に見せた。

「ほれ完成、小心者は敵の下駄箱に入れて悦に入っておれ、あとはわたしにまかせるがよいぞ」

「…………… 大谷さあーん、この小娘つ、おもっきしこき使つてやつてよおーっ」

「やあだ、意地悪バアサマじゃないのよ」

しづゑが厨房の巨大な冷蔵庫と格闘しながら、快活に答えてくる。

「なーにがマリア・エスターライヒだよ、マリー・アントワネットのおつかさんの長えフルネーム縮めやがって」

小声で悪態をつくつと、アヌークが意外だぞ、そんな顔になる。

「無学な貴様が知つていようとは、女傑マリア・テレジアはニッポンで有名か？」

「でもないよ、俺が世界史好きなだけだ」

「どうしたんです先輩ナンパスか？」

徳人のうしろに痩せぎすの一年坊主が並んだ。坊主頭の背の低い少年だった。

「おうカメ、お前も結局八月居残ったか」

「先輩ひとりにできませんもん」

丸顔に笑みをうかべた。

「カワカミくんの後輩ですか？」

アヌークが会釈して自己紹介した。

「マリアさんか、きれいツスねえ、俺、石亀いしがめつていいいます、あだ名、カメ、川上先輩の部活の後輩ツス」

ぴよこんと頭を下げる。部活？ アヌークが問いかえした。

「先輩、野球部のエースピッチャーツスよっ」

「まあ、意外です、チームの勝敗は？ ナンシヨウナンパイデスカ？」

アヌークはいやな笑みを見せた。ええっとその、と石亀が困ったように口ごもった。

「いくぞカメ」

徳人は踵をかえした。

石亀が威勢よく返事してついでくる。

四人座れるテーブルが横列につながって、二十人が座れるようにセツティングされている。ちょうどークラス分だ。テーブルが、学年分と予備をあわせて十列整然と並べられている。学食ホールのいちばん西側の一列だけが居残り組のために利用を許可されていた。徳人と石亀はいちばんカウンターの手近な丸椅子に座った。

徳人はソーセージをフォークでぶっ刺して噛みちぎった。横目でテーブルの一年坊主たちを見渡す。皆、一心不乱に早食いしている。「奴ら、そろそろ来るぞ」

「はい……」

徳人の言葉どおり、東の図書館側のドアから、数人の院生たちが入ってきた。

騒々しくなにか下品な笑い声を上げている。

最初に目の下にクマのできた一年生が入ってきた。坂野だ。

それから時代遅れのヤンキーふうの高橋、

ふたりとも両手にコンビニの袋をぶらさげていた。

最後に少年が現れた。徳人よりも指数本の長身、一年坊主にしては大人びた容貌。

柳本幸やなぎもとさち、通称ヤナちゃん、だ。肌が白い、イケメンとっていいが表情は読みとれない。

能面を貼りつけた、仮面をつけたような顔つきだ。皆の食べる速度が倍速になった。

「先輩、目えあわせないほうがいいです」うつむいていった。

徳人は能面野郎をガン見してやった。

柳本が視線を無視して、いちばん東側の列にゆっくりと座る。高橋と坂野、ふたりの手下がとなりに座った。コンビニで買ってきたフライドチキンとフライドポテトの山をひろげた。しづゑの朝食には目もくれずに、がつがつとチキンを喰い千切り、炭酸飲料で飲みくたす。

「先輩の友達や、三年の人たちが居残り組でいてくれたらよかったですけど……」

「残るっていつてくれたやつらもいたさ」

「マジっすか？」

石亀が目を光らせる。

「全員に頭下げて、帰省してくれって頼んだよ」

「先輩、味方はおおいほうがいいっすよ……なんでまた……」

「一年のクソガキ相手に、上級生が束になって呼びだす、そんなヒキョウなマネできっかよ」

せんぱい、石亀が情けない声を出した。

「ユリス中等部ウチノガッコの伝統タイムンでケリつけてやる、でもあの手下二匹が……やっぱ邪魔なんだ」

「伝統タイムンツスか、紅葉ヶ丘神社のあの空き地で？」

「おいっ、カメさんっ」

呼ぶ声が聞こえた。坂野だった。ポテトをむさぼり食いながら手招きをしている。

石亀はすぐに愛想笑いをうかべて、手をふって応じた。

「こつちきていっしょにコンビニの飯喰おうぜっ、ババアのつくったクソマジイ家畜のエサなんぞ喰えっかってんだよっ」

「いくな」

徳人は柳本たちのテーブルを睨みつけた。

大谷さんの朝食をバカにしやがって、そんな怒りを押し殺す。チヤンスを待たなければ。

「へへ、連中とはおんなじクラスです、坂野とはわりとしゃべるんで心配ないツス……っていうかいかないと俺のクラスでの立場がヤバイツス」

石亀が頭を下げる。徳人に笑みをうかべ、小走りに連中のテーブルへとむかっていった。

徳人は注意深く行方を見守った。

石亀はうまいこと坂野や高橋と笑って話し始めた。

うまくやってくれてる、そう思ったときだった。

厨房のスイングドアが勢いよく開かれた。

アヌークが学食ホールへ躍り込んできた。柳本たちのテーブルへと突進していく。あとから大谷しづゑも慌てた様子で出てきた。

「ヤベえっ」

まさかマジで謝るんじゃねえだろうな、女に謝らせたとあっちゃ、川上徳人、一世一大の不覚というものだ。フォークを放り投げて席を立つ。

「なんだよ、スゲえきれいなネーチャンがいるじゃん」

スケベな坂野がすぐに反応した。

外人？ ねえ何人？ 坂野はニヤついた笑いをうかべて、アヌークに近寄った。

アヌークは手にもっていた一味唐辛子を坂野の顔面に盛大にぶっかけてやった。

坂野は悲鳴を上げてホールの床の上を転げまわった。

あいつ、謝るとかいっておいて……。そうか、俺の身を案じてくれたのか？ 徳人は思った。

「シツ工殿の料理にケチをつけるとは何事かつ、いますぐ殺めてほしいかつ」

一年坊主たちが、食事をやめて席を立ちだした。残った朝食をカウンターにセットされた残飯入れのバスケットに投げ落としていく。

つぎつぎと足早に学食から逃げだしていった。

「あいつ喧嘩売っておいで謝るとか、なに考えてんだよっ」
焦りをおさえる。西側ドアへ逃げてゆく一年たちをかきわけて進んでいった。

「なんだこら、おい、ガイジンのメスブタがよ、カワイイからって調子ノツてんじゃねえぞ」

高橋が丸椅子を蹴って立ちあがった。チンピラ丸出しの口調で、アヌークに近づいていく。

「おいアヌ、マリアツ」

東側のテーブルへ駆け寄る。アヌークと高橋のあいだに割って入る。

徳人は高橋を見下ろしながら、思いつきり睨みつけてやった。

「なんすか？ 野球部の万年ボロ負けエースさま」

高橋は薄笑いをうかべた。

「なんだこら、ガキ」

徳人はドスをきかせてやった。

高橋がすぐに怯んだ様子を見せる。柳本のほうにすかさずSOSのサインを目で送る。

柳本は、一心不乱にフライドチキンを喰い干切っている。

大谷しづゑが、うしろから徳人とアヌークの手を握った。あたたかい力強い感触。

「大谷さん」

徳人がふりかえる。

「ここは私に任せて頂戴」

軽く微笑んでいった。

アヌークは顔を紅潮させている。

しづゑはすつと、まえに出た。高橋が気圧されたように脇にどく。彼女は柳本を見下ろした。

「柳本くん、ここはね、まえからいってるとおり、ご飯のもちこみは禁止ですよ」

「ヤナちゃん……」

高橋がせわしげにしづゑ、徳人、アヌーク、そして柳本に目を走らせる。

「高橋」

柳本が、初めて口を開いた。

「はいっ」

「茶、ヤカンごともってきて」

チキンにかじりつきながらいった。しづゑを見ようともしない。

「うん……」

高橋は落胆した様子で、カウンターまえのサービスコーナーにおいてあった麦茶の入ったヤカンをもってきた。顔に失望をありありと漂わせていた。

「ババアの頭に全部ぶっかければ？」

食い終わったチキンの骨を床に投げ捨てる。

「わかったっ」

高橋は喜色満面の様子に早変わりした。

「てめえ、柳本っ」

座ったままの柳本に近づこうとした。

「あら、だいじょうぶよ、川上くん」

しづゑが手で制した。声は平静そのものだ。

「大谷さんっ」「シヅエ殿っ」

しづゑは両腕をひろげ、徳人、アヌークをうしろへ追いやった。

もう五、六〇代だろう彼女の思いの外の力強さに徳人は度肝を抜かれた。

「なにしてるんですかっ」

甲高い、女性のような男の声が聞こえてきた。

柳本教諭だった。巨体を揺すって西側ドアから学食ホールに入ってくる。

「これは何事なんですか」

「柳本先生、ご飯のもちこみを注意していたところなんですよ」「し

づゑはいった。

「ほう、それはそれは」

デブヤナは腕を組んだ。

「おい生活指導っ、貴様のバカ息子はシヅ工殿にむかって茶をかけると又力したのだぞっ」

アヌークは、まるで自分の実の祖母が茶を浴びせかけられた、そんな勢いで叫んだ。

「ほっほう……目撃者は誰ですか？」

「俺です、たしかに聞いたっ」

徳人がいった。

「わたしもだっ」

アヌークが突っかかるようにいう。

デブヤナは巨体を動かして、ひろい学食ホールを見渡した。

高橋は目線を下に落とす。坂野は涙をティッシュで拭きながら床にへたりこんでいる。石亀は、すこし離れたテーブル席のところまで震えて立ちすくんでいる。

デブヤナはおおきくうなずいた。

「はい、ふたりともこちらへ来ててください、おおげさですが、事情聴取です」

デブヤナは徳人、アヌークを手招きして、西側ドアへののしり歩いていった。

徳人は高橋を睨みつけた。高橋はすぐに目を逸らす。それからバカ息子を見た。

柳本は、誰も見ようとせせず新しいチキンにかぶりついている。

「早く、ふたりとも」

デブヤナが催促してくる。

「……いくぞ、アヌ……マリア」

徳人はアヌークの手を引っ張った。

彼女がなにかドイツ語で罵りながら渋々ついてきた。

徳人たち三人は学食ホールの外に出た。デブヤナがガラス張りの

西側ドアを閉める。

「先ほどの話、ほんとうですか」
深刻そうな口調でいった。

徳人とアヌークはうなずいた。

西側ドアからいちばん離れた東の席上、柳本が、初めて顔を上げた。徳人たちをチラ見する。

「高橋、いまのうち」

「うんっ」

高橋は、小柄な大谷しづゑの頭に麦茶を浴びせ始めた。しづゑは無表情に高橋を見かえしてくる。高橋は、しづゑの表情に、またおびえた様子になった。

「ババア、冬なら熱湯だった、感謝すればいいのに」

柳本は骨を投げ捨てながらいった。

「柳本くん、あなたは可哀想な人です、親が常識人だったならちがう人生もあつたでしょうに」

「坂野、カメ公」

柳本は、突っ立つてことの成りゆきを見ていたふたりに一瞥をくれた。

「ババアを蹴れば？」

ふたりが顔を見あわせる。

「蹴れ、ば？」

語尾に不快なイントネーションをつけた。

坂野がしづゑの左の太ももを蹴る。石亀が弱々しく蹴った。

「カメ公、本気出せば？」

「……………すみませんっ、すみませんっ」

石亀は泣きだしながら、本気で蹴りだした。

大谷しづゑの体が、蹴られるたび、左右に揺れた。表情は、超然としたままである。

徳人の視界にデブヤナの巨体に邪魔されながらも、ホールのなかの異変が映った。

「あの野郎おつ」

ガラスドアに突進しようとした徳人をデブヤナが巨体で遮った。

「川上くん、落ちついて、お話がまだです」

子供をあやすように甲高い声でいった。

「デブヤナ、てめえも結局グルじゃねえかよおつ」

徳人は達也の交通事故の時以来の激しい怒りに襲われていた。

アヌークが徳人の白シャツを引つ張った。

「ノリト、決めた、このふたり、殺めるぞ」

ぞうつとするほど、感情のない声音だった。

「……アヌークツ、だから謝ってどうすんだよおつ」

彼女はちいさな顔を真つ赤にして怒った。貴様これを見てもまだっ？ 彼女の怒声に、てめえこそっ、徳人も負けじと声を張りあげる。つかみかかってきた徳人に彼女もつかみかえす。ついにふたりで罵りあいのケンカを始めてしまった。

「ふたりとも、ケンカはよくないですよ」

デブヤナが肩越しに学食のほうをふりかえって見た。

大谷しづゑは、高橋に麦茶をかけられ坂野と石亀に蹴られつづけていた。頭も顔も冷たい麦茶でずぶ濡れになっている。

坂野と高橋は、無抵抗の相手を踏みにじる行為に、陶醉した笑みをうかべている。

柳本がそれを見もせずまた新しいチキンを喰い干切っている。

東ドアが開いた。気弱そうな若い司書が入ってくる。

三人はすぐさま行為をやめて、しづゑから離れた。

しづゑは無言で厨房へともどっていく。自然な仕草で髪の乱れに手をやりながら。

司書は雰囲気や即座に察したようだった。西側のデブヤナと目線があった。気まずげに目を逸らす。踵をかえして学食から出ていってしまった。

柳本教諭はそんな司書のうしろ姿を見て、なんともいえない嘲笑をつくった。

柳本が父親を見る。親子ふたりでうなずきあった。

「さて川上くん頭を冷やしなさい、寮の部屋で自習を命じます」
「……ただじゃスマさねえぞ、デブヤナ」

引つつかんでいたアヌークのブラウスから手を離れた。

徳人とデブヤナは至近距離でガンを飛ばしあった。

「殺す、ぶつ殺す」

ドイツ語で罵った。背の低い彼女も、つま先立ちになって背のびをしながら、一生懸命デブヤナにガンを飛ばしてくる。

「小僧」

甲高い声に怒気が加わった。

「騒ぎをこれ以上おおきくしてみる、お前が暴行事件でもおこしたら、お前の野球部はな、他校との練習試合も禁止処分されるぞ、大切なチームの仲間に迷惑をかけるな、うん？」

「っ……………てつめえ……………」

徳人は唇を真一文字に結んだ。

「わかったら、自室にもどれ、いますぐに、だ」

ほそい目だけが笑ってはいなかった。

6、解けた誤解

「貴様、最早赦せん、本気で使役霊憑けるぞ、この、おおうつけ者めがあつ」

アヌークの罵声が六畳ほどの徳人の個室で炸裂した。

「すまねえ、アヌーク、ごめんっ」

悔し涙すら出てきた。

自室のフローリングの床に、文字どおり額をこすりつけて土下座していた。

「それでもニッポン人があつ、なにゆえに貴様は語彙が貧困なのだ？ 殺めると謝るの区別もつかなんだかつ？」

アヌークは情け容赦なく、土下座する徳人の後頭部を右足で踏んづけた。

「マジ、マジですまねえ……」

「謝って万事すむなら、使役霊はいらぬわっ、この度し難い低脳めがっ」

彼女がさんざん罵倒し、徳人は謝り、ついにふたりは荒い息をついて、ギブアップした。

ふたり隣りあつてベッドサイドに腰掛ける。徳人は呼吸を整えるのに四苦八苦した。

「アヌーク、俺、怒りが、収まんねえっ……」

「わたしもだ、これほどの怒り、？ 十字軍？ に敗北した、あの長江文明の、玉蟾岩遺跡群（おひくせんがん）の、戦役以来の屈辱よっ……」

アヌークもまだ息を荒げている。

「？…… 十字軍？ 中世に十字軍が攻めたのは、中東だぞ、中国大陸になんぞいってないし」

「うつけ者…… 現代の？ 教皇十字軍？ のことだ、我が父祖の戦列の仇敵であるぞ」

徳人は疲労でうまく考えがまとまらなかった。まだアヌークとは

何者なのか？ 根本的なところを教えてもらっていないことにだけは気がついた。でもいまはそれどころではない。

「ノリト、これからわたしがなにを最初にしたいか、当てたら貴様の大愚たいぐを赦す」

徳人は、息を整え深くうなずいた。ふたり同時に口を開く。

「大谷さん」

「シヅ工殿」

ふたりは見つめあった。

彼女の怒気が徐々に和らいでいく。真摯な瞳で徳人を見つめてきた。

「貴様を赦す」

ふたりは我先にと部屋を飛びだした。

ダンムシヨを出て、学食にむかい全力疾走する。朝八時のチャイムが校内に鳴り響くなか、ふたりは渡り廊下を走った。西側ドアへ体当たりの勢いで突進する。閉鎖されていた。

すぐさま厨房の裏口へとまわる。息せき切って押し入る。

厨房のなかで、大谷しづゑが残飯の処理をしていた。髪の毛の乱れをきれいになおし、新しい白衣に着替えている。麦茶で濡れた白衣は洗濯機のなかに入れられてあった。一年坊主たちの残していった大量の残飯を黙々と処理するうしろ姿を、ふたりは見た。

徳人は両手を握りしめた。爪が、掌に食いこんでゆく。

硬直している徳人を尻目に、アヌークが素早くしづゑに近づいていった。

しづゑは、ステンレスのバスケットに入った残飯を生ゴミ処理機に入れようとしていた。

「マリアちゃん」

驚いた様子だ。

「手伝うぞ、休息なさるがよろしかろう、シヅ工殿」

アヌークは、しづゑのもっているバスケットをもらい受けようとした。

「私ならだいたいじょうぶよ、マリアちゃん、アルバイトの拘束時間は七時半までの約束よ」

「サービス残業である、シヅ工殿」

「大谷さん、足引きずってるじゃん、ほっとけないって」徳人もそばに駆け寄った。

「……ふたりとも、ありがとうね」

三人で処理を始めた。徳人が学食ホールのほうの人の気配に気づいた。

石亀がひとり、ホールの床の掃除をしている。柳本宰が床に投げ捨てていったチキンの骨を拾い集めていた。骨やポテトの喰いカスが、床のあちこちに散乱していた。

「石亀くん、やるっていつていつていうことかかないのよ、みんな頑固ねえ」

しづゑの言葉には慈しみがこもっていた。

味方はおおいほうがいいですよ 石亀の言葉が脳裏に甦る。

徳人は、自分の無力さを呪った。

「う、うむっ、わたしは父祖の戦列の一翼を担う戦士よ、戦士に二言はないっ」

「どうやって?」

「いちばん手つとり早いのは三種の使役霊のうちのひとつ? 悪霊ダイモン? を憑けて殺す」

「悪霊って……あのさヤツらがもしヘンな死に方でもしたら、大谷さんが、もしも俺らの仕事だと見抜いてさ、悲しんだりとか………
…それって、ぜってえ、ヤダよな………」

アヌークがシヨックを受けた貌になる。なにかをいいかけて、黙りこんでしまう。

「あのさ、悪霊使って学院ごと吹っ飛ばすとか、まさかそんなこと考えてやしないよな?」

「っ……う、うむ、わた、わたしほどの戦士ともなれば、それしきのこと造作もないのであるが、ここはひとつ、シツ工殿の言がある、一般社会に我等カルマびとの存在を知られては絶対にならぬ掟もある、きょうはひとまず自重しようぞっ」

狼狽した様子で徳人から目を逸らした。

沈黙が降りた。

ふたりは、ぼんやり、タマアジサイの可憐な彩りに目をやっていった。

徳人の携帯が鳴った。

メールの受信だった。学院のパソコン教室の端末から送られてきている。

開いてみると、本文は《マリアはお前のオンナか?》ただこれだけだった。

「なんだ、如何したのであるか?」

「……ん、なんでもね」

アヌークが徳人の携帯をひったくる。

おいてめっ、徳人は叫んだ。奪いかえそうと彼女の腕をつかむ。

彼女は左手一本で徳人の腕を捌きかえす。カルマびとの野獣に匹

敵する腕力だった。ふん、と鼻先で笑った。素早く視線を周囲のそこかしこに走らせる。

「屋上か、まさに下衆の勘ぐりとはこのことよの、ふんっ」

「かえせアヌーク」

覆い被さってきた徳人の体を、抱きしめかえした、アヌークが。

「っ、おまえ、なにを？」

「恋人同士の演技をするのだ、ノリトよ」

徳人の胸もとでささやく。

「なに？ 恋……」

「下衆どもが、男子校舎の屋上から双眼鏡で我等を見ておる」

「奴らか、ちつきしょうっ」

眩しい太陽に逆らい、南の男子校舎を見上げようとした。

「やめるがよい、貴様まで屋上のほうを凝視したら、怪しまれるであろっが」

「わ、かったよ」

徳人はなにやらへんな気分になってきた。

「ノリトよ、男の弱点とはなにかわかるか」

「……」

徳人は口ごもった。

弱点 アソコ がまさに男の弱点の代名詞なわけだ。唐突になにをいいだしたのだ、徳人はアタマがパニックだった。

ふわり、よい香りが徳人の鼻腔をくすぐった。アヌークの細身の体軀からただよう、うっとりするような香りだった。アヌークの、体、それは ほっそりしている とてもやわらかい、けれどたるんだ脂肪を感じさせない、引きしまった肢体だった。

「わからぬのか？ あきれた奴よの」

二ヶ所だけ、とてもやわらかい、ふんわりとした、えもいわれぬ感触が、徳人の鍛えられた腹筋のあたりにダイレクトに伝わってくる。

「その、だからアレの、こっつらろっ？ アヌーク」

「あれ？ なにをいうておる？」

苛立たしく徳人の腕の中で動いた。

動かれると、やわらかい二ヶ所が摩擦でさらになまめかしく感じ
てしまう。

「ちよつ、やべえよアヌーク、マジかんべん……離れてくんないか
なっ」

「？ いまはの、不気味なメールが来たせいで、恐怖のあまり貴様
に抱きついた、そういう設定であるぞ、不自然に離れてなんとする
？」

「だからさ、おまえのいう、じゃくてんが、やっべえことに、なっ
て」

「ふんっ、なにを」

アヌークは、徳人を凝視した。

かたく、熱を帯びたなにかが彼女の肢体に当たっている。

馬鹿にした笑いを引っこめる。徳人の下腹部を、制服のスラック
スの股間を見てしまった。一瞬で徳人から体を引き離す。少女の頬
がすぐさま朱あけに染まった。

「貴様なんというかがわしい、しっ、しっ使役霊憑けるぞーっ
この色魔、ド変態めがっ」

「アヌークがワリいんだぞ、オトコの弱点とかいいやがるし、そん
な、いい感じのおっぱいぐりぐり押しつけてきやがって、おまえ、
俺に実は気があるんじゃないのかっ」

おもしろい現象がおこった。

アヌークの美しい頬と耳が、血の気がひいて青白くなった。

それからこんどは血が上ってきて、恥じらいが頂点に達して再び
真っ赤に染まった。

「お、お、とこのじゃくてんとはな、か、カノジョのことであろう
がっ、それを貴様はそんな穢らわしい……」

さらにおおきさを増した徳人のチャームポイントをまた見てしま
った。

徳人が咄嗟にジツパーのまえを両手で押さえつける。

少女は実に可憐な悲鳴を上げた。

悲鳴を上げつづけながら、渡り廊下をウルトラ全力疾走で オ
リンピックの金メダリストもドン引きの 速さで逃げだしていっ
た。

「アヌーク、待ってくれ、おい、おいってっ」
股間を押さえつけながら追っかけた。

8、嘲る者たち

三階建ての男子校舎の屋上、陽差しがコンクリートの床面を焦がしていた。

坂野と高橋は、落下防止用の柵のまえで双眼鏡を奪いあって、笑い転げていた。

見たかよ、川上の奴、相当欲求不満だろ？、ちがいねー、ふたりはそういつて笑いつづけた。

「黙れば？」

柳本宰がいった。

ふたりが一瞬でおとなしくなる。

柳本は携帯を手にしていた。

『 ね？ ね？ 俺のいったとおりだったすよね、ヤナさんっ』
有頂天になって独りしゃべっている。石亀だった。パソコン教室からだ。

こっからすぐずかるツスよっ、石亀がしゃべりつづける。チツキショウカワカミのヤロウ、早速留学生の白人ネエちゃんと、マジム力つくつすよ、ひよっとしてもうヤツたんすかね？ ね？ ね？ ヤナさん？ ね？ ね？ 。

「ウザい、カメ公」

通話を切った。

白い能面顔は、かわらず無表情だった。

9、嵐の前のしあわせ

昼、十一時すぎに校内アナウンスが流された。職員が学生食堂の臨時休業を告げた。

大谷さん……だいじょうぶだろうか。徳人は不安に駆られた。

食欲は湧かない。普段なら人の通常の三倍のメシを平らげる徳人だ。野球部のエースピッチャーとして 未だチームは全敗だが 食べ盛りの男子として当然といえば当然だった。

いまは悠長にメシを喰らってる場合じゃない。

カワユイ悲鳴を上げながら、アヌークはユリスモール学院から失踪してしまった。

徳人は、学院のある丘陵から坂を降りて、ふもとの商店街を当てもなくうろついた。

女の子に示しのつかないことをしでかした、その自覚はもっていたから、ワビの印に女子の喜びそうなケーキを商店街で適当に買った。

昼飯も食わず、寮の自室にもどった。

なにをするのも億劫だった。ベッドに重たい体を沈める。

きのうから、世界のすべてが一変してしまった。

アヌーク 彼女は、何者だ？ オカルトや超古代文明が大好きな徳人としては、想像がふくらんでしまう。

彼女の言葉……フツ素のセンベエ、じゃないし、フソノセンレッツ、アヌークが所属する組織の名前だろう。

その宿敵が？ 教皇十字軍？ なんで現代に十字軍がいるんだよ？

アヌークの正体、カルタ、じゃない？ カルマびと？ っていつてたっけ。

彼女は三種の使役霊を操る。

白状すると興奮している自分がたしかに、いた。

鬱屈した日常をぶっ飛ばせるときが、ついにやってきたからだ。

一方で焦りがある。弟、タツの仇、大谷さんの仇 先月達也の事故で、初めていじめのことを知った。兄貴、失格だ。だから最初はマジで、殺してやるう、そう思った。だから。

「……アヌーク、俺、大バカ野郎だ」

「で、あるうな」

アヌークの声。

跳ねおきる。

部屋は薄暮のなかにあった。いつの間にか夕暮れ時を迎えていたようだ。

出窓が開かれ、カーテンが真夏の夜風にたなびいている。

アヌークが、デスクチェアに座っていた。チェアにまたちよこんと正座して、うしろ足で、どかんっ、デスクを蹴る。くるりん一回転。セミののどかな大合唱がBGMだ。

「この椅子、岡村製作所のコンテツサではないか、貴様如きコワツパの座ってよい椅子ではないわ」

足でデスクを、がんっ、と蹴ってくるると十四万円のコンテツサチェアを回転させる。

「親が入学祝いとかいって勝手に送ってきたんだよ」

また倒れたガンイージをもとにもどす。

窓を閉めた。ベッドの上であぐらをかいて、彼女を見つめる。

足で蹴ってくるりん回転するたんびに、しなやかな太腿が躍って見える。制服のプリーツスカートがはためいた。彼女の輝くようなシヨートヘアが、くすっ、とした笑顔が、こちらを向いた瞬間、すぐさまうなじと優雅な腰のラインにとってかわる。背もたれにあごを軽くあずけて、のびやかそうに、満足そうに、少女はちいさな笑顔をつかべていた。

「なあどこ、いったんだ？」

「ヨコハマであるぞ」

途端、笑顔を引っこめてしまった。

デスク脇に手提げ袋が置いてある。横浜市内にあるヤマダ電機の

買い物袋だった。

「なに買ってきたんだ」

「貴様のパソコンでいずれテレビ電話の機能を利用させてもらうぞ、そのための周辺機器だ」

アヌークはDVD ROMを二枚、ちいさな手にもって徳人のほうへさしだしてきた。

「貴様に軍事機密情報を提供するゆえな、その資料であるぞ、年少^{エレメ}者用DVD、学生用DVD、どちらがよいか？」

レベル面を隠すようにもっている。

「え、マジかよつ、えつとじゃあ………学生でっ」

彼女は学生用DVDをセットしてスタートさせた。日本語の仰々しいテロップが映る。

父祖の戦列 教導総局より現地協力者へ 貴殿に対して機密情報の提供が承認された。我が父祖の戦列は、貴殿のアヌークに対する献身的協力に対して心より感謝の意を表する

徳人は、息を呑んだ。これで真実がわかるんだ。アヌークが、何者なのかを。

「アヌーク、ヤマダ電機でこんなソフト売ってるとは知らなかったぜっ」

「おおうつけが、わたしの私物だ、どこの世界に機密情報を量販店で売りさばくバカがおる？」

「あ、そっか」

BGMが鳴り響いた。セミの声にかわって？ニルンベルクのマイスタージンガー？が壮麗な旋律を奏でる。パソコンの液晶画面にかわいらしいアニメタッチのタイトルが映った。

《いっしょに学ぼう！ やさしいやさしいカルマびと講座へようこそ！》

「学生用DVDはな、貴様のような初学者を買収工作する際に利用するコンテンツである、我が父祖の戦列の？教導総局？監修の下制作された専用教材だ、とくと学習するがよいぞ」

「……」

かわいい美少女キャラがふたり、画面に登場した。

ひとりにはショートカット、白皙の美少女、アヌークの三頭身デフォルメキャラだった。

もうひとは知らない。ロングヘア、アヌークよりも日本人の血が入っているのか、ハーフっぽい顔立ちのクールビューティーな美女だった。

「……誰」

「我が同志イレエヌ、父祖の戦列序列第？列に序せられし者、我が姉にして、わたしが師と仰ぎ、わたしを厳しく、優しく教え導いてきてくださったたまことの戦士よ」

アヌークが中学生なら、このイレエヌという美女は高校生くらいの雰囲気といったところか。

「アヌークよ、授業を始めるぞ！」

「はい！ イレエヌ姉様！」

「カルマびとは何者か、十六世紀ヨーロッパで？大いなる眠り？より覚醒したヒトならざりしヒトのこと、葬られし遺跡より甦ったがゆえ、我等は己の名を？墓碑銘？と称するのだ」

「よいこのみんなが我等の特技を知りたがっております！」

「三種の使役霊を招喚して、操ることができるのだ、術者自身や、他人にも、物体にも憑依させることができるぞ、まずはひとつめ、悪霊だ、禍々しい暗赤色を放つ使役霊だ。術者のそばに？火？があれば招喚できるのだ、地獄の業火でこの世のすべてのものを破壊する力をもつタチの悪さ、オトコでたとえるならばイケメンホストであるっ」

「まあ怖い、姉様っ」

「ふたつめ、暗緑色の憑依霊だ、術者の吐息でもよい、？風？があれば招喚できるのだ。ヒトを操り、物体を意のままに動かす、まさに謀略するしか能のない陰険野郎、オトコでたとえるならば、結婚詐欺師であるっ」

『キモいですわ、姉様っ』

『みつつめ、蒼白色の美しき輝きを放つ癒し系、守護霊だ。術者が？水？を用いて招喚するぞ、森羅万象、あらゆる生命体の傷を癒す？守護霊治癒？、敵の攻撃をはねのけるバリアの働きで我等を守護してくださる？守護霊結界？、くわえて天高く飛翔する？守護霊跳躍？、斯様な器用さを併せもつ、女子でたとえれば、アヌーク、そなた、であるなっ』

『はううっ、なっ、なにゆえこのわたくしめがっ？』

『このイレーヌの闘争に明け暮れる荒んだ心を癒す者……そなたをおいて他に知らぬ』

画面のアヌークが、とろん、としたうっとり笑顔になる、まさにデレデレ。アヌークよっ、お姉さんはそう叫ぶと、アヌークのほっぺたをやさしくなでる。姉さんまでデレデレ。

徳人は、口をあんぐり開けっぱなしで、意識の遠のいたような視線を画面に送っていた。

『我等姉妹、末永くともにこの闘いを乗り切ろうぞっ』

『はいっ、姉様ッ、我等カルマびとは永遠不滅、不死ゆえに怖れるものなどありませんっ』

『うっけがっ、聖域には気をつけよと、あれほど常日頃申しつけてきたであろうがっ』

『はううっ、聖域のことを失念いたしておりマシたっ』

『うむ、聖域とはござかしいヒトどもが創りし聖なる土地、神を畏れ敬うために集う土地なり』

『聖域では使役霊が我等の意のままに動きませぬ』

『うむ、努々忘るるでないぞ、アヌークよっ』

『このアヌーク、姉様のためならば、いかなる使役にも従いまするっ』

『愛い奴、アヌークよ』

『……姉様』 『アヌークッ』

ふたりの三頭身美少女キャラは、画面の中でひしと抱きしめあっ

た。

エンディングテーマが流れた。歌劇？魔笛？第二幕の？復讐の心は地獄のように？だった。

「……………」

徳人は、ベッドの上で丸くうずくまってしまった。

「楽しめたか？ ノリトよ」

DVDを出しながら訊ねてくる。ハズいのか顔は真っ赤つかだ。

「……………ぶふっ、お、おまえたち、フツ素のセンベイ……………なんの冗談だよっ、ぶぶっ」

ついにこらえきれず、ベッドの上で腹を抱えて笑い出してしまった。

「ふんっ」

彼女はふて腐れた様子で、チェアの上にちよこんと正座したまま、くるりん、また回転させた。がんっ、と例によってデスクを足蹴りした拍子に、上においてあったガンイージがぶっ倒れて、DVDが二枚とも転がり落ちていった。

「ああっ」

かわいらしい声を上げた。

床を転がり、ベッドサイドにゆきついた。

二枚とも 年少者買取工作用わたし&姉様アニメバージョンとマジックで書かれてあった。徳人はそうつと、DVDを両方拾いあげた。

「……………」

顔をさらに真っ赤にしてチェアをまわす、ぷいっ、とうしるをむいてしまう。

「アヌーク……………」

仲直りしようとして、わざと笑えるおなじヤツを二枚、そうだったのか？

彼女は恥ずかしそうにしてうつむいたまんまだ。ちいさな背中を見せ、ちぢこまっている。

徳人はそんな彼女をじつと見つめた。わざとらしく咳払いをして、ベッドサイドのオーディオコンポをいじり始めた。O A S I Sオアシスの曲をランドラム再生する。最初に流れだしたのは徳人の好きな曲？ Chシampagne シャンペン Super novaスーパーノヴァ? だった。歌詞を知らなければ美しいメロディに騙される、そんな曲だ。

ふたりはしばし、美しい曲に聴き入っていた。

徳人は冷蔵庫のケーキのことを思いだした。

とりあえず転倒したガンイージは、きりがなから放っておくことにする。

「なんか呑み喰いすつか？ 甘いもんもあるぞ」

アヌークは、ちらり、徳人にひかえめな視線を送ってきた。

「……もし、もしも洋菓子、の類が……もし、あるならば……その……」

「おうあるぞっ」

アイスエスプレッソにガトーショコラ、ブルーベリーパイを出してやった。

アヌークが瞳を輝かせる。彼女は喜んでショコラやパイを手にとった。

「パイは好物であるっ」

おもいっきりかぶりつく。ベリーがはみ出て少女の唇にくっついた。

甘い、甘いつ、興奮して声を上げパクつく。徳人がそんな彼女を見つめる。ベッドに寝そべって、テイクアウト用のプラスチック容器のエスプレッソをストローで飲みながら。

「前線で、んぐ、斯様な、んぐ、美味なる嗜好品を食せるとはっ
パイ生地がサクツと小気味のいい音を立てる。

コンテツサチェアの上で正座して、デスクを蹴る。どっかーん、豪快に音をさせて、くるりと回転させる。ケーキと徳人のふる話題に夢中になっている様子だ。

「っ
」

彼女が喉をつまらせた。胸をとんとたたく。

徳人はすぐにエスプレッソを渡した。

彼女はもらうときも、決して徳人を見ようとはしなかった。目をあわせてこようとはしない。少女が一息ついて、語りだす。少年と視線があいそうになると、あわててパイにかぶりついた。ふと、会話がなにかの拍子に途切れた。

沈黙が降りた。

夜十一時になっていた。消灯時間を告げるチャイムが鳴る。ふたりはしばらく黙って 不思議と気まずくはない この時、この瞬間を楽しんでいた。静謐で、おだやかな、ほんとうに不思議な時間だった。

「なあ、まだわかんね、父祖の戦列ってなんだ？ 教皇十字軍っていうおまえたちの敵は？」

アヌークの微笑みが消え、真顔になる。

手につまんでいたパイのかけらを口に含んだ。

「我等、父祖の戦列の戦士たちは、ローマ教皇よりいわれなき咎の責めを受け、破門されたのだ、教皇側に巧みにとり入って我等を狩る者ども、それが教皇十字軍だ、両軍ともに、カルマびとよ、同族同士の戦争を幾世紀ものあいだつづけて参ったのだ、まっこと不毛なことよ……」

アヌークの声には抑揚がない。なにか、あきらめのようなものにじみ出していた。

「ノリトよ、稚拙な教材なれど、エンディングの選曲には誠の志が宿っておる、復讐の心はまさに地獄、復讐戦だ、是が非でも封印刑に処された戦友等の無念を晴らさねばならぬ」

「フウインケイ？ タツを封印すんのは……ちがうのか？」

「うむ、我等カルマびとは不死、肉体が滅ぼされても、我等の魂は肉体を脱することができる、これを捨肉と呼ぶ、新しきヒトの肉体に憑依してその者の魂を完全に支配したとき、その肉体を己のものとすることができる、これが呪肉だ。闘いに敗れ、肉体を滅されて

捨肉せざるを得なくなった瞬間、敵に？封印の儀？の呪文を詠唱されると、我等の魂は、詠唱した敵の精神を通つて？冥界？……いわゆる地獄に墮ちるのだ……これを封印刑、と呼ぶ。」

「フウインケイって、それ、どんな目に遭うんだよ？」

少女は無表情に、それこそ闘争に倦んだ仕草で片手を、すつつ、とさしだしてきた。

少年がつられて少女の手をにぎる。

それは……イメージ。少女の心、思念が少年の心を犯し始める。

封印刑が彼の想像できる範囲で、像を結ぶ。それは身動きひとつとれない棺桶の中、上から巨大な圧搾機が降りてくる、鉄の塊は、逃げ場のない徳人の胸、肋骨を押しつぶし始め

「っ

」

圧迫された胸からは、悲鳴すらも上げることができなかった。

少女が即座に手を離してやる。

「……貴様には……どのようなイメージが湧いたのであろうな？」

少年の顔をのぞきこんでくる。

少年は、少女のまえで オトコを見せたくって なんとか強

情に笑ってみせた。

少女は見透かすように、ふんわり、見つめてやさしく微笑んだ。

それからまた口を開いて、

「告白せねばならぬことがある、わたしはニッポンに配置された十字軍と闘うべく、入国した。ところが運悪くいままでの呪肉体が寿命を迎えてしまい、捨肉せざるを得なくなった。我が魂は憑依霊と化し、カナガワの空を彷徨っていた、書店から逃げてくるタツヤに呪肉を試み、憑依したのだ、その瞬間彼は交通事故に遭った……我等の魂は異界ゲルマティアに昇った」

「ゲルマティア……」

「呪肉の半ばで相手が死に近い状態に陥ると、異界ゲルマティアに魂がゆくのだ。我等が束の間の安息を得る世界にな……時に滅んだ種族の亡霊のさまよい出る異界であるが、なぜか我等にとっては

……懐かしみを憶えてしまう……不可思議な空間なのである」

「……じゃあ、それじゃあ……事故がなかったら」

「タツヤに呪肉し、貴様と出逢うことなく、十字軍との戦争をこの国でつづけていたことであるうな、元々タツヤを助けるために呪肉したのではなかったのだ、すべては我等の戦争のため、これでわかつたであろう？ わたしを恨む正当な権利が貴様にはあるのだ、ノリトよ」

「……なんで俺の味方をしようとするんだ？」

彼女がチェアを回転させてうしろを見せる。

徳人に顔を見られたくないかのように。

「ゲルマティアでタツヤと？約束？をしたのだ、貴様のそばを離れず手助けする、とな。筋の通らぬことは重々承知の上、せめてもの罪滅ぼしだ、わたしは貴様の弟を襲ったのだからな」

「……」

「ノリトよ、貴様はなにを望むのだ？」

「……アヌーク、俺……」

「わたしを赦せぬか、わたしを憎むか、ならばいますぐ貴様のまえから姿を消す」

「……」

「信じてくれ、わたしはタツヤの無念を晴らしたい、シヅ工殿を愚弄したあの下賤の輩を断じて赦せぬ……赦すことができぬっ、だからっだから……だから、ノリトを助けたいと……」

気づいたとき、少年は、うしろから少女を抱きしめていた。

プラスチックのタンブラーが、手にもっていたエスプレッソの容器が、床を転がっていく。

顎を少女の肩に軽くあずける。

アヌークの体の、匂い、自然、少年の腕に力がこもる。

誇り高い戦士に、それ以前に女にこれ以上、告白させたらオトコが廃る。

「ずりいよ、おまえ……女に泣かれたら、どうしようもないじゃん

かよ

「っ……………なっ……………泣いてなど、うつけめ、し……………使役霊……………憑けるぞ」

「泣くなよ、な？」

「泣いて……………など……………ないんだから……………」

かほそい、途切れ途切れの声。

「そばにいてくれ、俺を助けてくれよ」

びくん、と、ちいさな肩が震える、一度、二度、三度……………。

「……………ほんと？……………ノリト」

「ああ、タツ、体なくしまつたけど、声がマジ幸せそうだった、俺、タツがあいつらにひどい目に遭ってるの、最後まで気づいてやれなかった、おまえはタツの恩人でもあるんだ」

少女は、ひくっ、としゃくりあげた。

「いつもの威勢はどうした？ 俺のばっちい顔がおまえのかわいいホッペにくつついてんぞ」

「……………いまだけ赦す」もう一度、しゃくりあげた。

10、八月十日

まただ、徳人は思った。

半分覚醒しかけた夢の中だった。

真夏の夕陽。あんまりに暑いから、ちいさな公園の水浴び場でタツといっしょに水をかけっこしあっていた、遠い昔の思い出。

思ううちに、全身の感覚が覚醒してくる。

徳人はうつすらと瞳を開けた。

ベッドで、うつぶせになって寝ている。間近に壁が見えた。

ビートルズのポスターの端っこが視界の隅に映る。だんだん意識が明瞭になってきた。

アヌークの手だった。

ふわりと手が離れてゆく。ベッドの端にアヌークが腰掛けているようだ。

最後の瞬間、たしかに感じとった。あのあたたかい波動、アヌークに初めて守護霊となったタツを見せてもらったとき、触れたのだ。あつたかかった。

アヌークのやつ、どうしてタツを招喚して、俺の頭なんか、なでてくれていたんだ？ そっか、タツの夢を見せてくれるためなのか……？ ぼんやり思っていると、彼女と達也の話す声が聞こえてきた。

「タツヤ、いつもごめんね、どうしよう……このままじゃ、約束……ノリト、あと数日で……」

アヌークの悲痛な声、ささやくような小声だったけれど、たしかにそう聞こえた。

徳人は寝ぼけ眼をさすって、顔を壁側からアヌークのほうにむけた。

「どした、アヌーク」

「ッ 貴様っ、おっ、起きて、おった、のか」

ベッドサイドから跳び退いた。

「あ、いま、起きた……」

おおきくあくびをする。目覚まし時計は朝六時まえをさしていた。

「そ、そう、か……」

「あのさ、まえの晩も、俺の頭なでてくれてなかったか？」

「…………… 貴様、気づいておったのか」

「んんんっ、なあんとなく、さ」

また、あくびが出た。

アヌークが顔を真っ赤にしていた。

「どうした、アヌーク？」

徳人は彼女の視線の先を見た。自分の股間だった。

ローライズボクサーのまえがそれは立派に朝の自己主張をしている。

アヌークは震えながらあとずさっていった。

「貴様、わたしにそばにいて欲しいといったのは、わたしの女体が目当てであつたかっ」

こんどは徳人の赤面する番だった。

「てめっ…………… お、俺がそんな奴に見えんのかよっ、つかニョタイとか、エ、エ口いぞてめえ」

「見えるともっ、その穢らわしい現象こそなによりの証拠ではないかっ、使役霊憑けるぞーっ」

「っざけんなっオトコの朝はこれが日課だ、そんなにつけたきや味噌でもつけてる馬鹿野郎っ」

今朝もまたこうしてふたりのつかみあいのケンカが仲良く始まった。

ふたりはさんざん言い争い、互いのＴシャツとブラウスをしわくちゃにして、またベッドの端に並んで腰掛けた。

「なあ、きのう、男の弱点は、彼女って、いつてた、よな」

荒い呼吸を整えつつ、いった。

「…………… いかにも」

頭痛がする、そんなふうには頭を抱えながら答える少女はなんだか
かわいい。

「おまえ、オトリってヤツになるつもりか」
深刻な表情をして立ちあがる。

デスクの上で昨夜から投げっぱなしジャーマンを喰らっていたガ
ンイージを、もう事務的になおしてやった。

「そうだ、近日中に貴様の無念、晴らしてやるう、わたしがあの下
衆どもを誘いだし、ひとり残らず我が悪霊をもって、屍体の肉片ひ
とかけら余すことなくこの世から消滅させてくれるわ」

となりにもた腰掛けてきた徳人を見上げてくる。

「貴様の無念、さすれば晴れるであろう、な、そうなのであるう？」
そうであって欲しい、まるで懇願するような口調だった。

徳人は口ごもった。アヌーク、俺さ、ぽつりといった。

「……達也のさ、事故のあと、クソツタレの親がカネ送ってきやが
つてさ、俺さ、俺……」

起床のチャイムが鳴った。直後、校内アナウンスが放送された。

徳人に来客がきたとのことだった。至急教職員棟の応接室までく
るようになっている。

「誰だ朝っぱらから、クソ親どもだったら先に連絡くらいはしてく
るだろっし」

「おそろく、治安当局の手の者であろう」

「それって？」

「忘れたか、タツヤは世間では失踪中と見なされ、カナガワケンケ
ーが捜索中であろうが」

11、校庭バイク事件

徳人は学院の応接室というヤツを初めて見た。

超高級木材のグリーンエボニーで組み立てられた巨大なローテーブルを中心に、牛革張りのソファが十脚、整然と並べられてあった。金もち趣味丸出しのインテリア。

強面のオッサンがソファにふんぞりかえっている。

左に若い男、右に四十代くらいだろうか、いかにも銀行マン、そんな感じの伶俐そうなほそいインテリ男がいた。ノンフレームの眼鏡をかけている。

真ん中のヤクザなオヤジが徳人に自分の正面に座るよう促した。

この態度のデカイオヤジが上司だな、徳人は思った。

案の定ヤクザオヤジが神奈川県警の警部を名乗った。

率先して質問をしてくる。杉浦達也の立ち寄りそうなところはどこか？ 徳人は逐一答えた。警部が収穫のなさに口調を荒げてきた。

「そういわれても、達也のいきそうな場所、警部さんが話したトコでぜんぶです」

徳人は正直にいった。

ヤクザ警部が若い刑事と小声でなにか会話を交わす。

それから意外な行動を見せた。

銀行マン刑事に突然愛想笑いをうかべたのだ。

「立花さん、いかがでございますよう、立花さんのほうから、そのう、なにかご質問は？」

「立花と申します、徳人君、弟さんの失踪、さぞやおつらいでしょう、実はあなたのお父上の顧問弁護士と知己の間柄でして、弟さんのことを頼まれたのですよ」

オチチウエ……その言葉に、徳人はテーブルへ視線を落とした。磨きぬかれた天板に自分の顔が映っている。

この夏のいくつもの出来事のせいでやつれた顔。ふと、視線に気

がついた。

立花がじつと、徳人を見ている。

動物標本を注意深く観察するような目つきだった。

学院駐車場のほうから爆音がとどろいてきた。

デブヤナのご出勤だ。徳人は応接室の窓を睨みつけた。

毎朝のこの爆音にまた怒りの込みあがってくるのを憶えてしまう。

突然、女のように甲高い悲鳴が校庭から聞こえてきた。身もフタもない絶叫だった。

徳人と三人の大人は一斉に立ちあがった。

ドアにいちばん近かった立花が真っ先に飛びだしていく。あの悲鳴、デブヤナだ、復讐？ アヌーク、始めちまったのか？

徳人は立花のあとを追って職員棟を走った。職員たちも何事かと血相をかえ集まりだしていた。皆、デブヤナの悲鳴の聞こえてくる校庭のほうへとむかった。

徳人や、立花、神奈川県警の刑事たち、職員らが教職員棟の校庭に面するガラスドアを押し開いて校庭へと躍り出る。

一年坊主たちも男子寮のほうから校庭に集まりだしていた。

それは、奇妙な光景だった。

デブヤナがご自慢のハーレーにまたがって、優雅にゆっくりと男子用校庭を蛇行運転していたのだ。駐車場から連絡用の車道を通じて侵入したようだ。

「助けてくれえ、バイクが、止まらねえんだっ、チキシヨウ、止まれこのっ」

徳人や刑事たち、教職員、院生たちは、皆呆気にとられて目のまえの光景を見ていた。

誰もが手をこまねいているうちに、さらに驚くべきことが起きた。「みなさああんっ、うちのバカ息子、柳本宰は、レイプもののエロビデオが大好きでええすっ動画サイトでそのテのばっかり観てまあすっ、俺も時々、いっしょに観まあすっ」

誰もがざわつき始めた。

ひとりの長身の院生が、蛇行をくりかえすデブヤナにむかって駆けよっていった。柳本宰だった。

「父さん気は確かなの？」

柳本が冷たい声でいった。大股歩きでバイクに近寄っていく。

途端、バイクは三速までシフトアップすると柳本宰にむかって突進してきた。

柳本は横っ飛びに避けた。

バイクが急減速する。奇声を上げつつづけるデブヤナの体重移動など無視して、ハーレーは旋回しながらまた一気に加速してきた。開いた柳本との距離を縮めようと襲いかかる。校庭の舗装材からタイヤの摩擦で派手な白煙が舞いあがる。

徳人は血の気がひいた。

暗緑色の憑依霊だ、ヒトを操り、物体を意のままに動かす。

……教材どおりだ。遠目に見たところ、暗緑色に光るなにかは見えない。バイクの見えづらいどこかにでも憑依霊がくっついていていいのか？

まちがいなく、デブヤナは、？言わされてるんだ？バイクは？動かされてるんだ？。

柳本が校庭に面した男子校舎の中に逃げこもうとした。

ドアが開かなかった。バイクがうしろから突進する。柳本はさらに避けて走って逃げた。こんどは教職員棟のドアにむかってくる、徳人や立花たち、職員らの目のまえへと走り寄ってきた。柳本はガラスドアを開けようとした。

開かなかった。いまさっき、徳人たちが出てきたドアが開かなくなっていた。

棟内に残っていた職員が室内側から鍵を開けようとしている。

顔を引き攣らせて首をふった。

ドアの窓越しに、外にいる柳本にむかって、両腕で×のジェスチャーをしている。

そうか、ドア全部に憑依霊を貼っつけて開かなくさせて……柳本を逃がさないつもりなんだ、徳人はアヌークの罠をようやく理解した。

炎天下で、寒気を憶えた刹那。

バイクが徳人たちのほうに突っこんできた。

皆が悲鳴を上げて散り散りになっていく。徳人もあわてて数メートル先にいる柳本から離れた。柳本は、ドアや非常口を開けようとして走った。

開かなかった。

バイクがそんな柳本とびたり並走していく。親子のあいだに赤レングで組まれたタマアジサイのプランターが長くのびていた。柳本はこれのおかげで轢き殺されずに走っていた。バイクはしかし巧みに校庭の角、男子部の敷地の奥へと柳本を追い詰めていく。

徳人は走りながら周囲を見た。アヌークの姿は見あたらぬ。冷や汗が滲んでくる。

柳本は北側の女子部とのあいだの柵沿いに逃げていった。

中等部のいちばん真東にぼつんと建てられた、二階建ての礼拝堂へと走っていく。もう逃げ場はそこしかない。タマアジサイの植木がついに途切れた。誰もが金切り声を上げた。ハーレーは一気に四速のフルスピードで柳本を追い始めた。礼拝堂の丘を駆けあがり、斜面のカサブランドカの鉢植えをなぎ倒す。白い花弁が散った。腐葉土がタイヤに巻きあげられて数メートルも吹き飛ぶ。

柳本が礼拝堂の象嵌の施された扉に手をかける。

扉は 不思議なことに 開いた。すかさず屋内に入りこむ。

奴が閉めようとした瞬間、バイクが扉へ突進する。皆の雄叫びが、柳本の最期を感じて上がった。

バイクは、柳本を轢き殺す直前、礼拝堂の正面数十センチ手前で急停止した。

デブヤナはハーレーダビッドソンからふらりと地面に降り立った。まだ、なにかを叫んでいた。それが小声になり二、三歩歩いて、

ぶつ倒れた。

立花が先頭に立って校庭を突っ切っていく。

柳本はいつもの能面顔で礼拝堂からのっそり出てきた。気絶している自分の父親の頭に情け容赦ないキックを浴びせた。土埃の舞うなか、ヘルメットが吹っ飛んでいった。

一年坊主たちが大騒ぎをしている。

教職員たちが、校庭に面していないドアからやってきた。

礼拝堂……祈りを捧げる、聖なる場所　聖域？

これが教材でいつていた？聖域？か。

聖域とは、ごさかしいヒトどもが創りし聖なる土地、神を畏れ敬うために集う土地なり。

聖域では使役霊が我等の意のままに動きませぬ。

そうだ、教材どおりだった。

アヌーク、一刻も早くあいつのもとにもどらなきゃ、徳人は彼女の美貌を想いながら走った。

走りゆく彼から数十メートル離れた校庭の奥、礼拝堂のまえ、柳本宰は一点を凝視していた。

校庭の南側にある男子寮へとひた走る川上徳人のうしろ姿を、凝視していた。

能面顔には、相変わらずなんの感情も浮かべてはいなかった。

12、儚い夢

デブヤナこと柳本教諭は、当然のことながら現行犯逮捕された。紅葉ヶ丘市のこの地域の所轄署である神奈川県警紅葉ヶ丘署へ連行されていった。

俺は無実だ、そう叫び暴れながら。

一方、徳人は走って自室へと駆けこんだ。

彼女は、いた。コンテツサチエアに正座して、くるり、回転させる。足蹴りをフルパワーで。

「相すまぬ、し損じたわノリト、このアヌーク一生の不覚よ、治安機関の者が来校したまさしく千載一遇の好機を逃してしまったっ」
どかーんっ、蹴る。ガンイージがついに床へ落ちた。

徳人は、折れちゃったビームライフルとガンイージを拾いあげた。
「ノリトよ、そう気を落としてくれるな、つぎは約束する、かならずや
」

「アヌーク、礼をいうよ……」

いっべき言葉をひとつひとつ、考えながら口を開いた。

「これは面妖な、わたしはしくじったのだぞ、忌々しい聖域めが…
…この学舎がカソリック系スクールであったことを失念しておった、迂闊であつたわ」

「おまえが本気をだせば、柳本の親子ふたりに憑依霊を憑けてさ、自殺させることだつてできたんだ、やつぱ、おまえ、手加減してやつたんだろ」

アヌークは、それは愉快そうに笑いだした。

くすくすっ、と少女は愉しげに笑みをうかべる。またデスクを後ろ脚で蹴っ飛ばして、くるりと優雅に一回転した。回転するチェアに顎を寄せ、しなだれかかる。ヒトを殺め損じて、くすっ、と笑む少女。けだるげに背もたれに身をあずけ、蒼い眼を薄く閉じて。回るたび、プラチナブロンズが、ふわり、宙を舞う。眩暈を憶えそう

な光景。押し倒したいくらいに。手をのばせば、届くところにあつた、白く輝く少女の髪が。

「……………どうして……………笑うんだ？」

苦勞して邪念をふり払った。

「ふんっ、それが出来るならばとづくにやっておったわ、カルマびともヒトを殺めるのに苦勞はせなんだわ。まったくもって如何ほどに樂ができたことであろうな」

「……………どういう意味だよ」

「よいかノリトよ、憑依靈の心理操作、万能に非ず。憑依靈を憑けても、その相手が絶対におこないたくないと思っておる行為を強制することは、ほぼ不可能なのだ、憑けた憑依靈の靈力が強ければ強いほど、強制力はたしかに上がりはする、まあ、あとはターゲットとなったヒトの精神力が勝るか、憑依靈の靈力が勝るか、イタチごっこよの、ふんっ」

「なあ、もうやめよう、人殺しなんて、大谷さんも早まった真似はすんなって」

「シヅ工殿は、退職願を出したのだぞっ」

立ちあがって徳人に詰め寄る

。徳人は彼女の表情を恐る恐るうかがった。怒りをとりこした、決意のようななにかが彼女の顔を支配していた。

「このままあの下郎めらを赦してよい道理があるうか？」

徳人は首を激しくふった。

「ノリトよ？ 頼む、我が行いを是と認めてくれぬか、貴様も殺したいと思つておつたはず」

「……………いまは、ちがうんだよ」

「……………どういう意味であるか？」

「あんなクズ、殺したところでさ、タツは、タツの体はもとはもどらないんだ……………」

「……………やはり、わたしを恨んでおるのだな……………ノリト……………ッ」
少女にとって、最も残酷な言葉。先月、杉浦達也に襲いかかった

張本人なのだから。

「ちがうんだ、おまえといつしよにいたいんだ」

少女のかわいい掌を両手で握りしめた。

「……ノリト？」

声音が驚きにとまどう。

「もういいんだ、おまえと、タツと……三人でさ、平和に暮らさないか？」

少女の両の瞳がおおきく揺らいだ。

「おまえ、復讐が終わったなら、その……十字軍と闘うためにいつちまうんだろ？ 俺のまえからいなくなっちゃうんだろ？ タツを連れていつしよにさ」

「……わたしは父祖の戦列の戦士、闘いの中で生き、勝てば第？列への昇進、敗れば十字軍の手により封印刑を受けるのが定め
……それが……定め……だから、だから……」

「どこにもいかないでくれ、おまえと離れたくない、ずっといつしよにいたいんだよ」

「それは、ノリト……貴様はっ」

なにか、言葉をつなげようとして、少女は口をつぐんだ。

力づくで少女を抱きしめた。そうせずにはいられなかったから。

少女が堅くその身を閉じる。

「父祖の戦列つてところからさ、抜け出るとか無理か？ 俺、おまえやタツと別れたくないよ」

「……だめ……戦列を裏切ることだけは、それだけは……」

「どうしても駄目か」

よりいっそう強く抱きしめてやる。

「……封印された数多の戦友等を、同志等の無念を晴らさずして、どうして、なぜ、わたしだけ……安息を得てよい道理があるうか」

詰まりながらも、絞りだすように言葉を紡いだ。両手で少年の、中学二年にしてはたくましい、男になりかかった胸を押しもどしてくる。

少女の背にまわした両腕を　　なんとか未練を断ち切り　　解いてやった。

「……そっか、だよな……ダチは裏切れないもんな、わかるよ」
ベッドに横たわる。体に力が入らない。唯、心が、この募る想いだけがあつた。

「俺だって、つるんできたヤツから裏切られたら、つれえもん、わかるよ、おまえの気持ち」

少女の、顔を上げる気配。ベッドサイドの、間近の息づかい。その身の動きのひとつひとつが少年に突き刺さってくる。

かたく眼をつぶる。駄目だ、いま少女の顔を見たら、もう歯止めがきかない。抱きしめずにはいられない。この気持ちが、おさえきれなかった。

「デブヤナをぶつつぶしてくれただけでもさ、マジでおまえに感謝しなくちゃいけないのに」

「ノリトよ……」

「大谷さんを裏切りたくはねーよ、けど、タイムだけど柳本の野郎は弟の仇なんだっ、ヤロウとは、ウチのガッコの伝統で正々堂々決着つけてやるよ、デブヤナが逮捕されてもうヤツはオヤジのうしろ盾なくした、ヤツは学院じゃデケえツラ二度とできない、てか二度とさせねーっ」

「駄目だっ、その、だから、怪我したらどうするつもりかっ」

「オトコがんなもんでビビってらんねーって」

「貴様は……野球部のエースピッチャーであるうが、怪我して……ベースボールが、そっ、そうだベースボールが二度とできなくなったりしたらとりかえしがつかぬっ」

徳人はアヌークのほうに背中をむけた。

壁のビートルズのポスターをぼんやりながめた。

「アヌーク、ビートルズって知ってるか」

「……グレートブリテンの偉大なバンドであろうが」

「メンバーのジョン・レノンがスゲえいいこといったんだ」

徳人はポスターのレノンを見た。

「？根本的な才能とは、自分になにかができると信じること？なんだったさ」

身じろぎひとつしない少女の視線、じっと見つめられている。痛いぐらい、感じる。

「俺には野球の才能なかった、でも世界史が好きなんだ、将来、高校の世界史のセンセイになりたいんだ、デブヤナみてえな先公がいやがったら、教え子たちの味方になってさ……」

少女は沈黙していた。

それは長い、とても長い、奇妙なくらいに長い沈黙だった。

「……アヌーク？」

どうしたんだろう。うしろをふりむく勇氣は出ない。

彼女の立ちあがる音がする。

ドアが乱暴に開かれた。

徳人がベッドから跳ねおきる。

二階のほそ長い廊下。左右を見る。誰もいない。寮の誰かの部屋に入ったに違いない、そう思い、廊下の両側に並んだ二年生の部屋のドアを片っ端から開けていった。帰省した同級生たちの部屋。空っぽだった。一階へ降りる。廊下にも玄関ロビーにも一年坊主たちの姿すらなかった。がらんとしていた。

アヌークの姿は、すでになかった。

13、ユリスモールカフェ

昼すぎ。

ユリスのある丘の中腹にその店があった。

名前を？ユリスモールカフェ？という。

院生たち御用達の店だ。二十人くらいの座れる一階で、一年坊主たちが楽しそうに昼飯をぱくついていた。

夏季限定メニュー、まかないふうフィリングバターとシュリンプのベーグル、特製フィッシュ&チップスのタルタルソース添え。

旨いことは経験上知っている。

テーブル席の一年坊主たちは、ひさしぶりの平和な食事をまえにして、はしゃぎまくって平らげていた。話題はひとつ、あしたの夜の近所の紅葉ヶ丘八幡神社の夏祭りについてだった。古びていい感じの光沢を出した木製の壁、そこに地元のライブハウスや夏祭りの告知のポスターが所狭しと貼ってある。

皆ポスターをながめては、しきりに笑い声を上げていた。

そんななかをギャルソンエプロンを着けたカフェのスタッフたちがホールをせわしなく行き来している。

「食欲出ないか、ノリ」

チーフスタッフの若者が声をかけてきた。黒髪に蔦色とひいろの瞳の印象的な、いかにもヨーロッパの街並みの似合いそうな、ハンサムな男だった。

アルさん 本名は先輩たちも知らない。

徳人の通う中等部の系列大学の留学生らしいところまでは皆知っていた。

身長は一九〇はあるだろうか。見上げるぐらいの長身瘦躯だ。

中等部二年としては背の高いほうの徳人からすれば、いっそれくらい背が欲しかった。

徳人はカウンター席に座って、いつもならガツガツ喰うだろう、

ユリスのカフェめしをじつと見下ろした。アルさん自慢のエスプレッソだけ、四杯目をオーダーした。

「タツ、一日も早く見つかるといいな」

心配そうなアルの声音に、徳人は顔をぱつと上げた。そうだ、アルさんも心配してくれているんだっけ、そう思い、ちょっと迷ってから、アルに声をかけた。

「アルさん、誰にもナイショにしてくれる？」

「もちろんだ」

長身を折りまげ、カウンター越しに顔をよせる。

「タツとは連絡とってるんだ……元気にしてるよ……」

アルの表情がやさしくなる。

無言で、カウンターの上の徳人の拳を握りしめてくる。

アルさんに嘘をつくのはイヤだった。でもしょうがない。マジバナをしたところで信じてもらえるわけがない。

アルはなにか徳人に言葉をかけようとして、口をつぐんだ。それ以上、好奇心丸出しに根掘り葉掘り聞いてくるようなマネは一切しなかった。

徳人はアルのこういうところが好きだった。アルがもう一度徳人の拳をぎゅっと握ってくる。

哀しげな表情で握ってくれた。

徳人が店に通いだして二年、初めて見る、アルの表情だった。

一年たちがたらふく喰って帰り始めた。

帰り際、皆がアルと徳人に挨拶していった。誰もが、達也の仇取ってください、そういつてきた。徳人は一年たちとハイタッチしあった。

皆入学したてのときの笑顔をとりもどしている。当然だろう、柳本親子の恐怖政治がようやく終わったのだから。

先輩つ、ひとときわかるい声上がる。石亀が近づいてきた。

「元気出してくださいよ、タツのヤツが心配ッスけど、なあに、学院はもう安全ッス、多分、ヤナのクソ野郎が怖くってタツは帰った

くても帰ってこれないだけだと思っス、デブヤナの事件がテレビでバンバンやってますから、それ見たらタツ、安心してぜってえ帰ってきますよ」

「おう」

そうか、そういう考え方もあるのか……。

先輩、大谷さん、辞めたじゃないっすか、石亀の言葉に、徳人は無言でうなずいた。

「聞いた噂じゃあ、俺ら一年が学食でビビリながら飯喰ってるの見て、わざと俺らのために辞めてくれたそうッス」

いかにも悔しそうな表情をつくった。

学食が閉鎖されたら、一年坊主たちは、安全なユリスカフェで昼飯と晩飯にありつける。

「柳本と決着つけてやる、こんどこそ中等部の^{ウチ}伝統だ」

エスプレッソを一気に飲み干した。

カフェのエントランスで騒ぎ声が聞こえてきた。

あの声、高橋と坂野だ。

徳人はふりかえった。奴らがカフェのスタッフになにやら文句を垂れている。

「だから、ベーグルん中に髪の毛が入ってたんだってば、髪の毛」

高橋が声を荒げている。

「そうそう、しかも俺たちふたり両方になんだけどっ」

坂野が勝ち誇った様子でいう。

大学生のホールスタッフがアルに耳打ちしてきた。

連中六月にもおなじ手口で会計をタダにさせたんだという。

あいつらふざげやがってっ　　徳人がウインザーチェアから立ちあがる。

アルが、徳人の肩に手をおいた。

「アルさん？」

アルはおだやかな表情でキッチンから出ると、エントランスへ歩

いていった。

徳人や石亀、スタッフたちが緊張して成りゆきを見守った。

高橋と坂野は、アルを見つけると、あからさまにビビった顔になった。

「一発カマしてやってくれ、アルさん」

徳人は拳を握りしめた。カフェの全員の視線が集まる。

アルは、丁重に頭を下げた。胸に左手をあてがい、実に優雅な仕事でお辞儀をした。

「大変、申し訳ございませんでした」

詐欺の常習犯どもは、カンニングのバレなかった学生の、そんな安堵の半笑いをうかべた。

アルのうしろにいたスタッフがたまりかねて、ふたりの院生に食ってかかるうとした。体育会系のガタイのいい男の突進を、アルは

頭を下げたまま 軽く腕で押しやった。

ふたりはそれを見て、この店もうこねえから、といいながらもしやいだ様子で出ていった。

ホールスタッフたちがアルのところに集まってくる。

ひとり陰口をたたいた。チーフは見かけ倒しだ、と。

そいつとアルを慕うスタッフたちのあいだでにわかに口論になった。

徳人は悔しさに、目の前が眩みそうになっていた。

「アルさん、なんでだよっ」

カウンター席から駆け寄った。

「ん？ カフェにきてくれた人は誰でも大切なお客様だからさ、ノリ？」

「だって、あいつら見え見えじゃんかよっ」

「アイニク、オレは平和主義者なんでね」

ひよい、と肩をすくめた。

14、帰ってきたアヌーク、そして悪霊くデimonく

昼すぎから、小雨が降りだした。

夕方頃には大雨にかわった。遠雷が鳴り響いた。

雨はなかなか降り止まず、夜になるとスコールのような猛烈さで地面に降り注ぎ始めた。

徳人は寮の自室に引きこもった。

アルのことは尊敬してる、でも自分は平和主義者じゃない。

また怒りがこみ上げてくる。柳本とはいつでも決着をつける腹づもりはできていた。

でもなによりも、アヌークが、あの少女のことが心配でいてもたってもいられない。

使役霊？悪霊？って奴を使えば、人ひとり造作もなく殺せるのだから、それが怖ろしかった。あいつを、人殺しにしたいくはない。馬鹿な考えだった。

アヌークは歴戦の戦士だ。多分、いままで数多くの教皇十字軍、それから人類……の命も奪ってきたのだろう。だからあれほどわけもなく、あの方たり、殺めるぞ。そんな言葉を口にできるのにちがいない。

アヌーク、どこにいるんだよ？心配で、晩飯もカロリーメイトをすこし口にしただけだった。ベッドの上で体を丸めた。タンクトップとローライズボクサーだけ身につけて、タオルケットにくるまった。

手の中の携帯を見つめる。あいつ、タツの携帯をもってるはずだ、きつと連絡してくれる、一縷の希望にすがるしかない。

風雨が出窓をたたきつづけていた。

いつの間にか、日付はかわっていた。

携帯の液晶表示は、午前四時すぎを示している。

すつと、出窓の開く音がする。

ゆつくりと。雨音が近くなった。

風が部屋へと吹きこんでくる。

カーテンのはためく音がした。窓が閉められ、また雨音が遠くなる。

アヌーク……徳人は全身を緊張させた。いまずぐ飛びおきたかった。できることなら。

彼女は毎晩自分にタツの夢を見せてくれているんだ、だから寝たフリを、そう思いなおす。

壁のビートルズのポスターが暗闇のなかで見えた。

「ノリト」

アヌークが小声で、自分を呼んでくれた。

帰ってきてくれた、うれし涙のあふれそうになるのをこらえる、息を押し殺して。

「おきてるの、ノリト……」

そうつと、アヌークのほそい指が、徳人の頬をやさしくなでる。

おきてるよ、アヌーク、心のなかでつぶやいた。

彼女の微かな吐息、背に感じただけで全身が熱くなる。

つぎの瞬間、思いつきりほつぺたをつねられた。

痛っ、イデ、イデデ、マジ痛え、痛みはこらえたけれど、うれし

涙にかわってほんとの涙が出てきた。徳人は身じろぎひとつせず、

我慢した。かえって不自然だ、そう思いなおし、ムニヤムニヤ、と

いいながら寝ぼけたフリをしてほつぺたのほうに手をやってみる。

つねる手が、さつと離れてゆく。

徳人は自然な仕草で、つねられた頬を指で搔いた。体をすこし動かしても見せた。

「……………タツヤ、おねがいね」

アヌークは、徳人が眠ったものだと思信したらしい、掌を徳人の頭にあてがった。

あたたかい、慈しむような感覚。

やわらかい少女のちいさな掌。

タツの声が聞こえてきた。笑っている。少女の掌に招喚されたタツ、守護霊となったタツがやさしく自分を包みこんでくれる。なにもかも幸せだったころの夕暮れの公園の情景が目の奥にうかんできた。

兄弟は水浴びで濡れになつてはしゃいでいた。

心地よかった。嫌なこと、なにもかもが浄化されていくような感覚。

ありがとうな、アヌーク……。徳人の携帯をつかむ手が、震えた。やさしい時間がどれくらいのもあいだ、つづいたのだろうか。

雨はやんでいた。とつても静かだった。

アヌークは、そつと掌を離していった。

タツの声が遠くなつていく。

徳人はひたすら、携帯を握りしめて、こみあがる感情を押し殺した。

やがて、小さな音が聞こえてきた。

布がこすれるような音。

徳人は、つばを飲みこんだ。心臓の鼓動が早くなる。

ベッドの枕側、部屋の角に小物を入れる収納ボックスがあった。

その上の卓上ミラーを、徳人は見た。

三十センチ四方ほどのおおきさのミラーを、部屋の中央にたたずむアヌークが映っているのを。薄暗がりのなか、彼女は、びしょ濡れになった女子部のブラウスを脱いでいた。

滴の垂れるソフトグレイのミニスカートを、そつと下ろした。

アヌークは、首から鎖のついた懐中時計をかけていた。アヌークの拳こぶしくらいのおおきさだ。

懐中時計の保護用の上蓋ハンターケースには美しい装飾が施されてあった。浅浮き彫りの精緻なデザインだ。

月夜に照らされ、ハンターケースも月のように白く光り輝いた。

アヌークは、懐中時計を大切そうに握りしめている。

時計から両手を離すと、雨に濡れた白いブラジャーとショーツを

脱いだ。

徳人はぐつと、眼を閉じた。

また、開いてしまった。

うつくしかつた、晴れた夏の夜空の月と星々に照らされた、アヌークの白い体が。

徳人は我を忘れて見とれた。

背、くびれた腰、それから……なめらかな曲線だけで構成された透きとおるような白い輝き。疵きずひとつ無い完璧なヴィーナスの彫像だった。守護霊の蒼白色にも、あの美しさをもしのぐほど、アヌークのうしろ姿は神秘的だった。

徳人は、なんら劣情を抱かなかった。

唯、うつくしさに心を打たれていた。

アヌークがクローゼットを小首をかしげながらのぞきだす。

徳人のタンクトップ、サーフパンツをとりだす。

両方とも彼女の体からしてみればぶかぶかのサイズだった。

「借りるね、ノリト……」

すまなそうにささやいた。

少女は手早く着替えをすませた。

濡れそぼった制服を折りたたみ式の室内物干しにかける。

下着を両手に握りしめて、しばらくのあいだ、逡巡している様子だった。

ちらり、恥ずかしげにベッドの徳人のほうを見る。

徳人は瞬間的に眼をつぶった。罪悪感がこみあげてきてしまう。

なんとかしてやりたくっても、こればかりは徳人にはどうしようもできない。

少女は制服のポケットからガスライターを取り出した。点火して、下着といっしょに右手にもつ。

ライターで燃やして処分する？ ダメだ、ずぶ濡れだから無理……

……そうか悪霊の招喚か。

少女が、意を決したように左手の人さし指を一本立てる。

指の先に光が　おおきこそガスライターの炎程度の　禍々しい暗赤色の光が現れた。

？悪霊？だ。

少女は、悪霊の光へ濡れた下着を近づけた。どうやら下着を処分したいらしい。

「ええい、早く消してしまえ、なにをしておる」

薄気味悪い光は、のらりくらりと揺れ動き瞬くだけだった。

「頼む……いうこと、……聞いてっ、ね？　お願いだから」

ついにちいさな声で？悪霊？に懇願しだした。

あれほど誇り高く、天衣無縫な態度をとりつづけてきた彼女が。

悪霊はいきなり、四、五十センチほどに膨張した。

光の周囲の空間が歪み陽炎のように沸き立つ。部屋は真っ赤に染まり、そいつは、少女の右手の下着を一瞬で消し飛ばした。

アヌークの指先といっしょに。

徳人は驚愕のあまり声を張りあげそうになった。

アヌークは激痛に耐えるように、全身を震わせながら右手の傷に左手をあてがう。

「……ごめん、ごめんね、タツ、ヤ……」

もう一度達也を招喚した。彼女の左手に清浄な白い輝きが現れた。右手の消し飛んだ指先を治癒し始める。肩で荒く息をつきながら。

？　……っ、　っ？

アヌークツ、アヌークツ、タツが取り乱して彼女の名を叫んでいる。

徳人は胸が張り裂けそうになっていた。

自分の指のほうか吹き飛んでしまったかのような痛み。そんな苦痛に心が責め苛まれていく。

彼女が右手をかばいながら、コンテツサチエアの上に座る。ちいさな体軀を丸めて。チェアの上で、体育座りの姿勢になった。

白く輝く光を、泣き出していた達也を封印しなおす。

彼女は、頬を伝う悔し涙を拭こうともせず、顔を膝小僧にうずめた。

徳人は、自分でも気づかぬうちに涙を流していた。あふれ出る涙をぬぐいもしないで、携帯を握りしめていた。両手で強く握りしめていた。

抱きしめてあげたい、おまえを。おまえの悔し涙をやさしく拭きとってやりたい、そうかアヌーク、だから、悪霊ではなく憑依霊を使って柳本たちを……。

チエアの上に座って、ちいさな体を丸めて必死に痛みに耐えている少女に、目のまえにいるのに、なにもしてやれない。俺の起きていたことがばれたら、見ていたことをおまえが知ってしまったら、どれほどおまえの戦士としての誇りに傷をつけてしまうことが、少年は思った。

アヌーク、俺、おまえのことが
。 。
真の絶望とは、なにをさすのか？

少年は、今、その意味を十四年間生きてきた今、生まれて初めて知ってしまった。

15、八月十一日

徳人の部屋を朝陽が照らし始めた。

真夏の積乱雲がうかんでいる。

徳人は一睡もできなかった。アヌークのほうに背中をむけて、携帯をぼんやりと見つめていた。起床の時刻になったけれど、起きあがる気力は一向に湧いてはこない。

六時半、定刻どおりのチャイムが寮内で鳴った。

うしろで彼女の動く気配がする。

空気が背中を刺してくる、日焼けの痛み（サンバーン）の何万倍もつらい。

盗み見るなんざオトコのすることちゃねーよ、痛みを耐えて、そう思った。

彼女の体が心配でならなかった。気持ちにあらがえず、卓上ミラーのほうにまた目をやってしまう。

彼女がクローゼットから徳人の制服の白シャツを出していた。彼女の着ているブルーのタンクトップはサイズがおおきすぎた。胸のふくらみが見えそうになる。

徳人はすぐに眼をつぶった。

「ノリトよ、起きるがよいぞっ」

いつもの自信に満ちた声。

「……うっ……いま、何時？」

ぎこちなく、ゆっくりと起きあがった。

「チャイムが鳴ったぞ、貴様、気づかなかったか」

「うっ、おはよ、アヌーク」

わざとらしくのっそりとふりかえった。

「まったく自堕落なやつよ」

ふんっ、と余裕げな笑顔を見せてきた。

お気に入りのコンテツサチェアの上で仁王立ちになる、ぶんぶん、

元気よさげに手の先から垂れさがった長袖を振りまわす、腰に両腕をあてがった。

右手はもちろん、その指先が、長い袖に隠れて見えなかった。ちがう、見せたくないんだ。

深呼吸した。

夜中の、あの悪霊、思いだしただけで狂おしいほどの怒りがこみ上がってくる。

「なんだ如何した、貴様、眼が充血しておるぞ」

「……あのさ、教えてほしいことがあるんだ」

ベッドの上で正座をしてみせた。

アヌークの余裕たつぷりの笑顔が 無いはずだ、そんな余裕

徳人の真剣な表情をまえに消えていった。チェアの上でこんどは、ちよこん、と正座乗りした。メッシュ張りの背もたれの上で両腕を組むと、徳人を見据える。

ふたりとも正座して、お互いを見つめる格好になる。

「うむ、申すがよい」

「毎日どこ出かけてるのか？ それと柳本の奴をどうするつもりなのか？」

「忘れたかノリトよ、我等父祖の戦列が十字軍と闘争をくりひろげていることを、わたしは与えられし任務遂行のため、ニッポンに入国したのであるぞ」

「毎晩闘つてるのか？ 十字軍と」

「任務の内容は答えられぬ」

「じゃあ、柳本は？」

「ひと思いに殺める」

「アヌーク」

徳人を見つめ、まったく貴様ら兄弟は……と観念したようにいった。

「と、いいたいところであるが、貴様の気が晴れねば復讐の意味はない。ノリトよ、では貴様自身、あの下衆と如何様に決着をつ

ける所存か？」

「今晚夏祭りがあるんだ、紅葉ヶ丘八幡神社で毎年夏にやるんだよ、その境内、裏っ側に空き地があるんだ。ウチの生徒なら誰でも知ってる、そこであの野郎と伝統だ^{タイムン}」

「聞くがよい、あの下衆のこと、かならずやあの二匹のクソツタレのドチンピラ下衆野郎を伏兵として連れてくるはず、一対三では分が悪いぞ、ナイフの類もおそらくは」

「そこで頼みがあるんだ、もし野郎が汚え手を使ったら、人を呼んでくれ、祭りだから客がたくさんくるんだ、警備の警官もいるから俺がもし逆にボコられていたら、奴らは終わりだ、警官に捕まったら即刻学院を自主退学する羽目になる、うちのガッコ、集団リンチするような奴はすぐ放りだすからな、あいつら別の中学へ飛ばされてウチは平和になる」

「なっ、貴様の身が危ないではないか、しかも神社の境内とは……貴様、？聖域？で……わざとわたしの使役霊を無力化する腹づもりであるな」

「うん、俺たちが使役霊を使って余裕で勝っても、無意味だ、柳本が高橋や坂野を使って卑怯ないじめやってきたのとおなじになっちゃうからな、でも飛ばされた先のガッコで連中がおんなじことくりかえすようだったらどうしようもねーけど、もうケーサツに任せるしか……」

「わたしの役はいざというときに治安機関の者を呼ぶ、それだけでよいと？」

「うん、デブヤナを退治してくれただけで充分だ、バカ息子とのケリは俺がつけるっ」

「それで貴様、満足できるか？ 復讐の炎、消して溜飲を下げるこ
とできるのか」

徳人はおおきくうなずいた。

「ノリトよ、わたしはカルマびと、このようなちいさき体躯なれど、使役霊を使わずとも腕力で下衆どもを屠ることができぞ」

「ひよつとして、銃とかで撃たれてもカルマびとってのは死なないのか？」

「強力な銃、たとえばバーレットのような怪物ライフルで撃たれれば、肉体だけは滅しようぞ」

「バーレ……？ とにかく俺が最悪殺されそうにでもなっていたら、そんなときは助けてくれ」

「……致し方あるまいて」

アヌークは渋々承諾した。

16、チキンは好きか？

任務があるゆえしばしの別れだ、そういうと、出窓を開けてふりかえる。

「約束の刻限にはもどるゆえ案ずるな」
達也を招喚した。

ちいさな体を蒼白色の結界に包んで、地上の芝生の上に、ふわり降りたつ、敷地を走り抜ける。青銅製の三メートルはあるだろう外柵をぼん、と軽やかに跳びこえる。外にひろがる丘陵のカエデ林の中に消えていった。

徳人は出窓から彼女のうしろ姿を見送った。

任務 危険なことをしているんだろうか？

十字軍つて奴らと闘ってるのか？ 悪霊を使役できずに不利じゃないのか？ いろいろな想いがよぎった。彼女と一瞬一秒でも多くのあいだ、いつしよにいたかった。ただ、そばにいて欲しかった。誰にも邪魔されず、ふたりきり、誰も来ないこのがらんとした二階の部屋で……自分がベッドに、彼女がコンテツサチエアにちょこんと正座して……目を閉じて、思う。少女が優美な脚で自分のデスクを こんっ、なんて可愛いもんじゃないぞ、そうとも、どかんっ、と感じだぞ 足蹴りして、くるりん、とチエアを楽しそうに回転させる姿……思いだしただけで胸をかきむしられるような、経験したことのない気持ちに襲われてしまう。

ひたすら出窓の外を見ていた。

未練を断ち切るように、荒っばい仕草で夏服に着替える。

一階に降りた。

玄関ロビーのロングソファアに一年坊主たちが座って話しこんでいた。

寮監のおいちゃんが、観葉植物にスプレーで水を拭きかけながら、一年生たちになにやら語って聞かせている。石亀の姿もあった。

一年生たちは徳人が降りてくるのを見るとすぐに挨拶してきた。

「おいちゃん、なにかあったの」

徳人は、螺旋階段の手すりにもたれかかった。

「それがねえ川上くん」

「先輩、重大ニュースですよ」

石亀がおいちゃんの言葉を遮って興奮気味に話します。

「ヤナの野郎、自主退学させられることになったッスよ」

「マジかよ……おいちゃん、デブヤナは？ ヤツはどうなったの」

「紅葉ヶ丘署から学院に連絡があったんだけどねえ、まだ取り調べは受けてるみたいだよ、でもいい知らせじゃ、デブヤナは学院を懲戒解雇になったんだよお」

徳人はおいちゃんに礼をいった。いよいよだ、？ケリ？をつける時がきた、そう思った。

一階の真つ直ぐ延びた廊下を突き進んでいった。

石亀がついてくる。

「先輩、ヤナの部屋いくんすか、ヤロウ、いまふもとのコンビニッスよ」

「じゃあ坂野と高橋、あのコバンザメどもは？」

「そつか知らなかったんすよね先輩、あいつら今朝、朝イチで実家に逃げ帰りました」

「よしっ、今夜の紅葉ヶ丘八幡の夏祭り、柳本に呼びだしかけるつもりだったんだっ」

「マジッスかつ、ちょっと待ってください、ヤナのケータイに電話してみるッスッ」

石亀が上機嫌な笑みを見せる。

奴はすぐに電話に出た。

石亀が携帯を耳に当てながら、目でOKの合図をしてくる。

徳人が石亀の携帯を受けとった。

「柳本か？」

電話の奥からは、なにか食べている音が聞こえてきた。ガツガツ

と喰っている。

「おいっ」

『……朝飯の最中だから、気にしないで、川上』

先輩に対する言葉遣いではなかった。

徳人は怒りをおさえた。今晚の伝統タイムンの場所と時間を伝えた。

「おい、聞いてんのかてめえ」

苛立ちが声に混ざる。

『……川上、チキンは好きなの？』

なにをいってやがる、こいつ？ 徳人は本気で、この一年はなにかが、どっかがおかしいんじゃないか、人としてなにか、根本的ななにかが欠落してるんじゃないか、そう思い始めた。

『チキンは、英語で臆病者、弱者、クズ野郎の代名詞なんだ、俺がね川上、フライドチキンに喰らいつくのは、俺が肉食獣として生まれてこれた悦びの再確認をするためなんだよね』

「てめえ、一度医者にアタマ診てもらったほうがいいぜ」

『肉食獣は草食獣を狩る、自然の摂理、杉浦はチキン、草食獣だった、だからくたばった、それだけの話。失踪して今頃死んでるんじゃないの？ 良い悪いの問題じゃない、背負った宿命』

「……ヤロウ、死にてえのか？」

携帯をもつ手が強張っていく。握りしめて力の余り、石亀の携帯から、みしり、音が鳴る。

『いまからでも遅くはないよ川上、君もチキンを喰い千切る側にまわれば？ 君は肉食獣だね、君にはその資格がある、俺が保証してあげる』

多分チキンだ、喰い千切る音がまた聞こえた。

「今夜八時だ、忘れんな、チ、キ、ン、野郎」

嫌みたっぷりについてやった。

音がやんだ。

『……いま、なんていったの川上』

「何度でもいってやる、チキン野郎はてめえのほうだ、ひとりじゃ、

なあんにもできやしねー、手下使って卑怯なマネしか思いつけねー、最低の下衆野郎だ、いや、てめえをチキンにたとえたらニワトリさんたちがカワイソウだぜ」

「……………」

またフライドチキンを喰い干切る音が聞こえ始めた。無言がつづいた。

徳人は薄気味悪くなって通話を切った。

「どうでした、先輩？」

石亀が会話の険悪さの空気を読んだらしく、心配げに聞いてくる。

「奴はイカれたサイコ野郎だよ、カメ」

「俺心配ツス、ヤナの野郎、卑怯だから先輩の彼女、マリアちゃんを狙うんじゃないかって、それが、俺ら一年、みんな不思議に思ってたんすよお、マリアちゃんてどこで寝泊まりしてんのかなって、ジヨムシヨは閉まつてるし、きつとヤナの奴、マリアちゃんを」

「それなら心配いらねー、あいつは」

なんて説明する？ 一瞬迷った。

「………… あいつ、ヨーロッパで総合格闘技習ってきたんだ、俺よか強えんだぞ」

「マジツすかつ、じゃあ、先輩、マリアちゃんとふたりでヤナの野郎を？」

「ちがう、あいつにはいつしよに来てもらっただけだ、柳本がふざけた真似しやがったら、警備の警官でも呼んでもらうつもりだ」

「それじゃあどうしても伝統タイムンつすか？」

徳人はおおきくうなずいた。

17、徳人VS・柳本

夜の七時。

門限の時間だ。徳人は、寮監とドア口であぐらをかいて語りあっていた。

「川上くん、ここ二、三日部屋にこもりっぱなしじゃないかね、弟さんのことは心配だけど、君もしっかりご飯食べて、弟さんを待っていてあげなきゃあいかんと思うんだよお」

「ありがとう、おいちゃん、でも俺はおいちゃんの髪の毛のほうがか心配だ」

「こんちくしょうめ、寮監は薄くなった頭髪をなでながら悪態をついたけれど、それでも徳人を元気づけようとして、いくつか言葉をかけてくれた。

メシは喰ったのかい、そう訊ねてくる。

「ああ、食欲があんまないけど？勝負メシ？喰ったから」

「あれか、あのカップヌードルかい、干しエビのダシ、お湯代わりにするやつ？」

徳人がうなづく。

「ありゃほんとに旨えよなあ、おいちゃんはそういつて顔中で笑ってくれた。」

「あのさおいちゃん、今晚さ、門限破りしたバカはいたの？」

「あれだよお、デブヤナのバカ息子だよ、まったく退学が決まったからってねえ途端にこれだから……あつそうそう、それと君の部活の後輩、カメくんが」

「カメが？ あいつも破ったの？」

「いやあちがうちがう、ついさつき帰省していったよ、なんか、夏は寂しいねえやつぱり」

「やつぱりみんなホームシックかねえ、寮監はそういいながら徳人の部屋から立ち去った。巡回点呼を終わらせたおいちゃんの一階へ

と降りていく音がする。

音は螺旋階段に消えていった。

クローゼットからアヌークが出てきた。

その中でこの夏の流行りの柄の可愛いワンピースに着替えをすませている。

徳人はサマーセーターにデニム。ふたりの靴も用意してある。

彼女がダンムシヨに帰寮したのは 出窓からだが つい十数分ぐらいまえのことだった。

「どうでもいいが、おまえすっかりダンムシヨの住人になっちまったな」

「使役霊憑けるぞ、うつけめが」

言葉とは裏腹に、徳人を励ますかのよう見つめてくる。

「 ゆくぞノリトよ、復讐の刻ときは来たれり」

徳人はアヌークの右手を握った。

右の指は もとにもどってくれていた。しなやかで優美なアヌークの指。タツのヤツ、がんばってくれたんだ、そう思った。

彼女が不審げな顔になる。

「ノリトよ如何した？」

小首をかしげてくる。

「……なんでもねーよ、さあゆこうぜ、タツといっしょに俺を連れてつてくれアヌーク」

「面妖な奴よ」

きよとんとした カ一杯抱きしめなくなる 表情を見せる。

徳人は出窓の外の夜空を見た。これからアヌークといっしょに守護霊跳躍、だ。

緊張する、マウンドに立ったときのように、呼吸法で精神をリラックスしてみる。

「怖いか、ノリトよ」

ふたりは見つめあった。

彼女のほうが先に視線を落とした。

ガラスの小瓶をポケットからとりだし、水滴を床に垂らす、手をつなく、しつかりと。

彼女の掌から達也の魂が、蒼白の光がひろがる。

ふたりは出窓から夜空へ、飛びだした。一息に空の高みに駆けあがってゆく。

満天の神奈川の星空。

ユリス学院のある丘陵地帯のてっぺん、カエデ林、そのふもとの紅葉ヶ丘市の街の灯り……。あつという間に、遙か数十メートルの星の夜空のなかを跳んでいた。

アヌークは徳人をお姫様だっこしていた。

軽くスキップをしているような楽な姿勢で。

高空の強風も達也の結界のおかげでなんともない。風を切る音が聞こえてくるのみだった。

「すっげえっ、なあっ、どこまでも跳んでゆけんのかなあっ、ずっと、ずっと遠くにっ」

「守護霊跳躍は、結界と地面を反発させて？ジャンプ？するだけだ、いずれ自由落下するぞ」

満月に近づきつつある力強い月光を浴びて、ふたりは飛翔した。

白く輝く達也に包まれて。

徳人が耳を澄ます。

たしかに、タツの、あいつの懐かしい声が聞こえてくる。

? っ っ?

達也が訴えてくる。のり兄ちゃんの身が心配だ、と。

「安心しろタツッ、おまえのカタキッ、兄ちゃんがぜってえっぜってえ取ってやつからなっ」

紅葉ヶ丘市の夜空、遙かな高みで、兄弟は叫びあった。

昔のように、叫びあった。

晴れ渡り星々のきらめく夜空を駆け抜け、三人は そう、たしかに三人で跳んだ 学院のある丘陵の西側のほう、紅葉ヶ丘八幡神社のあるちいさな丘に降り立った。

カエデ林がやはり群生している。

神社の裏参道に近いならかな丘の中腹だった。きのうの雨で湿っている地面を踏みしめる。彼女のいうとおり、最後は落下し始め猛スピードの墜落だった。

徳人は一瞬目をつぶったけれど、タツの、守護霊の結界のおかげで地面に、ふわり、着地できたのだった。

「境内の中心からわりと離れてんな？」

空を跳ぶ………興奮がおさまってはくれなかった。

「いかにも、これ以上近づけば聖域の空間内に入る、着地するまえに空中で、招喚したタツヤがわたしの中に強制的に封印されてしまいうゆえな」

「それって、俺ら、地面に？」

「うむ、わたしと貴様、仲良く聖域のカエデ林の地面に墜落だ、肉体が滅めつしてしまうぞ」

ふたりは手をつないだまま、カエデ林のなかから間近に見える裏参道の賑にぎわいを見た。

通りに沿って屋台がひしめいている。

綿菓子、金魚すくい、焼きそば。家族連れ、近所の小中学生たちが行き交っている。

去年は、小田原の実家からタツを連れていつしよにきたんだった。タツ、あいつはまだ初等部六年生だった。

夜店のひとつで小学生たちが金魚すくいをしている。

徳人はじつと見入った。

「去年、タツといっしょに来たんだ、あいつ金魚すくいに夢中でさ、一匹もとれなかったんだ、俺もムキになってさ、俺のこづかいつきこんだけど、駄目だった。残った金で焼きそばを喰ったんだ、ふたりにパツクに入った焼きそばを分けてさ」

アヌークは、つないだ手に力をこめてくれた。

徳人も、握りかえしてやった。

「スゲえうまかった、ソースが濃くってとって……オヤジとオフ

クロに会いたって、タツ、毎晩泣いていたのに……あの夜はちがった、俺ら夢中で、一晚中夢中で語りあったんだ……楽しかった、タツのヤツ、来年の夏祭り、金魚すくいリベンジするよって……スゲえ笑顔で……」

小学校高学年くらいの子供だ、すくいかけた金魚に逃げられている。

ニューヨークヤンキースの　　タツとおなじ　　キャップをかぶっていた。何度も失敗していた。しくじるたび、キャップをかぶりなおす。

くたびれた感じの店のオヤジが、笑いながら声援を送っている。仲間の子供たちも一喜一憂している。小学生はひときわおおきい金魚を狙っているようだった。

「がんばれ」
アヌークが、徳人を仰ぎ見た。つないだ指先を、ぎゅっ、と絡めてくる。勇気づけるかのよう。

徳人も、アヌークのほそい指をしっかりと受けとめた。野球で鍛えた、かさついた指で。

くじけなかった小学生は、何度目かの挑戦でついにデカイ金魚をゲットした。

子どもたちはおおはしゃぎだ。

小学生はあまりに周囲に褒められたせいなのか、キャップをとって恥ずかしげに頭を掻いた。笑顔でビニール袋のなかで泳ぐ一匹の金魚をじっと見つめる。

「……ゆこう」

彼女の手を引っ張る。

握りあったまま林のなかを歩いていった。

アヌークは地面を見たまま、うつむいていた。

ひと言もしゃべらなかつた。

ただ、徳人の手を強く握りしめつづけてくれた。

カエデ林のなだらかな丘を登っていく。露店の灯り、月光。周囲

はほの明るい。

杉の木で建てられた神社の本殿が見えてきた。流造りの本殿は、ながれづく風雨にさらされていたけれど、それなりに立派だった。正面の賽銭箱の上をおおきくせりだした屋根が覆っている。

玉砂利を踏みしめながら、ふたりは賽銭箱のまえに立った。

「神頼みでもする所存か」

「……」

左右に首をふった。

うしろから足音が聞こえてきた。ふたりはふりかえった。

ひろい境内の十メートルくらい先、むかいあつた石灯籠がふたつ。そのあいだにおおきな階段が下へのびている。境内のある丘のふもと、本参道へとつづく階段だった。

本参道の、多くの屋台と客でごったかえしているのが遠くに見える。

下と違い本殿は静かなものだった。

少年がひとり、階段を上ってくるのが見えてきた。

石亀だった。

「先輩」

ふたりを見て手をふってきた。

階段を駆けあがり、はしゃいで境内の砂利の上を走ってくる。蚊がけっこうすごいツスね、息を弾ませながらいった。ふたりの手をつないでいるのをじろじろと見てくる。

かあつ、うらやましいツス、先輩つ、冷やかしの声を上げた。

少年と少女が互いを見る。

どちらからともなく、気まずそうにふたつの手は離れていった。

「おいちゃんから聞いたぞ、実家に帰ったって」

「先輩つ、先輩見捨てていくわけがないっすよ、俺も立ち会いますっ、ヤナが卑怯な手でも使ったら、マリアちゃんといっしょに闘うツス」

噴きだす汗をぬぐいながら、にこり、笑んだ。

「そうか、カメ」

「はい、大谷さんを蹴っちまった、なんていうか、罪滅ぼしっすよ」
「すまねーな」

石亀は照れ笑いをうかべながらついてきた。

三人は徳人を先頭に、本殿の右のほそい小径こみちに入った。本殿の建物の裏手へとまわる。

裏にはちいさな広場があった。

徳人は素早く観察した。砂利、小石、折れた枝、雨の泥濘……足場が悪い。

キックボクシング（キック）をやっている柳本にとっては、フットワークを封じられたも同然だ。

広場の右手は急な傾斜の崖になっていた。

一メートルくらいの高さの柵が、空き地の右手にのびていた。錆び付いた鉄製のパイプでできている。落下防止用にははずいぶんと貧弱な造りだった。

徳人から見て正面の側と柵の反対側はカエデ林に覆われている。

残る一面、小径を出たすぐ左手が本殿の建物の裏側だった。

逃げ道はいま通ってきた小径だけだ。

徳人は携帯で時刻を見た。液晶表示は十九時四二分を示していた。下の祭りの喧騒がわずかに響いてくる。月光に照らされ、視界は悪くはない。

アヌークが用心深く、本殿の裏側伝いに広場を歩いていった。

あきらかに周囲の様子を警戒している。

アヌーク　おまえに使役霊を使わせたりはさせない、あんな悪霊なんか、二度と使わないでくれ、じゃないとおまえの体が　徳人は、ふっ、と息を吐いた。闘争心で、全身が熱くたぎる。見ていてくれ、タツ、そう思った。

金魚をすくったキャップの少年の笑顔をふと思いだす。呼吸法、集中。

我にかえった。すぐそばで、石亀が体を震わせていた。

「カメ、ムリしなくていいんだぞ」

「だい、じょうぶツス、俺だって……」

声も震えている。石亀は震える両手を鉄柵にあてがった。

アヌークは広場の中央に立って、周囲を睨んでいる。

「先輩、あれっ」

石亀が小声で叫ぶ。斜面の下をのぞきこむ。

「どうした」

「ガケの下のほう、あれ、ヤナのヤツが地面にぶっ倒れてますっ」

「ッ」

徳人は咄嗟に鉄柵につかまり下を見た。

徳人の右手首にガチャリ、音がした。

手錠をかけられた。石亀に。

「カメツ？」

手錠を引っ張る。鉄パイプにつながれてしまっていた。

石亀が素早く離れる。

飛び出しナイフをだす。顔に狡猾そうなぎらついた笑みをつかべ

ていた。

正面のカエデ林から、人影が飛びだしてくる。

数はふたり、高橋と坂野だった。

アヌークが異変に気づき、徳人たちのほうに走り寄る。

数瞬、高橋たちのほうが早かった。

「動くなメスブタッ」

高橋が勝ったも同然のように笑う。徳人の首筋にナイフをあてが

う。

「チキシヨウ、てめえらっ」

徳人が怒鳴った。

「いまだきタイムンだか伝統だか知んねえけど流行んねえよ」

坂野が徳人の顔につばを吐いた。

「おいメスブタ、てめえがソーゴーだかなんだかやってるってのは、

カメから聞いてんだっ」

高橋は、これ見よがしに刃先を何度も徳人の首に押しやった。

「へへっ先輩、あんたがバカなんすよ」

石亀はいやらしい笑いをうかべてくる。

「カメ、おめえ」

「センパイがさあ、二年や三年のいばりクサツたバカどもが残るっていつてんのに、帰しちゃうんだからさ、バカだねえ、あんた、ね？　ね？　マジ、バアーカッ」

カエデ林から、ゆっくりと人影が現れた。柳本宰だった。

「みんな準備はいいの？」

なんの抑揚もない声だった。

「ヤナちゃん俺我慢できねーよっ、こいつ俺の顔にトウガラシぶっかけやがったんだっ」

坂野はデジカメを手にして、アヌークに近づいていった。

アヌークは、徳人たちから四五メートルくらい離れたところに立っていた。

「貴様ら、殺めてもこの怒り収まらぬ」

美しい顔に冷酷な表情をうかべている。

「カメ公、話せば？」

アヌークの肢体を凝視していた。虚ろな目は、死んだ魚のそれのようだ。

「へい、ヤナさんっ」

石亀が得意満面にしゃべりだす。

「なあ、マリアちゃん、そのかわいワンピもなんもかんも全部脱げよ、んでもって横になって寝てくれりゃあいいから、一部始終は坂野くんのもってるデジカメで撮影すっからさあ」

坂野が興奮してデジカメを操作している。

「わかるでしょ？　ね？　ね？　俺らに逆らったらマリアちゃん、恥ずかしい写真、ネットにはばらまくからねえっ」

石亀は徳人のほうを見た。

「センパイ、なあ？　暴れたらズブリといつちやうからさ、いい子

にしておいてよ、ね？　ね？」

「アヌーク、逃げろおっ」

「うるせえっ」

高橋と石亀が容赦なく徳人に殴りかかる。

徳人の体に火がついたようだった。全身がガスライターでなぶられるように熱い。怒りが痛みを吹き飛ばしたかのようだった。

アヌークは直立不動で、貌を歪めて徳人を見ている。

柳本、それから坂野がアヌークに近づいていく。

柳本が徳人のほうをふりむく。

「川上、これから君のオンナをうつから、ただそれだけ、悪く思わないでね、杉浦の馬鹿がどこ逃げてんだか知らないけどさ、警察にチクリでもしたら、俺らが困るんだよね」

「ふんっ、このクソツタレの蛆虫下郎めらが、できるものならやってみるがよい」

坂野が、高橋が不安げな顔になった。石亀はつばを飲みこんだ。

誰もがアヌークの泣き叫ぶのを期待していたようだった。三人の手下が柳本を見る。

「高橋、川上の指の爪をナイフで剥がせば？」

アヌークの体軀を見ながらいった。

高橋は話が違つ、そんな顔になった。

「ヤナちゃんこんな男ほつといてさ、四人でいっせいにウっちゃおうぜ」

声が震えている。

「剥がせ、ば？」

無機質な口調が広場に響いた。

高橋は荒く呼吸しながら、徳人の左手首を握った。

「やれよ、タカハシ」

徳人はいった。自分はどうなってもかまわない、そう思った。

高橋は徳人の顔を直視できないようだった。震える刃先を徳人の左手に近づけていく。

「 やめるがよいっ 」

高橋が、少女の雄叫びに、ひっ、と情けない声を出した。

柳本が徳人を見る。それからアヌークの顔を不思議そうにながめた。

「 ……アヌーク、ね、さつき、そうだったね、本名はマリアじゃないんだね？ 」

「 ふんっ、貴様の如き下衆の知ったことか 」

「 父さんは 」

柳本は教師に質問でもするかのように生真面目な口調で話した。

「 ヤバいくスリをキメていたわけでもない、父さんのハーレーには、なんの細工あともない、なぜ？ きのうの校庭、どうやったの？ 」

「 教えてよ。君だろう？ 君以外に誰がいるの？ 」

「 ひかえよ下郎っ、貴様の知ってよいことではないわっ 」

柳本は心底不思議そうな顔をした。

「 俺はいままで何人かオンナを強姦^{ムリウチ}してみたことがある、君は誰ともちがう、その自信の根源は、なんなの？ 頼むよ、教えてほしい 」

「 自殺するがよい、そうすればわかる、教えてくれようぞ 」

柳本自身がアヌークの使役霊になれば、身をもってわかる、彼女はそういつていた。

柳本はデニムのポケットから自分のナイフをとりだした。少女のワンピースの正面を切り裂きはじめた。

首からあの懐中時計をさげていた。浅浮き彫りのデザインが白く輝いていた。

「 アヌークッ 」

徳人は自分が叫んでいることすら気づいていなかった。

高橋が興奮して徳人から離れる。アヌークに近づいていった。ひとり残された石亀は、少女の白い胸を舌なめずりしながら見ている。坂野が奇声を上げながら写真を撮り始める。

徳人は渾身の力で右腕を引っ張った。引っ張りつづけた。錆びた

鉄パイプがきしんだ音を立てた。さらに引つ張った。手錠が手首に食いこんでいく。なんの痛みも感じなかった。

ワンピースが裂かれ、白いブラジャーが見えた。清らかな胸のふくらみがあらわになる。

「おのれ、下衆めが、ただで、すむと……思うでないぞ……」

「俺は十四歳未満だよ？ 女をムリウチしても触法少年ってやつになるだけだね、補導されて説教されてそれで終わり、シンプルだね」
柳本の口調はどこか他人事のように聞こえた。

少女は怒りと羞恥心で、耳まで朱に染めていた。震えながら恥辱に耐えていた。

柳本があのお懐中時計を引つつかんだ。興味なさそうに一瞥をくれた。

時計をつかまれて少女の表情が変わる。

時計が空中に放り投げられた。

カエデ林のなかに消えていった。

「やめてっ」

少女が、初めて悲鳴を上げた。懐中時計の捨てられた林を見ながら。

ブラジャーのまえが引き裂かれる。

徳人の視界が、真っ赤に 悪霊のあの色のように 染まり
なにも見えなくなった。

アヌーク、いま助ける、いまっ、いますぐっ

「ちきしょおおっ」

鉄錆が剥がれ落ち始める。破片はおおきくなっていき、いきなり

もろくも真っ二つに折れた。

手錠のはまっていた錆びたパイプの部分、粉と破片が砂利に落ちる。全身が解放される。

後背を見せられている高橋に襲いかかる。

ふりむく高橋のボディに強烈なボディブローをたたきこむ。高橋

は悲鳴を上げる間もなく、腹を押さえながら地面に突っ伏した。アヌークが、柳本のナイフと坂野のデジカメを一瞬でたたき落とす。

柳本がうしろに跳び退く、巨体に似合わぬ素早さで。

彼女が坂野にローキックを放つ。坂野はさつきとはちがう奇声を上げて砂利の上でのたうちまわった。

石亀は忌々しげに舌打ちした。どいつもこいつも使えねーバカどもだ、そういうと小径へと走る。そのまま独り逃げだしていった。

柳本はそれを見て馬鹿にしきった目になった。

そして 徳人、アヌークが、柳本宰を正面のカエデ林のほうへと追い詰めた。

ふたりの手下は、泣きながら地面を這いずりまわっていた。

「アヌーク、手をだすな」

「ノリトよ」

「頼む、俺の鬪いだ」

徳人は、アヌークのまえに腕をひろげた。柳本から護るかのよう

に。……わかった」

アヌークは、胸のまえを両手で隠しながら、増悪の眼差しを柳本にむけた。

「川上さあ」

柳本はのんびりした口調でいった。

「命乞いなら聞かねえ」

「そうじゃないよ、川上、俺は漢こいもを目指してきた、そして漢になれた。君も漢だ、そこで訊ねたいんだけどね」

石亀の逃げていった小径を指さした。

「あの、いま逃げだしてつたオナナの腐ったクズ、あれ、君から見てどう思っの？」

徳人は地面につばを吐いた。

「よく聞けチキン野郎、チキンがなあ、チキンをバカにするのをな

あ
」

「俺をチキンて呼ぶなよ」

柳本の顔に初めて殺気がうかぶ。

「この国じゃあなあ、目くそ鼻くそを笑うつつつうんだああっ」

正面から突進する。

柳本がすかさず二本目の隠しナイフをポケットからだす。

「ノリトツ」

隠しナイフが、徳人の左の脇腹に深々と突き刺さっていた。

徳人の右手が柳本の肩を、震える左手が、柳本のナイフをにぎる手をつかんだ。

ふたりの少年が間近で睨みあう。

「頭悪いね君」

能面顔が割れて、醜い嘲笑が飛びだした。

アヌークが駆け寄ってくる。

「くんな、アヌーク……くんなよっ」

めいっばい、腹の底から声を絞りだす。

「っ、でもっ、ノリトツ」

「オンナ、カレシの死に様、そこで見てれば？」

「……………貴様……………断じて、赦さぬ……………」

「俺？ 俺は殺人ですら説教されてオワリ、法が俺を守ってくれるんだ、少年法の特権だね」

柳本の、口を歪める無邪気な嘲笑いがさらにひろがる。

徳人が満身の力を左手にこめる。

柳本の拳を握りしめる。

いきなり、嫌な音が鳴った。

柳本宰の嘲笑が、凍り付いた。

さらに不快な音がして、彼の右手の骨が折れた。

徳人の怒りに震える拳に、握りつぶされた。能面顔に、そんなバカな、こんなハズでは、驚愕がうかぶ。

「っ
」

柳本の化けの皮が剥がされた。

十三歳の、恐怖におびえる子供の顔になる。肉食獣として弱者ばかりを狩りつづけてきた者の、狩られる恐怖を生まれて初めて憶えた顔になった。

「俺の女に」

粉々にした柳本の右手をナイフごと、自分の腹から引き抜いた。

徳人は、左手ひとつで柳本の腕をひねりあげていった。

ナイフがこぼれ落ちる。

「　　いつ、痛っ」

柳本は涙をうかべ始めた。過呼吸をおこしたように息を乱す。

顔を引きつらせ二、三步後退する。

徳人が腕をつかみながら、逃げる柳本に、弟の仇ににじり寄る。

「薄汚え手でっ　俺のっ」

「かわかつ、み、助けっ」

「　　俺の女にさわってんじゃねえっ」

「

川上徳人の渾身の右ストレートが柳本宰の生白

い能顔をぶっ飛ばした。

鼻骨と前歯数本が粉碎されて　文字どおり粉碎されて　砕け

散っていった。

柳本は、顔からおびただしい血を吹きだしながら、砂利の上に倒れこんだ。

数回手足をびくつかせる。

やがてそれも動かさなくなり、失神した。

18、裏切りの代償

「逃げるが勝ちっ」

もう一度、逃げるが勝ちっ、つぶやきながら石亀は小径を遁走していった。

本殿の右手を抜ける。二本の石灯籠が見えてくる。

よしいいぞ、階段下りて本参道の人混みに逃げこめればこっちのもんだ、そう思った矢先だった。

大人たちが数人、階段を駆けあがって境内の広場にやってきた。

制服警官たちだった。

先頭に銀行マンのようなインテリっぽいメガネの男がいる。この男だけスーツを着ていた。

おまわりさあんつ、石亀は即座に嘘泣きを始めた。あつちで女の子が襲われてるんですっ、助けてあげてくださいあいっ、僕、すぐに女の子のお母さんと呼んできまあすっ、そういつて階段のほうに逃げようとした。

ほくそ笑んだ瞬間、インテリが石亀のまえに立ちはだかった。

「君が石亀かね？」

「？ なんで俺の名」

インテリメガネは容赦なく石亀の股間を蹴りあげた。

石亀は玉砂利の上に倒れた。

ニヤ笑いが白目をむいた涙目になる。四肢を痙攣させる。ひっくりかえされた亀のように。

「？ 大谷しづゑの分？ だ、憶えておけ小僧」

インテリメガネ 立花が吐き捨てる。

警官をひとり石亀の身柄を確保するため残す。

立花は残り全員を率いて小径を走り始めた。

19、社務所にて、守護霊くシユツク

「このおおうつけ者めがっ」

涙声だった。アヌークは、自分よりもずっと大柄な徳人をお姫様だっこしていた。カエデ林のなかを疾駆している。白い頬を涙が伝っている。

「なにゆえ斯様な無茶をしたっ」

「アヌーク……時計……懐中……ど、けい……」

「黙れ、黙っておるがよいぞっ」

斜面を駆け下りていく。林が開けてきた。

木造の平屋の建物が一棟あった。紅葉ヶ丘八幡神社の社務所だった。

「いますぐ守護霊で治癒してやるゆえ我慢するがよいっ」

悲鳴に近い声だった。徳人の体を社務所の壁際にそうっとな寝かしてやった。開き戸に手をかける。鍵がかかっていた。

「おねがいつ」

アヌークは三種の使役霊のひとつ、憑依霊を招喚しようとした。

掌に、ゆらり、と暗緑色の光が煌めいた。

聖域を、抜けてくれていた。

涙をこぼしながら、鍵を操作して開き戸を殴りつけるようにして開ける。

八畳ぐらいのひろさのきれいに整頓された、いかにも事務所といった感じの部屋だ。

事務員がひとり事務机に座って書類を書いていた。年老いた温厚そうな男だった。

アヌークの無残な姿を見て驚愕の表情をつかべる。あわてながら、ひよる長い体を椅子からおこす。

「あなた、お嬢ちゃん、どうしましたっ」

急ぎ、アヌークに近寄ってくる。

「この社の宮司殿はいらっしゃるか？」

「え、宮司様なら、祭りのほうで町のお偉いさん方と」

アヌークがめいっばい背のびして、掌を老人の額に押しつける。ほそ長い体が硬直した。

「宮司殿より、帰宅命令が出た、これより社務所の事務はわたしが引き継ぐゆえ、そなたはただちに帰宅し、一日ゆるりと養生するがよいつ以上よろしいかっ」

「……はい、おっしゃるとおりに」

老人は口の端からよだれをすこし垂らした。

私物を手早く集めて、あとはよろしく頼みます、と丁寧に頭をさげていうと帰って行った。

アヌークが徳人の体をそつともちあげる。

事務室の奥に更衣室があった。

中に入って、鍵をかける。徳人を抱きしめながら、正座する。傷を負った腹に掌をあてがう。

「タツヤっおねがいつ」

蒼白色の光が、ふわりと彼女の体全体からひろがった。

三、四人も入れればいっばいになる更衣室を、真つ暗だった部屋を隅々まで照らした。ひろがった光を掌に集中する。徳人の脇腹に押し当てる。

アヌークは全力で治癒を始めた。胸のまえで彼の上半身を抱きしめながら。

「アヌーク……ごめん、な……」

「ばかつ黙っててっ」

徳人の耳もとで叱る。ささやくような涙声で。

蒼白い輝きが、強くなり弱くなった。

そのたびに更衣室がカメラのフラッシュでも使われたかのように明るくなる。

壁に並んだロッカー、扉の脇の勤務表や、伝言板、張られたいくつものメモ類、なにかもが蒼白い光の揺らめきに応じて影を躍ら

せた。

やがて達也はもてるその霊力をふり絞り始めた。ちいさな更衣室に乱気流が生じる。メモが何枚も剥がれて飛び散った。

?
.....?

達也の声は悲痛だった。

ねえアヌーク、のり兄ちゃんの体、もう、あと……。

「タツヤ？ ほんとう？……」

アヌークはつらそうに表情を陰らせた。

達也の声なき声に耳を傾け、徳人の傷の様子を診る。荒く浅かった呼吸が徐々にではあるけれど楽になりはじめてきた。血の気がひいてやつれきつた彼の顔がすこしだけ、ゆるむ。

徳人が口を動かす。

アヌーク、少年が唇の先だけで呼んだ。

自分の墓碑銘を呼んでくれた、それだけで少女の表情に輝きがもどる。少年の髪の毛をこれ以上はないくらいにそうつとやさしくなでる。

「……………応急処置だけど、ノリトの体、もうだいじょうぶだからっ」

「…ってんぞ」

徳人はかさついた唇を動かした。

「なに？ ノリトッ？」

「おまえの……………かわいい胸、俺のきたねえほっぺたに……………思いつきし、あたって」

「……………いまだけ赦すからっ」

「超きもちいい……………天国、だ……………きょうだけなんて、俺、やだ」

「あしたも赦すからっ」

「あさつては……………？」

「このっ、ド変態の異常性愛者めがっ、クソツタレのサカリのついた猿めがっ」

アヌークは、涙を懸命にこらえながら微笑みをうかべた。恥じら

いからか、顔を染める。徳人をかき抱きながら何度も頬をなでてる。

数時間、ふたりは抱きしめあっていた。

愛しみにあふれた、満ち足りた時間をともにすごした。

徳人の呼吸は静かになっていた。おだやかに胸を上下させている。

徳人は、うつすら、瞳を開けた。死ぬのかな？ 最初はそう思った。

アヌークとタツのおかげだ、ふたりの力で助かった。

痛みはない。全身に重苦しい虚脱感があった。

「なあ……タツの声、なんか、ちいさく……なつたような気がする」

「うん、ノリトの体の治療でタツヤの霊力をかなり消費させちゃった」

「タツ、だいじょうぶなのか、な？」

「だいじょうぶだよ、タツヤの？ 引導率いんどうりつ？ は21、霊カルマの業カルマが保てる

最高の値だからね、そうかんたんには？ 引導を渡される？ ようなことにはならないから」

「タツ、あんドーナツ、二十一個も喰ってんのか、いいなあ……あいつ甘えもん好きなんだ」

「このっ、ばかっ」

セリフとは裏腹に、口調はあまく、やさしげだった。

20、八月十二日

日付がかわって数時間が経っていた。

徳人は携帯を握りこんでガン見していた。

耐える、俺、オトコだろ、川上徳人っ、自分自身をどやしつける。

徳人の下腹部はすでにアツク反応していた。情けねー、自分の中学二年生のもてあます煩惱に気が狂いそうだった。

アヌークが徳人の真うしろで着替えをしていた。

「私は見ておるからな、こちらをふりかえったら使役霊憑けてくれるぞ」

祝、時代劇口調復活。

「いいからっ早く着替えろっ」

「ええい、ニツポンの和装はなにやら複雑なのだ」

真新しい巫女装束みこしつよそく相手に奮闘している。

更衣室には、予備らしい新品の装束が一揃いだけ保管されていた。やがて、衣擦れがやんだ。

「……………よいぞ」

光速マツハでふりむく。

少女は、無垢な白衣と緋色の巫女装束に身を包んでいた。

「アヌーク、俺はいま死んでもいいとすら思っている」

「……………望みどおりぶっ殺してやってもよいのだぞ？」

赤面しながら消え入りそうな声でいった。

「いまの声、スゲえかわいい、アヌーク」

「っ、おのれ、私を籠絡する魂胆かっ」

憑依霊を左手に招喚してきた。

「おいっ、ジョークだっばっ」

「もうよいわ、紅葉ヶ丘商店街の目抜き通りで二四時間裸踊りをさせてくれるわっ」

「マジでいってんのか、おまえっ」

アヌークが徳人に跳びかかる。
うわっ、情けない声を出して体を丸めた。

「……………」

なにもおこらなかつた。こわごわ目を開けてみる。

アヌークは徳人の右手首の手錠に憑依霊を憑けていた。

鍵が操作されて外された。

「邪魔であろうが、ノリトよ」

ふんっ、と自慢げに手錠を放り捨てていった。

巫女さんバージョンと化したアヌーク、脇腹に穴の開いたサマー

セーターを着た徳人。

奇妙なカツプルは、恐る恐る社務所から出た。

アヌークは憑依霊で律儀に鍵をかけた。歩きながら杉浦達也の携帯をとりだす。タクシー会社に連絡をとった。

「ダムムシヨ、帰らないのか」

「うむ、わたしには本作戦のために課された任務があるゆえな、タクシーで任地に向かい、そこにおいて貴様の治癒をつづけようぞ、

わたしについて参るかノリトよ」

「わかつた、でどこいくんだ？」

「わたしの本作戦の任務地であるぞ」

アヌークは目的地を徳人に教えた。神奈川県下でも有数の心霊スポットだった。場所は厚木市、県道六四号線から脇道にそれた所にある、老朽化したトンネルを抜けた先、現在使われていないレジャ―施設だった。

「ちよつと待ったアヌーク、俺、超古代文明とかミステリー大好きだけど、グロイのとか怖えのはダメ、あそこはマジでヤベえって」
「ならばわたしひとりで行くまでのこと、毎晩いっておったのだからな」

「……………わかつた、いくよ、チッキシヨウいきゃあいいんだろ、オトコ見せてやるっ」

徳人は渋々承諾した。アヌークにコンビニのATMで現金を下ろ

してくるようにいわれた。

徳人は一万円札を五枚引きだした。

彼女と飲もうと思いい、万札一枚を出して缶コーヒ二本を買った。睡眠不足で死にそうな顔の店員が、釣りを千円札九枚でぞんざいに渡してきた。

急いで帰つてくると、少女は天を見上げていた。

月を見つめている。

徳人に気づくと、寂しげに微笑んだ。

少年は一瞬見とれた。

それから、朱色の巨大な大鳥居に寄りかかって、ふたりで缶コーヒを飲み始めた。

不味いと徳人が愚痴って、すぐ左にいるアヌークを見つめる。

ちいさな頭、さらさらのショートヘア、そして、白衣、スカートタイプの緋色の行灯袴。あんどんぼかま

乱雑な着方だった。襟もとがゆるんでいた。アヌークのつややかな白い頸くびと鎖骨が、背の高い徳人から丸見えだった。

体は疲労困憊していたのに、中二の煩惱はかぎりがないらしい。

ちなみにアヌークはいま、ノーブラなわけなのだが……わけ、なのだが……。

徳人は深呼吸して、視線を外した。遠く南西に雨雲が見える。

月は満月になりかかっていた。

「きれいだな」

おまえのほづが、ずっと、徳人は思った。

「まつこと見事な月よの」

月を見る瞳はなぜか、不安げな色をたたえていた。決意を奮いおこしているようにも見えた。うつくしい瞳は揺らいでいた。

「なんでそんな目で見えるんだ、お月さんを」

「此度のニッポンにおける我等、父祖の戦列の作戦名の由来だからよ」

徳人を仰ぎ見ていった。

「作戦名……」

「Operation Vollmond」
オペレーション
フォルモント

一語一語、噛みしめるようにドイツ語で作戦名を発音した。

そうだ、彼女は？父祖の戦列？序列第？列の誇り高き戦士。

？十字軍？と闘う戦士。

徳人も月を見た。

アヌークの言葉を心のなかでつぶやく。

？オペラ・血のホルモン？……。

「なあ、怖えよ俺、そんな怖えオペラ、誰も見たくねーし聞きたくもねーし」

「むっ、貴様らしくもない、作戦をオペラ観劇にたとえるとは、なんと雅な、やはりニッポン人の血が流れておるのだなっ」

「へへっ、照れるってアヌーク」

「褒めてやったのだぞ、ありがたく思うがよいっ」

彼女が、いつもにくらべれば、はるかにやさしい仕草でローキックを見舞ってきた。

徳人もまんざらではない様子でブロックした。

「まっこと貴様はうつけなのか気骨ある男なのかわからぬわ、わたしがそばにいてやらねば」

少年の、少女のローキックを受けていた体が、止まった。

「いま、おまえ」

声がうわずる、カノジヨから不意打ちで告られちゃった男子のように。

「ずっと……ずっとそばにいてやるゆえ、心からありがたく思うがよろしかろうってっ」

少女は大鳥居に寄りかかり、ぷいっ、と横を向いてしまった。

カエデ林に囲まれた大鳥居の下、少年と少女は不味い缶コーヒ―を手にしながら、じっと、寄り添いあっていた。

少年が、ついっ、と体をぴたり、寄せてきた。

少女は、拒まなかった。まだ若いふたりのつたない想いを、まだ

満月と呼ぶには若い月が見守り、やさしげな光を落としてくれた。

「……ま、まっ不味い、な……この缶コーヒー……なっなっ？」

「……うっ、うっ、む、うむっ、たしかに戦闘糧食の粉のコーヒーにも劣る代物であるなっ」

少年と少女は、不味い不味い、そう繰り返した。

月を見つめながら、繰り返した。

そのうちどちらからともなく黙りこんだ。

ふたりして、顔を真っ赤にしながら 相手の顔を見れなくて

月を見た。

不味くてかなわない缶コーヒーを時折、思いだしたように口にしながら。

夏の大三角形を織りなす彦星も織姫星も、天の川も月明かりに邪魔されて見えなかった。

ふたりは唯、美しい月を見つめていた。

言葉はいらなかった。

少年と少女は互いのぬくもりを感じながら見つめつづけた。

それだけで、充分だった。

21、ネズミのお出迎え

やさしい刻は過ぎ、やがて黒塗りのタクシーが大鳥居のまえへやってきました。

アヌークの呼びよせた車輛だった。自動で開いてくれるはずのリアドアが目の前で閉じたままだ。

アヌークは苛立って、フロントドアのサイドウインドウを乱暴にたたいた。

ウインドウが十センチばかり下がる。

運転手が顔をのぞかせる。

「君たちねえ、なにそのカツコ、おじさん面倒なこと巻きこまれんのイヤなんだよねえ」

「運転手よ、チップははずむぞ、ノリト、マネーッ」
顔をちよっぴり赤くしながら怒鳴った。

アヌークが徳人の手から千円札九枚をふんだくる。

ふうっ、とお札に息を吹きかける。

「マネーならあるぞ、九万だ、釣りはいらぬ」

「なんだってえっ？」

運転手は素っ頓狂な声を上げた。

アヌークは千円札九枚をウインドウ越しに運転手に手渡した。

お札に憑依霊を憑けて。わずかな暗緑色の光はお札に浸透し、素早く吸収されていく。

運転手は千円札九枚をしげしげとながめた。

ホンモンの諭吉だ、そういつてリアドアを開けてくれた。男は小柄なネズミを連想させる、なんとも憎めない顔立ちをしていた。

「今夜のお供をいたしやす、根津充邦ねづ みくにと申しやす」
機嫌良く自己紹介してきた。

名前まんまじゃん、徳人は思った。

根津運転手は気さくな男だった。

嬢ちゃん、そのカツコ、訳を聞いてもいいかい？ ネズミの問いにアヌークは、工事現場のお被いである、と答えた。そうかい、道理であそこへいくわけだこんな時間に、ネズミは納得げにうなずいた。

アヌークはリアシートにちいさなおしりをのつけて、しきりに、すとんつ、すとんつ、クッションの上でしりもちトランポリンを始めた。

ふんつ、と悔しそうに吐息を漏らす。

「どした？」

「コンテツサチエアはメツシユであるゆえ、夏場に蒸れないが、この革張りソファは好かぬ」

「あのなあ、どんだけ椅子フェチなんだおまえ」

ふたりは顔を近づけささやきあった。

タクシーは深夜の国道一二九号線を使い、目的地へとひた走りはじめた。

根津運転手はカーオーディオのラジオでアメリカのメジャーリーグの情報に夢中になっていた。

アヌークはいつの間にか、すとんすとん体操をやめていた。

サイドウインドウの景色を見やりながら、ふい、と手を胸もとに当てがう。

徳人が横目で見る。

直感でわかる、懐中時計だ。あの白く、満月のように光り輝く懐中時計。アヌークが頸からさげていた。よほど大切なものだったのだろうか？

まさか、プレゼント、恋人からの？ 思った途端、徳人は心の凍えそうになる感覚を憶えた。

そばにいてやるゆえ、は決して恋人、という意味じゃなくって？

……つばを飲みこむ。

アヌークは幾世紀もの月日を闘ってきた、いても不思議じゃない、いないほうが不自然だ。

「……ノリトよ、如何した」

「懐中時計」

口のなかが渴いた。飲みこむつばは出ない、彼女を直視できない。
「大事な……もん、なんだろ……」

「うむ、姉上から頂戴したものよ」

そうかよ、そうだったのか、声にもならない、唇だけ動かして、
徳人はどつと、脱力した。

手にしていた ホントに不味くてかなわない 缶コーヒーの
ロング缶を握りしめる。

「 たしかイレーヌって名前のカルマびとだろ、あのロングヘア
の美人の」

「うむ、序列第？列、わたしなど及びもつかぬ勇ましき戦士である
ぞ」

「三番目に偉いのか、アヌークは七番目だっけ、一番下は何番？」
アヌークは急にそわそわし出した。やおら指を二本、徳人に突き
出してみせる。

「 ん、に、につ、にじゅう、ちょっとお……ぐらいかなー
っ」

「すげえっすげえじゃんっアヌークってやっぱ上のほうなんだな、
姉妹ですげえじゃんかよっ」

「ん？ あっ、姉上はなっ、偉大な戦士であるぞっ……カンフゲルツベ 戦闘団も率
いていらっしやるっ」

「完封……ブルペン？」
「ドイツ語で戦闘団のことよ、主人たるカルマびとがひとり、部隊
指揮官となり、その麾下に複数の眷族を従えて構成される戦闘単位
のことなのだ」

「ケンゾク？」

「ヒトの身でありながらカルマびとの血を飲み、我等の如く使役霊
を御することのできるようになった超常の者だ、ただし呪肉や捨肉
は不可能だ、寿命がくれば完全な死が待っており」

「マジかよっ、俺おまえのケンゾクになりてえっ、そういうことは早くいつてくれーっ」

「っ、なにを、申すかっ」両手を膝に打ち付け、うろたえを見せる。態度が普通ではなかった。

「なんだよケチ、おまえの血を飲ませてくれればいいだけじゃん」
「だから、適性というものがある、ヒトなら誰しもなれる存在ではないのだ」

「じゃあ、俺の適性は？」

「ない、うむ、全くないぞ、全くといっていいほど皆無だ」

徳人はだらり、シートに身を沈めた。なんでだよっ、と舌打ちする、苛立ちを隠せない。

「俺、おまえを一生守ってやりたかったのに……」

少女はうつむいてしまった。

両手を胸のまえで固く握りしめている。

おまえの役に立ちたいんだ、と少年は何度もつぶやいた。

少女がそっぽをむいてしまう。

「よっしゃあ、三振っ」

ラジオに聞き入っていた根津運転手がうれしそうに叫んだ。

22、ヤンキースの大ファンなんだ

一時間足らずで、厚木市内にある、県道六四号線の脇道のトンネルを抜けるところまでやってきた。

アヌークは、抜けてすぐのところまで停めるよう根津に頼んだ。

「二、三時間待っていて頂きたいのだが、料金は払ったマナーで充分であろう」

「おう、問題ないよ、がんばってくれやな、外人巫女さんよっ」

根津がニカツと笑った。

しっかしやつぱここ薄気味ワリいねえ、根津はぶつくさいいなから車から降りて、周囲を見た。

夏草があたり一面生い茂っている。

路上に捨てられたペしゃんこのビール缶を蹴飛ばした。

「なあニイちゃんや、日本時間でよ、朝八時からメジャーのヤンキースとレッドソックスの宿命の首位対決が始まるんだ、ニイちゃんならどっちにカネかけるかい？」

「ヤンキース一択だよ、おっちゃん」

理由は？ 根津の問いに、俺も弟も大ファンなんだ、答えた。根津がニカツと笑う。笑いながらニイちゃんも弟もホンモンの男だ、そういつてくれた。

徳人は礼をかえした。やっぱりこのオッサン、どっか憎めないな、そう思った。

アヌークと徳人は、アスファルトで舗装された、けれどゴミや枯れ草の散乱する道を歩き始めた。道は右へカーブしている。

目前に金網のフェンスと閉鎖された門が立ちふさがった。

「なあ、あの気のいいオッサンにさ、憑依霊つけて運転させればタダでこれたのかな」

「お主もワルよの、憑依霊を憑けられたヒトは思考が鈍るゆえ、運転は危険なのだ」

徳人は納得した。根津に九千円渡して騙したのをなんだか申し訳なく思い始めていた。

「ゆくぞ、ノリト」

ふたりが手をつなぐ。

アヌークの体から達也が招喚された。

蒼白い光に包まれて、ふたりは、ひょい、とフェンスを跳びこえていった。

23、プジョー403

根津はセブンスターに火をつけて一服していた。
あくびをこらえて背のびをした。

トンネルから一台のセダンがやってきた。

タクシーのすぐうしろで停車した。

根津は車には詳しい。

プジョー四〇三ベルリヌ。

正面、フロントマスクのふたつのヘッドランプがなにやら猫の目のようにも見えるデザインだった。

プジョーからふたりの男が出てきた。

ドライバースシートから一九〇はあるだろう長身の白人青年、ナビシートからはインテリを絵に描いたような、メガネの日本人らしき男が颯爽と降り立った。

「少女からいくもらいました？」

インテリが訊ねてきた。

「……そいつあ、いえねえなあ」

はぐらかすようにセブンスターにまた火をつける。

「倍の金をだそう、すぐに、営業所へ、もどりたまえ」

「断る」

「なぜかねっ？」

「ヤンキースファンの男に、いたいけな女の子、見捨てちまっちゃあ俺の名が廃るってもんだ」

「いいかね、君の身を案じていつているのだが？ 私は警官だ、あの少女は指名手配されている殺人犯なのだ、これでわかってくれたかね、さあ」

「令状」

根津は、ふわっ、とタバコの煙を吐いていった。

「逮捕令状見せてくれや、おまわりさんや、それとあなたの警察手

帳もな」

男は神経質そうに根津を睨んだ。指示を仰ぐように、自分よりも若い白人青年を見た。

「いこうタチバナ」

青年が歩きだす。立花は根津を一瞥すると、首をふりあとを追った。

根津は奇妙なふたり連れのうちろ姿を見送った。

彼らは道路を右に曲がって草陰に消えた。

月夜とはいえど、廃墟へむかった四人は、ハンドライトの類をもつていなかった。

こんな足場の悪い土地で無謀すぎる。

人間のすることじゃない、根津運転手は思った。

「やっぱ、妙なことに巻きこまれちまったみたいだあねえ」

セブンスターの煙を盛大に吐いた。

24、教皇十字軍、強襲

レジャー施設は廃墟だった。

ひときわおおきな保養所は爆撃でも喰らったかのように荒廃している。窓もドアも破壊されたコテージ。地面の廃材やガラスの破片で歩くのもつらい。

「なあ懐中電灯とかもってきたほうがよくな？」

「カルマびとや着族は野生動物のように夜目が利くのだ、わたしの手を握ることを赦す」

徳人は喜んで彼女の手を握った。歩きづらそうにしている徳人を彼女が心配そうに見る。

「すこし跳ぶぞ」

アヌークと徳人は達也とともに飛翔した。

保養所の裏手に広大な雑木林がひろがっていた。

雑草の陰に大型のキャリアケースが置かれてあった。鍵の部分がちいさく緑に光っている。憑依霊だ。アヌークは憑依霊を封印した。鍵がひとりでに外れてくれた。

「そっか、こういう使い方があんのか、すげーなーっ」

「ふんっ、そうか、たかがこれしき」

照れ隠しなのか、ちよっぴり怒ったようにいう。

ケースの中からいくつか道具をとりだす。

そのひとつ、憑依霊を使って自分の左腕にするり、と駆血帯を巻き付ける。採血管ホルダーの先の採血針を左腕の静脈に刺入した。

「うげ、痛そう」

注射嫌いの徳人は寒気を感じて、両腕をさすった。

アヌークは採血管の中の血液、彼女の鮮血を雑草の生えていない地面のあたりで撒き始めた。

鮮血でまず丸く円を描いた。円の中の地面に奇怪な模様、なにかの文字？ ミミズののたくったような不思議な文字や図形が描かれ

ていった。

「これなんだ？ アヌーク」

「血文字魔法陣、自由霊招聘の儀よ、読んで字の如し、わかるな？

ノリトよ」

「……しやもじ魔法瓶、十兵衛笑瓶脱ぎ……??

「ばつかだなあ十兵衛じゃないよ笑福亭だよ、あの芸人の名前は笑福亭笑瓶だって、ハハハッ」

「もおおおっーよいわっ貴様は黙っておれっ二度としゃべるなあああーっ」

「え、はいはい、わかつたわかつた」

素直に従った。いい漢バカはいつだって女に優しいものだ。

アヌークは、呪文を、徳人の聞いたことのない未知の言語で詠唱し始めた。

数行の詩の朗読のような詠唱が終わった。

地面の土に染みこんでいた彼女の鮮血が、浮きあがったように赤黒く光り始める。ふたりは魔法陣をまえにしてたたずんでいた。

なにも、おこらなかつた。

セミが数匹、思いだしたように鳴くのが聞こえてくる。

「……なにをしたんだ」

数分が経ち 彼女の顔色をうかがいつつ たまらずに口を開

く。

アヌークは森林の一点、なにもない空中を凝視していた。

「きたぞ、ノリトよ」

「なんにも見えねー」

「いま魔法陣に吸いよせられてくるがゆえ、しっかと見ておれ」

なにか、霧もや? うっすらとしたなにかが魔法陣の描かれた地面の上に見れた。

やがて、徳人は見た。それは人間の形になった。

「なあ、これってまさか」

「貴様らヒトの?自由霊?だ、俗にいう幽霊のことよ」

これが……徳人は息を呑んだ。

自由霊は、アヌークの血文字魔法陣によつて自由を奪われ？使役霊？となった。魔法陣の中で暗緑色に輝きだしたのだ。まさに自由霊を招聘、招き集めるための魔法陣だった。

「これ、憑依霊じゃね？」

「いかにも、いまから封印するぞ」

アヌークは両手を優雅に、まるでオーケストラの指揮者のように、華麗に動かした。

緑に光る憑依霊はアヌークのちいさな体躯に吸いこまれていった。

「……スゲえ、スゲえぜアヌーク」

「そうか？ うむ、べつにな、もつと褒めてもさしつかえないぞ、わたしを褒めることを赦す」

徳人ははしゃいでアヌークをべたボめした。

アヌークはまんざらでもなさそうに、照れたような、恥ずかしいような、うれしいような、なににせよ徳人を魅了する微笑みをうかべた。

そのあとも、幾人かが、憑依霊となつてアヌークに封印されていた。

「なあ、さつきから憑依霊ばかりじゃん、悪霊とか守護霊は？」

「自由霊にも何種類か種族があるのだ、我等の使役霊が三種あるが如くにな」

「じゃあいまの人たちは？」

「いままでの者たちは自由霊の一種？浮遊霊？よ、我等カルマびとやその眷族に封印されることにより、かならず使役霊の一種、憑依霊と化するのだ、すべての自由霊のなかで浮遊霊がもつとも数が多く

「

いいかけて彼女は口を閉じた。

新しい自由霊が魔法陣に招聘されてきた。

そいつは突然、強烈な暗赤色の光を放ち始めた。

魔法陣のなかで燃えさかる炎のように勢いを増してゆく。炎はふ

たつのイメージに形を為していった。それは、セーラー服を着た女子高生と私服の女子。業火ゆえに輪郭のぼやけた女子高生は、もうひとりの女子を　　霊の記憶、実態のない幻の女子を　　抱きしめていた。

女子高生は抱きしめながら、私服の女子の背中に包丁を突き刺していた。

「アヌーク」

徳人にもわかった。？悪霊？だった。アヌークの指を吹っ飛ばした使役霊の一種。

徳人は不安げにアヌークを見た。彼女の表情からは先ほどまでの余裕が消し飛んでいた。

「ヤベえよ、こいつ悪霊だろ、どうすんだ」

悪霊は苦手なんだろ、その言葉は飲みこんだ。

？ツ

ツ　ツ？

それは、悪霊からの憎悪の声だった。

徳人は耳を塞いだ。それでも脳に直接聞こえてきた。

ヘッドホンで音量を最大にしたデスメタルを聴くよりも、はるかに激しく圧倒する声だった。女子の声はいつていた。絶対に赦さない、と。苦しい、と。親友に彼氏を奪われ、親友を刺殺してから、自殺した霊だった。

「こやつ餓え尋常ではない……浄霊するぞっ」

アヌークが顔を歪める。

「浄霊っ？」

悪霊の激しい声に気圧されないよう、徳人は大声を上げた。

アヌークはまた呪文の詠唱を始めた。徳人にはわからない言語で。

我、父祖の名に於いて汝等を浄霊せんと欲する者也

汝等、カルマに絡め取られし宿業の子等

大地に還り、生命の糧いのちとなるべし

沃土に花を、
荒土には慈雨を

彼女のショートヘアが逆立つ。

その勇ましさと逆には瞳は、ヒトのもつ怨念に恐怖していた。

上空から、眩い光が降りてくる。それは巨大な意志を持つかのよう
に、悪霊だけを取り囲んだ。守護霊の煌めきにも似たその光の束
は、慈愛とともに悪霊の怒りの炎を吹き飛ばした。

怒りに燃えさかっていた悪霊が、ふわり、光を明滅させる。その
テンポは速くなつていき、やがて無数のちいさな火花のような粒子
へと分裂していった。

粒子たちが、天空からの光の階段を上るように、空高く舞いあが
つてゆく。すうつと虚空に消えていつてしまった。

「いまのつて……なんて名の自由霊？」

「……………？ 因縁霊？ よ、かならず……………悪霊と化
してしまうのだ」

かならず かならずな…………と彼女はまたつぶやきを漏らした。

苦しげに瞳を閉じながら。びっしりと美しい貌に冷や汗をうか
べている。やがて、その場にしゃがみこんでしまった。

「なあ、どこも怪我とかしてないよな？」

徳人がすぐに肩に手をおいた。

「案ずるなノリトよ、哀れな因縁霊を大地に？ 還元？ してやったま
でのこと」

徳人は彼女の汗を拭いてやろうとした。ハンカチもティッシュも
なにももってないことに気がついた。彼女の額に幾筋かの髪の毛が
冷や汗で張り付いている。徳人は指先でそつと ド突かれるの覚
悟で 額にかかった髪の毛の乱れをきれいにしてやった。

少女は、おとなしかった。おとなしく、されるがままになってい
た。

少女は、唯、息のふれあうくらいそばにいる少年のことを、静か

に見つめていた。

「……自由霊が我等の力で使役霊に転じると、斯様に声が聞こえるようになる、生きておるかの如く、貴様にも聞こえたか、？彼女？の無念の声が」

「うん、女子高生だった……怖えつつつか、かわいそうだったよ……なあ、浄霊された自由霊ってどうなっちゃうんだ？」

「還元だ、文字どおり地球に還るのだ、大地、大海、大自然の一部と化するよ、そこよりまた生命いのちが、動植物が誕生する、か弱き生命となり、ふたたびこの世に生を受けるのだ」

遠くで雷鳴がとどろき始めた。廃墟に、霧雨が降り始めた。

「……人がこうさ、いろんな動植物に生まれかわっちゃうのか」
ぐるぐる腕を回した。

「うむ、ヒトが死を迎えたときふたつの道が残される、この世に未練無く安らかに亡くなった者は、即座に地球へと還ってゆくのだ、自由霊にはならぬ」

「じゃあ、死にたくなかった人たちは」

「自由霊となるのだ、己の死を認めたくないごく普通の人々は、浮遊霊となる。怨念を残して逝った者は因縁霊に、慈しみの心を捨てなかつた者は」

雨が次第に強くなってきた。

「捨てなかつた者は？指導霊？となる。善霊だ、高位の良き霊よ、タツヤ・スギウラのように」

そうつと達也を招喚した。雨に招かれ達也の魂がひろがり、雨からふたりを護ってくれた。

雨が白い光の結界に弾かれて飛沫を上げる。

「……………タツ、そっかおまえ……………」

徳人の両眼に自然と涙がにじんでくる。

アヌークはさらに憑依霊を招喚した。強い、かなり暗緑色の輝きの巨大な憑依霊だった。達也の光よりも数段、眩しさが強い。

「タツヤよ、頼むぞ」

左手の上の憑依霊を、ふたりをやさしく包みこむ達也の魂に、自分の胸のあたりに押し当てる。

「……………ッ？」

「……………つ、なんだよ、この声っ」

無意味と知りつつ両耳を塞いだ。

「タツヤに、この憑依霊と闘ってもらっておるのよ」

「なんでだよっ、タツ、いま弱ってるんだろ？」

「うむ、霊力はな、貴様の治癒のため消耗したが？ 引導率？ は最高の21であるぞ」

「それ、そのあんドーナツってなんなんだ？」

「自由霊と使役霊のもつ意志の強さ、指導霊ならば、指導霊でありつづけようと、守護霊ならば、守護霊でありつづけようとする決意の固さの現れよ、強さは契約を経て引き継がれるのだ」

「タツは、あれか、ニジユウイチあるから強えのか？」

「うむ最高だ、霊力のほうは、使役の契約を交わす際わたしの魂を十分の一度しか喰わなかったから強くはないが、21の指導霊と出逢えたのは、わたしにとっては初めての経験であった」

いま、さらりとアヌークは、途方もないことをいったような……………。

「あ、あのさ、おまえの、たましい……………魂ってっ」

「文字どおりだ、カルマびとは自由霊と契約を結ぶとき魂を喰われるのよ、自由霊とは、まっこと哀れな存在、霊力と呼べるようなパワーはもっておらぬゆえな、自由霊がもつもの、それは唯一、現世にありつづけたいという意志の強さ、先ほど申した引導率の強さ、これのみよ」

「じゃあ、その憑依霊は？」

「引導率4である、霊力はいまの弱ったタツヤの二倍ほどだ、こやつも小食の部類よ」

「二倍って、アヌーク……………おまえ自身の魂がそのうち消えちまうぞっ」

「ノリトよ、カルマびともヒトも、生ける者は強いぞ、しっかかど静

養し、滋味あふれる糧を食せばすぐさま快復するのだ」

徳人は安心したように吐息を漏らす。

それからまた不安に駆られたように彼女を見た。

「タツのやつ、二倍の強さのやつに勝てんのかな」

「案ずるな、引導率にこれほど差があれば、タツヤはわずかな靈力の消耗で勝てるぞ」

「じゃあタツが勝ったら憑依霊はどうなるんだ？」

「この憑依霊の引導率が0となったとき、憑依霊の業カルマが解かれる、守護霊に負ければ、おなじく守護霊と化す、これを？引導いんどう抜はらい？と呼ぶのだ。引導率の差がおおきいゆえ、両者ともさして靈力を失うことはない、おとなしく憑依霊は？引導が渡される？であろうな」

徳人は考えこんだ。なにかに似てるな、そういった。

「うむ、引導率を闘う気力、靈力を兵士の数、そう考えるとわかりやすいぞ」

「それだ、部活の後輩にシミュレーションゲーム（S・L・G）好きのマニアがいるんだ、気力がゼロになっちまうと、兵士ってヤツはたくさんいても逃げだしたり降伏しちまうんだよな」

よくわかったな、アヌークはそういつて、背のびをすると徳人の頭をなでてやった。

徳人は照れくさそうにして、頬をゆるめた。

「相手のあんドーナツを全部喰って気力を奪えばいいんだ、早食い競争で勝ったらタツの、仲間が増えるってことかな」

「ふむ、仲間か、愉快的表現よの、そう考えてさしつかえなからう」

「あんドーナツ、インドウリツか、そっちが残って靈力のほうが先にゼロになったら？」

「わたしの中に逃げこもうとして自ら封印されにくる、再び招喚するには、また魂を喰らわせねばならぬ」

彼女の言葉に、徳人は、まるで戦国大名と手下の部将みたいだ、といった。

アヌークは、まっこと歴史好きな奴よ、と楽しげにいった。雨が

激しさを増し始めてくる。

「見よ、ノリトよ」

憑依霊の光の強さが、杉浦達也のそれより遙かに強かった煌めきが途端に激しく明滅を始めた。徳人は、お気に入りロックバンドのビデオクリップをテレビで見ているときのことを思いだしていた。ダムシヨの自分の部屋全体が、いまのように激しく真昼のように光ったり、闇夜のように昏くなったりした。明滅は激しさを増していき、やがて。

一瞬で、巨大な暗緑色の憑依霊が、蒼白色の守護霊と化した。

穏やかで静謐な光をたたえていた。

「早食いに勝ったのか、タツのやつ」

「うむ、タツヤの引導率は21のままであるぞ、見事ひとつとして落ちなかった、憑依霊はタツヤに引導を渡されて4から0となったのち、引導率7をもつ守護霊となってくれたぞ」

「そっか、タツ、いいダチが増えたんだな」

「うれしそうだな、ノリトよ」

額の汗をぬぐう。彼女の声もうれしげだった。

「ったりめえじゃんかよ、タツ、ひとりっきりじゃないんだし、あれ、でもアヌーク、毎晩ここ来てたっていつてたよな、おんなじことをしてたのか？」

「うむ、今回のわたしの任務は使役霊をひとりでもおおく徴兵することにあつたのだ」

「シヨウヘイ？ なんだまた笑瓶かよ、意味わかんねー」

「……前々から思っておつたが、貴様は日本語の語彙が致命的なまでに」

「？ っ？」

達也が叫んだ。逃げて、と。

「なっ」

アヌークが驚愕の声を上げる。おおきなキャリアケースのハンドルをつかんで軽々と肩に背負う。徳人の腕を握ると、瞬時に守護霊

跳躍する、雨が裂かれ、大地が遠のいていく、徳人の視界が森林地帯から、大雨の降り注ぐ夜明けの大空へと一変する。

「どうしたんだっ」

徳人がアヌークにしがみつく。

彼女は、震える手つきで金属製のケースをとりだし、白いカプセルを一個、口に含んだ。

「教皇十字軍の襲撃だっ、タツヤが教えてくれたっ」

彼女の声には、明らかな恐怖があった。

「マジかっ」

敵？ いったいどんな奴らなんだ？ アヌークとおなじカルマびと？

ふたりの跳躍は落下運動に移った。

地上に降り立った瞬間がいちばん狙われやすい。

アヌークは地上を靈視した。敵の発する靈波動を捉えるために。

動いてる、蒼白く光るふたつの人影、十字軍団員だ、数、二名 カンプグルツペを結団している？ 人影が森林を疾走している。アヌークたちの降下予測地点へむかって。

「なんでなのっ？ 参謀総局の情報とちがうっ」

アヌークは徳人をかばいながら、森林へと降下していった。ブナの木からひろがる枝を守護靈結界でへし折りながら、下草に逃げ込むように着地する。

銃声が響いた。

鼓膜を殴りつける轟音。徳人の頭のすぐそば、ブナの幹に弾丸が直撃する。暗赤色の光、悪霊だ。悪霊を憑けた弾丸^{フレット}。十数メートルの高さはあるだろうブナの立派な巨体が真つ二つに折れた。アヌークが、倒れるブナの木を尻目に下草の茂る混交林を駆け抜ける。

「ばっ、爆撃っ、ばっ」

「ちがうっ、大型拳銃の弾丸だからっ」

声が裏返る。

「だって、あんなでっけえ木っ」

無様だった。小柄なアヌークの片腕に抱えられていたのだ。

せめて森林にひろがる大木にぶつからないよう、宙にういた両手足四本を彼女の体に密着させるしかなかった。ぬかるむ地面を駆けふたりが窪地に滑りこむ、少女がキャリアケースから武装をとりだす。

ロシア製の小型サブマシンガン、OTs 二二ピカールだ。

ガスライターを手にとる。

壊れていた。指を吹っ飛ばされたあのときから。

アヌークは己のあまりの未熟さに幼げな顔を歪めた。装填された九ミリ×一八弾を悪霊弾にはできない。仕方なくかわりに憑依霊を数人、九ミリ弾に憑かせた。

ブナの大木を粉碎した悪霊弾丸は破壊のために霊力を消耗しつつも、独りでに帰っていった。術者のカルマびとのところへと。

ふたりから見て左側だった。強い使役霊の霊波動が疾駆する。

彼女は、右側に精神を集中させながら走った。

弱い、弱い守護霊の波動しか感じられない。まちがいない、

右斜め前方にもうひとりのほうの敵。こいつが眷族だ。

「序列第？列の意地があるもんっ……見せてやるっ」

実戦の恐怖のあまり、全身の震えが止まらない。

第？列 七階級で構成される父祖の戦列、序列最下列、眷族をもつことを赦されない、カンブルグッペを保てない最下級戦士。

「カルマびとの誇りに賭けて、敵の眷族にまで負けるわけにはゆかないからっ」

右の小川を跳躍して渡る。左の敵が後方へとまわりこむのがわかる。挟撃するつもりだ。

アヌークは、敵二名からの十字砲火の射線上になるのを避けながら、正面の眷族へ素早く接近した。森を抜ける。

正面に小高い崖がそびえ立っていた。大人ふたり分ほどの高さだった。

崖の上に長身瘦躯の男がひとり立っていた。光の弱い守護霊を全

身にまとわせている。切れ切れの雨雲が上空を素早く移動している。雲の晴れ間から、傾きかけた丸い月が顔をだす。

月光をバツクに、はつきりと男のシルエットがつかびあがる。

目のまえに、教皇十字軍の 眷族ではない カルマびとが立っていた。

アヌークは、身がすくんだ。動けなかった。虎のまえに引きずりだされた仔猫のように。

「あれ、もしかして」

宙に抱えられたまま徳人がいう。

カルマびとは地面の水たまりを踏みつけた。弱い守護霊が封印され、かわりに強力な守護霊が招喚された。単純な罠だった。

口にくわえた洋モクの？ガラム？にはすでに火がついている。

五体の悪霊が左手の巨大なリボルバーに同時に招喚される、強力な悪霊たちが巨大な拳銃のシリンダー内へと移動する、五発装填さ
れている実包カートリッジの先の弾丸にそれぞれ憑依してゆく。

「アルフォンス・カミュ……」

絶望を吐きだすように男の墓碑銘をつぶやく。

「あれ、アルさん、アルさんじゃないかっ」

「……知っておる、か……ノリ」

唇が震えて、うまく発音ができない。

「俺の大先輩っ、おっ……いアルさあんっ」

アル アルフォンス・カミュがためらうことなく、ふたりに巨大な銃口をむける。

「アルさん、なに？ なんだよ、俺だよ、徳人だよっ」

「アルフォンスッ、貴様？外敎院がいしやいん？に属しておろうがっ、このカソリック教徒の肉体は攻撃してはならぬはずっ」

ピカールをもつ左手が震える。憑依霊弾で弾幕を張らなきゃいますぐに。

アルが悪霊弾を発射した。銃口から火炎ガス、シリンダーから発射ガスが噴きだす。

悪霊の憑いた五〇口径マグナム弾は、大音響とともにアヌークのちいさな体に命中した。

「っ」

彼女の体が衝撃でなぎ倒される。

「っ アヌークッ」

凶悪な悪霊だった。

アヌークは自身の体に達也の？ダチ？、徳人の体には達也の守護霊結界を展開していた。

悪霊弾がダチの守護霊に襲いかかる。五〇口径弾丸に憑依した悪霊は、見た目こそちいさくなっていた。その赤と蒼の光の激突面からは、火の粉が流星のように、稲光が、天体から噴き出るプラズマジェットのようにあふれ出す。森の暗闇が真昼と化した。

「やめるおっ、アルつてめえっ十字軍だったのかよっ」

アルが体に染みこんだ習慣だろう、スピードローダーを使わず、撃ったカートリッジ一発分再装填して再び銃口をむける。

リロードから一連の動作まで、瞬時の早業はやわざだった。

「アルっ、アヌークはいいやつなんだよっ俺のことを助けてくれたんだっ命の恩人なんだっ俺こいつのことが大好きなんだよっ助けてやってくれよおっ」

五〇口径の巨大な銃口が、アヌークの体に精確な照準を定める。

「てめえっ信じてたのにつ、アルつてめえっ」

徳人が激怒した。手足をめちゃくちゃにばたつかせる、倒れこんでいるアヌークの腕から抜け出る、銃口のまえに立つ、少女を護るために。

ノリトよっ……アヌークが口だけを動かす。

「逃げろっアヌーク、早くっ」

「おのれ、アルフォンスッ」

徳人を護らねば。恐怖に凍り付いていた彼女の体にふたたび、活力がみなぎり始める。アヌークが、また徳人の体をかっさらうようにもちあげた。

ちきしょうつ、アルツちきしょうつ　徳人の絶叫はやまない。

彼女は一気に崖の右へと疾駆した。

銃口の死角へと潜りこむ。そのままブナの大木と生い茂る下草の陰に逃げこむ。

「まだだ、ノリトを傷つけさせぬ、決してっ」

それは、自分のふがいなさへの怒りか、徳人を失いそうになったことへの恐怖か。

アヌークは涙をこらえながら森林を駆け抜けていった。なんとし
てもトンネルのあの根津運転手のタクシーのところにもどらねば。
敵ふたりの霊波動を霊視する。このまま森にいれば、野戦経験の乏
しい彼女に、実力のない最下級戦士に勝機はない。

イチかバチかの覚悟を決める。

「ノリト、守護霊跳躍するぞっ」

徳人がただ、うなずく。

遅れてやってきた恐怖からか、呼吸を乱して体を震わせていた。

25、外敕院と内敕院

アルフォンス・カミュとその眷族、立花は森林地帯から出て合流していた。

場所はアヌークたちが魔法陣の儀式を行っていた荒地である。ふたりとも耳に付けるタイプのイヤホンマイクを装着している。

イヤホンはコードで携帯端末と接続されてある。

立花は苦り切った顔で魔法陣を見ていた。

アルが下唇を噛みしめる。なにか見えないプレッシャーとでも闘っているかのようなだった。その表情には焦燥感のようなものがうかんで見える。

太陽が昇っていた。積乱雲が、かなとこ雲に成長し雄大な姿を空一面に誇示している。

イヤホンからオペレータの声が聞こえてきた。若い日本人女性の声。

『？外敕院？日本司令部よりカンプレッペ（KG）・カミュへ通達、准将より直通回線つなげます、どうぞ……』女性の声にかわって精悍そうな男性の声が聞こえてきた。

『カミュ大尉、私だ』

イタリア語だった。

『准将、？内敕院？はなんといつてきましたか』

改まった口調でマイクにしゃべる。

『連中、いつものように？治外法権干犯？だと喚いている。大尉、内外両院の対立は私の線から下に降りぬようなんとか食いとめておく』

『申し訳ありません』

『？常習犯？が謝るときは、しおらしいな』

苦笑混じりだった。ため息をついてからつぶけた。

『破門者アヌークに対しては、いままでどおり監視に徹しろ、自分

が外教院に属していることを忘れるな。貴官等のKGはあくまで内教院隷下KG（PKG）が到着するまでのつなぎだ、カソリック教徒は内教院の管轄下だと何度いつても貴官には通じないようだな」

「准将、ノリト・カワカミの件ですが」

アルは管轄権など知ったことか、そんな調子でいった。

『川上徳人の件は私にも報告書が届いている……さぞや無念だったろうが、我々がヒト同士の紛争に私情から介入することは断じて許されない……カミュ、任務に専念してくれ』

「では、ノリトの件は？」

アルの声には、ユリスモールカフェで見せる余裕はなかった。

『十字軍法典に則り、破門者共々内教院が処理する、例外は認められない、以上だ』

回線は切られた。立花が汗を拭きながら、近づいてくる。

「躊躇している暇はありません、あの破門者の女がこれ以上日本人を殺害するのを、警察庁に身をおく者として座視するわけには参りません、あの運転手の命もどうなるか……カソリック教徒に与えられた治外法権に怖じ気づいてる場合ではないかと、ご決断を……」

「……治外法権に縛られないお前らしい正義感だ」

アルの皮肉を、立花は歪んだ微笑でやりすごした。

アルが両眼をつらそうに閉じる。

ノリ、タツ……兄弟の名をつぶやく。鳶色の瞳を開いて立花を見た。

「破門者を追跡する」

26、達也VS・悪霊

日本時間の午前八時から始まった宿命の一戦、ニューヨークヤンキースとボストンレッドソックスの首位争いを賭けた試合は、緊迫した投手戦にもつれこんでいた。

根津運転手はあくびをしながらもラジオの試合中継に夢中になっていた。

九回の裏、依然として〇対〇のままだった。

いま、ヤンキースの九回裏の攻撃で最初のバッターが三振をとられた。つぎは三番の八億円プレイヤーだった。頼むぜホームランッ、根津は叫ぶと最後のセブンスターの火を消した。

リアドアがノックされた。

根津がサイドミラーを確認する。

あのふたりの乗客だった。根津は口笛を吹いて、ドアを開けてやった。車内にエアコンの冷氣と真夏の暑気が混じりあった。

ふたりが乗りこむ。ともに憔悴しきっていた。体のあちらこちらに泥汚れをつけている。

アヌークが悪霊弾を撃ちこまれたとき、彼女の使役下にあった使役霊は三十一人いた。

悪霊がふたり、憑依霊が二十七人、そして貴重な守護霊は達也と達也のダチのふたり。

これまで引導被いで守護霊となった者たちが複数いた。

ある理由から、いまはいなくなっている。

さらに九人の憑依霊が根津の千円札に憑依して、アヌークから離れていた。

すこしでも時間を稼ぐため、ふたりしかいない守護霊の消耗を防ぐため、残り十八人の憑依霊たちと悪霊弾とを闘わせた。

使役霊同士の闘いは 徳人の好きな表現を借りるならば 伝タイ統マシだ。使役霊たちはかならず一対一で闘争をおこなう。

？達也のダチ？に喰らいついていた悪霊に憑依霊をぶつけたのだ。憑依霊が負けそうになると、つぎの憑依霊を招喚して悪霊弾と闘わせた。十八人の憑依霊たちはことごとく悪霊弾のまえに敗北した。引導率を1か2までに落とされるか、霊力のほうを先に消滅させてしまい、彼女の身のうちに逃げこんでしまっている。

それほどにアルの悪霊は手強い。引導率18とかなりの霊力を誇っていた。

その悪霊は？女？だった。

憎悪にあふれ、燃えさかるアイスピックの形態を成している。愛する者と自分自身とを、アイスピックを凶器に使い死に追いやり、因縁霊と化した女だった。赤い光の塊のアイスピック。アルの五〇口径ブレットを核にして、鋭い切っ先となった悪霊の思念を突き立ててくる。

いま？女？の一騎打ちの相手は、いったん避難させていた？達也のダチ？の番にもどっている。

アヌークはふたりの守護霊を行灯袴の右脚の陰に憑けていた。彼らは？ちいさな子どもの手？の形態となっていた。ダチの？掌？に女の？アイスピック？が突き刺さる。

行灯袴の片隅で、空間がねじ切れて見える。蒼白い超新星の煌めきを赤色巨星が引き裂きつつあった。

「だいじょうぶか」

徳人は不安を隠そうとしなかった。

「どうしたい、嬢ちゃん、具合悪いのかい？」

根津がルームミラーを見ながらいった。

「お疲れで疲れたんだよ」

徳人がいった。

そうかい、大変だな、根津がうなずく。

おっちゃん帰ったのかと思ってた、徳人がいうと、根津は笑った。徳人はユリスモール学院中等部まえまでいってくれるよう頼んだ。

根津は車を出した。

トンネルを抜けても、ラジオからはノイズしか聞こえてこなかった。

根津が慌てて放送局を切りかえる。どのバンドを選んでも野獣の唸り声のようなノイズを吐きだすだけだ。

使役霊同士の死闘が、電波障害を引き起こしていたのだった。

「？ダチ？のあんドーナツ残りいくつだ」

徳人が、根津に聞かれないよう彼女にささやく。

彼女が震える手で達也の携帯をとりだす。テキストメモ画面に文字を打っていく。

《神経集中でうまく日本語発声できぬ》

徳人も自分の携帯でメモを打つ。液晶画面を見せてやる。

《メモでいいから教えてくれ》

《達也のダチ ドーナツ残り二個 悪霊残り十七個 悪霊の霊力が強い》

徳人は血相をかえた。どうすんだと、かえす文字を打つ指が強張る。

「ケータイでなに見てんの、顔くっつけあつてっ」

オーディオパネルを一発殴りつけた。

「つせえな、闘ってたんだよおっちゃんっ」

「なにつ、ひよっとしてヤンキース戦か？ ケータイで見れんのかっ？」

徳人は適当に相づちを打った。教えてくれ、根津が切羽詰まった様子でいう。

窓外では、のどかな森林地帯のブナの大木が見えた途端、後方へとすぎ去ってゆく。

いまヤベえんだよっ、徳人の叫びに、マジかよニイちゃんクソッタレっ、根津が忌々しげにハンドルをたたく。

《どうすんだ？》

指がふるえる。

《ダチを封印する かわりに達也に闘ってもらおう》

「いまでもなってる、ニイちゃんっ」

「選手交代だっ」

「チキシヨウめ、ツーアウトかよっ、あの野郎っ八億ももらってるくせしやがって」

根津はヤンキースの三番スラッガーの名前を叫んだ。

《タツも負けたらどうなる？》

《達也もアルフォンスの悪霊にされる　ふたりの悪霊がタクシーごと我等吹き飛ばす》

アヌークと徳人は互いを見た。

ふたりとも恐怖のあまり大粒の汗を顔につかべていた。

根津が不安げにそんなふたりを見てくる。

「なあ、ニイちゃんや、ひよっとしてカネ賭けてんのかい」

「カネじゃねーよ、命だっ」

「そうかつオトコだよニイちゃん、あんたオトコだっ、俺は営業所の仲間と賭けてんだ、十八万だぞ、十八万、ヤンキースの延長なしの勝ちによ、あんたはどっち？」

「ヤンキースに決まってるだろ、おっちゃんっ」

「クソッ、燃えてきたぜ、そうこなくつちゃニイちゃんっ」

根津運転手は興奮して叫んだ。

朝十時、照りつける太陽の下、タクシーは県道六四号線を猛スピードで突っ走っていた。

《達也十六個　悪霊十四個　霊力互角》

《うまくいきそうか》

《達也若干有利》

ニイちゃん教えてくれっ、バッター有利っ、中年と少年の怒鳴り声が車内で飛び交う。

根津はヤンキースの主砲四番打者の名前を叫んだ。頼む、ホームランだっ、切実な叫びだった。

少女が苦しげに貌を歪める、喘ぎながら、携帯を少年に見せてくる。

《達也三個 悪霊二個》

入力ボタンを押す指がわなないている。お互いの強靱な業がぶつかった。

引導率が一気に落ちたのだ。激しい闘争とともにタクシーの車内はフラッシュのような残光に満たされた。アイスピックの先端はすでにねじ切れ曲がっている、意志の力を失い、輪郭がブレ始めている、それでもためらうことなく？達也の掌？を貫いてゆく。

達也は五本の指を切っ先に絡め、死力を尽くして凶刃を食いとめていた。車内に乱流が舞う。三人の髪が乱れた。根津が舌打ちして、エアコンのスイッチに手をのばした。

アヌークは、掌にもっていた金属製のケースから白いカプセルを襲撃された際服用した、あのカプセルを　また一個とりだした。

口に入れ、噛み砕く。口に運ぶとき指が震えていた。

「なんだニイちゃんいまの光っ、ええっおい？」

空調を不思議そうにいじりつづけた。

「だから……ケータイのメールツ、着信ランプだよっ」

苦しい言い訳だけれど、十八万を突っこんでる根津にはたいした問題ではないようだった。

「なんだよ、それっちきしよう、がんばれタツッ」

「ニイちゃんっ、カウント教えてくれっ」

「うるさいなっ三、二だよっ」

「三、二？　フルカウントかよっ、スリーボールのツーストライクかよおっ」

《た二 あ二》

アヌークの指が震えだす。

少年と少女は空いている手同士を堅く握りあつた。

根津も必死の形相で、ルームミラーでふたりの様子をうかがっている。

達也と悪霊の光が、蒼白色の美しい、暗赤色の凶悪な、それぞれ

の光が明滅をくりかえし、徐々にその眩さを衰えさせていく。現世で死んでもなお、闘わなければならない者たち。

《一》

少年と少女は、頬をくつつけあって、達也の携帯画面に見入った。ふたりの顔から血の気がひいていった。根津が叫んだ。頼む、神さまっ仏様っ俺の十八万円っ。

そんな根津もついに首をふり始めた。

あの四番はダメだ、今年でクビにしちまえ、つぶやいた。中年のつぶやきも、ふたりの顔色をまえにして次第にフェードアウトしていった。

刻が、止まったように車内が静かになった。車内の？着信ランプ？は、行灯袴の片隅でちいさく明滅をくりかえすだけとなっていた。ふたつの光は、衰えてゆき、やがて。

タクシーは六四号線をひたすら走っていた。紅葉ヶ丘市へむかっていた。

車内をエアコンの音と、神経に障るラジオのノイズだけが支配していた。

アヌークは、親指でゆっくりとボタンを押した。

《一〇》

徳人に寄りかかってくる。

徳人はそんな彼女を全力で抱きしめてやった。

ふたりは、震えながら笑顔を見せあった。

途端、いままでノイズしか聞こえなかったラジオが復活した。

「勝ちました、ヤンキース、宿敵レッドソックスを一〇でくだしました、まさに四番の一ふり、弾丸ライナーで右翼席に飛びこんでいきました、サヨナラホームランで劇的な」

根津は叫ばなかった。

何度もうなずきながら、ヤンキースの四番バッターの名前をつぶやいていた。

俺はおめえを信じていたんだぞ、そうとも信じていたんだからな

……ちゃんと信じて、信じて。

中年のささやく車内で、少年と少女は、疲れ切った体をシートに沈みこませた。

アヌークの緋色の行灯袴に、蒼白色の光がふたつ、静かに瞬いていた。

アルフォンス・カミュの放った五〇口径の弾丸が、車内のカーペットにぽとりと落ちる。

達也の勝利によって、アルの悪霊は、アヌークの守護霊となっていた。

もう、アイスピックの姿を成してはいなかった。

達也同様、手の形となり、ただ震えていた。

ふたりの煌めきは、蒼く透きとおっていた青空が、昏い夕闇に浸されたように儚げだった。

？達也の光り輝く手？が、怯える？彼女の手？を握りしめた、もうだいじょうぶだよ、そうささやきかけながら。

ふたりは、もうぼろぼろだった。それでも達也は握りつづけてあげた。

やがて、彼女の震えがやんだ。

おずおずと達也の手を握りかえしてくるようになった。

アヌークは、達也のうれしげな声を感じとった。

それから、ふたりの魂を封印した。

27、ブジョー403の会話

根津のタクシーの後方、数十メートルのところをブジョー四〇三が走っていた。

立花が運転している。

ナビシートに座ったアルフォンスがふっと、おおきく息を吐きだす。

「大尉、悪霊の使役、お見事でした」

ねぎらいの言葉をかける。

「おそらくあの破門者は？カプセル？補給に踏みきつたはずですが、まちがいありません」

アルの悪霊の使役力と、アヌークの守護霊の使役力ではアルのほうが数段優れていた。

アルが悪霊に全力をだすように使役命令の思念を送っていたならば、タクシーは吹き飛んでいた。そうしなかったのは、無論、これ以上犠牲者をださないためだ。

根津運転手や、県道を走る他の車輛のドライバーの生命を守る義務を果たさなければならぬ。それが教皇十字軍の使命だ。

悪霊弾に退却を命じることも出来はした。

アヌークは敗北するまえに、タクシーに乗車してしまった。車内から退却させれば、車体を貫通させるとき大爆発をおこしてしまう。アルは苦心して、悪霊のもつ憎悪と強大な戦力を弱めるよう使役するしかなかった。

「大尉の力をもってすれば、アヌーク程度の小物はあの森林で容易に封印可能だったかと……ですがあきらかに追撃の手が途中から緩んだようにお見受けいたしますが」

「封印刑は代執行するつもりだった、だから18の悪霊弾を撃つた」立花はたまりかねたように、運転しながらアルの横顔に顔をむけた。

「二発目を発砲なさらなかった理由をお訊ねします……川上徳人の、彼の態度ですね、あの少年が破門者に恋情を抱いているのは疑問の余地はありません、少年はどんなセリフで破門者を助けるよう、大尉に願ひ出ましたか？ まだあのふたりの兄弟に残酷な情けをかけるおつもりですか？ 戦場で躊躇なさるとは、外赦院スきつての暗殺者ケラーノの大尉の名が泣くというものです」

「ノリの、まだあいつの姿は」

「杉浦達也はすでにあの破門者の使役下です、さらに川上徳人には非道な外法の仕打ちを」

「タチバナツ」

声を制した。聞きたくもないというふうに。アルは下唇を噛みしめた。

「あきらめるべきです、あの兄弟はたしかに大尉と昵懇の間柄でした、しかしすでに破門者の手の内に堕ちてしまったのです、大尉の手で葬ってあげてこそあの兄弟への手向けでしょう？」

「……タチバナ、お前は常に冷静だ」

「はい、でなければ私の職責は果たせません、表の職務も、裏の任務も、です」

アルの携帯端末に、テレビ電話のコールが鳴った。

アルが回線を開く。

相手は中年女性、東京の外赦院日本司令部（NJHQ）からだ。

彼女からの報告を聞くうちに、アルの表情が強張っていった。

28、父祖の戦列

太陽が空に上り詰め、真昼の陽差しを容赦なく地上に浴びせ始めた頃、アヌークと徳人はようやく聖ユリスモール学院中等部男子寮に帰ってくる事ができた。

アヌークは部屋にもどつてくると、ただちにノートパソコンでテレビ電話機能を使い始めた。

「貴様はゆるりと休んでおるがよいぞ」

「ワリい、そうする……」

疲労困憊の体でベッドに身を投げだしてしまう。

アヌークは、ベッドで意識を失ったように眠る徳人を見た。

「待っててノリト、報告が終わったらすぐに……治してあげる、からね……」

声には力がなかった。

彼女は、ふらり、体をぐらつかせて、その場に倒れこんでしまった。

全身が激痛に苛まれていた。

混濁する思考のなかでカプセルをもう一個ケースからとりだし、噛み砕く。服用後、甘い、この上ない多幸福感に包まれる、カルマびとにとつて、特に実力のない者にとつては欠かせないもの、それが？墓碑の血？^{カプセル}だった。

タクシー内で、達也の引導率低下と霊力消失を食いとめるため、彼女は己の魂を裂いて霊力の増援を達也に送りつづけていたのだった。

達也の勝利までに、彼女の魂はその霊力を残り三割にまですり減らしていた。

彼女は徳人にいった。休息すれば、快復すると。事実ではあつた。けれどこれほどまでに消耗すると、そうはいかない。墓碑の血^{カプセル}で短期間に快復させないと、魂をえぐりつづけたゆえの激痛により身動き

ひとつとれないまま卒倒しつづけることになる。

アヌークは気力をふり絞り、ベッドへとむかって床に手をつき、這いずっていった。

「……ノリ、ト……やく、そく……まもってみせるっ……からね」
唾を呑み吐き気をこらえる。

徳人の顔色は悪い。

ちいさな掌を彼の額に当てる。

彼は疲弊しきった体で浅い眠りについていた。

まだ、まだ時間はある、残されているんだから、少女は自身にいきかせる。

「かならず……タツヤとの、約束、守るからね、だから、安心してね……だいじょうぶだからね……安心してね……安心……」
うわごとのように繰り返しかえし、徳人の髪を、そうっ、とやさしくなでてやる。

少女の峻烈な瞳は、少年の寝顔を見ているときだけ、ふんわりとやわらいだ。

数時間ほどのあいだ、魂を引き裂いた後遺症の激痛と闘っていた。それは急激に訪れたかと思うと、カプセルの効能でまた緩解していた。何度もくりかえしつづいた。

ようやく起きあがれるくらいになってきた。

呼吸を整え、卓上ミラーを見る。青白いやつれた顔、額に垂れさがる白金の前髪。故に凄絶な、ある種退廃的ですからある美しさを放っていた。

「斯様な無様な顔を閣下にお見せすることになるうとは……っ」

キャリアケースから軍服を出した。白のブラウス、黒い細身のネクタイ、ソフトグレイ 奇しくもユリスモールの制服と同系色のジャケットにミニのタイトスカートでその身を固める。右肩からベルトへ斜めに斜革をかける。左の袖には序列第？列を示す、黒地に赤文字で？と記された腕章を巻いた。ジャケットの襟章、戦歴を示す胸章が、戦士としての四〇〇年間を物語っていた。最後にへ

アスタイルを整え、ブラックの制帽を被る。？父祖の戦列？戦士の第一種軍装だった。

表情に凜とした、戦士の、最下級であるがゆえに守り抜きたい誇りが甦っていた。

ノートパソコンで通信を始める。

相手はロシア連邦、ウラジオストク市の地下にある極東総軍司令部だった。

パソコンモニタにアジア系の若い通信士官が映る。

アヌークは敬礼してから、士官と言葉を交わした。やがてモニタは別室を映し出した。寒々とした打放しコンクリートの壁が背景の個室だった。やや薄暗い照明が地下の待避壕の印象をより強くしている。

「クヴィスリング卿、お呼びだてして申し訳ございません」

アヌークは最敬礼した。

クヴィスリング卿　序列第？列、極東総軍司令官。？作戦名・オペレーション・フォルモント満月？の最高指揮官だった。二十代の快活そうな白人青年に呪肉していた。清潔な軍服に乱れはなかった。

充血した右の眼からは一筋の血が流れだしている。

卿は、手にもったネツカチーフで丁寧にぬぐった。老朽化した呪肉体が拒絶反応をおこし始めていたのだった。

『同志アヌーク、私の体の話題は無用だ、報告を早速頼む』

「はいっ」

アヌークは、十字軍外赦院隷下のアルフォンス・カミュ大尉からの強襲を的確に報告した。卿はとなりにいる副官から報告書をもらいながら、アヌークと言葉を交える。

彼女の目撃したもうひとつの影、アルの着族の正体が判明した。

名前はタチバナ、表の顔は警察庁次席監察官、階級は警視長。裏の顔、彼の正体は教皇十字軍の諜報機関？秘蹟認定局？調査官だった。

認定局は破門者狩りのために執念を燃やす、十字軍の最強硬派が

集まった組織だ。

認定局とは別に、十字軍の軍政はふたつの組織によって統制されている。

カソリック教徒を護るために組織された内赦院。

それ以外のすべての人類を護るための外赦院、認定局は双方のために諜報活動をおこない、犬猿の仲である内外両院の利害調整役を實質的に果たしている。

『同志アヌーク、貴官はカソリック教徒に呪肉したと報告を受けているが』

「はい閣下」

恐縮しながらも疑問を二点、申し述べた。

一点目、外赦院は原則としてカソリック教徒の呪肉体を攻撃する権限を有していない。これをもつのは内赦院のみだ。

この特権が？治外法権？だ。

それにもかかわらず外赦院隷下のカミュに攻撃を受けたのはなぜか。

二点目。自分が戦列の参謀総局から得た最新情報では、カミュのカンプグループ（K・G）をはじめニッポンの敵戦力は現在、トーキョー方面で本作戦の主力。それもイレーヌ姉様の率いらっしやる。我が戦列の五個KGと交戦、釘付けになっているはずではなかったのか、と。

『貴官が疑問に思うのも当然だ、我が戦列主力はトーキョー方面で手痛い打撃を受けたのだよ、敵内外両院の有力なるKGと激戦となつたのだ、目下チバ方面より空路、撤退中だ。敵もトーキョーで大損害を出し恐慌状態だ、カミュの貴官への強襲もそれゆえの焦りの現れだろう』

「閣下つ、では姉上つ、同志イレーヌの安否はつ？ 本作戦の帰趨はつ？」

『うるたえるな、作戦は成功裡に終わった。同志イレーヌも無事、ウラジオストクへむけ撤退中だ』

卿は、顔にやさしい笑みをうかべた。

アヌークは、感涙をこらえながら、自分の不甲斐なさをわびた。
「自分には、最後まで主力KGより連絡がきませんでした、トーキョーへ使役霊を増派するように徴兵任務の大役を命じられたにもかかわらず、残念であります」

卿は教え諭すようにアヌークをなだめ、功をねぎらった。君がカナガワ方面で任務を遂行していたおかげで、カミュは主力を追撃できず、カナガワへ転進する事態に陥ったのだと。

「貴官のおかげだ、同志アヌーク、カミュほどの難敵がチバ方面へ追撃していれば、我が主力は、？列級のイレーヌといえども撤退に成功したかどうか危ぶまれるところだったぞ」

「わたし如きにもつたいなきお言葉、有難うございますっ」

「同志アヌーク、貴官の今作戦の勲功に報いるため、序列第？列への昇進を裁可した」

アヌークは全身で喜びを表現した。両方の拳が感動のあまりになく。

卿はさらにあたたかい言葉をかけた。

それから彼女へ可及的速やかに退却するよう命令した。

退却したアヌークの救出ポイントは、作戦当初新潟近辺だった。

鳥取県に急遽変更された。新潟を中心に十字軍の警戒ラインが敷かれ始めたのがその理由だ。海路救出されることに決まった。

副官から卿にまた報告書が手渡されるのが画面に映る。

一読した卿の表情がゆるんだ。

「参謀総局からの最新情報だ、KGカミュは内赦院の治外法権干犯で査問委員会に召喚された、一方、内赦院は、チバ方面への追撃で予備兵力を使い果たした模様だ、貴官を攻撃できる敵戦力はニッポン戦線には最早存在しない、油断は禁物だが、ひとまずは安心したまえ」

アヌークは、安堵のため息ののでそうになるのを我慢した。

卿のまえで許される行為ではない。

「はい閣下……閣下、ひとつ、ひとつだけお願いがございます」
『うん、なにかね？』

「ノリト・カワカミも海路救出に加えることをお許し願えないでしょうか」一息にいった。

『ああ、現地協力者の、例のあの少年かね？ よろしい、裁可しよう』

アヌークの心を、第？列昇進よりも遥かに歓びに満たしてくれる、これ以上ない裁可だった。

「閣下、何卒御身を御自愛下さいませ」

『ありがとう、同志アヌーク、ウラジオストクで待っているぞ』

卿はまた流れる鮮血を拭いた。拭きながらアヌークを労った。

顔に疲労の色が濃いぞ、？墓碑の血？^{カプセル}を使い果たしたか、と。

「はい、特配頂きましたカプセル、すべて使用致しました。伏してお詫び申し上げます」

「構わんよ、総司令部に君の今期分の再度配給を要請しておく、私からは以上だ」

「はっ、父祖よ永遠なれっ」

アヌークは最敬礼　右腕を直角に曲げ掌を掲げる　敬礼をし

て、戦列への忠誠の合い言葉を宣誓した。

『父祖よ永遠なれ』

クヴィスリング卿も笑みながら、答礼した。

回線は切られた。

29、アヌークを愛するということ

「タツヤ、引導率の快復具合はだいじょうぶ？」
「……………」

達也が哀しげに教えた。

「どうしようアヌーク、いまの僕じゃのり兄ちゃんを……………」

「…………… 11? うん、わかった……………」

達也の携帯を見る。時刻は夜八時すぎだった。

タクシーでの闘いから十時間近く経過していた。

引導率は基本的に一時間に1しか快復してはくれない。

達也に追加で喰わしてあげられる魂の余裕を、アヌークはもう保つてはいなかった。出征の際支給された墓碑の血カプセルを使い果たした以上、魂は自然快復に頼る以外に道はない。

「いつも、いつもごめんアヌーク、きみのたいせつな魂、僕食べるばかりで……………なのに？」

「ばか、気にしないで、そんなこと」

「僕、きみにつらい思いをさせるばかりだ、なのに……………のり兄ちゃん、まだ……………」

「弱気になっちゃダメ、ゲルマティアでの？約束？忘れたのタツヤ？」

アヌークは、掌の達也の魂を勇気づける言葉をつづけた。

達也は自身、弱りきっているのに、なおもアヌークの体のほうを心配してくる。

彼女は空元気の笑顔で応えた。

「封印するから天界でゆっくり眠っていてね、そうしないと引導率も回復しないし」

達也はまだ何かいいたそうだったけれど、アヌークの言葉に導かれ、すうつ、と封印されていた。無理は、禁物だ、タツヤも疲れきっているんだから、少女は思った。

薄暗がりにつつまれた、ノリトの部屋。

ふと、隅にあるゴミ箱に目がとまった。ノリトのくれた、ブルーベリーパイの包装容器が捨てられてある。ふたりで語りあった、あの夜。

急いで目を背ける。

コンテツサチエアに瞳がむけられた。

心地のよい、大好きな椅子。デスクの上の壊れたプラモデル

ノリトの宝ものだったのかな？ いままで気にもとめなかった、

自分が夢中になってチェアを回していたせいだ。いたたまれなくなつて、目をつむつた。

ほんのたつた数日間、気づいたらこんなにも思い出が詰まっていた、この部屋には。

少女はベッドサイドに座つて ノリトとタツヤ、ふたりとの思い出が押し寄せてくる 涙のこぼれそうになるのを懸命にこらえた。

目元を何度かぬぐつて、天井を見上げる。ノリトはわたしを助けてくれた、タツヤは、体を亡くしたのに ちがう、わたしが、わたしが奪つたんだ それでもわたしを支えてくれてる、自分がしつかりしなくつちゃ、ダメなんだ。

いまのままでは未来は切り拓けない、ノリトの未来をかえてはあげられない……。

「……ノリト」

愛おしげにちいさな手を徳人の頬にやった。

手首を握られた。徳人に。

「きやつ」

戦士にあるまじき可愛らしい悲鳴をもらってしまった。

少年は眼を閉じたまま、いつもありがとな、アヌーク、ぬくもりに満たされた様子でいった。

「なあ、もすこし、さ、ホッペ、なでていてくんないかな、タツの夢もうれしいけど、さ」

「……………っん」

少女は素直に従った。

少年はしばらくのあいだ、じっとしてされるがままになっていた。やすらかそうに両眼を閉じて、ほんとうの心の底からこの時間を大切に感じてくれているようだった。

少女の、少年の頬や前髪をそつとなでる手に、恥じらいといとおしさがさらにこもっていく。

指の動きが、大切なひとを、よりいつそう大切にしたいと、たしかに物語っていた。

刻が、数分かも、数十分かも知れないが、すぎていった。

徳人はゆっくりと上半身だけ起きあがった。

ベッドの上であぐらをかいた。

デニムのうしろからなにかいいさなものをとりだす。暗い部屋の中でできらり、光を放った。

「タツのしてた、おメダイのリングなんだ、いまなら神様、また信じられそうな気がするから」

「……………」

ベッドサイドに腰掛けた少女は、不思議そうに、少年の顔とリングの光を交互に見た。

「俺とタツから、アヌークに、プレゼント」

アヌークはおメダイのリングをじっと見た。

また徳人の顔をのぞきこむ。

「好きだ、アヌーク」

「……………」

徳人は照れくさそうに頭をポリポリとかいた。彼女の表情のかわっていく様を見守った。

「……………そんなさ、そんな顔、しないでくれよ」

アヌークはちいさく首をふった。

力なくふった。

「好きな女の子に、告ってさ、泣かれそうになったら、どうすれば

いいのかな」

アヌークはうつむいてしまった。

「俺、女に告ったの初めてだから、よくわっかんないや」
ぱっ、と少女が顔を上げた。

ふたりは身動きひとつせず互いの顔を、瞳の奥を見あっていた。
少年は視線を少女の左手にもっていった。

左手をそつと握りしめる。目で合図を送った。

もういっぽうの手にもつリングを少女に見せる。

おまえの左の薬指にこのリングを、これもダメか？ 静かな眼差しで問いかけてくる。

少女は、また首をふった。

「……キリスト教徒の証であろう？ カソリックの。我等が戦列への赦されぬ背信行為になる」

かすれた声は迷いを断ち切るうとして、彼女自身、自分に語り聞かせているかのようにだった。

「そっか、しゃあないよな」

照れたそぶりでまた頭を乱暴にひっかいた。

唐突に、施錠していた部屋のドアが開かれた、合い鍵で開けられてしまった。

ドア口に寮監のおいちゃんが立っていた。

困ったそぶりで薄い頭髪に手をやっている。

「おいちゃんっ」

「まったくよお、だめだよお、川上くん、毎晩毎晩、マリアちゃん
とよお、ダムムシヨで逢い引きつてのは勘弁してくれや、俺の立場
つてもんがよ、ねえつてばよお」

徳人が正座する。アヌークは気まずげにベッドサイドから立ちあがった。

「マリアちゃんあれかい、オーストリアでクノイチってやつか、修行でもやってきたんかね？」

アヌークは不思議そうにおいちゃんを見た。

「最初はびつくらこいたわ、下の芝生と出窓をぼんぼんと飛び跳ねて逢瀬を重ねるたあ、なあ」

見られていたのか。ふたりは互いを見た。

「不純異性交遊なんかしてっから、ケーサツがくるんだっ」

アヌークがすぐさま反応した。

「ほれ、まえきた立花って奴だあ、川上くんに弟くんの件で事情聞きたいことがあっから、署まできてくれってさ、顔が笑っつけど、目はぜんっぜん笑っつてねえ、ありや嘘っきの目だあ」

「ああ、立花さんが、なんの用だろ、あれ、アヌーク？」

アヌークはキャリーケースに私物を整理して入れ始めていた。

瞳の色におびえがあった。

「だからよお、県の淫行条例違反っつてやつだと俺はみた、ああ、俺の目はごまかせねえぞっ」

「寮監殿、タチバナなる人物はいま何処にっ？」

「下の玄関ホールにきてっぞ、川上くんは紅葉ヶ丘署まで来てくれっつてよお」

ノリトよ逃げねばならぬっ、身支度をすませたアヌークに、へ？

徳人が問いかえす。

「注意はしたぞ、不純異性交遊っ」

注意はしたぞっつてばよお、おいちゃんはくりかえした。

「かたじけない寮監殿っ」

理解の表情をうかべ、徳人の手を引っ張った。

注意はしたからなっ、おいちゃんはまだいうと、ドアを閉めていっつてしまった。

「ノリトよ、タチバナは十字軍の手の者であるっ」

徳人は血相をかえて、ふらつく体をおこした。

30、逃避行

根津運転手は睡眠不足にはめっぽう強いタチだった。

そつでなければタクシーの運転ちゃんなんぞつとまらない。

ユリスモール学院中等部の駐車場まえ。

根津はゲート脇の警備員の詰め所で窓口には片肘をついていた。

守衛の小太りの老人は気前のいい男だった。安物の味だったけれど、ポットに入ったインスタントのアイスコーヒーをふるまってくれた。

「運ちゃん仕事もどんなくていいのかい」

守衛がペーパーカップのコーヒーをすすっていった。

「きょうイチンチ寝ないで長距離の客乗つけてね、営業所帰る気なんぞしねえんだ」

それよか聞いてくれジイサン、今朝のヤンキース戦に十八万カネ賭けたおかげで懐具合の野郎がよ、俺にソーブいけてウルサク誘ってくんだよ。はは、そいつあ景気のいい話だねえ。根津は守衛と笑いあった。

根津はふと駐車場に停まったメルセデスベンツに目をとめた。ベンツE六三AMGの正面、バンパーのあたりが二箇所赤く点灯したのだ。

前面警光灯が点灯したのだった。

覆面パトカーの装備品以外の何物でもない。

「覆面にE六三使ったあ、ただのキャリア組じゃねえなこりゃ」

昔の習性で用心深く周囲に目を走らせた。

駐車場のむこうから一組の男女が走ってくる。見覚えのあるシルエツト。

「あれ、ヤンキースのニイちゃんと外人巫女ちゃんっ」

カップをアスファルトに放り捨てる。

何事かといぶかしむ守衛の声を無視して大声を上げた。

呼び声に、ふたりが気づいてこちらに走ってくる。

「根津の、おっちゃんっ……」

徳人はもう、息を切らしてしまっていた。

「ネズミ殿、なぜここに？」

「おっつ、早く乗んなっ」

根津は、車道に路駐してあるタクシーに走った。

ふたりは一瞬顔を見あわせてから、根津の誘いに乗ってきた。

三人がタクシーに乗りこむ。

根津が急発進させる。

根津はサイドミラーを見た。

駐車場ゲートの黄色いポールがあがった。

覆面ベントのナビシートの男が守衛に話しかけている。それを尻目に、タクシーは丘陵の坂道を駆け下りていった。

「危ねえとこだったな、おふたりさんや」

スピードを落とさず丘陵から県道へと入った。

おっちゃん、どうしてここに？ 徳人が聞いた。

おめえさん方送ったあと、営業所に帰る気しなくてよ、なんせ賭けで大金転がりこんだんだ、根津が答えた。いくらだと思っちゃん、根津の問いに、徳人は今月の両チームの成績からして、オッズはヤンキースのほうが高いだろ、そう答えた。当たり前だニイちゃん、ヤ軍三倍のレ軍二倍だぜっ、得意満面で吹聴する。

「スゲえおっちゃん、えつと十八万の三倍……アヌーク？」

「五四万だ、うつけ者め、ネズミ殿なにゆえ我等にこれほどまでに加勢してくれるのか」

「今も昔も、キャリアのオマワリにはいじめられてるんだよねえ」
「なにしたの」

「昔、組の幹部だったんだぜ、こっ見えてもよお」

またニカツと笑っていった。

「ウツソだあ」

笑おうとして、咳きこんでしまう。アヌークが不安げに背中をさ

すつてくる。

「おいニイちゃん、顔色悪いぜ、どうしたい？」

「うん、こう見えても死にかかったケガ人なんだ」

「病院は」

笑顔が真顔にかわる。いく暇がない、と少年と少女は口々にいった。

根津が目的地を訊ねてきた。

アヌークは鳥取県へいくゆえ、深夜高速バスに乗りたい、そう伝えた。

根津の表情がまたかわる。まるで抜き打ちテストを告げられた中学生のような顔に。

「……………ふうん、鳥取、ねえ、なにしにいくのか聞いていいかい？」

「相すまぬ、人にはいえないのだ」

根津が黙りこむ。

それから普通なら羽田から国内線使ってひとつ飛びだろ、それがダメならめっちゃ混みだらうけど新幹線使うだらう、そう聞いた。

それにも答えられない、とアヌークはほんとうに申し訳なさにいった。

根津は、たまげたねえっ、声を上げた。新幹線もヒコーキもあえての禁じ手かよ、空港、鉄道使わないってそりゃあ重要指名手配犯の逃げ方だ。

根津はルームミラーで、アヌークのもちこんだ大型のキャリーケースを見た。

「ヤベえブツでも入ってんのかい、巫女さんや」

咎めるでもなく物のついでに聞いてみた、そんな感じだった。

アヌークは凶星をつかれたのを隠そうとしてか、顔に作り笑いをうかべた。両腕がキャリーケースにまわされている。命よりも大切な我が子を護るかのように。

「いかにも、わたしの命よりも大切なものが入っておる」

徳人がやつれた顔をキャリーケースにむける。

なんなんだろう、そんな思案顔をうかべた。

……そうかい、命ときたかい、根津はつぶやいた。

「よっしわかった、鳥取県まで連れてってやらあな、おふたりさんよ」

これもなにかの縁だ、そういつて根津は口笛を吹き始めた。

アヌークと徳人は戸惑いを見せあった。

「八月の盆に列島横断、高速も新幹線もヒコーキも大混雑だ、いちよ奥の手使ったるわ」

根津は？昔の組の仲間？とやらの携帯で頼み事を始めた。

何人かに電話をしてから、根津はアヌークの服装について、それはやめたほうがいい、と助言してきた。

彼女はまだ第一種軍装のままだったのだ。美少女のソフトグレイの軍装はどう考えてもコスプレだった。

アヌークは迂闊であった、つぶやくとジャケットを脱いだ。

脱ぎながら根津にひとつ、気がかりな点のあることを話した。全国の道路網に張り巡らされた、自動電子検問監視装置とでもいえばいい、日本警察の車輛ナンバー自動読み取りシステム、通称Nシステムについてだった。

「あの心霊スポットにてネズミ殿のタクシーのナンバーは敵に知られてしまっているのだが、Nシステムの監視カメラが気がかりであるゆえ……」

「心配しなさんな、へっへっ」

根津はこれからの手筈をふたりに話した。

ツテを頼ってよ、車を別のヤツに乗り換えっからよ、俺様のタクシーのほうは、アサツテの方角へ？身代わり？の知り合いが転がしてってくれっから、まあ、ギソウコウサクってやつだよ、おふたりさんや、どうだい？ 根津は、こういう相談相手ならアヌークのほうだと見抜いているようだ。彼女を見ながら提案してきた。

「ネズミ殿、それは……まっことかたじけないが、しかし、今一度

訊ねる、なにゆえにしてそこまで我等に加勢なさるのか」

「アイスマヌ軍服巫女殿よ、人にはいえないので」

根津はニカッと笑った。

31、おたかさんのミッドナイトジャパン

根津たち三人は、ごくありふれた白のカラーラに乗り換えた。

ところがそれを、静岡県警のパトカーが先導し始めたとき、アヌークは一瞬ではあるけれど、根津のことを疑った。

ニッポンの治安機関に通じているとは……。

先導する県警交通課のパトカーは赤色灯を誇示しながら、国道二四六号線沿いの渋滞の軽い抜け道を走り抜けていった。

時刻は深夜、日付はかわってもパトカーのうしろをいく根津の運転は絶好調だった。

「ネズミ殿、治安機関の車輛がなにゆえ？」

「なあに、昔のなじみのツテってヤツよ、キヤリア組は雲の上だからカンケ ねえけど、下っ端のオマワリサンたちと俺らみてえなもんはよ、もちつもたれつ、連中は組の情報欲^{ネタ}しがる、俺らも？ マル暴？ いまは名前ちがうか、ヤクザを取り締まる刑事たちとよ、コネつくって、組を裏切った野郎のネタ渡して、そいつの柄^{がら}を警察に引きとってもらんだよ、俺らは手を汚さず、裏切りもんはムシヨの中って寸法よ、ほかにもいろいろ下っ端同士まあ、ってな」

「キツタネえの……」

「ニイちゃんのいうとおりだ、気の休まる暇はなかったねえ」

徳人は、リアシートにだらしなくあずけていた体をなおした。

アヌークが腕をつかんできた。

だいじょうぶだよ、徳人は心配げな彼女を勇気づけるようにいった。

「おっちゃん、拳銃で人を殺したことあるの」

「ないねえ舎弟に命じたことならあるよ、敵の組長の命^{タマ}としてこいつて、ねえ……送りだした」

「どうなったの」

「その舎弟な、組長が、若い衆にガッチリ守られてっから、かわり

のタマとつてきやがってな」

「誰？」

根津の顔が一瞬、ほんの一瞬、険しくなった。

過去の己とむきあう貌になり、すぐもどった。

ひとときのあいだ、車内はカーオーディオからの深夜のAMの喧騒だけになった。

「組長の娘さんだよ、まだ小五のよ、かわいい盛りの女の子だった」

かなり渋滞の緩和されてきた二四六号の対向車線を、ダンプロラックが地響きを上げてすれ違つていった。

右側に座っていたアヌークが顔を背けた。

そのまま徳人のほうに寄り添った。

パトカーのアナウンスで、まえを走るセダン、十トンサイズのド派手な電飾のデコトラも道を譲つていく。

パトカーのあとを割りこまれない程度に間隔を開けてカローラは走った。

「おっちゃん……………」

アヌークの頬が、右肩にあたっている。

ふたりは手を握り合つた。

根津は、ハンドルを握りながら、ひとつ深呼吸をした。

「若えアベック相手に、いやカップルつてのかい今風は？ すまねえな、辛気くさくつてな」

「よけいなこと聞いた俺が」

「いいんだ、俺が…………俺が、聞いて欲しかったんだ…………」

根津は、まえを見据えながらいった。

無表情だけれど、男の目に動揺の色のひろがってゆくのを、アヌークは見た。

「…………その組と全面抗争だよ戦争だ、その舎弟も相手の鉄砲玉に殺られてよ、俺はムシヨ行きになったんだ。組は解散して、俺は足を洗つて生きのびちまつた…………あの子は死んだのによ」

口ぶりは、いつもの飄々とした口調ではなかった。
重苦しい告白でもない。まえを走るパトカーを見ながら、淡々と語った。

根津はクセなんだろう、セブンスターに火をつけようと自然に手を動かし、舌打ちしてやめた。

「中年オヤジのザンゲだ……出雲大社のお隣さんに行くんだ、お清めしとかねえとな……」

「おっちゃん、ごめん」

「……あの、女の子のために、よ、祈ってやってくんねえか、頼むユリスの学生さんよ」

頼む、と根津は、やさしい笑顔でいった。

いつものニカツとした笑いではなかった。

徳人は十字を切った。

祈りの言葉を、新約聖書の福音書の一節を静かにつぶやいた。

アヌークは宿敵の神聖なる言葉　彼女にとっては呪文を　徳
人に身を預けながら聞いた。

「ありがとう……ありがとう、ニイちゃん」

「……おっちゃんっ、俺もザンゲってヤツ、してもいいかな……」

「……したいんだよ……」

「ザンゲかい、俺にむかってしたって地獄行きになっちまうぞ」

「俺もさ、ぶっ殺したいと思った野郎がいてさ、ヤーさんから拳銃買おうとしたんだ」

いつだったっけ、徳人はいった。

となりでアヌークが震えだしていた。肩を抱いてやった。

「で、どうしたんだい」

「それがさ、ネットで何週間も売ってくれる相手探してさ、ようやく見つけたんだ、五十万で売るっていうんだ。東京の町田駅のそばのホテルの部屋でさ、落ちあったんだ。チンピラみたいのかと思ったら、そこらにいるフリーターっばいさ、二、三十歳くらいかな、フツの感じの二人組でさ、親からの仕送りの金があったんだ。五

十万渡したよ」

声には自分の馬鹿さ加減を、どっかしら冷めた感じで見ているところがあつた。

「五百万自慢した俺が、トンだおめでたヤロウだったな」

「うちの親、俺の弟が事故に遭つてさ、なのに海外から帰つてこないんだ、仕事忙しいからつてさ、そのワビつって金送つてきてさ、それが百万」

根津は、軽口を恥じた様子で黙りこんだ。

「チンピラに渡してどうなつたと思う」

徳人は、無理した様子で明るい声を上げた。

「ダメされたかい？」

「だね、ヒデえ目にあつた、この五十万は前金だから、拳銃欲しかつたらもう五十万よこせつていうんだ、アツタマきてさ、仕送りの金はまだ口座に残つてたけど、こりゃあいくら金渡してもタカられると思つて頭きてなぐりかかつたんだ、そしたらうしろからなぐられて、オワリ」

「そのあとどうしたんだい」

「気づいたら、ホテルのその部屋でノビていたんだ、金だけ盗られて、バカもいとこだよ」

徳人はデニムのポケットからコンビニのATMの利用明細票を出した。

預金残高は六二万ほど残っていた。

疲労からか、充血した眼でながめた。徳人はサイドウィンドウの外を見た。

静岡の、どこかは知らない街の灯りがあつという間に後方へとすぎ去つていく。

根津がトイレ休憩でもすつか、そう訊ねてきた。徳人は軽くのびをした。

「なんだか、スゲーねみや……」

けだるげにあくびをした。

「顔色悪りいぞ、缶コーヒーとかなんか軽いもん、サンドイッチとかよ、どうする?」

食欲ねえんだよ、おっちゃん、そういって、アヌークにまわした手にやさしさをこめた。

「なあ、大鳥居の下で飲んだ缶コーヒー不味かったよなあ」

彼女はじつと、徳人のそばに寄り添ってうつむいていた。

「あんなのさ、アルさんのいれたエスプレッソに比べたら……」

「あるさん、誰だい?」

「……いまぶつ殺してやりてえ相手だよ」

アヌークが、びくりと、徳人の腕のなかでわなないた。その胸中を絶望が満たしていった。限られた残り時間。?タイムリミット?は刻一刻と迫ってきているからだ。

「ん、どうしたんだよ?」

「ノリトよ、アルフォンス・カミュが憎いか」

うつむいたままいった。姉の宿敵の墓碑銘を。

「へえ、あいつのフルネーム、初めて知ったよ」

「憎いか、殺したいほどに」

「つたりめえだろ、おまえを殺そうとしたんだ、正体隠して俺をダメしてやがったんだぞ」

アヌークが徳人にしがみついてくる。徳人は両腕で抱きしめてやった。

「俺も、タツもあの野郎がユリスカフェに入れてくれたとき、スゲえうれしかったんだ、あのカフェは初等部のガキは入れないって勝手な掟があつたんだよ、五年坊主のタツを連れてさ、初等部から横浜線で一駅離れた紅葉ヶ丘までいったんだ、カフェのまえで入りたくても中高の先輩連中が怖くって、ブルって俺らを入れてくれてさ」

スゲえ笑顔でさ、俺たちにエスプレッソとフィッシュ&チップスをおごってくれたんだ、徳人は声を落とすし、言葉を切った。それからまたつぶやいた。タツと奪いっこになつたんだ、フィッシュ&チップ

ブスのポテトフライ、ざく切りで喰い応えがあつてタルタルソース
たっぷりつけて。昼休みになるとタツ、いつも俺を誘うんだ、カフ
エでF&C喰おうつて　まえのパトカーをぼんやり、見ながらし
やべった。

「タツも俺もアルに会いたくっていつてたんだ、あいつ俺らのくだ
らねー話にもちゃんど……」

「ニイちゃんや、復讐は怖えぞ、つれえぞ」

「んなこた知ってるよ、弟のカタキは討ったんだ、つぎはアルつて
ヤツの番なんだ」

「おふたりさんの事情は知らねえがね、よくわからねえがね、他人
を憎むとよ、いつの間にかためえ自身も憎ったらしくなってくるん
だ、こいつだきやあたしかだニイちゃん」

元ヤーさんが説教かよ、徳人が流れる景色を見ながらいった。

はは、ちげえねえ、と根津はただ笑った。パトカーとカローラの
奇妙なコンビは、赤信号を我が物顔で横断していった。

パトカーから連絡がきた。

そろそろ東名高速の大渋滞も緩和されてきたという。パトカーに
導かれて、国道三六二号線から豊川インターチェンジで東名高速に
乗ることができた。

さあ飛ばすぞ、根津がいった。

二台の車輛は猛スピードで愛知県へとむかった。

徳人はとうとう眠り始めてしまっていた。

アヌークは自分のジャケットを上からかけてやった。彼のもつれ
た前髪をなおして、額に掌を当てる。毎晩してきた霊視をおこなっ
た。

「またあがってきてしまっている……」

いままでの努力が水泡に帰していくのを感じていた。

「どうした、彼氏……本マジでヤバいのか」

「ノリトの心は怒りと憎しみにあふれておるのだ、どうすれば安息
を与えてやれるのか……」

もうわからぬ、つぶやくアヌークを根津はただルームミラーから見守るしかなかった。

カーラジオから陽気なジングルが流れてきた。

『大浦たか子のミッドナイトジャパアンツ、さて今夜もそろそろお別れの時間だぞ、火野っ』

火野と呼ばれた女性放送作家が、東京で起きた不思議な事件の話を一ラストにふってきた。

『ああ、アレがあったね、リスナーのみんなも知ってるかな、ネットではちよいと話題になってる真夏の怪談話だぞ、事件がおこったのは日付かわつたからもう五日まえ、今月の八日だね』

火野が、警視庁からつい数時間まえになってようやく、この不可解な事件の詳細、及び生き残った容疑者の供述が発表されたことを伝えた。火野の語りも興奮気味だった。

『ありやたまげるわねえ、事件のあらまはさ、むこう見ずな学生くんが、ネットで知りあった元ヤクザ、チンピラだわ、二人組のワルから拳銃買おうとしたんだよ』

『ニイちゃんの事件っ、あんたらコレのせいで逃げ』

『消してくれぬかラジオをつノリトに聞かせるわけにはいかぬっ』

アヌークがちいさく叫ぶ。左に寝ている徳人を見る。

ラジオではDJと放送作家が、逮捕された容疑者はヤバイクスリをキメていたにちがいない、そういいあっていた。

根津がすこしためらった様子を見せる。

『俺には聞く権利つてもんがないかねえ、巫女さんや、ニイちゃんは熟睡してんのかい？』

アヌークが徳人の片方のまぶたをそつと開く。

眼球が水平方向に素早く動いている。急速眼球運動だ。REM睡眠中を示すたしかな証拠だった。

『いわゆる熟睡ではない、夢を見やすい睡眠状態であるが、しかし』

┌

『寝てるんなら……すまねえが、聴かせてもらっせ』

ボリユームをできるだけ下げてくれた。

『 できあ、話もどすんだけど、このワルども拳銃はちゃんもつてきてたんだよ、でも哀れな学生くんからもつと金せしめようとしたんだって、したら学生くんがキレちゃってもみあいのかんか、ここでやめときゃよかつたもんをこの二人組なにトチ狂ったのか、口封じのためだけに気絶した学生くんをその場で撃ち殺しちゃったってんだからさあ、世も末だぞ、火野っ 』

火野がまったくだよね、おたかさん、そういつて相づちを打った。根津がふりむく。

険しい表情で。

アヌークは徳人のサマーセーターに額をこすりつけていた。

嗚咽をちいさな全身でこらえていた。

根津が、視線をまえにもどす。赤色灯とテールランプが闇夜に眩く光っていた。

『 こっからが真夏の怪談っ、このバカふたりが逃げようとしたとき、突然ホテルの窓破ってちっちゃい女の子が乱入してきたんだって、で、片割れの男のもつた拳銃をひったくったんだと、その拳銃で片割れを撃ち殺したんだって、残ったヤツ、こいつが証言者だ、こいつは廊下に逃げだしたんだとき、事件の翌日、ホテルの通報で警察が部屋に踏みこんだときには、学生くんの死体はなくなってる、撃ち殺されたチンピラの死体のほうはバスルームに押しこめられてたってんだからさあ、なあーにがどうなってんのかねえっ 』

火野が、あり得ねえっ、と叫ぶ。

番組のエンディングテーマが明るく流れだした。

32、敗者、復活

「……兄弟をして、憐れなるかな」

アヌークはぽつりと、つぶやいた。

白い浜辺に大海からの海風が吹いてくる。海風は徐々に静まり始めてきている。

アヌークは？ゲルマティア？の廃都を、宙をながめやった。

時間がない、つぶやく声に焦りが見える。

「海辺に出ようぞ、タツヤ・スギウラ」

傾いた列柱のかたわらで達也をふりかえった。

杉浦達也は泣きながら立ちあがった。ニューヨークヤンキースのキャップをまたかぶる。

彼女を先頭にしてふたりは歩きだした。

しばらく歩きつづけ、廃墟を抜け出る。

最後の列柱を通りすぎ、目の前に大海のひろがりを見せる砂浜にたどりついた。

「お願いです、アヌークさん、のり兄ちゃんの未来をかえてあげてください」

「無理であるタツヤ・スギウラよ、我等は神に非ず、ヒトの未来をかえることなど出来ぬ、目のまえの大海に飛びこめば、未来絵図に映りし同時刻に、近しい場所で我等の魂は甦るゆえに」

「それじゃあ、のり兄ちゃんはどうなっちゃうんですか」

「貴様から聞いた話を先例に思い巡らし鑑みるに、まずまちがいないこれから命奪われるホテルで？因縁霊？と化すであろうな」

若干の憐れみをこめていった。

「インネンレイ……になると、その先はどうなるんですか？」

「安心いたせ、我が悪霊にしてくれようぞ」

「悪霊……」

「怒りと憎悪を糧にして万物を破壊する、我等カルマびとの良き戦

力となつてくれるのだ」

「怒りと憎悪？ そんなの、嫌ですっ、のり兄ちゃんを幸せにしてあげてくださいっ、僕が悪いんです、いじめっ子のいいなりになつて、怖くつて、惨めだからのり兄ちゃんにも知られたくなくつて」

達也の頬がまた涙で濡れた。ヤンキースのキャップを握りしめて、僕が意気地なしたつたからだ、意気地なしたからっ、そう何度もくりかえし訴える。

「ええい、まっこと難儀な者に呪肉してしまつたわ」

達也の額に、ちいさな掌をあてがった。

達也は泣きながらも、不思議そうに彼女を見つめる。

「ふうむ、貴様、これは恐れ入つたぞ、タツヤ・スギウラよ、貴様の？カルマ？引導率21にして全き善霊、指導霊であるな、わたしは四〇〇年の永きに渡り数多の指導霊どもと使役の契約を交わし守護霊としてきたが、21の指導霊と出逢つたのは初めての経験である」

「僕は、シドウレイ？ 21？ なんだか中途半端な、不思議な数字……」

「引導率の研究体系は軍事機密ゆえ知らぬが、東洋の宗教の吉とする数が21だとか、仄聞だがな」

「それつて、仏教かな？ アヌーク、僕は、21あるから……強いつて、ことですか？」

「うむ、慈愛に満ちた心やすらかな霊であるぞ、貴様は我が最高の守護霊となり、わたしを闘いにおいて護つてくれるであろう、であるからして、貴様は安心して我が使役下に」

達也の瞳が潤んだ。

「お願いします、のり兄ちゃんも、僕とおなじ守護霊にしてあげてください」

「っ、なにを申すかつ、なにゆえわたしが煩わしい？ 引導被い？ をせねばならぬのだ？」

またしても達也の瞳が潤んだ。

「インドウバライ？ それをやれば、悪霊になったのり兄ちゃんを守護霊にできるんですね」

口を滑らせてしまったアヌークは、可愛い貌を引きつらせながら、達也の手を引っ張った。

「ええいつ、小賢しいヒトの子よっ、もうよいわっ、ともにこの大海に飛びこむがよいぞっ」

「お願いですっ、インドウバライをのり兄ちゃんにしてあげてください」

「知らぬわっ、わたしといっしょに大海に飛びこむがよい、貴様は現世にもどれるのだからな」

またしても、またしても達也の瞳が潤んだ。

「僕が飛びこまなかつたら、アヌークも現世にもどれないんですね」
またしても、またしても口を滑らせたことに恥辱を感じてか、少女は両頬を真っ赤に染めた。

ええい、飛びこむがよいっ、嫌ですっ、よいからこいつ、嫌だっ、ふたりが怒鳴りあう、腕の引っ張りあいが始まる。真っ白い砂浜で取っ組みあいの喧嘩になる。

白い砂塵が舞った。

アヌークは根負けした様子で、荒く息を吐き、ではこうしようではないか、といった。

「タツヤよ、貴様の、兄の、霊、浄霊してくれようぞ、これで、よ、よろしかろう？」

「ジョウレイってなんですか？」

「地球に還るのである、天地あめつちに同化してふたたび生命の源となるのだ」

「絶対に嫌です」

「貴様は……おのれーっ」

怒りもあらわに両手で達也の肩を揺さぶった。

「貴様はなんなのだ？ なにゆえそうまでしてわたしの邪魔をするのであるかっ？」

「のり兄ちゃんにひと言謝りたいから」

アヌークを真正面から見つめていった。

「僕の意気地なしのせいで、のり兄ちゃんが死んでしまう、だからお願い、アヌーク」

「……」

「アヌークには兄弟がいないの？ のり兄ちゃんは、いつつ僕を守ってきてくれたんだよ、だからこんどは僕がのり兄ちゃんを守りたい」

達也から手を離れた。さらりとした砂浜の上に、ぱたん、と座りこんでしまった。

「アヌークは、ひとりっ子？」

「……姉上がいらっしゃる、とても偉大なカルマびとよ、わたしなご及びもつかぬほどの」

「あのね、僕はいつつものり兄ちゃんに迷惑ばかりかけてきたんだ、僕が弱くって、いじめられっ子だったからなんだ」

達也もとなりに座った。

「アヌークはすごいよね、人間の幽霊を操れるんでしょ？ いいなあ、僕なんかとちがって」

「……」

アヌークは大海の水平線に目をやった。

ドライアイスのような霧は重く立ちこめ彼方は見通せない。

わたしも、だ、彼女はつぶやきを漏らした。

達也は不思議そうに彼女を見た。

「わたしも四〇〇年の間、同志たちから嘲笑を浴びせられてきた、悪霊もろくに使役できぬカルマびとと讒られてな。負けじと誇りをもって精進してきた、徒労に終わったのだ、未だ、悪霊を使役することすら叶わぬ、戦場いくさばにおいては、姉上の足枷となるばかりであった」

不思議であるな、彼女はいった。貴様になにゆえこのようなことを話すのか、心許して話せてしまうのか、これが引導率21をもつ

指導霊の成せる業カレマなのか……。

アヌークの訴えかけけるような問いかけ。

達也は一点の迷いもない、そんなふうにあヌークを見た。

「根本的な才能とは、自分になにかができると信じること」

「……」

ふらり、達也を見た。

「ジョン・レノンの言葉なんだ、のり兄ちゃんの大好きな言葉なんだよ」

達也は、水平線の遙か先を見通すように、透きとおった瞳を大海に巡らした。

「僕も、大好きな言葉なんだ。だから僕はそんなのり兄ちゃんが大好きなんだ」

ふたりは霧の立ちこめる海辺で座りこみ、ひたすら大海をながめた。海風の勢いが衰えてゆく。あつたかくもなく、冷たくもないそよ風がふたりの髪をわずかに泳がしていった。

「わたしは、悪霊が怖かった、昔から、いまでも、ずっと……悪霊の引導被いに成功したことは数えるほどしかない」

瞳を閉じて眉根を寄せる。

「アヌーク……」

「グレート・ブリテンのその世界に名の知られた男の言葉、信じてみるか、貴様の引導率21をもって、ノリト・カワカミの悪霊を、守護霊に……これは、わたしにとって、敗者復活戦だ」

「うんっアヌークッ」

「タツヤ・スギウラよ、貴様、兄のために闘うことができるか」

達也はうなずいた。ためらいを見せることなく。

「悪霊と化したノリト・カワカミの憤怒、憎悪、悲哀、あらゆる負の思念に抗えるか、凍てついた兄の心を融かせるか、復讐の炎を鎮められようか」

「やるよアヌーク、僕にとっても敗者復活戦ってヤツだ、僕は、やる、何度失敗してもだいじょうぶ、僕は闘い続ける。あきらめない」

よ、こんどこそ」

「……ひと言、謝りたいと申したな？」

まぶたを開く。水平線のむこうを見渡した。

蒼い瞳には決意の色がうかんでいた。敗けつづけてきた者の、魂のこもった眼差しが。

「うん」

「ならば致し方なし、ノリト・カワカミにその死後もヒトとして肉体を保たせようぞ」

「できるの、そんなことっ」

「うむ、数日間のあいだなれど、ノリト・カワカミの骸は、生きておるかの如くふるまうことができるぞ。我が悪霊と化した彼の魂を魔法陣の中に安置するのよ」

「魔法陣？」

「血文字魔法陣？屍鬼の儀？を執り行うのだ」

達也は聞き慣れない単語を反芻した。

それから、拳銃で撃たれた体はどうなるの、訊ねた。

「タツヤ・スギウラよ、そこで貴様の役まわりとなる、貴様の任務は三つになるぞ、ひとつは現場のホテルにて兄の体の銃創の治癒、ふたつめ、悪霊と化した兄の魂に引導を渡し、守護霊と成す事、三つめ、兄の骸が腐らぬよう毎夜骸の治癒をせねばならぬ」

達也は彼女の言葉をくりかえした。

自分の役目、銃創の治癒、魂の引導被いと体の治癒……。

「わたしは、ノリト・カワカミの復讐の炎を鎮めんがため、彼が屍鬼として動けるあいだ、行動をともしよう、彼の願いを叶え、心を満たしてやるのだ、さすれば引導被いも楽になろう」

「うんわかった、ありがとう、アヌーク」

達也は正座してお辞儀をした。

「のり兄ちゃん……川上徳人をよろしくお願いします、あのひとは本能で生きてるところがあるから、だから、自分が死んでしまったことを、どうか……気づかれないように……お願いしますっ」

お辞儀をした達也の顔色は、アヌークには見えなかった。

「……………ふん、逐一^{せつがん}切願しおりよって、まっこと呆れた指導霊もいたものよ」

達也はお辞儀をつづけた。

アヌークはしびれを切らした。ええい、いつまで頭^{こぶ}を垂れる所存かつ、一喝した。

達也は勢いつけて頭を上げた。アヌークの手を握りしめた。

「なにをするか、タツヤ・スギウラよっ」

手をふり払おうとしたけれど、達也はよりいっそう強く握りしめてくる。自分の決心を、心の底から伝えるために。

「約束するよ、アヌーク、僕はアヌークの守護霊になって、きみをいつまでも守るから」

「……………」

「約束だ、男と男じゃないけど、男子と女子の約束だ」

愛嬌のある童顔に笑顔がひろがった。

「……………承知した」

ふて腐れたように、ぷい、と横をむいていった。

「のり兄ちゃんに会えるんだ、これからは、アヌークとのり兄ちゃんと僕と、三人で力あわせてがんばるんだ、のり兄ちゃんと仲良くなってくれと僕うれしいな、アヌーク」

アヌークは横をむいたまま、頬をすこしばかり朱に染めた。

「僕たちじゃ、だめかな？」

「……………ほんとに？ ほんとうに……………守ってくれる？ わたしを？」
達也がうなづく。

少年と少女は白い浜辺に座って、互いの瞳と瞳でなにかをたしかめあおうとした。カルマびととヒトの自由霊、使役する者とされる者の溝を払いのけて……………。

「やっぱりきみには女子っぽい言葉のほうが似合ってるな、うんっ、似合ってるっ」

「貴様っ、わっわたしは、父祖の戦列の一翼を担う戦士っ、戦士た

るもの、威厳を保ちつ……」

達也は、ただ、にっこりと微笑む。しどろもどろになる少女を眩しげに見つめてくる。

「威厳が、大事、だから……あのねニッポンの時代劇をね、ユーチユーブで観て、ブシドーに憧れたから……おかしかった、かな？」

少女は、やっぱりヘンかな？ 重ねて訊いてくる。

「そうかつ、職業意識ってやつなんだね、きみは、立派な戦士だつ」「立派？ で、でもつ、わたし決して強くは、ないんだよ……悪霊がね、やっぱりまだ怖いし」

くたつ、と肩を落としてしまう。

達也は、体をずらして少女との間合いをちよっぴり縮めた。

「僕もだ、だから力をあわせていっしょにやっつていこう、ほら胸張って侍言葉にもどしなよっ」

「う、うん……そ、それほどまでしてわたしを守りたいと申すなら

……守ることを赦す、よ？」

少女がちらり、気まぎれな瞳をむける。

少年の笑顔が輝いた。

少女の頬がさらに染まる。

海風がやんだ。空気が、この世界のなにかが死んだように止まってしまった。

「っ」

アヌークは気を引き締めるように、口を切り結んだ。戦士の貌をとりもどす。

「いくぞタツヤ・スギウラ、海風がやんでしまった、？ゲルマティア？が閉じる、これ以上長居すれば、わたしたち違う時代、違う土地へと時空を超え飛ばされちゃうんだよ……ああっ」

言葉言葉つ、がんばってつ、達也に励まされて、アヌークは、こくん、と何度もうなずいた。

「……あの、タツ、ヤ？ わたしのニッポン語……てにをは……は、まちがえてないよね？」

「うんっ、だいじょうぶ、とても立派な侍言葉だよっ」

ふたりの顔に、自然、微笑みがうかんだ。

互いを認めあった戦友の見せあう表情だった。

彼女は気をとりなおすように、咳払いをひとつして立ちあがった。

「大海に入るぞ、そのつぎの瞬間、貴様とわたしの魂は病院の貴様の肉体から飛びだす、そのまま、未来絵図で霊視したノリト・カワカミの死せるホテルへ空を跳びこえ一息に赴おもむこうぞっ」

「うん、わかったっ」

アヌークの気合いに応えようと、元気よく立ちあがる。

「まずは貴様の兄を殺めた下衆を屠ほぐってくれるわっ」

ゲルマティアの白い世界が、またたくうちに昏くなり始める。

達也は宙そらを見上げた。

宙が、渦を巻いて昏くなつてゆく。

白い砂浜と大海に一拳に影が舞い降りてくる。

「ほんとうにありがとう、僕にチャンスをくれて」キャップをなおす。決意を表すかのように。

「ふんっ」

達也の心意気に負けじと、不遜な微笑みをうかべた。

ふたりは、せーのっ、掛け声とともに、手を握りあいガスの渦巻く大海に身を投げあった。

33、八月十三日

大谷しづゑは神奈川の空を見上げた。

南から巨大な低気圧が昏い、禍々しい黒雲となつて眼前に迫つていた。

雷が鳴った。真夏の嵐が近づいてくる。夏の夕暮れ時、上空はまだ明るい。

「一刻の猶予もないわね」

つらそうにいった。

しづゑは夏の旅行者を装うにふさわしい軽装に身を整えていた。

動きやすいパンツスタイル、背にはデイパックを身につけている。中身は旅行者のもつようなものではなかったけれど。

在日米軍のまだ若い士官がヘリコプターのほうからしづゑにむかつて走り寄ってくる。

「オータニ少尉、出発いたしますっ」

ヘリのメインローターの立てる爆音に負けじと大声を上げた。ローターからの突風に飛ばされないよう、制帽を片手で押さえている。

「ミード少佐、カミュ大尉の機嫌はいかがかしらっ？」

「少尉っ？表の階級？では呼ばないでください、恥ずかしいかぎりでありますっ」

本気で照れた様子だ。

三十代の闊達そうな軍人の顔がすこしばかり大学生風に若々しくなる。

ミードの表の職業は在日米陸軍司令部、キャンプ座間配属のアメリカ陸軍少佐だった。未だにアルフォンス・カミュの眷族として適性検査をパスできなかったことに、未練を抱いている、すくなくともしづゑにはそう見えた。

彼は現在十字軍外敎院の？現地協力者？の身分だった。十字軍での年俸と待遇は米軍の基準で？ E 六？二等軍曹のクラスを与えら

れている。

ふたりは米軍の輸送ヘリ？UH 六〇A ブラックホーク？にむかって、キャンプ座間のヘリポートの上を歩いていった。

全長約十九メートル、間近で見ると巨大なヘリだ。

爆音が近づいてくる。大尉は非常に気分を損ねておいでですつ、ミードの声には緊張があつた。

無理もないわ、しづゑは思った。

東京の司令部からアルにテレビ電話で第一報を入れたときの彼の表情　大尉、アヌークは、彼女は、同志たちから見捨てられたのですよ　あのときの表情。

アルフォンス・カミュは、モニタのまえで沈黙していた。

アルはあの兄弟と親しくしながら、その危機を救えなかった。

彼はそんな己自身に、怒りを抱き続けてきた。

十字軍では、私情からヒトの紛争に介入すれば、教会法により？破門？されてしまう。この戒律がなければ、どうなるか？　父祖の戦列の側は世界中で謀略と殺戮のために、平然と力を使う。彼等は躊躇わない。

ローマ教会は、この事態を收拾し、世界の救済に心血を捧げてきた。配下の十字軍までもが　理由が何であるにせよ　社会へ介入を始めれば、救済どころか両軍のカルマびとの力で世界は破滅しかねない。

それを防ぐための、戒律だった。

がしかし、戒律を守りつづけた結果、今回の一連の事態はどうなつたのか？

川上徳人は八月八日にチンピラに殺され、破門者の屍鬼にされた。主たる破門者を封印すれば、少年の屍体は滅びる。アルのまえで生き生きとふるまってきた肉体が灰燼と化してしまう。

アルは、兄弟を見殺しにする以外、ほかに道が赦されなかった。

そう、破門されたくなければ。

それが、教会に忠誠を誓った奴隷カルマびとの一生だ。

彼は決断し、治外法権を侵してまで破門者を襲撃した。

兄弟の魂を浄霊するために。

教会法の下位に位置する十字軍法典違反？治外法権干犯？を敢えて侵した。教会の輓の下、破門されないぎりぎりのラインの抵抗だった。そして、しづゑからプジョーの車内で知らされたのだった。敵の、破門者たちの作戦の正体を。

「こうしましょう、ミードと呼び捨てにするから、あなたもしづゑと呼んでちょうだい、私たちはカンブルツペ（K・G）を結団したのだから、階級での呼びあいは混乱のもとよっ」

「少尉、いや失礼、シヅエは、相変わらず階級にも昇進にも無頓着ですなっ」

「いまの私はただの？無職のおばさん？ですよっ」

しづゑは、五十すぎとは思えない強い足取りでヘリ胴体の大型ドアからキャビンに乗りこんだ。ミードがつづく。

四人が座れるシートが後部と前部に対面して配置されてある。

アルフォンスは後部シートに座っていた。さわやかな色のサマージャケットを着ている。

しづゑは着族として、自分に血を与えてくれた？主人たるカルマびと？に敬礼した。

アルが、憤怒をおさえこんだ顔で答礼する。

しづゑはアルのとなりに着座した。堅い感触のシートにハーネスで体を固定する。発進準備の整ったUH 六〇Aは双発エンジンを轟かせて地上から舞いあがっていった。ミードは前部シートに着座して、コクピットの二名のパイロットに英語で命令をくださった。後部シートのアルトとしづゑを見た。

「パイロット二名はニツポン語を解しませんっ、会話の情報は秘匿できますっ」

流暢な日本語で叫んだ。キャビンの三人はそれぞれ十字軍の携帯端末を手にした。

「これよりブリーフィングをおこないますっ」

ミードは尊敬するカルマびとをまえにして、若干の緊張を強いられていた様子だ。自分にとっては初めての？破門者狩り？でありま
すっ、ミードはいった。

アルはミードの挨拶に黙ってうなずいた。

このへりの爆音、どうしても慣れないわ、しづゑは思った。

ブリーフィングは、大谷しづゑの東京での霊視結果の報告から始
まった。

しづゑの霊視力は日本戦区で図抜けたものがあつた。

アルはカルマびとでありながら、霊視力に関してはしづゑに遠く
及ばない。

彼女は、破門者アヌークの監視のためユリス中等部の？調理師？
となつた。そのあと破門者の存在を確認後、調理師を辞する形で東
京へ霊視のために赴いていたのだつた。

「以上霊視の結果、日本戦区に侵入した破門者は、アヌーク一
名のみですっ」

しづゑの大声に、ミードが問いかえした。では破門者の作戦、作
戦名・満月はやはり、投入戦力が序列第？列であるアヌークたつた
オペレーション・フォルモント
一名の陽動作戦だつたのか、と。

「そのとおりです、秘蹟認定局の収集した情報は完全な誤りでした
っ」

しづゑは激しい憤りを隠しながらいった。

あの少女は、アヌークは父祖の戦列、極東総軍にとって捨て石に
しかすぎなかつたのだから、そう思うと非情な軍隊組織に自身、身
をおいていることすら不愉快になつてくる。

認定局の得た情報、それは、序列第？列イレヌを筆頭に五個K
Gが首都東京の某所にある秘蹟認定局日本支局を強襲、とある機密
情報を奪取する、というものだつた。

日本政府部内の政・官トップクラスの協力者たちからの？強い要
請？によって、日本戦区に配置された外敎院隷下六個KG（NKGG
六）は東京に集結した。

在日米軍からも？強い要請？があつた。神奈川県一帯に展開する米軍関連施設護衛のため、有力なKGを同県に残してもらいたい、という内容だつた。

結果、神奈川県が赴任地のアルフォンスが残つたのだつた。

「すべては内赦院の無謀な作戦が発端となつたのですっ」

「敵ウラジオストク司令部の所在地の発見、および強襲作戦ですなっ」

「そうです、我が軍は、クヴィスリングを侮っていました、奴は内赦院の強襲を事前に察知し、満月作戦という陽動作戦情報を故意に認定局につかませたのです、結果、ウラジオストク強襲に参加する予定だつた、外赦院隷下KG（NKG）は東京で釘付け状態にされましたっ」

それにもかかわらず内赦院は日本戦区唯一の隷下一個KGすらもウラジオストク強襲に投入してしまつた。現在、日本の戦力は外赦院隷下KG（NKG）のみの編成となつているのが実情だつた。

「では、シツエ、破門者イレエはっ、それでは……」

「外赦院からの正式な戦況分析報告書です、端末で参照願いますっ」

三人が各自の携帯端末で、報告書に見入つた。

しづゑが報告をつづけた。

「KGイレエ又は、ウラジオストクで内赦院隷下一〇個KGと交戦、彼女らによつて三個KGが殲滅の憂き目に遭いました。イレエの奇襲を受けた模様です、内赦院は、彼女が？満月作戦？で東京方面に侵攻していると完全に信じこんでいました、認定局からの誤つた情報を元に、です。敵極東総軍最強のKGイレエの不在を狙つたつもりで、ウラジオストクを強襲、その結果の惨敗です。クヴィスリングと極東司令部は、KGイレエを殿軍として残し、安全にウラジオストクから脱出した模様ですっ」

過去四〇〇年間の戦闘記録によれば、アヌークとイレエの姉妹は常に戦線をとみにしてきた。これこそが認定局の情報の信憑性を決定づけてしまつた。

そう思わせるためだけにアヌークの価値があった。

すべてはクヴィスリングの罠だった。

「シツエ、イレーヌはっ？」

アルが初めて口を開いた。叫んだ。

「宿敵？の女の墓碑銘を。」

「彼女も麾下の眷族をほとんど失いながらも単身、脱出に成功した模様ですっ」

三人が押し黙る。

へりの爆音だけが鳴り響くなか、三人の携帯端末にテレビ電話回線がつながった。

相手は、秘蹟認定局調査官の立花だった。三人がイヤホンマイクを耳にかける。

「まず日本支局を代表して謝罪します、弁解の余地はありません。」

私としては我が局の汚名返上をかけ、破門者を紅葉ヶ丘神社で拘束する予定でした、聖域で捕らえる絶好のチャンスを逸した上、学院において川上徳人の身柄確保にも失敗しました、同女の凶悪性は明白であり」

「封印執行権のない認定局が破門者と接触するのは危険ではありませんか」

しづゑがいった。

「大谷少尉のいうとおりです、がしかし同女は先月、国内において杉浦達也に呪肉し」

「あれは哀しい交通事故も重なりましたよ、立花さん」

立花はしづゑを無視してアヌークの？蛮行？を述べつづけた

東京の町田市で元暴力団組員から拳銃を奪い射殺、さらに川上のみ。

タチバナツ、アルが声を上げ、釈明を遮った。

「タチバナ、破門者のノリト・カワカミに対する意図、認定局の最終見解は？」

「大尉、単純明快です、認定局の結論としては屍鬼の一種の生体実

験ではないかと、つまり何日間のあいだ川上徳人の屍鬼が生存できるか、同女が実験観察しているのではと推認し

「邪推ですわ、全くの邪推です」しづゑがいった。

「……大谷少尉、貴官はたしか、中等部食堂において、破門者の憑依霊洗脳攻撃を受けましたね、あの後遺症により、同女に対してなにがしかの温情をかけていらっしやるのでは？」

「それも邪推です、彼女から憑依霊攻撃は受けましたけれど、完璧に防御しました、それすらできないようでは、学院に潜入して彼女と川上徳人の監視役に立候補などしません、杉浦達也の事件以来、学院潜入は入念に下準備をしてきたのですから」

「操作されたフリをしたと、そう強弁なさるのは少尉の御自由です、まったくもって」

ええそうですとも、しづゑの言葉に立花が訊ねた。では少尉の「意見を拝聴したい、と。」

「破門者は、アヌークという少女は、女性として、川上徳人に好意を抱いているのでは」

「本気ですか、破門者とヒトの両者に愛が成立すると？ これを本ブ」

「本ブリーフィングの発言記録に明記して頂いて結構ですつ」
アルはキャビンの窓の外の夕陽を睨みつけていた。

ミードは、予想外のブリーフィングとなつていく展開をまえにして、ただ固唾を呑んで見守っている様子だった。

「立花さん、支局報告書によれば、彼女の神奈川における任務は使役霊の徴兵ですね」

「そのとおりですか？」

「彼女は任務中、川上徳人に対し？フサイ・ゼータ・イチ・オメガ守護霊及び悪霊各自引導率21？を実行していた旨、報告書に明記されてます、この引導被いをどう解釈しますか、私には悪霊と化した恋人の憎悪を必死に鎮めようとしている少女の孤独な姿が目につかんでくるのですが」

「……いまの発言は聞き捨てなりませんな、利敵行為と受けとられ

かねませんぞっ」

プサイゼータイーチオメガ。ギリシャ文字の符丁である。守護霊
「プサイ（ ）、悪霊「ゼータ（ ）、各自の引導率が21「オメ
ガ（ ）を意味する。

憑依霊及び、引導率1から20には残りの二一文字が割りふられ
ている。

それは兄弟同士の闘いだった。

21の守護霊と化した弟と21の悪霊と化した兄との間の闘い。

川上徳人は、ホテルで悪霊引導率21と成り果てていたのだった。
ゼータ・オメガ

「川上徳人の、あの拳銃を手に入れようとまでした殺人の衝動は、
八日以降急速に鎮静化しているのがなよりの証拠ではありません
か」

「断じてあり得ません、破門者どもは人類を呪肉、捨肉の材料とし
か思わぬ外道の集団ですっ」

大谷少尉と立花調査官の激論はつづいた。

両者とも持論を引っこめようとはしなかった。

やがて、アルフォンスの待っていた、外赦院日本司令部（NJH
Q）からの通達の時間がやってきた。

「外赦院日本司令部（NJHQ）より前線のカンブグルツペ・カミ
ユへ通達、回線つなげます」

女性オペレータにかわり、准将の声がノイズ混じりに聞こえてく
る。

「大尉、私だ、貴官の予想どおり、内赦院日本司令部（PJHQ）
がようやく治外法権の一次的放棄を通達してきた、いずれヴァチカ
ン本国の内赦院総司令部も追認すると、内々に連絡が入った、内赦
院のウラジオストクでの敗北、友軍としては痛ましいかぎりではあ
る、がしかしこれで連中は戦線の立てなおしに躍起だ、日本戦区に
KGを再配置する余裕を現状喪失していると見ていい」

「それでは、准将？」

イヤホンマイクを強く耳に押し当てる。

キャビンの三人が、そしてカンプグルッペ・カミュの一員である立花も聞き入った。

『そうだ、ついに連中の治外法権を無視できる、そのフリーパスを手に入れたぞ、KGカミュに正式に命じる、現時刻をもって破門者アヌークに対する監視任務を解除、同女を追撃し内赦院にかわり同女に対し封印刑を代執行せよ、立花調査官、応答したまえ』

『はい、准将閣下』

『秘蹟認定局並びに日本警察の捜査情報を開示せよ』

『ただいま携帯端末に情報を送信いたします』

アヌークたちの足取りに関する捜査の進捗状況が戦闘団各員に送信された。

アヌークと川上徳人の退却に手を貸した人物がいた。

『送信した写真の男が退却を幫助した者です、名前、根津充邦、五二歳、元暴力団幹部、現在の職業、タクシー運転手、我が認定局日本支局の占星官、四名による合同霊視の結果、根津の財布の千円紙幣複数枚にアヌークの憑依霊がわずかながら付着しているのを確認しました』

「つまり、憑依霊操作を受けているということでしょうか」

ミードが使役霊のパワーを目の当たりにしてか、興奮気味に訊ねた。

それはあり得ませんミード少佐、立花が冷静に答える。

『憑依操作を受けると、思考力が低下します、車輛の運転は自殺行為です。アヌーク、川上徳人、根津の三名は……恥ずかしいかぎりですが、根津の人脈で静岡県警のパトカーの先導を受けながら、関西方面へ逃亡した模様です。根津は、退却幫助開始時点では、タクシーで逃亡しているため、同運転手は操作されてはおりません、おそらくは一万円紙幣などの幻覚を見せられ、買収されたと思なすべきでしょう』

「そのあとの行方はわかるか」

アルが先をうながす。

立花は、根津の？ギソウコウサク？である替え玉作戦に關してもすでに情報を把握していた。

この件を全員に報告して、さらに認定局の新たな分析情報を自信ありげに語り出した。

『鳥取市内に根津運転手の実母が暮らしています、別ファイルで情報を送信します、認定局の最終的結論としては、鳥取市内を重点的な靈視の対象とします、千円紙幣の憑依靈の靈波動は極めて微弱となっており、現在追跡不可能ですが、もしもアヌークが鳥取市内で再び使役靈を行使すれば、確実に靈視により位置を特定できます、次善の策としては川上徳人が預金を引きだすためATMなどを利用すれば現在地の特定が可能となるでしょう』

「鳥取県警内部に？現地協力者？は確保できていますか」
しづゑが立花に聞いたのだした。

『残念ながら同県警の協力者は二年まえ戦死しました、後任候補確保に鋭意工作中です』
「どうもありがとう」

しづゑは立花の釈明を遮った。ほつと胸をなで下ろしていた。
ブリーフィングはさらに今後の作戦について詰めの情報が議題に上り終了しかけた。

「准将、お聞きしたいことがあります」
『なにかね、カミュ大尉』

「破門者、及びその使役下にあるノリト・カワカミ、タツヤ・スギウラ、ジョン・ドウ複数名の処遇はどうなるのでしょうか」

ジョン・ドウ 米国の法律用語で氏名不詳者をさす隠語だ。

この場合は身元不明の使役靈を意味する。

『 治外法権停止はあくまで一時的なものだ、破門者とすべての使役靈は、内赦院隷下K G (P・K・G) が日本に到着次第ただちに引き渡されることになる。特に川上少年の悪靈と杉浦少年の守護靈は引導率21を誇っている、？列級の破門者に価値はないが、このふたりは素晴らしい鹵獲品となるぞ、内赦院に引き渡して貸しを

作る絶好の機会だ、他に質問は大尉？』

カルマびとの戦争のために使役される運命にある魂たち。

名が残されているかいないかは関係はない。

死ねば、兵器だ。星へ還ることを拒んだがゆえ、死後も安息を赦されぬ魂たち。

「 以上です」

しづゑは、横にいる主の顔を見た。横顔からは、感情は読みとれなかった。

『 よろしい、現地協力者ミスター・ミード、応答せよ』

「 はい、准将閣下っ」

『 在日アメリカ軍の協力に心より謝意を表明する、これより外救院勧告第六三四号を発動する、同勧告に基づき、アルフォンス・カミユ大尉の指揮下に入りへりを追撃態勢に移行せよ』

「 了解しましたっ（サー・イエツサー）」

ついに破門者狩りだっ、そういつて若い士官は興奮を頂点にし始めた。

UH 六〇Aは機体の両脇に、魚雷のような形状の増槽を搭載していた。中に満載された燃料により航続距離は充分に確保されている。

ミードは、鳥取方面にいちばん近い米軍基地である山口県、岩国飛行場へむかうようパイロットに命令した。同基地を指揮下におく、キャンパトラー沖縄島の在日米海兵隊司令部の？現地協力者？と軍用通信で協議に入った。機密性の高いバーストモードの暗号通信を終えると、感極まった様子でアルを見た。

「カルマびとと使役霊、自由霊に関する情報が一般社会に万が一漏洩すれば、世界的パニックは必至です、自分は、ヒトへの呪肉、自殺による捨肉を厳禁する教皇十字軍のネットワークの下に加えて頂いたことを誇りに思いますっ」

自分は選ばれた存在、そう言外に匂わせていた。

「大尉、あなたの戦歴を存じております、大尉への尊敬の念を禁じ

得ませんっ」

アルがただうなずいて応じる。

「父祖の戦列を僭称する破門者どもはまさに我々人類の敵ですっ、ヒトに対して呪肉と捨肉をくりかえす破門者を自分は許せませんっ、大尉殿は四〇〇年間捨肉するような敗北を喫することはなく？ 祖体？ を保持されてきたそうですねっ、不老不死とはどんな感覚でしょうかっ？」

祖体　？ 大いなる眠り？ からの覚醒以来、保ってきたカルマびとのオリジナルの肉体。

ミードは、絶対的な超越者、不死の肉体に対する畏敬の念を両眼にみなぎらせていた。

「無性に自殺したくなる時があるっ」

怒鳴り声で答えた。

ミードはあきらかな狼狽の表情をうかべた。気まずげに沈黙してしまった。

キャビンの窓から見える空は、雲海が果てしなくつづいていた。すでに宵闇の世界だった。

UH 六〇A ブラックホークは愛知県上空に進入した。

巡航速度の時速二六〇キロ前後で岩国を目指して。

ミードが海兵隊司令部との暗号通信に忙殺され始めた。

しづゑは好機の到来とみた。資料の検索をするフリをしながら、アルの携帯端末に英文のメールを送った。

《大尉、まだです、まだ希望は残されています。あきらめないでください》

アルは端末の横一〇センチ程度の長方形の有機ELEDディスプレイを見た。

レスを打ちかえす。

《どういう意味だ？》

《敵の満月作戦の奪取目標とされた機密情報をご存じですか》

《タチバナから以前聞いた。八年まえの長江文明遺跡の戦闘で確保

した遺構から得た情報か》

《そうですね、長江文明揚子江中流域、玉蟾岩遺跡ぎよくせんがんの第四遺構群から出土した遺物？5です 奇妙な偶然ですが、それが彼らを救うかもしれません》

《どこでその情報を？》

《認定局日本支局の親しい同期の人物から得た情報です。眷族は眷族同士ギブ&テイクです》

《？5の正体は？ こんども粘土板か》

《はい？父祖の叡智えいち？の粘土板です。熱ルミネセンス法の年代測定で真贋は確認済みです。解読に成功したのは四年まえだそうですね》
世界各地の遺跡から時として出土する謎の遺物があった。

その遺物だけが、発見された遺跡よりも年代が遙かに古いのだ。その遺跡の主である古代人が、先人の遺物を大切に保管してきたことを意味していた。そのうちの何割かは血文字の魔法陣の儀式に関する知識を未知の言語で陰刻した粘土板だった。

教皇十字軍と父祖の戦列は四〇〇年にわたり、その存在を賭して謎の遺物？父祖の叡智？を追い求めつづけてきた。

叡智を発掘し、知識を集め、究極の謎を解くために。唯そのためにである。その謎とは。
？父祖とは、いったい何者なのか？？

たしかなことは、？大いなる眠り？から覚醒したカルマびとたちが断片的な記憶しかもち得ないなか、全員の脳裡に焼き付いていた単語、それが他ならぬ？父祖？の一語だった。

《叡智の内容は？》

《血文字魔法陣 福音ふくいんの儀》

しづゑは、不完全ではあるけれど、同期の人物から知り得た情報のすべてをアルにメールした。彼の表情がわずかに動く。

三十年以上アルフォンス・カミュの眷族として仕えてきた大谷しづゑだからこそ、わかる変化だった。

しづゑの主たるカルマびとはしばらく、画面を凝視していた。

ついにたまりかねた様子でしづゑをふりかえった。

彼女は力強くうなずきかえした。

カルマびとの男を、四〇〇年間の闘争に疲弊しきった己の主を勇
気づけるために。

34、鳥々軒のカップヌードル

鳥取駅北口の？風紋広場？にある時計塔が夜九時の鐘を鳴らし始めた。

川上徳人はむかい側にあるオブジェのまえの階段に腰掛けていた。鐘が童謡を奏でている。

徳人の右側にアヌークが寄り添っていた。ノートパソコンでネットにアクセス中だった。

「だめなのか」

「うむ、我が戦列のわたしの複数の海外口座すべてにあたってみた、アクセスが拒否されてしまうのだ」

さらに緊急時に利用できるはずの極東総軍の秘密資金口座にもアクセスしようとした。

アヌーク所有のIDとパスワードは現在使用不可能となっていた。ネット回線で極東総軍司令部と連絡をとろうとしたのに、なぜかできなくなってしまうている。

「よし、俺にまかせろ」

そつと立ちあがった。すこしよろけた。

アヌークが、膝にのせていたノートパソコンを放りだして徳人を支えてやる。

だいじょうぶだよ、徳人はいった。

アヌークが徳人を食い入るように見つめてくる。

「まださ、俺の口座に六十万ちよい残ってたんだ」

「ならぬぞ、タチバナという男が警察庁の要職を務めておる、ニッポン国内で銀行取引をおこなえば、治安機関に我等の位置が特定されてしまうこと必定であるぞ」

アヌークはブラウスの胸ポケットから名刺を出した。

根津の名刺だった。

それなんだ？ 徳人の問いにアヌークは、ネズミ殿が別れ際に渡

してくれた名刺なのだ、と答えた。彼女は、駅の北口で自分たちを降ろしてくれた時の根津の笑顔を思いおこした。もう一時間ほどまねのことになる。

神奈川から鳥取県まで、途中仮眠をとり渋滞と闘いようやくたどり着いたのだった。

なんかあったらよ、名刺の裏に書いてあるとこ、いってくれや、アテにならねえかも知んねえけど　　そういつてニカツとあの憎めない笑顔をうかべたのだった。

それから根津は徳人にむかっていった。

ニイちゃん、自分のカノジョは最期まで守ってやんな、守れねえ野郎はヤンキースファンじゃねえや、そういつた。

顔はいつもの笑顔ではなく、見る者を圧倒する真剣な表情だった。「あの根津のおっちゃん、別れ際にスゲえマジな顔して俺にいつたけどさ、なんか照れるよな」

徳人が力のない笑みをうかべた。

あのド迫力、マジで元ヤーさんだったんかな、そういつた。

少年の笑顔を、少女は見上げる　　無表情をとり繕って。

あと、時間はどれだけあるのか。

アヌークと徳人は名刺を見た。

表にタクシー会社の社名、その社員である根津充邦の名前が印刷されてある。裏側にボールペンの走り書きのメモがあった。

「なんだろうな？？鳥々軒？安西夏子、店の地図が書いてある」

トリトリケンツ、徳人がおもしろがった。

アヌークが不思議そうにすると、だつてさ、鳥取県にあるからトリトリケンはないだろ？　ダジャレにもほどがあんだろ、そういつて、力のない笑顔を見せた。

「トリトリケンとは飲食店の屋号であろうか」

「軒だから多分ラーメン屋かなんかだろうな……」

アヌークはノートパソコンと軍服のジャケットをキャリアケースにしまった。

「ノリト……あいすまぬ……」

「ん？　なんで謝るんだ？」

彼女は恥じ入っていた。

ドライブの途中、高速のサービスエリアのレストランや一般道に面したファミレスなどで大量の食事を摂っていた。魂を削りすぎたことにより、体力が著しく落ちていたのだ。快復のため栄養を摂ったのだけれど、徳人には秘密にしていた。

「わたしの食事のせいでノリトの所持金が　」
「気にすんなって」

財布を見た。ATMで下ろした五万円は六千円ほどに減っていた。アヌークのおなががまた、くう、と音を立てた。さすがの戦士も腹が減っちゃあ、イクサはできないってヤツだな、元気な証拠だぞ、徳人は、羞恥心で顔を染めた彼女を気遣った。

「俺なんかさ、最近、全然、食欲がないんだよ、病気じゃないかな？」

アヌークは徳人の手を握りしめてきた。

徳人はびっくりした様子で彼女を見おろした。

「なにをそんなに驚いておる」

「……雪でも降るんじゃないかな、つてさ、あのキョーボーな人食いとらみたいなおまえがさ」　徳人はいつてからささっと、手はつないだまま距離をすこしとった。

アヌークはそんな徳人をじっと見た。

どうした、アヌーク、ローキックしねーのかよ？　と徳人は不審げだ。

「……赦す」

「なんだよ、それ、調子狂うじゃんかよ」

照れながら彼女とのあいだをまた縮めてくる。

ふたりは風紋広場を出て、烏々軒のある商店街のほうへ歩きだした。

快晴の夜空に、月が出ていた。

きょうは、満月の夜だった。

ノリト……アヌークは、言葉を口にしかけた。どう切りだしたらいいのかわからなかった。夏祭りの終わった静かな鳥取市内をふたり手をつないでとぼとぼと歩いてゆく。

少年と少女は寄り添って、夜の街の弥生町界隈の喧騒を横目に、車影も人影もすくない本通りを北上した。

「ノリトよ、あした救助艇が海岸に到着する、ノリトを我が父祖の戦列に迎え入れたいのだ」

「おっ、へっへー、やったねっ」

屈託のない様子でよろこびを見せてくる。

「もしも、仮定の話であるぞ、ノリトの肉体が病気や寿命がきて、死を、迎えたら……」

「……？」

アヌークはいおうとした。

わたしの悪霊となってそばにいてほしい、と。いつもいっしょに、ともに十字軍と闘ってほしい、と。

でもそれは、負けだ。

またしつぽを巻いて逃げだすのか？ 悪霊が怖いから？ ？ 守護

霊及び悪霊ブサイ・ゼータ・イチ・オメガ各自引導率21？最強同士の闘い……ホテルで、ノリトが悪霊引導率21だと知ったとき、この引導被いを成功させれば、

過去の惨めな自分とサヨナラできる、そう思った。

でも上手くいかなかった、手に負えなかった。まだノリトは悪霊のまんまなんだもの……。考えまいとしても脳裡をよぎってしまう想いがあった。

……もしもノリトが真実を知ってしまったら？ とっくに殺されていたことを。

魂を、肉体を外法で穢されつづけてきたことを知ってしまったら？ ノリトおねがい。アヌークは、祈った。何に？ わからなかった、祈らずにはいられない。

どうか、おねがいだから、わたしのこと、きれいにならない

で。
どうしようもなく、唯、想いが募る、張り裂けんばかりになってしまふ。

少女は、顔を見られたくなくって、うつむくしかほかになかった。「おまえ残して死なねーし安心しろ、でもさ、おまえの着族ってヤツ……なりたかったなあ」

少女は、少年の手を握る力をより強くした。少年が驚いたように少女を見つめてくる。

彼はうれしそうに精一杯、握りかえしてくれた。その握りかえしてくれる手を失いたくないから。

少女は、だから、涙のこぼれそうになるのを、いつそう懸命にこらえねばならなかった。

その商店街では、二四時間営業のチェーン外食店やカラオケスナック、居酒屋がちらほらとまだ店の灯りをともしていた。

大半の商店はすでに営業時間をすぎてシャッターを閉めている。ふたりは走り書きの地図どおり、コインパーキングの角を曲がった。

曲がってすこし離れたところにその店はあった。

烏々軒はちいさな中華料理屋だった。

灯りがまだついていて。店から年老いた女性が出てきた。

老いてはいるけれどどっしりとした貫禄のある、女主人、そんな感じの、けれど温厚そうなどっかしら憎めない顔つきの老婆だった。彼女がふたりに気づいた。

「あら、ごめんなさいね、きょうはもうおしまいなんですよ
ほんとうにすまなそうだった。

アヌークが名刺をさしだす。

安西夏子は、名刺を受けとった。じつと見つめて、けれど無表情を装っている。アヌークは、夏子が驚愕のあまり、両眼の瞳孔の開くのを敏感に見てとった。

「……あら、おふたりさん、神奈川からきたのかしらね」

徳人がうなずいた。

私も神奈川の生まれなんですよ、夏子はそういつて磨りガラスの引き戸を押しやった。うれしそうにふたりを招き入れてくれた。

店はこぢんまりとしたものだった。

入って左手にカウンター席が四脚、右手に安手のテーブルクロスが敷かれた、四人掛けのテーブル席がふたつ。正面には黄色いカーテンと開けっ放しの開き戸に仕切られて、奥の部屋が見えた。六畳ほどの居間のようだ。どうやら住居を兼ねた店らしい。店内は清潔だった。壁に貼られたポスター、水着姿の昔のアイドルがビールジョッキを片手に微笑んでいる。なにか懐かしさを感じさせる、あたたかみのある中華料理屋だった。

「おふたりさん、晩ご飯はもうすませたのかしらねえ」

「お気遣いだけありがたく頂戴します」

アヌークがいった。途端に、くう、とまたおながが鳴った。

真っ赤っかになる。夏子は、にっこり笑って、すでに火を落とすてしまっている厨房に入った。大の大人ふたりも入れればいっぱいになる狭さだ。

「あのおばあちゃん、お願いしてもいいですか」

図々しい願いを恥じる様子でいった。

カノジヨに喰わしてやりたいもんがあるんです、しょうゆ味のインスタントラーメンありますか、そう訊ねた。

そんなんでいいのかい、夏子はというと、奥の部屋に入っていった。

「こんなならあるけどねえ」

日清のカップヌードルを二個もってきた。

「それだよ、おばあちゃんっ、あとさ、できれば干しエビ、もらえないかな」

「いいけどどうすんだい」

不思議そうにして、業務用のおおきな袋に入った干しエビを出してくれた。

「これから俺の勝負メシ、カノジヨにつくってやるんだ」

厨房に入ってお湯を沸かし始める。

「ははあ、エビで出汁だしとるんだね、そりゃ美味いかもしれないねえ」
味のイメージがすぐにピンときたらしい、楽しそうに目をほそめる。

アヌークはキャリーケースを大事そうにもったまま、カウンターのまえでたたずんでいた。

「二十分はかかるからテキトーに休んどけ、なっ」

「ノリトよ、体は……」

人を病人扱いすんなって、徳人は機嫌よさげにいった。

夏子は、ラーメンつくるんならさ、これ食べるといいよ、そういつて奥の居間に一度引っこんだ。レンジで温める音がした。数十秒経ってからラップをかけた皿をもってきてくれた。

「いまこれしかなくて、ごめんね」

すまなそうに皿を出した。餃子が三個あった。

「うちの自慢のひと口半餃子ハンギョ、食べてっておくれね」

「半魚ハンギョ、であるか？」

魚肉入りの点心であるか？ アヌークはいぶかしんだ。

夏子は楽しげに恰幅のいい体を揺すって笑った。

徳人も笑いながら、店の壁を見た。

「ちがうって、あそこのメニュー見るよ」壁に貼られたお品書きを指さした。

特製ひと口餃子（六個） ¥四五〇 特製ひと口ハンギョ（三個）
¥二五〇。

壁に貼られた紙に、ラーメンやチャーハンなど定番メニューに並んでサインペンで書かれてあった。

「うちのは味が濃いから、タレをつけずに食べておくれね」

「そうか、餃子の半人前を略したのであるか」

アヌークは早速割り箸を割ってひとつを口に運んだ。肉汁がじゅわっと口にひろがった。

「ナツコ殿、とても美味であるっ、かたじけない」

夏子はうれしそうに微笑んだ。

アヌークは、ノリトも食べるがよいぞ、そういつて自分の箸でひとつつまみあげた。落とさないように、もういっぽうの手で皿を下にそえて徳人の口に運んでやった。

どれどれ、と徳人はいつてぱくりとほおばる。

「ウメえっ」

おばあちゃんウメえよこの餃子っ、少年は肉汁にむせながら笑った。最後のイツコおまえが喰え、そういうと、少女はノリトが食せば良いぞ、といつて譲りあいになった。

夏子はそんなふたりを見て、お邪魔虫と思ったのだろう、カーテンの奥に引っこんで、静かに戸を閉めた。

アヌークは夏子のうしろ姿を見送った。ノリトよ、小声で厨房の中にいる彼にささやいた。結局彼女が餃子をぺろっとほおばった。よく味わって飲みこんだ。

「んぐ、美味であった……安西夏子なる女性、ネズミ殿の実の母親であるぞ」

「そうなのか、そういや、どっかニクめない笑顔が似てつかもな」

「ナツコ殿にはよい指導霊が憑いておるぞ、ご主人であるな」

「それって、根津のおっちゃんの親父さんってことか」

アヌークはうなずいた。そんなことわかるのか？ わたしはカルマびとよ、霊視力というものをもっておる、ふたりはカウンター越しに小声で話しあった。

「……父親殿、大変喜んでらっしゃるぞ」

「なんでかな」

「ネズミ殿が組織犯罪者から更生して、正業に就いたためであるな」

「そっか、会社の名刺渡したんだもん……」

アヌークは、申し訳ないとは思いつつ、カーテンと開き戸の奥を霊視で見た。

安西夏子は、床の間のちいさな仏壇に拜んでいた。

？ おとうちゃん、あのバカんたれが足洗ってくれていたよ……？

アヌークは耳を研ぎ澄まして聴いた。自由霊たる指導霊の声がすかに聞きとれた。使役霊ほどの強さではない。徳人には決して聞こえない、父親の声が聞こえた。

心から喜ぶ声だった。

夏子は位牌のまえに名刺をおいた。それからまた、手をあわせて拝んだ。両眼に涙をうかべていた。おとうちゃん、天国であのバカんたれ、どうか見守っておくれね……。夏子は何度も眼を開いては、位牌を見つめていた。

また両手をあわせて拝みはじめた。

これが、父、これが母、これが、子を想う者のまごころなのかな？アヌークは、歩んできた数世紀に渡る闘いの日々をふりかえった。自分が呪肉し、その呪肉体が老朽化すれば自死を遂げて捨肉した。

？使い、捨てた？幾人かの人々のことを考えた。

「おまえの親父やお袋って、いるんだろ、元気なのか？」

「……わからぬ、謎だ、記憶がないのだ、？大いなる眠り？以前の」

徳人はそれ以上訊ねようとはしなかった。

ただ黙々と、干しエビをお湯に入れていく。

アヌークは割り箸を皿の上においた。

朱色のカウンターにぼんやり、視線を落とす。

「ノリトよ、わたしは数百年の永きに渡り、捨肉と呪肉をくりかえしてきた、タツヤに呪肉したように、謎を解くためには、わずかな犠牲は必要であると、己に言い聞かせて、殺めてきたのだ、知りたいのだ、己が何者であるのかを、それを知らずして封印刑の辱めは」

？謎？　？父祖？の謎。

その言葉のもつ意味から類推すればおのずとカルマびとの誕生に関わりあることはまちがいない。その結論にたどり着かざるを得ない。

「ジュニク、しなくつてもさ、生きていけるわけにはいかないのか

な、カルマびとって」

「……もって数時間だ、それが限界よ、我等がヒトに呪肉せずその魂を現世の空間に触れさせることができるのは。それ以上は、ちょうどヒトが海で潜りつづければ窒息するように苦しみが訪れる、人事不省に陥り、気づくとヒトに呪肉していたことが一度あった」

「なんだよ、それ……つれえよ、つらすぎるじゃんかよ……」

「ノリト、我等は紛う方無き異形の獣である、救助艇に乗りこめばあともどりはできぬぞ」

「かまわないよ、おまえさえそばにいてくれたら、さ」

アヌークの華奢な指が閉じた。

カウンターの上で両手が固まった。

ちいさな店の中が、しんと静まりかえる。

干しエビの出汁の良い香りと、湯気が厨房から立ちこめていた。

「……あつ……よ、良い、良い香りであるなっ」

「……おっ、お、お、おうっ、そうともっ、俺の勝負メシだ、試合前にはかならず喰うんだっ」

「そういえば、何勝何敗なのかまだ聞いてはおらんなんだな」

徳人はふくれっ面になった。

ふん、可愛いやつよ、アヌークは、そういつて、くすつ、と寂しげに笑った。

「こんなに良い香りのする馳走を食しながら、万年ボロ負けエースとはな」

「……おまえのカラダのほうが、ずっといい匂い、させてんぞ」

アヌークにうしろをむいていった。

壁際の業務用ガステーブルにかけられた鍋を見たまま、そうつぶやいた。

業務用のガスの、ごう、と燃える音だけが、店の中で静かに音を立てていた。

「……いま、わたしを見るな、わたしの顔を見たら本気で使役霊憑けるぞ」

「俺にも霊視力があるんだ、霊視してやろうか」

徳人は意地の悪い復讐を果たしてやった。

ふたりはそうして互いの顔を見ないまま微動だにしなかった。静かな時間だけが過ぎていく。

出汁ができあがった。

徳人は二個のカップヌードルに干しエビの出汁のスープを注いだ。ふたりは、ただ押し黙っていた。

二分三〇秒後、徳人は大盛り用のラーメン丼に二個分の麺とスープをたっぷりよそった。

「麺はやっぱ堅めだぞ、二分三〇秒ぐらいがいいんだ、ほら、昔NHKの番組でやったのを先輩から教わったんだ、うちの部で受け継がれてきた」

徳人は丼をもってふりかえった。

アヌークは、徳人の唇にキスをした。

カウンターに乗りあげて、せいっぱい背のびをして、キスをした。

少女はすぐに唇を離れた。少年から、おおきな丼を奪いとった。

割り箸でカップヌードルの麺をすすり始めた。

「ひゅん（ふむ）、ひゅまひゅじょ（うまいぞ）、ひょうひえひえあひゅひよ（じょうできであるぞ）、みゃっこひよ（まつこと）、ひゅひゅひよ（びみだぞ）、ほひゅひゅひゅひゅ（おぬしにしては）、ひょうひえひゅひゅあひゅ（じょうできであるぞ）」

ヌードルを口から恥ずかしげにたらし、上手くすすることができずにいた。

そのまま少年を何度もおなじフレーズをくりかえして、少女は褒めつづけた。

少年の顔を直視することはできなかった。

音を立てないようにしながら、苦労してエビの出汁のゆたかな旨みのゆきわたった、ヌードルとスープを味わった。

熱いスープをすすったせい、火照ったせいなのか、かわいらし

い両頬を真っ赤に染めながら、アヌークは一生懸命、徳人のつくってくれた勝負メシを味わった。

35、親子の再会

夏子はふたりを引きとめてくれた。

両眼には、まだ泣いた痕がすこしばかり見てとれた。

ふたりは丁寧に礼をいった。先を急ぐ旅だからと、残念がる夏子に謝った。

「また、おいでね」

夏子は、最高の吉報をもたらしてくれた、見ず知らずの若いカッブルにお辞儀をした。

徳人はしきりに照れて、夏子に鳥取県までくるときの渋滞のすさまじさを話した。

アヌークはふと、商店街の角を曲がったところにあるコインパーキングのほうを見た。

自分の使役霊の霊波動を察知したのだ。

思念を集中した。

車数台の駐車できるちいさな駐車場の一角、一台の白いカローラが停まっていた。

設置されたナトリウム照明に照らされて、カローラによりかかって男が独り、セブンスターの紫煙をゆっくりと吐いている。

タバコの火を足でもみ消した。帰るつもりだろう、カローラのドアに手をかけた。

忘れていた、千円札の九人の憑依霊たち、まだ霊力を残してたんだ……根津に渡した札の憑依霊が、封印されず未だもどってきていなかったことを思いだした。

少女は、ごめんねみんな、憑依霊たちに謝って、ふと、妙案を思いついた。

「いたずらっ子っばく、くすくすっ、と笑う。

「ふふっ、ナツコ殿、しばし閉店するのを待たれるがよいつ、ふっふんっ」

「え？ どうしたのかねえ、お嬢ちゃん」

ほんのすこしばかり、千円札の憑依霊に、自分の魂を削って霊力の増援？を送ってやった。霊力の消えかかっていた憑依霊がまた動きだした。

奇妙なことがおこった。

ワンブロック離れたコインパーキングのほうから、人影が路上に飛びだしてきた。

人影は九枚のほんのりと暗緑色に光るなにかを追っている。

九枚のその紙切れのような物は、吹く風に逆らいながらひらひらと、烏々軒のほうへと宙を舞って近づいてきた。

「あら、嫌だねえ、酔っぱらいかね」

夏子が顔をしかめる。

「いくぞ、ノリトよ、再会の邪魔をしてはならぬ」

踵をかえして歩きだす。

徳人は呆気にとられていた。

やがて人影が満月の明かりに照らされて誰かがわかるようになってきた。

徳人は酔っぱらいの正体をたしかめると、夏子に別れの挨拶をした。

「おばあちゃん、元気でなっ」

うれしそうにいうと、自分のカノジヨを追いかけていった。

ふたりのうしろから、声が聞こえた。

待て、俺の諭吉っ、なんなんだっ、こんちきしょうめっ

男は手をのばして、光る？一万円札？をようやく一枚つかみとった。

ふたりは商店街の角を左に曲がった。

電信柱の陰から、そっと烏々軒のほうをふりかえる。

烏々軒のまえで酔っぱらいは、ただ、突っ立っていた。

なんとか？諭吉？一枚を握りしめて。

八枚の光る千円札が、宙に高く手の届かないところへ舞いあがっていった。

安西夏子は、いきなり酔っぱらいの頬をひっぱたいた。
ふたりはなにやら言い争いを始めた。

夏子は有無をいわさず、男を店の中に押しやった。
男が悪態をつきながら入っていく。

夏子は、烏々軒の紅白の暖簾を仕舞おうとした。
暖簾を落とした。

顔を両手で覆った。

男が慌てた様子で出てくる。

しばらく気まずげにしてから、夏子を抱きしめてやった。

男は暖簾を拾いあげた。

夏子の肩に腕をまわして、困り果てた様子で話しかけている。

親子は、静かに烏々軒の中に入っていった。

アヌークと徳人は、見届けると、歩き始めた。

かたく手を握りあいながら、ふたりは、人通りのなくなった商店街を歩いていった。

八枚の千円札はひらり、彼女の手にかえってきた。

「ネズミ殿は八万円を損してしまっただが、わたしは騙したことをすこしも悔やむ気にはなれぬ」

「うん、俺もだ、アヌークッ」

でもさ、と、ふと思いついたようにつぶける。

「十字軍の奴らって、やっぱおなじカルマびとなんだろ、霊視力つてのもってんだろ、俺らの居場所突きとめられたりしないかな」

「危険性はゼロではないぞ、派手に我が使役霊を使役すれば、その霊波動がたちどころに秘蹟認定局の占星官どもに知られてしまおうぞ」

「おいつ、ヤベえじゃん、さっき使ったじゃんかよっ」

「ふむ、案ずるな、我が参謀総局の事前情報によれば、日本戦区には現在？占星官が一名しか？駐留してないとのこと、我等がトットリ県にいることも知らぬはず、霊視で我等の居場所を突きとめるには、三、四人ほどの占星官の合同霊視でもしないかぎりほぼ不可

能よ
「

そっか、徳人は安心した様子でおおきくのびをした。

「でき、救助艇って奴はいつくるんだ」

「あした、といってももうすぐであるな、午前零時よ、場所は鳥取砂丘に面した海岸である」

36、砂丘のオアシス

「……スゲえ、マジ、ここ日本じゃねーみてーだ、サハラ砂漠だぞ」
徳人は、アヌークから手渡されたハンドライトでまえを照らした。
数十メートルの高さの砂丘が、いくつも起伏をつくっていた。

砂丘と砂丘のあいだの窪地、通称？すり鉢？の底には、ちいさな
澄んだ池ができていた。

さながら砂丘のオアシスだった。

夜の陸風が海にむかって吹いていた。

熱帯夜の砂漠を心地の良い風が吹きすぎてゆく。

風は砂丘に見事な芸術をつくっていった。大地の表面の砂が、さ
ざ波の立ったような美しい無数の文様を描いていた。風紋、と呼ば
れる自然の生みだすアートだった。

「きれいだな、見渡すかぎり、マスクメロンのシワ模様じゃんかよ
っ」

「ふむ、神々が、大地にその巨大な指で指紋を押し去ったかの如
くであるな」

ふたりは四十メートルの高さはあるだろう、広大な砂丘のなだら
かな斜面を登っていった。互いに手をつないで、美しい風紋にふた
りの足跡を残しながら。

砂丘を登り詰めると、海が見えた。

日本海だ。昏い水平線の彼方に、無数の光が見えた。

「すげえぴかぴか光ってっぞ、守護霊の光みたいだ」

徳人は感動した様子でいった。

「夏の時期、イカ釣り漁船の漁り火というやつであるな、救助艇は
漁船に偽装して海岸に接近したあと、接岸用のボートをだす予定で
ある」

「そっか、いよいよ日本とおさらばだな」

徳人は四方をハンドライトで照らした。

正面は漁り火の光り輝く幻想的な大海原だ。

周囲一帯、風紋の刻みこまれたうねるような砂丘の列なりしか見えなかった。

「救助艇がくるまで、すり鉢に身を潜めておいたほうがよいであろう」

右手にもったおおきなキャリーケースをひよいつと肩越しに乗つけた。徳人の手をつかんだまま、砂丘の坂をずぎざつ、と滑り降りていく。

「おいつアヌーク」

長身を折り曲げて、しりもちをついた。子供がおしりをソリに乗せて、雪の上を駆け落ちていくように、ふたりは手をつないですり鉢の底へと落ちていった。

そのすり鉢には直径数メートルくらいの丸いオアシスができていた。

徳人は大喜びで、頭を思いっきり透明な水の中に突っこんだ。ぷはっ、と水面から顔をだす。

アヌークも水浴びるよっ、そういつて水辺の砂地に寝転がった。

「まっこと、ノリトは稚気あふれた男であるな」

徳人はオアシスのほとりで、横になったまま、アヌークを見上げた。

「スゲえ、いいながめだ、超きれいだ」

「？」

アヌークは夜空を見た。

天空に素晴らしい満月が光をたたえていた。

「今宵は、満月の夜であったな」

うつくしいな、アヌークは同意してつぶやいた。

「ちがう、おまえだ、アヌークのほうはずっときれいだ」

アヌークは宙を見上げたまま、徳人のほうを見れなくなってしまった。

「……ノリトは、そうやっていつも、わたしの心を拐かそうとしよ

る、まっこと憎き奴よ」

「だってスゲえ可愛すぎるんだからしょうがないよ、たのむからさスカートなんとかしてくれ」

アヌークはなんのことかと思い、徳人の目線の先を見た。

軍服のグレイのタイトスカートがめくれあがっていた。

滑り降りたせいだ。瞬時に両手でスカートの裾の乱れをなおす。

「もう俺だめだ、死にそう、純白のフリルのついたのなんか、履きやがって、俺を悩殺する気かよ」徳人はカラダを大の字にして、愛おしそうにささやいた。

「……いうな、煩惱の、色魔めが」

アヌークはへたりこんでしまった。ボロ負けエースの分際で、すこしは勝って見せよ、情けないぞ　アヌークはいつてから徳人を見た。

徳人はぴくりとも、動かなかった。

「ノリトよ？」

彼は動かなかった。

ノリト？　ノリトよっ、アヌークは砂をまき散らして駆けよつた。

「ノリトっ」

抱きおこした。

徳人は眼を開けてはくれなかった。

「……ノリト、ノリッ……」

徳人は、がばっ、とアヌークの体を抱きよせた。

「捕まえたぞ」

へへ、と笑った。

アヌークは、腕のなかでその身を固くしたまま身じろぎひとつしなかった。

「……ワリい、アヌーク、ごめんな、なんだよ、そんな怒んなよ」怒んなってばっ、徳人は、少女をあやすように抱きしめてやった。それからふと、宙に浮かぶ満月のほうに目をやった。

「……なあ、ほらあのさつ、例の作戦はうまくいったのかよ」
どうにかして空気をかえたい、そんな感じで話をふってきた。

「……うむ、成功だぞ」
宙にういたような口調だった。

「よかったじゃんかよ、昇進できたりとかすんのかな」

「うむ、序列第？列に昇進が裁可されたぞ」

「スゲえじゃん、誰が決めるんだ」

「クヴィスリング閣下であらせられる」

「……？ 首吊リング輪くびつつか？」

アヌークは、不敬であるぞ、そういつて、徳人の胸をしおらしく
げんこつでたたいた。

「ノリトは我が父祖の戦列の一翼を担うのだぞ、わたしのそばで働
かせようぞ」

「もちろん、そのつもりだ、あのさ、おまえんところって学校とか、
あんのかな？」

「あるぞ、教導総局である」

「よし、決めた、俺そこで将来世界史の先生になるよ、俺、なれる
かな？」

「……」

「まえいつたら、世界史の先生になるのが俺の夢だつてさ、あんと
きおまえ、いきなり逃げだすんだからさ、なにかと思っちゃまった」

「……」

徳人の胸に、頬をよせる。

「いったっけ、ジョン・レノンの言葉、根本的な才能とは、自分に
なにかができると信じること、俺、この言葉知ったとき死ぬまでが
んばろうつて、絶対誓ったんだ」

「……」

徳人の胸のなかで抱かれ、ちいさな体を丸める。

「アヌークの将来の夢ってなんだ？」

少女は、肩で息をしていた。心臓の鼓動が保ちそうになかった。

この体は 分子や原子といったレベルでは タツヤ・スギウ
ラだった存在だ。

おまえにならば、わたしの祖体を捧げても構わぬ……アヌークは
そう思った。

叶わぬ夢だった。彼女は祖体を喪つてすでに久しかった。

？血文字魔法陣 屍鬼の儀？

ノリト・カワカミのこの亡骸は、あと何日保つてくれるだろ
うか？ かわりの肉体へとノリトの魂 悪霊 を乗り移らせる
ことなどできはしない。

たった一度きり、父祖の戦列が、ヒトを殺して体のよい、そう、
使い捨てる？死に兵？として、眷族のもてない第？列級がその代替
物として使い捨てる存在。そのための屍鬼、その儀式。

ウラジオストクへ無事撤退するまで、保つてくれるだろうか？

自分の栄えある序列第？列、昇進の序階式を見届けてくれるだろう
か？ 自分が夢にまで見てきた序階、昇進。

昇進が……夢？

「……わたしの夢、か」

「そう、アヌークの夢っ」

「ひとつだけあるぞ」

「なに、教えてくれよ」

「……ニッポンにきてからな、タツヤとともにひとりの悪霊を守護
霊にしようとして、懸命に引導被いをして参った」

「おう、あれか、相手のあんドーナツをゼロにしちまうやつな？、
で？」

「そやつ、引導率、タツヤとおなじく21、食欲のほうは、通常の
因縁霊の三倍はありよった」

「っだよ、そいつ、マジあり得ねー、アヌークの魂、スゲえ喰った
んだろ？」

「いかにも、これほど喰われたのは、四〇〇年間で初めての経験よ」
「そんでさ、その大喰い悪霊、どうなったんだ」

「タツヤや彼によって憑依霊から守護霊となった者たちの力で一時は、そやつ3の引導率まで落とせたのだ、守護霊たちは皆、そやつに引導を渡され、悪霊と化した、ゆえに浄霊してやったのだ、同時にそやつの霊力も相当減った、霊力をゼロにしては私の身のうちに逃げこむ、また招喚するためにはわたしの魂を三倍喰わせねばならぬ、それではわたしの魂が保たぬ」

「くそつ、もとのモクアミになっちまうのかよっ」

「まったくよ……呆れた……大うつけ者である……」

だから、そやつの霊力がゼロに近づくたび、わたしはそやつに霊力の増援を分け与えて……引導率は時が経てば快復しよる……イタチごっこよ……アヌークはつぶやくと、徳人の胸に疲れ切った自分のその身をあずけた。

「チキシヨウ、マジ許せねー、俺の大事な女になんてことしやがるんだよ」

「……いつわたしがおまえのものになったのだ？」

「いま、なった」

アヌークの体軀が縮こまる。

「どんなときでも、俺はおまえから離れないから、なにがあってもおまえを裏切らないから、最期までおまえだけを守るから」

「……」

「約束すつから、な？」

「……」

「いつしよに暮らそう、アヌーク」

アヌークは、ゆっくりと、胸のまえで固く閉じていた左手を、徳人に見せた。

「アヌーク？」

「ヒトの習慣よ、誓いの御印みしるしとやらを指にはめるのであろうっ？」

徳人は、ちよつと驚いた様子で間をおいた。それからこそごと、デニムのポケットを探った。杉浦達也のおメダイのリングを出した。

徳人は、小刻みに震えるアヌークの左のほっそりとした薬指に、

はめてやった。

ぶかぶかだった。

「だめだ、はは、映画みてえにはうまくキマらないもんだよな」

「ならば、であるならば……ノリトが決めるが良いぞ」

徳人の息を呑む音が間近に聞こえた。

「如何した？ わたしに恥をかかせる気か？」

「おまえは、その、長えこと生きてきたから男ともいろいろあったろうけどさ」

アヌークは首を左右にふった。恥ずかしさに、顔を上げられなかった。

「わたしは、まだ……男の体を、知らぬ」

「……アヌーク？」

男の体へのおびえと恥じらいとで震えるアヌークを、徳人はやさしく抱きしめなおした。

その腕のなかで、少年の問いかけに、少女はこくん、とうなずいた。

「俺もだ、女の子と、まだ……」

「ほんとにつ？」

驚きのあまり弾かれたように顔を上げた、瞬間。

徳人は、アヌークにキスをした。

少年と少女は、ふかく、あまく、唇をかさねあった。

おおきくうねる砂丘は、ふたりを護るかのように、ふたりをとり囲んでいた。

誰にも邪魔されることもなく、深いすり鉢の底、オアシスのほとり、ふたりはキスをした。

キスでその愛をたしかめあった。

37、うれし涙

二三時三十分。

救助まであとすこし。

アヌークは携帯で時刻をたしかめた。

それは永い、とても永いキスだった。

ふたりは唇を離れたあと、相手の瞳を見つめあった。

その瞳の奥に真実の色を見た。

オアシスのほとりで、アヌークは、徳人の胸の中で幸せな時をすごしていた。

いままで幾世紀のあいだをまたがって闘争に明け暮れてきた。

ようやくたどり着いた、幸せをかみしめていた。

アヌークは、ふと、クヴィスリング卿から東京方面で激戦となつたと告げられた戦局を思いだした。

イレーヌのことを。姉上は大戦おほいせんのなか、チバ方面から撤退なさつたはず……気がかりだった。妹たる己独り、愛する男を見いだしてしまった。

自分たちがウラジオストクに撤退して、姉上にどのような申し開きをすればいいのか、考えると途方に暮れてしまう。

イレーヌ姉様は、果たして自分たちふたりのことを祝福してくださるだろうか？

アヌークは、徳人の胸の中で、戦士の貌にもどらざるを得なかった。

「……ノリトよ……救助艇が早めに到着するやもしれぬ、海岸に出ようかと思うが」

「……」

「ノリトよ？」

徳人はゆっくりと、アヌークの肩に顎をのせてきた。

アヌークはちいさな頬をまた染めてしまった。

「ノリトよ、戯れはこれ以上は……ここでは困るぞ、ノリトは疲れ切っておるゆえ、ノリト」

徳人の上半身はそのままアヌークの膝の上に倒れこんできた。

「ノリトよっ」

しゃにむに抱きおこした。

「あ、れ？……チカラ、入らなく……なっ……」

「ノリトツ？ ダメツみんな、おねがいっ」

毎晩の、徳人の亡骸の治癒をいまずぐに始めねばならなかった。片手をオアシスの水面に突っ込む。

「まだ、まだいやっ、ノリトツ、まだ、わたしはあなたといっしょにっ」

快復途上の魂をえぐりとった。

天界に眠る達也たち三人の守護霊にありつたけ、与えた。

「みんなっ、ノリトを治してあげてっ」

激痛に全身を震わせた。白い額に、頬に汗がつかぶ。頭の、心臓の内側から肉切りナイフで切り裂かれるような痛みを耐えて、魂を引き裂いた。

アヌークの左手から真っ先に達也が 彼は必死に叫びながら招喚されてきた。

？

っ？

達也は叫んでいた。僕を結界にして、と。

「タ……ッ……ヤ……？」

激痛のせいだ、達也の言葉を理解するのが遅れた。

一発の銃声が砂丘に響き渡った。

「ッ」

アヌークは悲鳴さえ漏らせなかった。

銃弾はアヌークの右肩を貫通した。

砂丘の上から、男が、全身を守護霊で護りながら降りてくる。

秘蹟認定局員、立花調査官だった。

十字軍の制式拳銃、中型のオートマティック、SIGシグザウアーP

「二三二を構えていた。」

「破門者の女め、よくも我が国内で同胞を虐殺してくれたな、いまのは最初の犠牲者、？杉浦達也の分？だ」

？

っ

っ

っ

っーっーっ？

達也が叫ぶ。

僕はまだあきらめない、まだ闘うと。僕を結界にして守護霊跳躍で逃げて、？僕のダチ？と？女のひと？をきみの体の治癒に回して、のり兄ちゃんのお霊と憑依霊のみんなを機関銃の弾に憑依させて、のり兄ちゃんなら絶対使役に従ってくれるはずっお願い早くアヌークッ。

「……………タツ……………ヤ……………」

達也のいうとおり、激痛を押しつけ思念を集中しようとする。

うまくできない。這いずり、キャリーケースのビカールサブマシンガンに手をのばす。

「ノリ、ト……………」

徳人の腕を握りしめる。

亡骸を見捨てて逃げるわけには断じていかない。

「悪霊弾でないだけありがたく思うがいい、我が局は封印の儀の執行権をもっていないのだ」

立花は忌々しげにいうと、容赦なく二発目の三八〇ACP弾を発砲した。

アヌークの左肩を貫通した。

「……………」

タチバナ、か？ 救助まであとすこしだったものを 彼女は奥歯を食いしばった。身をよじって苦痛に耐える。この程度の痛み、魂を先ほど喰わせたときに比べれば、どれほどのものでもなかった。

オアシスの水に神経を集中する。使役命令暗唱、守護霊結界……………。

「これが、貴様に射殺された？チンピラの分？だっ。あのような人間の屑といえども、日本人を、貴様ら破門者には断じて殺させんぞ

っ

？

っ

っ？

達也がまた叫ぶ。僕を結界にそれだけでも早くアヌークッ。

「タツ……ヤ……タツ……ッ」

脳裡に？水？の像を結ばせる。純水、穢れなき生命の糧いのちのイメージを。彼女の左手の達也の魂が、腕、肩へと徐々に結界の蒼白の光をひろげ始める。

「つぎは残酷な貴様の人体実験に使われた？川上徳人の分？だっ」
発砲しようとした。

徳人が動いた。

アヌークに、激痛に体を丸めて耐え、使役命令を唱えきれずにいる少女に覆いかぶさる。

「俺、まもる、ぞ……」

いうことを聞かない体を、それでも、動かしてくる。

「川上徳人君、君には真実を知る権利がある、動けるようならそのキャリアケースの中を開けたまえ」

立花はつらそうに首をふった。

「ま、もる……ぞ……」

立花は用心深く距離をとりながら、キャリアケースに近づく。

彼の携帯端末に連絡が入る。

「タチバナ、オレだ、いまずぐ戦闘行為を中止しろっ」

「大尉、今回の我が認定局の満月作戦に関するミスリード、実に慚愧に堪えませんが、我が局が責任をもつて、屍鬼の儀を終わらせませう、この非道なる人体実験を一刻も早く」

「いまそちらにむかっています、認定局の単独行動は厳に慎んでくださいっ」

しづゑが叫ぶ。

立花はキャリアケースの鍵をSIGザウアーを撃って破壊した。
足でケースを蹴り開ける。

案の定だ、立花が吐き捨てるようにいう。

中に入っている小ぶりのアタツシエケースを引きだす。鍵をまた銃撃で破壊する。アタツシエケースを蹴り開けた。

その獰猛な暗赤色の光は、一瞬ですり鉢の底をくまなく照らし、砂地を赤一色に染めあげた。

なかに、魔法陣の描かれた画用紙があった。

中央に悪霊がつかんでいた。拳銃の形だった。灼熱の溶鉱炉に投げこまれたように燃えさかっている。拳銃のグリップをつかむ腕が像を結び始める。野球で鍛えた腕。それは、生前の川上徳人が欲した拳銃、記憶の虚像。

「川上徳人君、君はすでに死んでいるのです、君の魂が、この無残な悪霊ですっ」

画用紙は、火に炙られた紙さながらに中心から外へむかい燃え尽きようとしていた。もうすぐ血文字魔法陣、屍鬼の儀の陣形絵図の外周に近づきつつあった。

屍鬼の寿命の終わりである。

「この穢れた外法、私の手でっ」

画用紙を引きちぎろうと手をのばす。

立花は、異変に気づいた。

川上徳人の悪霊の引導率　最初は最凶の21を誇っていた。

目のまえの悪霊の引導率は、立花の霊視するまえで勝手に落下を始めた。

アヌークと達也の必死の引導被いで、21から、いまは9にまでは下がっていた。

それがさらにみるみるうちに下がってゆく。

8……………6……………1……………0……………。

眼を眩ませる光の本流が、すり鉢全体を覆った。

川上徳人の魂　アヌークの悪霊は一瞬のうちに、彼女の守護霊と化した。

「なにがおこったのだ……………」

銃口を破門者にむけたまま、川上徳人の魂を凝視する。

徳人の魂はアタツシエケースから、アヌークの左手に跳び乗った。
「……破門者、なにをした？ どんな術を使ったのだ？ 教えろっ」
「ノリトツ……ああ、タツヤツ、やくそく、やっどっ……まもれたよっ」

身もだえながら叫んだ。体に走る痛みを忘れ、アヌークは叫んだ。
ノリトツ、タツヤツ。

叫びつづけるアヌークに立花は激高した。

罵声を浴びせ、術の名称を教えろっ、強要した。

アヌークは無視して徳人の魂を、蒼白色に輝く守護霊を全身で感じた。

声が聞こえた。徳人と達也、ふたりの声。

兄弟の、ふたりしてよろこびあう声。彼女の目前で、ふたりは光り輝く？手？の形を成して堅く指を、掌を重ねあわせていた。

「ああ、ノリト、タツヤ……」

感激にみだされた。唯、ふたりの兄弟が愛おしかった。

引き裂くように、SIGザウアーが火を噴いた。

三発目はアヌークの右脛を貫いた。彼女が声を詰まらせる。それでも無様な悲鳴を上げはしない。戦士の矜持がそれを赦さない。

「教えろ、破門者っ」

「……なにも、してはおらぬっ……」

右脚に両手をあてがいながら、立花を睨みすえた。

「馬鹿をいえっどんな奥義を使ったっ？」

「愛しただけであるっ」

アヌークは身をよじり、声の出るかぎり叫んだ。

「私はノリトを全身全霊で愛した、愛してしまったのだ、他にまだ理由が入り用かっ」

「？破門者？の分際で人類を？」

オアシスのほんの先、数メートル先の人類の敵を凝視した。

立花は驚愕を押し殺した。もちまえの冷静さをすぐさまとりもどす。霊視で引導率を調べはじめ。

徳人、達也、ともに守護霊フサイ・オメガ引導率21、内赦院に引き渡せば高い貸しを作れる値だった。

「これは見事な、我が局の失態もわずかながら名誉挽回できるっ、よし破門者、貴様の使役霊、すべてを引き渡せっ？追放の儀？を執り行えっ」

アヌークは、意を決した。

この呪肉体　本来はタツヤのものだった存在　を捨てる覚悟を決めた。

自死を遂げて捨肉を……ノリトとタツヤの魂を連れて、三人、空高く飛翔しよう、どこだつていい、逃げられるところまで逃げよう、それ以外に。

少女はビカールサブマシンガンの銃口を自身の口に押し込んだ。立花のほうが進んだ。

P二二三二がまたしても火を噴く、マシンガンの銃身を破壊した。

少女は、破壊されたマシンガンを見つめ、手から離れた。

のろのろとした仕草で、徳人の亡骸を抱きよせる、胸元の、ふたりの魂の光といっしょに抱きしめた。

社務所のと時の様に。

「なんと憐れな兄弟だ、破門者に誘惑されたばかりに……おい女、教えてあげたまえ、いまのふたりの霊力で私の悪霊たちに勝てるかを」

ガスライターに火をつけ、悪霊七体を招喚した。

霊力の、物量があまりにちがいがすぎた。

アヌークは、オアシスのむこうの立花と彼の悪霊たちを絶望の眼まなこで見た。

それから霊力の弱ったふたりの兄弟の魂に、寂しく微笑んだ。

「……………ごめんねノリト、タツヤ、わたし……………弱くつて……………ごめんね……………」

ふたりの兄弟が？闘おう、アヌークツ？声をそろえていつてくる。

少女に残された願いは、ただひとつになっ

た。

「破門者、さあ兄弟を、使役霊たちを解放しろ、追放の儀を唱えろ」
少女は、鼻をすすり、嗚咽をこらえた。

兄弟の魂と、徳人の亡骸を一層強く抱きしめる。

「……………いわれ、なくても……………そうする……………」
少女は顔を上げた。

立花の銃口が、ぴたり、少女の頭に照準を合わせてくる。

「タチバナ調査官にお願い申しあげる、何卒、何卒、この哀れな魂
たちを、このふたりの兄弟の境遇、親にも逢えず、ふたり、互いを
想い懸命に生きた兄弟に憐れみを抱かれるならば」

「黙れ破門者っ、早く執り行えっ」

「何卒、慈しんで使役してください、十字軍団員の使役下に…
…お加えいただきますよう、何卒伏して、伏してっ、お願い申しあ
げるっ」

徳人の亡骸を胸にかき抱きながら、願ひ出た。

黙れっ、立花が怒鳴る。

憎むべき破門者をまえにSIGザウアーP二二三を握りなおす。

「破門者に指図されるいわれはない、ただちに私が封印する、さあ
唱えろっ」

アヌークはふらつきながら上半身をおこす。

両手をオアシスのむかいの立花にさしだした。

「嫌だっ、アヌークッ？徳人が叫ぶ、白い光を膨れあがらせながら。
アヌークッ、約束っ、あきらめないでっ？達也がゲルマティアの
約束を声を枯らして訴える。

「ノリト、タツヤ……………」

青ざめた貌に笑顔をつかべる。胸の前、徳人の亡骸の額にキスを
した。

別れの、覚悟のキスを。ふたりの魂と出逢えた。もう、封印
刑も怖ろしくはなかった。

アヌークは、唱えた。

我、汝等を天界より追放する

追放の儀　　天界より追放して、己の使役霊を他者に譲り渡す儀式。

両掌から突風が噴きだす。

悪霊が、憑依霊たちが、彼女の体軀からあふれだした。天界での安息を破られた使役霊たちは、？負け犬の主人？たるカルマびとを、使役者に見切りをつけて逃げだしていった。月明かりを圧倒して、すり鉢の底を照らしだす、つぎつぎと依り代を介さず、掌からの乱流に流されるまま、宙を舞いオアシスの水面の上を通っていく、立花調査官の体に封印されていく。水面にうつくしいくつももの光が乱反射した。

アルの悪霊だった守護霊が、達也のダチの守護霊が立花に封印されていく。風は収まらず、オアシスの水面が揺れる、砂塵が吹き荒れる。

彼女の両手に、徳人と達也だけが残った。

兄弟は手の形となり、少女の掌を握りしめていた。

「なにをしている、破門者、それだ、そのふたりに価値があるといっている」

「どうしたの、はやくいつてっ、追放するんだからっ」

追放の乱流をさらに強めた。

「なにをしている？　貴様無能とはいえ……追放の儀も満足にできないのかっ」

掌からの暴風をまえに、兄弟の光る指が、すこしずつ離れてゆく、徳人の、達也の指がアヌークの指を握りしめつづけた。

絶対、この手を離さない、兄弟の思念が伝わってくる。

「私を愚弄するつもりか破門者の女……兄弟を人質に取ったつも

りかつふざけた真似をっ」

「……………追放すると、いつてるのにつ、わたしは……………封印刑に……………」

「おまえを守るっ、おまえをフウインケイにはぜってえさせねえっ？
？思いだしてっ、男子と女子の約束っ？

兄弟が風に抗い、懸命に声を上げてくる。

「最期ぐらい……………いうこと聞いて……………」

少女は何度も首をふった。

「俺が結界とかいうのになつてやるからっ、おまえはアヌークの傷を治してやれっ？」

「わかつた、のり兄ちゃんっ、アヌーク、早く使役命令を出してっ
お願いっ？」

ふたりの指が、彼女の指にしがみつく、残った霊力の、最後の力を振り絞つて。

「……………だめっ」

ノリト、タツヤ、わたしといっしょにいたら、だめなのっ、いっしょに封印刑にされてしまうっ、心で叫ぶ、掌の兄弟に訴えかける。

「川上徳人、杉浦達也、君等は騙されているのです、直ちにその魔性の女から離れたまえっ」

「うるせえ立花っ、俺はぜってえアヌークを守ってみせるぞっ、ぜつてえだっ？」

「僕もだっ、あきらめるもんかっ？」

「……………悪霊弾を使うか」

立花は苦悩と疲労の色を押しつけ、残弾に七体の悪霊を憑けた。

「やめてっ」

砂にまみれた顔を上げる。

「小賢しい演技は止める、悪霊弾で霊力をゼロにして、兄弟を貴様の体に再封印させる」

『立花さん話を、どうか話を聞いてください、話を
しづゑが静かな口調で語りかける。』

「少尉、認定局としては、破門者が憐れな兄弟を誘惑し、人質にすべく、彼等に？魅了の儀？を仕掛けたと推認します、これは非常事態です、兄弟を破門者に再封印させ内赦院に引き渡し、三人全員に封印刑を与え、使役の契約を強制解呪させます、しかる後速やかに兄弟二名の魂のみに恩赦を与え刑から救出すればよいのです、兄弟の守護霊フサイ・オメガ引導率21を破門者の魅了の儀から、この女の魔の手から解放するには他に方法はありません」

『徳人くん、達也くん、アヌーク三人の魂を救う道がまだあるので、唯一残された』

「破門者の魂を救うっ？ 正気ですかっ、認定局は兄弟を救うべく教会法？ 霊魂救済の義務？ に基づき悪霊弾を発砲しますっ」

「ノリトツ、タツヤツ……」

おまえたちのいまの霊力では、すぐに負ける、わたしの体にもどる、封印刑の道連れにされてしまっつ、早くっ アヌークは残りの己の魂、あるだけを、引き裂けるすべてを、あくまで離れないふたりに与えようとした。

もう無理だった。彼女の魂が悲鳴を上げた。

少女の口から、血が吹きだす。砂の上に倒れ伏してしまう。苦痛のあまり、両手の砂を握りしめる。全身を小刻みに痙攣させながら。アヌークの力が尽き果て、砂地に荒れ狂っていた乱流は、やんだ。兄弟たちが少女の使役に逆らい、その傷をどうにかして癒そうと光をいっそう強めだす。

「冥界に堕ちる破門者、最期の悪あがきに日本人少年二名を人質にしたこと、死ぬほど後悔させてやる」

空いた手で十字を切った。

救出までのあいだ川上徳人、杉浦達也、破門者ではない、ヒトの兄弟すらにも封印刑を与えねばならないことに対して、祈りの言葉を捧げた。

「主よ、赦したまえ……」

濁いた唇でつぶやき、SIGザウアーの照準を兄弟たちに定める。

「そこまでだ」

アルの声がした。

立花がふりかえる。

アルフォンス・カミュ、大谷しづゑが守護霊跳躍して、オアシスのそばに降り立ったところだった。

砂塵がふわり、すり鉢の底で舞う。

しづゑは息を切らしていた。こんなに跳躍したのは、初めてです、そういつて、よろけながらも歩きます。

アヌークがしづゑを見る。瞳がおおきく見開かれた。

「シヅ工殿、そなたまで十字軍の……」

唇の周りのちいさな鮮血の泡が一筋こぼれ落ちる。

しづゑが哀しげにうなずく。オアシスの横を通ってアヌークに近づいていった。

そうだ、つたんだ、シヅ工殿、わたしの術にかかったふりをして……。わたしは、十字軍の掌のなかで泳がされていたんだ……。思いが駆け巡る、唇を歪めて自分自身を嘲った。

「大谷少尉近づくのは危険ですっ」

立花の警告を無視して、しづゑは傷ついたアヌークに寄り添った。彼女の体を抱きおこす。ハンカチで丁寧に彼女の貌を清めた。

アヌークは目を伏せ、ただ、されるがままになっていた。

「アヌーク、聞いて頂戴、ふたりの声を。どうか耳を傾けて聞いてあげて」

アヌークは憔悴しきった顔を上げた。しづゑの顔に瞳をむける。

しづゑの微笑みは宿敵の破門者にかける表情ではなかった。

アヌークはじっと、徳人と達也の声に耳を澄ませた。

? るぞ まもるから おれが、アヌーク ?

「……ノリト？」

? ぼくだって のりにいちゃんと いっしょに ?

「タツヤ？」

? おれら さんにな いっしょだ ずっといっしょだ そ

うだろ???

?うん アヌークと やくそく ぼくら ずっと
いっしょなんだよ??

「ふたりとも、わたしは、封印刑に……もういっしょにはいられないの……」

まもるよ、ずっといっしょだよ……ふたりの声はやまなかった。

オアシスに、すり鉢に、砂丘に、その声は、凜と響き渡り、こだましていった。

「ノリト、タツヤ……」

アヌークは、くずおれた。顔を両手で覆った。

「アヌーク、あなたは、徳人くんと達也くんにはんとうに愛されたのね」

アヌークはしづ彥を見た。なにかを伝えようとして口を動かした。

しづ彥はアヌークの言葉を待った。

アヌークは首を何度かふった。あつてはならぬ、とわずかにかすれ声をだした。

「シヅ工殿……わたしは、ヒトを……殺めてきて、ずっと……ずっといままで」

アヌークはしづ彥にすがりついた。

「ないのだ、わかっていたのだ、ヒトに好かれる資格など、わたしにはないっ」

「あるわ、あなたはこんなにもふたりから愛された、ふたりはあなたを見捨てなかった」

アヌークの美しい貌が悲嘆に歪んだ。しづ彥の肩を揺すぶった。

「我等は、数えきれぬほどのヒトを殺めて……なのにつ、ノリトよっ、タツヤッ」

しづ彥は勇気づけようとしてか、手をさしのべた。アヌークはしづ彥の手をふり払った。

「ノリトを騙したのだっ……屍鬼の儀を、穢れた外法でノリトを穢しながらっ」

徳人の亡骸に手をやる。もう自分の名を呼んではくれない、少年の唇にそつと、指をあてる。

「それでも徳人くんは、あなたになんと知っているの、達也くんは？」

アヌークは両手に輝くふたりの魂を見た。かたく、瞳を閉じた。彼女は唇を震わせた。

「……………なぜ？ わたしのこと、好きだ、って、いつてくれる……………」

「あなたにならあるわ、ふたりから愛される資格が、あなたはふたりを愛したのだから」

「わたしに……………そんな価値？」

しづゑは、うなずいた。

アヌークは、わななきながら両の掌の兄弟の光り輝く魂を、見つめた。

？ ツ？

好きだアヌークツ……………川上徳人のせいっぱいの声。

？ っ？

僕だつてアヌークのことが大好きだよ……………杉浦達也のあたたかい声。

アヌークはふたりの魂を抱きしめた。抱きしめずにいられなかった。

「……………はじめて……………なの、こんなに、好きって……………いつてもらったの……………」

しづゑがアヌークの肩にそつと、手をおいた。

「はじめて、なの……………みんな、わたしのこと知ると、ヒトはみんな化け物だつて、逃げていつちゃう、ずっと、何百年もずっと……………ずっと、そのくりかえしだつた……………」

しづゑはアヌークを抱きしめた。

「ずっと、イレーヌ姉様だけだつた、同志たちからもずっと、ずっと、笑われてきて……………」

アヌークはしづゑを見た。心の底から、うったえた。

「はじめて……こんなにヒトに、好きって……いつてもらえたの」
アヌークはしづゑにやさしく背中をさすられながら、涙を流した。
うれしい、アヌークはしづゑにいった。かすれ声で、うれしい、
つぶやいた。

「うれしいよ……」

アヌークは涙を流した。

涙はとめどもなく、うつくしい瞳からあふれつづけた。

彼女は泣き続けた。しづゑにやさしく、胸に抱きしめられながら。
しづゑは、自分よりも遥かに永い時を生き抜いてきた少女を、我
が子を愛おしむように抱きしめ、その涙を受けとめた。

アヌークはうれしかった。

いままで悪霊に、その指を焼かれるたびに、第？列の同志から嘲
笑われ、第？列から無視と憐憫の視線をむけられてきた。

数えきれぬくらい、独り、悔し涙を流してきた。

そのすべてが、いま洗い流されていった。

第？列への昇進への餓えも、いまはもうどうでもよかった。同志
たちの冷たい視線も嘲笑も、脳裡に焼き付いて離れなかった記憶の
数々も、いまの彼女には、もうなんの関係もなかった。

アヌークの心には、ただ徳人への愛と、達也への慈しみだけがあ
った。

それに満たされた。

破滅しか残されていない自分を見捨てない、それでも見捨てない
ふたりを、少女は愛した。

人を愛するよろこびと、愛する人からも愛されたことを知ったよ
ろこびだけがあった。

四〇〇年まえ破門された少女は、うれし涙を流した。

いま生まれて初めて、うれし涙を流した。

アルフォンスは、呆然として立ち尽くしている立花の手からSIGザウアーをとりあげた。

立花は硬直したまま、抵抗しようとはしなかった。ただ、しづゑとアヌークを見ていた。

十字軍の眷族と、憎むべき人類の敵である破門者との、ふたりの抱擁を。

泣きむせぶ子を抱き留めるように、大谷しづゑはアヌークの涙を受けとめていた。

あふれる涙をそっとぬぐってあげていた。

大尉……立花はひと言、なんとか口にした。

「あり得ません……」

立花は上官になにか、うわごとのようにさらに声を発しようとする。

アルフォンスは立花の肩に手をおいた。

立花は呆けたように、上官を見た。

アルの揺るぎのない鳶色の瞳を凝視した。立花はアルから眼を逸らした。

ふたたび、オアシスのほとりで抱きあう母子のようなふたりと輝くふたつの魂を見すえた。

ただ、立ちすくんで見つめつづけた。

38、人として選択すべき道

午前零時をすぎても救助艇はこなかった。

満身創痍のアヌークを、しづゑと兄弟が守護霊の力で治癒した。

アヌークはしづゑに丁寧^{ていねい}に礼をいった。腕の中の兄弟の光に頼ずりする。

ふたりの魂は途端にその輝きを青く、白く、うれしげに瞬かせた。そんな魂たちを哀しげに見つめた。時刻を確認してから海上を霊視した。

そういうことであつたか、アヌークはつぶやいた。

「どうやら、わたしは、同志から見捨てられたようである」

最期を悟った戦士の声音だった。見捨てられた少女は、オアシスに視線を落とした。

「シヅ工殿、わたしはここで封印刑であろうか？ であるなら」
掌のふたりの守護霊を見た。

「わたしから離れようとせめこのふたり、せめて浄霊の儀によりて、この星に還してやりたい」

しづゑはひとつの選択を彼女に告げなければならなかった。

「外教院からあなたの封印刑の執行命令は受けました、ふたりの魂も？ 鹵獲^{くわく}？ せよと……ですが、ひとつ残された道があります、そのまえにふたりをまずは一度、封印してはくれませんか」

アヌークが怪訝な表情になった。

しづゑの真意を信じて、ふたりを身のうちに封印した。

光がすり鉢から消えてゆく。

砂丘は、再び満月だけのほのかな灯りの舞い落ちる所となった。

「これから話すことを、ふたりに聞かれたくなかつたのです、あなた方の今回の作戦、オペラツイオン・フォルモント、奪取目標とされた機密情報の内容を知っていますか」

「儀式の名だけは……血文字魔法陣、福音^{ふくいん}の儀、そのような名称で

あつた」

「そうです、それが救いの、残された道です」

「大谷少尉、機密事項ですっ」

座りこんでいた立花が起きあがった。

「立花さん、成功すればふたりの兄弟が甦るのですよ」

「シヅエ殿っ、福音の儀とは一体っ？」

眼前のしづゑにいつのつた。

「ヒトを現世に復活させる儀式です。使役霊とその肉体が残っていないことが条件です」

「……………そのような……………？父祖の叡智？に……………そのような儀式が……………」

「アヌーク、聞いて頂戴、復活するためには、強大な霊力が必要なんです、ヒトの魂と肉体とを結びつけるために、カルマびとひとりの魂が、それだけの巨大な霊力が必要となります」

アヌークは、しづゑの説明にひたすら聞き入っていた。

「一度の儀式で、徳人くん、達也くん、ふたりを甦らせることができるのか、前例はありません、この儀式は四年まえに解読されて、まだ成功例は一度もないのです、軍のシミュレーションがたしかならば、成功すれば、あなたは兄弟の精神世界の住人となります。あなたの意識が現世において再びながしかの意志を發揮できる可能性はまったくの未知数なのです、失敗のおそれもあります」

「……………わたしの魂をもってして、ふたりを現世に復活させると……………」

しづゑはうなずいた。

「カミュ大尉、大尉はこれを看過なさるおつもりかっ、大谷少尉っ、失敗すればふたりの兄弟の魂もあの忌まわしい？ゲルマティア？世界とやらから生還できなくなることをお忘れかっ」

アルはオアシスの水面から立花に目を転じた。

その瞳は水面とおなじように静かだった。

「タチバナ、裏の顔のお前としては許されないことだな、だが、表

の顔はどうなんだ、まだ肉体の残っているニッポン人少年ふたりの命が助かるかもしれない、今が、今しかもうないんだ」

「いまを逃せばふたりの魂は内赦院の？ 鹵獲品？ として私たちの戦争の道具になる運命です」

「それは、しかし……」

アルとしづゑからの言葉に、立花の両眼が泳いだ。

「ニッポン警察官としての、お前に聞く、ニッポン人二名の生命を救うのか、それとも？ 小物の破門者？ とその使役霊を内赦院に引き渡し、奴らに恩を売りつけて、それで終わるのか」

「立花さん、魔法陣の陣形絵図は、認定局員であるあなたの携帯端末から、カミュ大尉のIDとパスワードでアクセスしなければ、前線での閲覧ができません」

しづゑは強制するでもなく、温情に訴えるふうでもなくいった。

「しかしながら少尉、失敗したとき我等のカンプレックスはどう責任をとれば……」

「立花さん、成功してもおそらく降格処分、失敗すれば査問委員間に召喚、いずれにせよ認定局のあなたには、関係のないことですよ、すべては外赦院隷下の私たちが責めを負います」

「オレは？ 小物の破門者？ の封印になんぞ、なんの興味もないんでね、あとはお前次第だ、タチバナ、上官として命令はしない」

「大尉……」

「タチバナ、お前がオレの眷族ではなく、ヒトとして、ヒトの選択すべき道を選べ」

立花は息を呑んだ。しづゑを見た。最後に忌々しげにアヌークを見た。

アヌークは、唯、立花を恨む様子もなく、穏やかな瞳をむけてきた。

「っ、これは……まったくもってっ」

立花は天を仰いだ。

全員のイヤホンに通信が入った。

『ミードより、前線のKGカミュへ通達、外赦院日本司令部（NJHQ）より最新情報あり、内赦院隷下一個KGが急遽東アジア軍管区司令部より岩国飛行場へ到着した模様、前線状況の報告を請う』
全員の視線が立花に集中した。

立花は皆を見た。もう一度苦り切った顔で満月を見上げた。

『KGカミュへ、内赦院は封印刑を執行された破門者アヌークの魂、及びその使役霊の可及的速やかな引き渡しを要求、外赦院日本司令部（NJHQ）はこれに正式に同意した模様……応答を請う』

立花は弱り切った視線をアルに投げた。

アルはただ、うなずいた。

立花は、スーツの懐から携帯端末を出した。アルに放った。

アルは受けとると、即座にミードにむかって応答した。

『前線のKGカミュより、ミードへ、破門者の封印に失敗、現在、前線は混乱状態にあり、破門者は自死を遂げ、捨肉をおこなった、魂は憑依霊の形態を為し、西方、シマネ県方面へ飛翔、撤退した模様。内赦院隷下KG（PKG）に対して速やかに追撃するよう、本情報を通達されたし』

ミードは無線の奥で絶句した様子だった。

一呼吸、間をおいてから、了解しました、ただちに司令部へ通達します、なんとかそれだけいって通信は切れた。

「タチバナ調査官殿、厚く御礼申しあげる」

アヌークは深々と頭を下げた。

立花は首をふった。

なにかをいいかけて、口を閉ざす。オアシスのほとりに座りこんだ。

アル、しづゑ、立花、このなかでいちばん魔法陣の呪文詠唱に秀でているのはしづゑだった。

彼女は、立花から受けとった端末を早速操作し始めた。しづゑはアルに眼で促した。

アルは、あらぬ方をむきながら、暗記しているIDとパスワード

を口にした。

しづゑがアクセスした。

血文字魔法陣、福音の儀のすべての情報が立花の認定局専用端末のディスプレイに開示された。魔法陣陣形絵図、詠唱する呪文が。

しづゑはデイパックの中身を開けて、採血に必要な道具を出した。オアシスのそばに血文字の魔法陣を描いてゆく。

砂地の上に直径三メートルくらいの円形の複雑な絵図ができあがった。

アルが徳人の亡骸をそつと抱きあげる。魔法陣の中央に安置した。アヌークが魔法陣の中に入っていった。

すぐかたわらに横たわる、徳人の亡骸を愛おしそうに見た。

それから徳人、達也、ふたりを胸のまえに招喚した。ふたりのあたたかな光を、愛する我が子を抱きしめる母親のように、胸にしっかりとかき抱く。ふたりが楽しげに輝いた。

徳人、達也、ふたりの魂と肉体、アヌークの魂　福音の儀に必要な供物はすべてそろった。

アヌークは三人を見渡した。最敬礼した。

「ご温情かたじけない、終生を賭してノリト・カワカミ、タツヤ・スギウラ、ふたりの兄弟の魂を護っていくことを、アヌークは父祖の名にかけてここに誓う」

大谷しづゑは答礼した。

アルは形ばかり腕を上げた。

立花は砂地に座りこんだままオアシスの水面を睨みつけていた。

「アヌーク、あなたが、もしもほんとうに留学生のマリアだったら、もしも達也くんの不幸な事故さえおこらなければ……だめね、無意味な仮定だわ」

「オータニ少尉殿、わたしはいま、最高に幸せである、我等三人の邂逅は必然だったのだ」

アヌークは瞳を閉じた。満ち足りた笑顔をうかべた。

しづゑは、呪文の詠唱を厳かに始めた。

39、月の砂漠

アヌークは、瞳を開けた。
意識が遅れてもどつてきた。

ここは？ 地面を見た。白い砂地、大空を見上げた。白い宙。
目のまえの白い霧が徐々に晴れていった。
うつくしい水面みなもが現れた。

それはちいさな、人ひとりの水浴びがやっとというくらいのちいさなオアシスだった。白い砂地にちいさなオアシス、それはとてもうつくしく澄みわたった静水せいすいをたたえていた。砂漠に現れ、旅人を惑わす逃げ水の類か、そんな疑念をおこさせるような、はかなげな水面だった。

霧が晴れ渡り、周りが見えてくる。

オアシスのそばの砂地にふたりがいた。

アヌークは駆け寄った。ふたりも気づいた。

「アヌークッ」

徳人が、達也が、同時に叫んだ。

三人はオアシスのすぐそばで互いに抱きしめあった。なにも言葉は交わさなかった。

ただ、相手のぬくもりを、体で、肌で感じとりたかった。

三人は、互いの肩に腕をまわしあった。円陣を組んで、三人は、互いにキスのできるくらいに頬をよせあった。自然と顔がほころぶ。よろこびに満たされた笑顔。

「なあここに、どこなんだ」

徳人が聞いた。

「ゲルマティアであるぞ」

徳人は彼女を不思議そうに見つめた。

ここが、ゲルマティアか？ オウムかえしにつぶやく。

「なあ、俺たちこれからどうなるんだ？」

「ふむ、オアシスに飛びこみ、現世にもどるのであるな」

「なに、もどれんのかよっ」

「三人とも？」

達也が聞いた。

「うむ、三人とも、無事もとの体にもどれるぞ」

アヌークは、嘘のばれないように晴れやかにいった。

やったなタツツ、のり兄ちゃんっ、兄弟ははしゃぎまくった。

アヌークは、ほほえましく思った。

ふと、イレーヌのことを思いだした。

姉様は無事ウラジオストクに帰還なされたのだろうか？

姉上……お別れの言葉をいいたかった、最後にもう一度、いつも

のようにやさしく叱ってほしかった、うつけ者っ、と。

我にかえると、徳人が自分を見ていた。

「……アヌーク、俺ら兄弟のせいで……おまえに、迷惑かけちまっ

たな……」

「なにをゆうのか、このおおうつけ者めがっ」

「僕が無理なお願いをするから、アヌークは大変なことになっちゃ

ったんだ」

達也が徳人にいった。

達也は、自身のゲルマティアでの体験を、未来絵図に映った徳人

の未来、アヌークとの約束を徳人に話した。

なんだよ、そういうことだったのかよ、徳人は、すべては自

分がバカだったせいだ、そういつて悔し涙を一筋、流し始めてしま

った。

アヌークは至近距離から、思いつきりローキックをお見舞いして

やった。

「っ痛えっ、アヌーク、てめえっ」

「このおおたわけ者め、我が唯一の伴侶となりし者が、なにを涙す

ることがあるかっ？」

「伴侶っ、いいなあ、のり兄ちゃんっ」

達也が口を尖らせた。

「ああ、なんつったんだ？ いま？」

アヌークは、ありつたけの心をこめてすぐ間近にある徳人の瞳をのぞきこんだ。

徳人もじつと、アヌークのまごころを受けとめるかのように、あつい眼差しでかえしてくる。

「ノリトよ、我が生涯、唯一の伴侶となることを赦すっ」

頬を朱に染め、瞳を潤ませながら、初めて愛した男にそう宣言した。

「アヌーク……」

アヌークは、こくん、とうなずいた。

達也はうらやましげに、うれしげにふたりを見比べてくる。

「……………半餃子？」

「なんだ、ノリトよ、我が伴侶では不満でもあるのか？」

徳人は深刻そうな顔になった。

ちよつと待てよ俺、いつつもアヌークは、俺にコムズカシイ言葉をいってきたよな、ぶつぶつとつぶやいた。

アヌークと達也は不安げに徳人を見た。

がんばつてのり兄ちゃん……………達也が祈りをこめる。

アヌークも、祈るような瞳を徳人に送る。

徳人がさらにつぶやいた。ハンギョか……………俺がアヌークのハンギ

ョ？ ひよつとしてようやくおまえ、俺にあわせてわかりやすい言葉使つてくれたのか？

いい漢バカはいつも真剣なものだ。

「ノリトよ？」

たまらず、ひとりつぶやくド阿呆に助け船をだそうとして。

「……………わかった、アヌーク、そうか、美味しかったんだな？ 俺のキスの味、そんなに。そうか半餃子アレくらい美味かったってことか？」

少女は満面に羞恥の色をうかべた。

少年は眼で、語りかけた。慈しみをこめて初恋の、生まれて初め

て心から愛した少女に。

「この、恥ずかしげもなく、よくもぬけぬけとっ、しっ、使役靈憑けるぞーっ」

心の底からわき出てくる、人を愛するという気持ちに満たされていた。照れ隠しのローキックを何回かやさしく、けれどあくまで、アヌーク基準で徳人のスネに見舞ってあげた。

「痛えアヌーク、てめえっ」

痛みが叫びながらも、徳人の顔にも満ち足りたなにかがあった。

三人は、アヌークのキックに翻弄されながら、円陣を組んだままぐるぐると踊るようにまわった。のり兄ちゃん、負けんなっ、達也がいった。帰ったら勝負メシ食べてアヌークともうひと勝負だっ、達也の声援に、徳人は、勝負メシはアヌークにつくってやったぞっ、そっいいながらキックから逃げまわる。

アヌークは蹴るのをやめた。

彼女が立ち止まり、輪も止まった。

「どうしたんだよ」

「……あのヌードル、美味であったな……」

「食べたんだ、のり兄ちゃんの干しエビ出汁のカップヌードルッ」

「うむ、ノリトのつくりしカップヌードル、まっこと美味であった」

「よーしっ、帰ったらいつでもおまえにつくってやつぞっ」

三人は、しばらくはしゃぎあった。

それから、現世に帰ったら具体的にどうするのかを討論しあった。砂地に座りこんで、真剣に語りあった。

達也があれこれとアヌークに提案する。ふむ、とアヌークが相づちを打つ。徳人はそんなふたりを頼もしげに見つめていた。

結論が出た。

十字軍がアヌークを封印しようとしてきたら、徳人と達也はアヌークの人質になったふりをする。よし、こいつでいくぞっ、徳人がそういつて気合いを入れる。

ふたりの兄弟は、福音の儀についてしづゑが話しているあいだ、

アヌークに封印されていた。これからどうなるかを知らされてはいなかった。それでも、これからの三人の未来を熱く語る兄弟を、アヌークは見つめていた。

ふたりの姿を記憶にしつかりと残すために。

やがて、閉じる刻はやつてきた。

白一色だった宙が、見る間に昏くなり始める。白い太陽も消え始める。白い砂漠に暗闇が落ちてくる。

三人はじゃれあうのをやめた。

「……我が愛しき伴侶ノリトよ、我が愛しき義弟タツヤよ、現世にもどろろぞぞ」

三人は互いの顔を見た。

「タツヤよ、まず貴様からオアシスへ入るがよい」

「うんっ」

達也はちいさなオアシスの水辺に手をおいた。

「ねえ、水面に月がうかんでるよっ」

そうつと、水面をすくいあげる。静水にさざ波が立った。水に映った満月もそれにあわせてその月光を波立たせた。

「なんだかすごいね、月の砂漠に手が届きそうだよっ」

「つつか、タツ、こっちのほうが月の砂漠みてえだぞ」

真つ暗になった宙を見上げていった。

「たしかにそうだね」

水面から顔を上げてゲルマティアの宙と砂漠とを見た。

三人の周りにひろがる、地平線の彼方までつづく砂漠を、ふたりの兄弟はながめやった。

「むこうで待ってる、すぐにきてね」

達也はアヌークを見つめた。決意を固めた様子で。

「タツヤよ」

アヌークは達也の頭のヤンキースのキャップをずらした。掌を達也の額に押し当てた。ふっ、と吐息をついた。

「強く、強く生きるがよい」

そのまじないである、ゲルマティアでのまじないはよく効くのだぞ、そういつて押し当てた。

「……ありがとう……先にいくねっ」

徳人が達也の頭をくしゃつとなでた。

アヌークは頬をなでてやった。

達也は途端に、顔を赤らめた。ふたりを見て、いつてきますっ、元気に叫んで水に飛びこんだ。満月は残像をわずかに残しながら消えていった。

達也も水中に、ふっ、と消えた。

「なんだこれ、底なし沼かよ？」

「案ずることはない、ノリトよ」

徳人の額にも掌を当て、吐息をつく。

また、おまじないであるぞ、そういつた。

これでもうだいたいじょうぶだ、憑依霊が、ふたりから忌まわしい記憶をすべてぬぐい去ってくれるから。

「俺のは、なんのまじないだ？」

「うつけが治りますように、とな」

「バカにつけるクスリなんか、ないよ……」

ふたりは互いの腰に腕をまわした。

アヌークが徳人の腕のなかで、いつた。

「帰ったら、懐中時計を……いつしよに、そうだ、三人で手分けして、探さねばなるまいな」

「あのおまえの大切な首からさげていた宝もの、イレーヌ姉さんからもらった……」

「うむ、見つけたら貴様に与えるゆえ、大切にすることが良いぞ」

「いいのか、おまえの宝もの」

腕のぬくもりの中、瞳を閉じて、こくん、うなづく。

これが徳人の腕、胸、心臓の音。徳人のぬくもりを脳裡に焼き付けるために、少女は貌をこすりつける。彼の胸に何度も、ひたすら。「アヌーク……」

「うん？」

「キスしてえ」

「……このサカリのついたエロガツパめがあっ」徳人の体をしゃにむに抱えあげる。

「やめろっ、俺っ、泳げねーんだ実はあーっ」

「このうつけが、ただ現世に、その魂が落ちていくまでのことよっ」
「やめっ、アヌーク、そうだいっしょに入ろうぜっ、徳人が叫んだ。
「黙れ、とつとといくがよいわっ」

頭からオアシスに放りこもうとした。

「なあ？ ウラジオストクに売ってつかない？ カップヌードルツ」
手足をばたつかせる徳人と、眼が一瞬あつた。一瞬だけ見つめあつた。

なあ、アヌークツ？ 徳人は、ほがらかに笑つて。

さよなら（チユース） アヌークはドイツ語で、ひと
言いつた。

徳人をオアシスのなかへと投げこんだ。

少年の体は、一瞬のうちに透きとおつた水のなかへ消えていつた。
ちいさなオアシスのほとりに、少女が独り残された。

すとな、と、腰から落ちるように座りこむ。砂地に両手をついて
水面を見つめる。

なるほど、そういうことだったんだ、静水を見つめながら、つぶ
やいた。

「ゲルマティアの閉じるまえに、わたしもこのオアシスに飛びこめ
ば、現世に還れるんだ」

この儀式の成功してこなかった理由がいまならわかる。

「ノリト、タツヤ、こんどこそ……こんどこそ、幸せになつてね、
幸せにふたり仲良くね……」

絶対幸せになつてね、ノリト、タツヤ 少女は、何度もひたす
ら兄弟の名前を呼び続けた。

数百年間、祖体を喪つたがゆえに人を殺めつづけねば生きてこれ

なかった、イレーヌとともに闘いに明け暮れてきたいくつもの時代を思いやった。

いつ、いかなる刻でも、自分を支えつづけてくれた姉に対して、ただ申し訳ない、アヌークは思った。

……姉上、何卒お赦してください、ヒトを心から愛しました。最早、戦場で何人も殺めたくないのです……イレーヌの美しい峻烈な戦士の貌を思いうかべた。そして、それから。

中等部の学舎の渡り廊下で徳人と体を触れあったときのことを。

三人でさ、平和に暮らさないか？ 徳人の言葉を。

神社の社務所で、ふたりの大切な刻をすごしたことを。

大鳥居の下、不味くてどうしようもない缶コーヒーをなぜかあまく感じられたことを。

好きだ。徳人に告白されたときのことを。

自分から初めてキスしたことを、徳人から初めてキスされたことを根津充邦の憎めない笑顔を、半餃子をもってきてくれたときの安西夏子の微笑みを。

ふたりの親子の再会を。

自分を抱きしめてくれたときの大谷しづゑのぬくもりを。

きみをいつまでも守るから、杉浦達也の言葉を。

すべての想いは、いまもわたしとともにある。忘れはしない、絶対に。

ノリトが、好きだ。大好きだ。野球で鍛えた 勝てなくせに

がさがさの指が、すぐ怒るところが、笑うところが、くじけなるところが、好きだった。語彙が貧困でいっつも会話が噛みあわなくってとんちんかんなことをいいだすのが、好きだった。

そうだ、いまにして思う、ノリトとタツヤが、ふたりのほうがわたしを救ってくれたのだと。

殺戮から、憐れな使役霊たちの悲鳴や怒号の渦巻く日常から救ってくれたのだと。

宙の闇が地平線までつづく砂漠を覆い尽くしていく。
闇と地平線が一体となる。

足の裏から、砂地の感覚が消えていく。
宙にうくような、不思議な感覚に支配されていく。

ノリト、タツヤ、いつか、いつかまたいつしよに遊べる日がくる
といいね、でもそのとき、さつき憑けた憑依霊がわたしにもどつて
きたら、消した記憶、甦つちゃうけど、少女は祈った。

どうか、ふたりの兄弟が、二度とカルマびとの愚かしい争いに巻
き込まれませんように、と。

どうか、ふたりがしあわせになれますように、と。

だから、消した、記憶を消した、たいせつな思い出のすべてを兄
弟から奪い消してしまった。

「ぜつ……是非に及ばないのであるっ」

自身、勇気づけようとした声は震えた。

異界に満ちゆく闇は冷たくもなければ、熱くもなく……唯、なに
かに護られている、そんな不可思議な安堵感があった。それは、眠
りに落ちるとき、まぶたを閉じるとその暗闇が安息に満たされてい
るのおなじ感覚だった。やさしい暗闇は、アヌークの体軀をゆり
かごの中の乳飲み子のように、慈しみ深く包みこんでくれた。

そして、その声はささやくように聞こえてきた。

何人も、何千もの声。重なりあって響きあう声。

アヌークを、心の底から愛おしむ、闇の畏れを打ち消してくれる
闇からの声。

? 我等の子等のうちのひとり、愛しき子、アヌー
クよ?

……あなた方は、いったい?

? 案ずる事なかれ、汝の魂は、かの兄弟の魂といついかなる刻も常
にもともにあるものと心得よ、汝等の歩む道は平坦に非ず、永く険し
き道程也、されど愛しき子よ、かの二人とともに歩み辿りつきし先
にはいずれかならずや安息の地が汝等を迎え入れてくれるであろう?

……父祖。

アヌークは聞いた。

たしかに父祖の声を。感じとった。

哀しいくらいに懐かしい声を。

少女は、声のぬくもりにくるまれながら、安息の眠りへと誘われ
ていった。

異界、ゲルマティア世界は静かに閉じられた。

40、彼女の宝もの

川上徳人は、暗闇の中にいた。

ここ、どこだ、俺、なんだか揺すぶられてつぞ、不思議に思った。最初はゆりかごに揺られて自分は眠っているのかと思った。でも赤ん坊じゃない、中学二年だ、なんだこれ？ おおきななにかに寄りかかっているぞ やがて、視界が開いた。

「目が覚めたか」

「……アルさん？」

眼のまえにアルフォンス・カミュのおおきな背中がある。

アルに背負われて、巨大な砂丘の列なりのなかにいた。満月が西の宙に傾きつつあった。

「スゲえ、なに、ここどこ、サハラ砂漠みてえだぞっ」

「のり兄ちゃんっ」

うしろから達也の声が聞こえた。

「タツツ？」

首を曲げてふりむいた。

微笑みをうかべた大谷しづゑに、杉浦達也が背負われていた。

スエットシャツを着ている。

アルとしづゑに同伴するように、見知らぬいかにもインテリ銀行マンといった感じの男が歩いていった。両手にキャリーケースやらバッグやらとけっこうな荷物をもっている。

大人たちは、軍用のマグライトを片手に風紋のうつくしい砂丘のゆるやかな斜面をくだっていた。

ライトに照らされて砂漠の風紋が、すり鉢の底のオアシスの水面が光った。

「アルさん、大谷さんっ、ここどこだよっ」

「鳥取砂丘ですよ」

しづゑが答えた。そうだよのり兄ちゃん、達也がいった。

「俺たちなんでこんなところにいるのアルさんっ?」

「なにか思いだせないか、ノリ」

「えっと、そうだ……思いだしたっ、タツからケータイに電話きたんだっつ、タツ、おまえ、千年意識障害からもどったんだよな?」

「遷延性意識障害、のことでしょうか?」

立花がいった。

「……あの、おじさんは、誰ですか?」

徳人がすこし警戒していった。

「警察庁の立花と申します」

にこやかに笑みながら答えた。

「のり兄ちゃん、僕ね、病院から目が覚めたら砂漠にいたんだよ、びっくりしちゃった」

「マジかよっ」

どうなっつてんだ、徳人はつぶやいた。

「立花さんがね、警察の偉い人なんだって、鳥取で迷子になってた僕を捜しだしてくれたんだよ」

達也は立花に礼をいった。どういたしまして、立花は如才なく微笑んだ。

「じゃあ、俺がここにいるのは?」

「頭部を殴打されたことによる前向き健忘、一種の記憶障害でしょう」立花が解説した。

「頭部、って」

徳人は思いだした。東京の町田市での自分の愚かな過ちを。

「川上徳人くん、君には町田市での事件、思い当たる節がありますね、人ひとり殺されています」

立花は訊ねた。

はい、と徳人は正直に答えた。でも、殺された? 誰が?

「大変結構、君に拳銃を密売しようとした犯人のうちひとりが何者かに射殺されました、君には参考人として事情聴取させて頂きます、よろしいですね」

「わかりました」

素直にうなずいた。

「のり兄ちゃんはどこな罪に問われますか」

達也は不安を隠しきれない様子だ。

「君の誕生日はいつでしようか」

立花が徳人に尋ねた。あくまでもおだやかに。

「えっと、十月です……」

「事件は八月八日に起きました、あなたはまだ十四歳未満、触法少年です、あとのことは児童相談所と連絡をとりあいます。ところでですが柳本宰との乱闘事件、憶えていますか」

「……あつ」

そうだ、タツの仇を討とうとしてあの野郎と伝統を……誰か、いたぞ、あそこに、誰だ？ 全然思いだせないや……。タツから連絡があつて、柳本の野郎をぶん殴つたのは憶えてる、でもその数日間、記憶がすっぽりと無くなつてる。徳人は混乱した。

「ユリスモール学院へ留学生として来日したオーストリア人の少女が、柳本たちに乱暴されそうになっていました、君は身を挺してそれを助けたのですよ」

「え、俺が？」

アルの両肩を、サマージャケットの上から強く握りしめた。

「すごい、のり兄ちゃんっ」

「君に殴られた柳本は重傷を負いました、この件に関しても今後事情を聞きます、柳本は君には指一本触れていない、仲間の高橋という少年が君の脇腹を刺した、そう供述しているのですが、君の体に傷はありますか？」

徳人は背負われたまま、慌てて腹のあたりを探った。

傷ひとつなかった。

「ないです、俺ぴんぴんしてます」

「彼とその仲間、さらに柳本の父親はいま婦女暴行容疑の余罪を追及されてます、父親のほうは警察署で、少年たちは児童相談所で警

官から厳しく？指導？を受けているところですよ」

「じゃああのデブヤナの野郎も、これで終わりですか」

「ええ、社会人として、あの品性のない男は許し難い不適合者ですから」

兄弟は互いを見た。これでやっと中等部も平和になる、その想いで力強くうなずきあった。

「つぎです、杉浦達也君、あの柳本のグループは、君以外にも何人も院生たちに暴行を加えていました、証言、してもらえますか」

「はいっ」

達也は力強く、即答した。

「よろしい、君は強い少年です」

満足そうに微笑んだ。

「刑事さん、はやくデブヤナを逮捕しちゃってくださいよ」

徳人がいった。

「残念ながら警察庁に属する私がそこまで現場に介入するわけにはいかないのです、あとは神奈川県警にまかせましょう……ああ、ようやく車の見えるところまで来たようです」

？六人？の一行が砂丘を出ると、県道沿いに車輛が三台縦列駐車しているのが見えてきた。

徳人と達也は背中から下ろしてもらった。

途端、道路上にへたりこんでしまった。

「スゲえ暑い、だめだ、腹減って動けね、一週間くれえ飯喰ってない気分だ」

徳人が愚痴った。

「なんだか僕もすごい疲れてるんだよ、なんでかな」

達也が汗を腕でぬぐった。

アルが兄弟のそばにひざまずいた。

ふたりはあぐらをかいて口々にいった。

「アルさん、これから俺たちどうすんの？」と。

アルはいきなりふたりの兄弟の肩に両腕をまわした。

力強く抱きしめてやった。

「チキシヨウ、アルさんヘッドロックかこらあつ」

徳人が腕のなかでうれしげにはしゃぐ。

「アルさん、痛いっ、痛いよっ」

達也は、すこしゆるめてくれたアルの腕のなかで彼の顔をのぞき見た。

きよとん、とした表情をうかべた。

こんちきしよう、負けねーぞっ、徳人が盛んに腕でアルの胸ぐらを押しもどす。

「帰るか」

アルがいった。

「え？」

徳人が聞きかえした。アルの胸に抱かれながら、兄弟は互いを見た。

「帰るか、ダムシヨに」

「うんっ帰ろうっ」

兄弟は同時に答えた。

アルは、ふたりから離れた。車輛のほうへと歩いていった。

「俺たちにあ、シャバの空気は、ちよっとお高くとまりすぎてっぜ」

徳人はダムシヨがお似合いだ、そういつて笑った。達也は歩み去っていくアルのひろい背中をじっと見つめていた。

「どした、タツ？」

「ねえ、のり兄ちゃん、いまねアルさんがね、僕たちのクビしめてたときね」

「うん？」

「泣きそうな顔、してたよっ」

アルに聞こえないよう、徳人の耳もとでそっとささやいた。

徳人はげんこつで可愛い弟の頭を小突いてやった。

「痛いっ、のり兄ちゃんっ」

「バカッ、あのアルさんがだぞ、泣くようなタマに見えつかよ」小
声で叱った。

そういうと徳人は立ちあがった。だってほんとに見たんだよ、達
也はぶつぶついいながら大好きな兄のあとにつづいた。

兄弟はアルが見知らぬ白人の男たち数人と話しているのを見た。

岩国飛行場で私服に着替えたミードと米軍の？現地協力者？たち
だった。ミードが、飛行場から乗ってきたミニバンに男たちとも
に乗りこむ。無線を使って英語で交信を始めた。

徳人は、駐車している三台のうちすこし離れたところにある車輛
を見た。

一番高級そうな白いセダンだった。徳人は疲れた体を引きずって、
好奇心旺盛に車内を見た。

「ねえこれ、クラウンってやつですか」

徳人が、そばに寄ってきた立花に聞いた。

「はい、私の乗ってきた車です」

警察庁の中国管区警察局の車輛だった。

「君たち兄弟には私といっしょに乗ってもらいます、そのあと警察
庁のヘリコプターに乗せてあげられますよ」

ヘリコプター？ 兄弟は叫んで、初めてのヘリ体験を告げられ
て興奮を見せあった。

先頭に停まっていたミードたちのミニバンが出発していった。

アルとしづゑが二台目の古ぼけたステーションワゴンのフロント
ドアに手をかける。ふたりが兄弟のほうを見た。

「ふたりでまた来てくれ、ユリスモールカフェに」

「うん、いくからあれつくってくれよっ」

徳人がいった。

「フィッシュ&チップス（F&C）、タルタルソースをたっぷり
っ」

達也がうずうずした様子でいった。

アルが手を挙げて応える。

しづゑが、元気でねっ、兄弟を励ますように声を上げた。

「大谷さんっ、学食のメシこれからもよろしくっ」

「あそこのお仕事はもう辞めたのよ」

彼女は手をふるると車内に消えた。

アルたちの乗ったステーションワゴンが砂埃を上げて県道を走り去ってゆく。

「そっか、そっか、大谷さんが辞めて、あれ……」

徳人の記憶の混乱は収まらなかった。

「……大谷さんのメシもけっこう美味かったんだよなあ」

「僕をおぶってくれたあのおばさん、誰かな」

「そっか、おまえは病院のベッドだったもん、夏に学食で俺らのメシつくってくれてた人だ」

そうなんだ、僕も食べたかったな、達也はいかにも残念そうにいった。

「なんだか……」

徳人は西のほうへと沈みつっある満月を見た。

「この夏、なんかほかに、スゲえいろんなことがあった気がする」

なぜかわからない、満月を見ていたら、途方もなく大切ななにかを忘れている、そんな不安、いや恐怖？ 不可解な気持ちになった。

ぼうつと満月を見つめてしまう。ぼんやりとしたままS二〇〇系クラウンに乗りこんだ。

腹ぺこの兄弟は立花から缶コーヒースナック菓子を手渡された。

クラウンは立花の操縦で発進した。

徳人は、リアシートの右側に座って、リアドアウィンドウから見え隠れする満月を見つめつづけていた。

さつきから忘れちゃいけないなにかを忘れている、そんな感覚にとらわれていた。

「あのう、俺、柳本の野郎ぶん殴ったのは、ちょっと思いだしてきたんです、でもあの神社の裏にオーストリア人の女の子、いたのがどうしても思いだせないんです」

「そうですか、記憶障害ですから無理に思いだそうとするのは体によくありませんよ」

「その女の子、名前はなんていうんですか」

徳人は引きさがらなかつた。

「マリア、マリア・エスターライヒさんです」

ちがうよつ、徳人、達也、ふたり同時に叫んだ。

缶コーヒーを握りしめて。

その言葉は、気づいたら口にしていた。

「……アヌーク」

「うん、のり兄ちゃん、アヌークって名前の女の子っ」

「ばっかだな、おまえがどうして知ってんだよ、鳥取で迷子になってたんだろ」

「あれ、そうだよね、なんでだろう。でもねのり兄ちゃんのいつてることまちがいじゃないよ」

「なぜ、そう、思うのですか」

ゆっくりと訊ねてくる、噛んで含めるように。

徳人は、満月を見た。

白く、丸く、うつくしく白銀に光るものを。無意識に缶コーヒーを口に運んだ。

不味かつた。

不味い缶コーヒー。

砂丘は月の光に照らされて、この世のものとは思えなかつた。

それはまるで？月の砂漠？みたいに幻想的で美しく……徳人は眼を閉じて……少女を神社で助けた？……神社……巫女さん？理由
はわからない、言葉の断片がいくつも浮かんでくる。無垢の白衣と
緋色の行灯袴？……それから……。

くうつ、と達也がお腹を鳴らした。

「お腹すいたねえ……ねえのり兄ちゃん、ダムシヨ帰ったら僕、
カップヌードル食べたいっ、干しエビ出汁入れたやつっ」

スナック菓子を食べ終わって達也が、うっん、と背をのばした。

……カップヌードル……徳人は満月に目をやると、つぶやいた。
それから達也を見て笑った。

「？ のり兄ちゃん？」

「……………懐中時計だ」

立花はちいさく舌打ちした。

「そうだよ、女の子から俺、懐中時計もらったはずなんだ、現場に落ちてます、警察が見つけてくれたんじゃないんですか」

不思議なくらい懐かしさの込みあがるのを抑えきれなかった。

クラウンは赤信号で止まった。

「お願いします。俺にください、彼女、自分の宝ものを俺にくれたんです」

達也が、ごくり、喉を鳴らしてふたりを交互に見る。

立花がルームミラーでリアシートの徳人に視線を走らす。

徳人の表情になにかを見てとっただけらしい、ため息をひとつ、ついた。

……私もヤキがまわりましたね、つぶやくと、ナビシートにおいてあった頑丈なビジネスバッグのなかを左手で探った。なかにはいくつかのフォルダ、それとケースにおさめられたSIGザウアーP二二三二、教皇十字軍のいくつかの装備品などが入っている。なかにビニール袋に入った白く光るものがあった。

懐中時計だった。

イタリア語でなにか書かれたタグがついている。意味は 破門者 アヌークより押収 さらに押収した日付と場所なども記載されていた。

タグをとり外して、懐中時計だけをリアシートのほうにさしだしてくる。

「それです、それっ」

徳人は受けとった。

「きれいだねえ、すごいやつ」

「ああきれいだ」

女の子の拳くらいのおおきさの懐中時計を大切そうに掌の中におさめた。白銀に輝いていた。白く光る丸い懐中時計。浅浮き彫りの精巧なデザインの保護用の上蓋。ハンターケース

さわっているうちにリユーズをいじった。

ハンターケースが開いた。

ふたりはケースの裏側を見た。銀製の土台にガラス釉を焼きつけた絵画が施されてある。

「うわっ、きれいっ」

達也が叫びを上げる。

徳人は呼吸もできなかつた。

ふたりの少女が描かれてある。

ひとり髪は長い、気高く凜とした目つきの俊敏そうな美女。歳は高校生ぐらいか。右の少女の肩に手をおいている。かぎりない情愛の感じられる仕草だ。

手をおかれた美少女は中学生くらい、ショートヘアに眼力の強い、誇り高い眼差しを見る者に対してむけている。

ふたりともドレスを身につけていた。ふんわりとひろがったスカートの。

世界史好きの徳人はすぐにフランス革命時代を連想した。

正解だった。当時流行した新ロココスタイルのイブニングドレスだった。なぜいまこんな古風なドレスを着用しているのか、そんな疑問など、どうでもよかつた。

徳人はこのちいさな絵画に魅了されてしまっていた。

ただ見とれつづけた。何色も使われたガラス釉のほんのり淡い輝き、その中の少女たちを。

「もしかしてひと目でマジになっちゃったの？」

「……」

達也のからかいに、いつもならげんこつで応じる徳人だった。

無言で見つめつづけた。

「ショートヘアの小柄なほうの女の子が、アヌークです、まちがい

ないです、なにか、なんでもいいんです、俺あてに彼女、伝言とか、
いってませんでしたか」

赤信号が青にかわった。クラウンが発進した。

「……ただひと言、？ありがとう？と、徳人くん、助けてくれて、
ありがとう、そう伝えて欲しいと、いってましたよ」

「ああっ、よかったねっ」

兄と、この少女のことを祝福するかのような、満足げな声だった。

「おっ、おっっ」

徳人はそうっと、ハンターケースをまた閉じた。心が充足感にあ
ふれてゆく。

それは、なにかに包まれてゆく、護られている、いま、この瞬間
も、アヌークっていう名前の女の子といっしょにいる、そんなあり
得ないはずの不思議な感覚だった。

「僕さ、なんだかすぐそばにアヌークがいるような気がするんだよ
っ
っ」

「おっ、俺もだ、なんでだろうな」

徳人は、ウインドウから見える、西へと沈みゆく満月を見た。

「よくわかんねーけど、いつかきつと逢える、きつとまた逢える、
俺そう思っただっ」

徳人はよくわからない　こみあげてくる、それはおさえようの
ない　不思議な涙を自分の大切な弟に見られまいとして、ウイン
ドウの外を、沈みゆく満月を、ひたすらながめていた。

41、三人の想い

アルフォンス・カミュは、無表情にまえを見て運転しつづけていた。

「たつたいま准将との通話を終えたところだった。」

大谷しづるはアルのシフトレバー操作の仕草をちらりと見た。

「自分の敬愛する指揮官の、ただいまのご機嫌、これが一発でわかるからだ。」

「大尉」

「任務は終了だ、アルでいいよシツエ」

「声音は平板そのものだった。」

「アル、准将はなんと？」

「中尉に降格になるかもしれないな、またシツエの年俸を下げるぞ」

「構いませんわ、出世運のない主あしに仕えてしまったと後悔は三十年以上まえにすませました」

「なんだ、オレの眷族になって間もない時期じゃないか」

「ええ、そうですね、カンプレグの指揮官は本来、少佐からでなければならぬのに、眷族の私と階級がいつしよになつたらたいへんね」

「声にはなんら棘はなかった。」

アルは、ひよい、と肩をすくめた。

「ところで、男の人って、自分が心から愛した女ひとからも愛されてるって気づいたとき、どんな気持ちになるのかしらね」

「引導を渡された気分になっちまうなあ、シツエ」

「まあ」

「これでオレもこのオンナに一生アタマの上がらない人生が始まっちゃまった、ってね」

「それから、帰ったらカフェでワインを一本、付きあってくれないか、アルは頼んだ。」

「あなたは、いつもワインの本数を一桁減らして他人を誘うから、私が監視してさしあげます」

またアルは、ひよい、と肩をすくめた。

しづゑには、主の心が理解できた。痛切なまでに。おどけて、たわいのない軽口をたたくとき、このカルマびとが、そう、どれほど心の奥では。

突然、アルの十字軍専用の携帯端末に着信が入った。

未登録の携帯電話の番号だった。

アルは端末につながるイヤホンマイクをセットした。

「……ミスターカミュ、中尉への降格、並びに今後の君とニッポンのたどるだろう運命を私は衷心より憂う、せめてもの手向けにと思い、祝辞を述べさせて頂きたい」

ドイツ語訛りのある、英語で男の声がそうしゃべった。

「極東総軍司令官閣下みずから、感謝感激、恐縮、痛みいるね」

アルも英語でかえした。

クヴィスリング卿は、クツクツ、と耳障りなちいさい笑い声を上げた。

アルがしづゑにアイコンタクトする。

彼女が自身の携帯端末を手にする。

立花に緊急の暗号を送信して、イヤホンに耳を傾けた。

「ひとつ卿に訊ねたい」

「なにかねミスターカミュ？」

「イレーヌは？ あいつは、妹を見捨てたのか？」

オペラツイオン・フォルモント

『滅相もない、operation volllmondは機密情報奪取に成功したが、同志アヌークは退却に失敗、封印刑に処せられたと、十字軍団員たち、とりわけアルフォンス・カミュ大尉に辱めを受けたあと、肉体を破壊され封印刑に処された、と真実を語って聞かせてあげたのだよ、同志イレーヌの君への憎悪、復讐の炎はかぎりなく深い、対ニッポン戦線で先陣を切りたいと、猛り狂っている、おそらく……君らが、なにを、いおうとも、彼女は聞く耳をも

たないだろう、復讐とは、虚しいものだ、そうは思わないかねミスターカミュ？」

またクツクツ、笑った。

「福音の儀、すでに情報は入手していたのか」

『まさしく悲劇だよ、去年参謀総局から渡された資料を見て、慄然としたよ、あのときの私の悲しみがわかるかねミスターカミュ？』

我等カルマびとが犠牲になり、ヒトを現世に復活させるなどと、これの一体どこが？父祖の叡智？なのか理解に苦しむよ、こんなものために、我が同志の多くが八年まえの玉蟾岩遺跡の激戦で封印刑の恥辱を、被ったのだよ、恥辱をね』

「貴様のいう、こんなものが、三人の魂を救った、ノリトとタツヤは甦ることができた、アヌークの魂は、貴様らに嘲笑を浴びせられつづけても決して忠誠心を捨てなかった彼女の魂は、ようやく安らげる居場所を見いだすことができた」

『ミスターカミュその三人は弱者だったのだよ、狩られる側だったのだ、あの、使えない、無能で、馬鹿な娘はカルマびとでありながら弱者だった、我等の面汚しなのだよ、我等カルマびとこそが、すべからくこの星の頂点に君臨する至高の存在、ヒトは、我等に狩られる側にすぎない弱者だ、実力ある君ならばこの？自然の摂理？を理解して頂けるはずだミスターカミュ？』

「理解？ オレには無理だな、逆もそうだ、ヒトを狩ることしか能のない貴様にあの三人の想いは、かけがえのない絆は、この星の寿命が尽きようと永遠に理解できないだろうな」

『けっこうだミスターカミュ、理解不能だ、第一、理解したいとも思わない』

電話の奥で、あの笑い声がぐもった音へとかわる。

吐血の音がする。

「どうした序列第？列？ 呪肉体がもう保たないか？ またヒトに呪肉して逃げつづけるつもりか、呪肉体とはどんな気持ちだ、無学なオレに教えてくれ」

アルが初めてニヤリと笑んだ。

発作のような呼吸音がつづいた。

激怒している者の発する呼吸音だった。

「……祖体を保持しているからといって、いい気になるなよ、あまり……そう、そうだ、あまり私を怒らせないほうが賢明だミスターカミュ？ 君のため、君の愛するニツポンのために」

「ご忠告感謝する、おい卿閣下っ？ 父祖よっ、永遠なれっ？」

「……」

通話が切られた。

「タチバナ？」

即座に携帯端末で連絡をとる。

「？フレンシエロン？の協力者に至急可能なかぎりの情報を提供するよう局を通じて打診いたします。いちおうエシュロン側にも試みてみます」

フレンシエロン フランスを中心とした世界規模の通信傍受システムだ。アメリカのエシュロンに対抗して設立された組織だった。

教皇十字軍の協力者は、エシュロンよりも比較的多数が在籍している。

「頼む」

「もつとも、クヴィスリングも相応の防壁を構築して通信してきたのは、自明ですが……」

通話を切ると、アルは下唇を噛みしめた。

主のもつとも危険なサインだった。

父祖よ、永遠なれ、父祖……アルフォンス・カミュは、ドイツ語で一語一語、発音した。

彼女はカルマびとの独白に耳を傾けた。

ゆきかう車輛の姿のない、暁の県道をながめながら。

東の空が白み始めていた。

もう一方からは真夏の熱帯低気圧が間近に見える。凶暴などす黒

い暗雲が、フロントウインドウからアルの座る右のサイドウインドウにかけておおきくひろがっていた。

山陰地方の大山だいせんの山々を越え、暗雲は、地上に落ちかかるほどに低く威圧してくる。

「……クヴィスリングは牙を日本にむけたようですね、きますわ日本に、第？列級が、初めて」

「わかつてる」

きますわ、嵐が、しづゑは前方を見やりながら、つぶやいた。

アルがまた下唇を噛みしめる。

それでも彼女は問わずにはいらなかった。

「……大尉？ 私たちヒト、自由霊、使役霊、あなた方カルマびと、ほんとうに醜くって、なのに自分の醜さを強さだと本気で信じこんでいる存在……… いったい、誰なのかしらね」

「決まってる」

アルは乱暴にギアチェンジした。

「カルマびと（オレたち）だ」

しづゑはアルの横顔をじっと見つめた。

それから窓外の動きはじめた街の灯りに目を転じた。

42、眠りの旅路へ

秘蹟認定局、立花調査官は、アルとの通話を終えた。

東京の秘蹟認定局日本支局にただちに連絡した。

必要な部局数力所に連絡をとり終えた。

最後にヴァチカン本国の内赦院と外赦院の各総司令部、ミラノの認定局本部に連絡をとった。赤信号でまた停車した。

立花も真夏の嵐のほうにちらりと目をむける。へりはお預けのようです、つぶやいた。

着族の強靱さをもつてしてもあらがえない、不眠不休で疲弊しきった体をぐったりと心地よいシートにしずめる。

「？列のつぎが、？列、ですか……」

立花の脳裡に、警察庁外事情報部、内閣情報調査室、内閣官房、防衛省 各現地協力者たちの顔がよぎった。

ある、怖ろしい考えに襲われた。彼らのトップがもしも、またイレイ来襲かと、また破門者の、敗色を強めつつある彼らの欺瞞工作ではないのか、とそう意志決定して警戒心を解かれるのがなによりも怖ろしかった。

首をふって、サイドウィンドウの外の街の景色をながめやる。平和な街並み。

自分が、命にかえても護ろうと決意した、日本の街並み。人々の日常。

充血した両眼を閉じて、ため息をつく。

ふっと、呼吸法を使い、気持ちを切りかえる。

眠気覚ましに、アルフォンス・カミュの、自分に血を分け与えた主たるカルマびとの淹れてくれるエスプレッソ、ユリスモールカフェのあの逸品を、また味わいたくなかった。

ふと、考えた。

我が主は、聖ユリスモール修興学院大学をいま、何年留年してい

ることになっているのか、と。思いだせなかった。さらに自身のことに思いを巡らせてみる。

やれやれ、情けのない、我等のカンプグルツペの主が、とうとう、こんどは中尉？ 全くの貧乏くじです、私の年俸はどうなることか。立花はそんな思いで己を煙に巻こうとして、失敗した。いままで敢えて考えてこなかったことに、むきあわざるを得なかった。

……もし、そう、もしも、あのとき命令されていたならば？

？タチバナ、お前がオレの眷族ではなく、ヒトとして、ヒトの選択すべき道を選ぶ？

そういわれずに、上官として命令をだされていたならば、自分はおそらく？ 抗命権？ を行使して、服従しなかったらう。当然だ。それが軍の規律というものだからだ。

それをまつたくもつてあのお人は……。

不愉快きわまりなかった。

「人たらしです、私の主は」

そういつて深く、ため息をつく。それからルームミラーでうしろの？ 三人？ の様子を見る。

「人の気も知らず、子供は呑気なものです」

またおおきくため息をつく。

クラウンの上質なリアシートで、川上徳人と杉浦達也、ふたりの兄弟は、肩を寄せあい、ゆっくりとした寝息をついていた。ひんやりとした冷房のおかげだろう、心地よさげだった。

立花は、さらに苛ついた表情をうかべた。

神経質そうにノンフレームのメガネに指をあてがう。

しばらくためらう様子を見せた。

それから、ハンドルを握っていた片方の手に憑依霊を招喚した。ナビシートにある破門者からの押収品に憑依させる。それは憑依霊に操られて、ふわり、リアシートのふたりに覆いかぶさっていった。アヌークの第一種軍装のジャケットだった。

「いまだけですよ」

苛立たしげな声だった。懐中時計はさしあげます、ジャケットのほうはのちほど返却して頂きますから、独りで、さも不快そうにつぶやき、リアシートをふりかえる。

徳人が夢でも見ているのだろうか、顔をほころばせて、アヌークのジャケットの裾をつかむ。

もういっぽうの手には、しっかりと白く光る懐中時計を握りしめていた。

達也はそんな兄にすべてをゆだねるようにもたれかかっていた。

心地よさげに、二、三度、頬を指でひつかく。顔に垂れさがってきたヤンキースのキャップをつるさそうにずらす。それからジャケットの襟のところを顔に引きよせた。無意識からか、鼻をくんくんと鳴らした。

香りを楽しんだらしい、思いたし笑いのようにうれしそうに表情をゆるめた。

ふたりの見ているその夢は、兄弟のささやかな、けれどたいせつなあの想い出だった。

まだ幼い兄弟は、ちいさな公園で遊んでいた。

真夏の夕焼けに照らされる滑り台、ブランコ、砂場、水浴び用のちっちゃなプール。

兄弟は笑い転げて水をかけあっていた。

徳人が最初に気づいた。滑り台のかけにちいさな少女のたたずんでいるのを。

思い出にくわわったかわいらしい異邦人を。

達也も気づき、兄弟はふたりして声をかけた。？いっしょにあそぼうよつ？と。

少女があたふたと慌てふためき、顔を両手で隠した。

すこしのあいだ、もじもじしてから結局逃げだしてしまった。

兄弟はつられて、我さきにと少女をおっかけはじめた。

？あのおんなのこ、どっかでみたきがするっ、だれかなっ？？
達也が息を弾ませ、聞いてくる。

？わかんねっ、かおみたらっ、きっとおもいだすぞっ、タツツ？
徳人が笑顔で全力疾走する。

いずれ憑依霊の霊力は消耗して消えるだろう、そのとき兄弟は思
いだすだろう。少女に消された、七日に満たない恋の想い出を、カ
ルマビとの戦争に巻き込まれた忌まわしい記憶も。

少女と会話でも交わしてしまえば、瞬時に解けるかも知れない、
なぜなら……。

？よいかノリトよ、憑依霊の心理操作、万能に非ず？

あの日、少女が少年に諭したように。

少女は時折ふりかえった。

兄弟の様子を見守るように。兄弟がおっかけっこにへたばってし
まうと、少女も走るのをやめた。

兄弟がまた立ちあがり、少女をおっかける。

少女はすぐにまた逃げはじめた。

夕暮れの陽差しを浴びながら、兄弟と少女のおっかけっこはつづ
いた。

ふたりの少年の顔には、最高の笑顔があった。

時折ふりかえる少女も、笑顔だった。

兄弟の夢の世界の住人と化した、少女の微笑み。

三人は、走りつづけた、果てしなくつづく夢の町を。

信号はとっくの昔に青になっていた。

黄色へとかわった。

立花はある種、子等への想いのこもった表情を引き締めなおした。
アクセルを踏んだ。

S二〇〇系クラウンは、ディスプレイヘッドランプの光で前方

を照らしながら、車影のない県道を疾走していった。

満月は消え、夜明けの訪れるなか、日常が静かに加速を始めだす。クラウンは、どこまでもつづく車道をひたすら走っていった。

三人の子等を無事送り届けるために。

徳人、達也、アヌーク。

鳥取砂丘から遙か五百キロ以上、遠く離れた神奈川県紅葉ヶ丘市の自分たちの住処にむかって、いまようやく三人はやすらかな眠りの旅路についた。

42、眠りの旅路へ（後書き）

第一章、終了です。お読みいただきありがとうございました。

友絵少尉 2011年7月23日

43、第二章 プロローグ（前書き）

オペラツイオン・フォルモント（作戦名・満月）……あれから、五年の歳月が流れた。川上徳人は、大学一年、杉浦達也は聖ユリスモール学院高等部三年に進級していた。

そして、いま、新しい登場人物たちが揃い、物語はふたたび、動きだした。

イレエヌ、父祖の戦列序列第？列、アヌークの姉が、妹の復讐を遂げるべく、やってきた。日本への再侵略が開始された。教皇十字軍、内教院は総力を挙げ、迎撃を試みるが……。第二章、開幕。

トツプクラスでエラーいエラーい人からの御命令だからなんだ。

はい コイツ、ヤベえ？ いま、そう思ったね？ 少年は人に問いかけてみたくなるときがあるのだ。

ヤベえもなにも、とんでもなく追い詰められてんのは自分のほうなんだよね、そう自暴自棄にもなりたくなっちゃう、なぜかって？ その殺さなきゃいけないー人つてのが、けっこうカワイい、わりかしいい線いつてる、女の子だったりするからだ。

しかも初恋の女の子。

どう？ けっこう地味ーにボディブロー、効いてくる感じ、ね、しないか？

ただここだけの話。

その子、性格的にね、あとほかにも色々とビミョー、に人類規格外的なところ、あるわけで、それが少年の目下の悩みだったりするわけだ。

それと貧乳。

少年の悩みではないんだけど、どうやらターゲットの女の子としては、やっぱりそれなりに悩みのタネ、のようなわけで。

少年がこう思っているのは、これまた秘密だったりする。

バレると、ターゲットの女の子に先に殺されかねないからだった。別にいいじゃんね、貧乳、かわいいじゃん？ そういうの好きなヤツだっているでしょ？

まあ貧乳はともかくおいとくとして。

いますぐ殺せ、エライ人からそういわれているわけじゃあ、ないわけだ、現状はね。

暗殺命令はいまのところ、執行猶予の状態だ。

だからこうして、うっだうっだ、悩む時間も与えられているわけだ。

スマホがさつきつから鳴りっぱなしだった。出なくっちゃいけない、これ、殺し屋の義務な。

「はい、すいません、出んの遅れちゃって……ええ、はい、え？」

マジッスかつ」

少年が驚くのも無理はない。

ジョークにもほどのあることを、ジョークとは無縁のオトナが生真面目にしゃべっているからだだった。それはもう真剣そのものって感じで語ってくるし、このオトナは妙に少年を、なんていうのか、オトナ扱い？してくるのだ。

対等なオトナ、として扱ってくれたりする。

それはうれしいときもあるし、責任からダツシユで逃げだしたいとき、途轍もなく重い枷となって、少年にのしかかってくることもある。

こんな感じなのかな、？封印刑？って。

そう、思うときもある。

『聞いてますか曹長？』

「ああ、ごめん、立花さん、にしてもですけどね、ひと言いいたいんですよ」

『何なりと、曹長』

すうすうっ、と少年は呼気を溜めて、精一杯声を大にしていいいことがあるのだ。

「　　っあのさあ、あ、ああ、いや、そのっ……」

……すんませんくだけた口調になっちゃって、なにぶんまだ高二ですんで」

『構いません、お気になさらず』

けっこう笑いを含んで返すことがある、この立花調査官、てゆうオトナは。

オトナの余裕なのか、やっぱりガキ扱いされてんのか？

少年の、高校二年男子の沈黙に、

『曹長、私はときおり慥懃無礼、そう評されることがありまして』

「うわー自覚、あるんだあー……」

『これはこれは手厳しい』

また、笑いの含んだ声音が返ってくる。

「とにかくさ、評判悪いよ、秘跡認定局って、暗いってさあ陰口た
たかれちゃってるよ」

『差しつかえなければ、どなたでしようか？』

「あ、これ告げ口じゃないからね、本人たちが言えって、むしろい
って構わねーからって公言してるから立花さんに話すけど、アルさ
んね、あと旦那、ミラボーの旦那も悪口いってるよ」

『中尉も、ですか？ 我が主からの一言はきついですが、？大熊ミ
ラボー？の放言癖はいまに始まったことではありませんが』

「いや立花さんはよくやっていると思っただね、ちゃんとさ仕事をね
ー」

『お褒めにあずかり光栄です』

「ってかさー、アルさん、中尉のまんまなんだよね、あれから五年
も経ってんのにさ」

『ええ、それも大いに嘆かわしいかぎりですな、私のサラリーに直
結する問題です』

少年と調査官は、アルフォンス・カミュはいったいどこまで降格
するのか、ひとしきり真剣に語りあった。

少年はスマホの画面を見ながら　これはビデオ通話なのだ
ため息をひとつついた。

昼休み、教室には少年以外、誰もいなかった。クラスメイトたち
は学生食堂へいっちゃってる。少数の運のいい連中が、？ユリスモ
ールカフェ？の席をゲットして、でもって女子部の女の子たちと昼
メシ喰いながら、たわいのない話でもしてんのかも知らない。

「あー、話かえっけど、立花さんってマジ、悪い知らせしか送って
こないんだよなあ」

『それが私の職務ですから』

「はいはい、表の公務も、裏の任務も、でしょ？」

『ご理解いただき恐縮です、曹長』

今後の事務的な案件のいくつかについて立花から情報を開示され、
ふたりでその対応を話あった。

通話が切れた。

こうして少年 将来の職業、初恋の女の子の暗殺任務 の想
うところがひとつ、またしても増えたのだった。

少年は、男子校舎の二階、二年イエルサレム組の エルサレム
じゃあない、イエルサレムって発音しないとマジで英語の時間、セ
ンサーに説教喰らったりするんだ 教室の窓辺へと足を運んだ。

西の空を、遙か西方を睨みつける まるで親の仇でもあるかの
ように、え？ 親？ 親ってそっぴい自分の親、誰なんだろう
まあそれはともかく、睨みつけるのだった。

自分の将来に、暗殺者の内々定をくれちゃったりした連中を、こ
れでもかつ、ってゆーくらい、それこそ思う存分、思う、ぞ、ん、
ぶ、ん、ぶちのめしてやりたかったから。

44、詩本龍子の憂鬱

あの人たち、また私のことを物笑いの種にしてる、詩本龍子しほんりょうこがそう思ったかどうかは、他人が読みとることはできなかった。彼女の無表情のせいだ。

龍子は教室の窓際の席に座って、景色をぼんやり眺めていた。六月の梅雨時、外は霧雨が降りつづいている。

きょうは金曜日、一時限目の 聖書の講義 のあとの休み時間だった。

龍子は、その神秘的な澄んだ瞳 すれ違う者たちをふりむかせ、あの子日本人？ そう疑問に思わせる そんな色をたたえた両の瞳を雨滴にむけた。

片手を、デスク脇のスクールバッグに突っ込んだ。あるものを手にとって、ブレザーのポケットに落としこむ。

神経質そうに髪の毛を、耳の隠れるくらいのショートヘアを指先でいじる。

五感のすべてを、第六感というものがもし、あるのならばそれをもすべて研ぎ澄ます。

意識を、？あの人たち？のほうへと集中させる。

谷たにたちのグループが このクラスでいちばん目立つ女子たち

窓際と反対の廊下のほうに集まっていた。数人の声をひそめた密談だ。龍子のところまで聞こえてくるわけがない。

それが龍子の脳裡に、徐々に音を増して聞こえ始めた。

龍子は、それに連れて両眼を細めてゆく、遠く、なにかを見つめる目つきになる、龍子の瞳に映るのは、校舎の外に咲き誇るタマアジサイの花びらではなく、別のものへと徐々に変わっていった。

カメラのピントが合ってゆくように、その光景は鮮明さを増し始めた。

龍子の唇がほんの微かに動く。

そう、その調子、もう少し……うん、いい感じ　ベテランの読唇術者なら、そう読み解ける動きだ。谷たちの笑い顔、声、ソフトグレイの制服、谷の指先の付け爪^{スカルプチュア}までが、光景と声が龍子の脳裡ではつきりと完成する、像を結んでゆく。

廊下側の彼女たち、谷を含めていまは四人でしゃべっていた。

？　だーかーらっマジなんだってば、龍^{ドラゴン}の奴、マジで靈視でユーレイとか見えちゃうらしいってさ？谷が得意げに仲間たちにしゃべりまくっている。

？マジ？　ターニイー、あんた話盛ってない？？

谷の親友の有吉^{ありよし}がおかしげにいった。

？マジだよ、中^{チユウ}等部時代から有名なんだって、あのオンナ、ガキの頃からユーレイ見るとかいつて周りのオトナの秘密をいいあてたりしてたんだってさっ？

？なにそれ、たとえば？？別の女子が興味津々に身を乗りだす。

？ドラゴンの親戚のさ、ダセえオヤジがウチらとタメぐらいの高校生とエンコーしてさ、んでもってそのオンナ、ドジ踏んで一回墮ろしたらしいんだよっ？

？それで？？この手の話にグループ全員の目が輝いた。そばにいた女子たち三人が興味を持って谷の隣の席に陣取ってくる。

？マジ？　ねえ谷、ウチらにも聞かせてよ？そういつて谷の周りに三人が集まる。

これで馬鹿どもの頭数が七人に増えたわ、龍子はカウントした。

？チヨ一受けるんだけどさあ、まだ初^{シンヨウ}等部のガキだったドラゴンがさ、そのオヤジに向かつて、愛人の女子高校生は、ほんとうは赤ちやんを生みたがってましたよ、てさ、正月の親戚連中のまえで暴露したんだってさあつ、そいつの家族のそろってるまえでっ？

谷はそういつて馬鹿笑いして、

？それだけじゃないんだから、あのオンナ、マジヤバい交通事故とかに何度も遭ってるらしいんだけどさあ、死んだのは全部ドライバ一のほうらしいよ？

?呪いじゃね? ドラゴンの呪いつ、黒魔法??

周りの女子たちも釣られて甲高い笑い声を上げた。あの根暗ドラゴン? マジでヤバくね? 声はひそめあっているけれど、爆笑だけは、龍子の席にまでMAXに響いてくる。

?じゃあさ、あのオンナ、マジ、ソツチ系かどうかテストしてみようよ?

有吉が谷にいった。

?どうやってすんだよ???

谷が不思議そうに返す。

?私の先月の援助交際の相手、チョーイケてるホストの人だったんだ、五万もくれたんだ、あのオンナが当てられるかどうか試してみねえ??有吉が得意げにいった。

?いいなあ、私にも紹介してよ?別の女子がうらやましげに口を出した。

?ヤダよ、私、あの人とマジモードだし?

有吉は有頂天な表情をうかべている。

谷がうらやましそうな、^{ひが}僻んだような、そんな様子で有吉を細目で見た。

?じゃあ、有吉、当てられたら今日の昼の?ユリザブ?おめえの分のオンナに譲れよ?

?やってやるうじゃん、そんなかわり、根暗が外したら昼さ、私の分おぐれよな??

谷がちよつと自身をなくした顔になる。

全員が、やりなよ谷っ、とノリだけで茶化してくる。

ユリザブ 龍子たちの学院の近所に ユリスモールカフェという店がある。その昼食の予約席を略した言葉だった。学生食堂の料理は不味い。院生たちは毎朝携帯でカフェに予約の電話を入れるのである、こういうときだけ十字を切つて、懸命に祈りながら。

谷が有吉たちを見る。彼女たちの視線は雄弁に物語っていた、賭けは有吉の勝ちだと。当然だ、谷が暇つぶしに話を盛ったにすぎな

い、ガキじゃあるまいし、誰がそんな与太話を本気で信じるだろう？ 自分の勝利を確信してるからこそ、有吉は必死の電話攻撃で勝ち取ったんだろう、ユリザブを？賭け金？にしたってわけだ。

彼女たちが声を上げ、けしかけてくる。谷としても、もう、後には引けなくなった。

谷は、やってやろうじゃんつ、そういつて席を蹴って立ちあがる。よしいくぞ、有吉がそういつて、先頭になって窓際をふりむいたとき。

全員の顔が引き攣った。

詩本龍子は、いつのまにか、グループの目のまえに立っていた。七人にもふくらんだ女子部一年の院生たちをまえにして、龍子はただ、静かな視線を有吉にむけてくる。右手をブレザーの脇ポケットのなかに入れて、ICレコーダのスイッチを密かに押した。

ほらいえよ、有吉つ、谷が気をとりなおした様子で嫌な笑みをうかべる。

有吉は谷をチラ見した。有吉はつばを飲み込み、意を決した様子になった。

「あのお、ドラゴ……いや詩本さ、あのお、あのお……」

有吉がどもりながらもいいかける。

「有吉さん、あなたは？七つの大罪？のうち、三つも犯してしまっ
たわ」

「……なに、いつてんだよ」

詩本龍子の言葉に、有吉の顔が見る間に戦闘モードになっていく。谷の顔からもニヤ笑いが消えた。ほかの五人の女子たちもだ。

「ひとつめ、？色欲？あなたは美男子がなによりも好きね、ふたつめ？傲慢？あなたの相手、先月の、そう何日かまではわからない、金曜日かしら、相手はホスト系の男性の方には見えないわ、強いていえば生真面目公務員タイプの超弩級肥満体型、BMI実に三七以上、中年の方」

「てめ、なにいつて」

有吉の顔から、見事に血の気がひいていく。全員が、周りの六人が、十数人のクラスの女子院生がいまや、詩本龍子と有吉、谷たちを見ていた。

「みつつめ、？強欲？携帯サイトで中年の方相手にあなたは五万円から交渉を開始した、でも相手の方は予想に反し歴戦の強者、^{つわもの}約四時間の粘り強い交渉に陥り結果、九千五百円で性の取引を交わすことで契約が成立したわ、それがBMI三七以上ある超弩級肥満男性の方と実際に出会って、三七以上の超弩級肥満体型とルックスを見た途端、あなたは三七以上という超弩級の現実に肥満、失礼、不満を抱いたわね。そのせいで、あなたは三七以上の超弩級の取引相手の眼前で三万にも土壇場で値段をつり上げた……商取引として信義に悖るといふものよ」

つい数分まえまで、女子らの声が教室に楽しげに飛びかっていた。いまは、ただ、ミサの時間にも匹敵するほどの、静けさに支配されている。

有吉は、すとん、とそばにあつた椅子の上に腰を落とした。

「でも、あやまちはおこらなかつた……中年の方も、あなたのルックスにご不満を抱いたわね、顧客に逃げられたあなたは、ご自宅の自分の部屋で、携帯電話から学院の裏サイトに罵詈雑言を書き連ねた……モモンガ急便のマスコット、モモンちゃんのぬいぐるみを抱きしめながら」

七人が、恐怖に顔を歪めだしている、互いに目配せをしあう。

谷がひとり、有吉をチラ見した。おい有吉、フカシこいてんのはテメエのほうだったのかよっ、なにがイケメンホスト系だよっ、その表情にまざまざと出ている。

龍子は、そんな谷の行動をも見逃さず、目線を配る。

クラスのまじめなグループ　谷たちとはソリの合わない　女子院生らは会話のおぞましさゆえにことの成りゆきを注視していた。数人が、穢らわしい、そういつて十字を切った。

「有吉さん、あなたは、都合四度目の商取引に於いても無事、処女

を護りぬいた、私はそんなあなたが、嫌いじゃないわ、否、むしろ好意に値するといつても過言ではないの」

有吉の顔は、貧血から、サウナで赤面した常連オヤジの顔へと変貌していった。

「ふざけんじゃねえよ、テキトーなこといいやがって、この、根暗オンナツ」

谷が睨みつけてくる。有吉が救いを求めて谷を見る。

龍子は、初めて谷に顔をむけた。あら、そこにいたの？ そんな感じで。

「谷さん、あなたは、賭けに勝利したのよ、喜ばしいのに」

「てめっ……」

「谷さん、あなたは、七つの大罪のうち、ふたつ犯してしまっただわ、ひとつめ？嫉妬？。先ほどホスト系といい感じと愚にもつかない馬鹿な嘘をつく有吉さんに嫉妬を抱いてしまった、けれど、その必要もなくなっただわね、やっぱり喜ばしいのに、ふたつめ？憤怒？。有吉さんの傲慢を知ったあなたは、彼女に憤怒を覚えてしまった。

でもだいたいようぶ、大罪を平然と犯す馬鹿者同士、あなた方の友情はきつと、きつとこれからも不変だと思っの、だから不変の友情に關しても喜ばしいのに、馬鹿者同士」

谷は言葉に詰まった、そんな感じで視線を彷徨さまよわせた。へたり込んでいた有吉と目が合う。ふたりは親友同士とは思えない、なんとも複雑な表情で相手のことを睨みあった。

「ユリザブはありがたく頂戴するわ、有吉さん、？主の御加護のあらんことを（ゴツド・ブレス・ユー）？」

龍子は、座り込んだ有吉の目のまえまで上半身をかがめた。

その眩まばゆい神秘の双眸で有吉をガン見しながら、右手で十字を切った。

龍子の白い、うつくしい貌かおにそれは見事なまでに決まった、様さまになる、所作になった。

有吉はただ、怒りと羞恥に唇を震わせて、赤面した顔を龍子にぶ

つけるしかなかった。

教室の後ろに聖母マリアの肖像画があった。高価な絹製のブロケードの織物、その垂れ幕の奥からマリアさまが、慈悲深い視線を哀れな高等部一年の女子院生に、有吉にむけていた。

「私の……ユリザブ……」

有吉が情けのない声を出す。

彼女の落胆も無理はない、ユリザブさえゲットすれば、美味いカフェ飯、しかも自由に男子部のオトコとしゃべりながらの昼休みだ。陰鬱なミッシヨンスクールで、最高のひとときといえる。そう、予約さえとれたら、うまいメシ、オトコとの昼のおしゃべりを楽しめる。谷や有吉たちのように、カソリックの教義を鼻で笑う？元気づきる？女子たちの生きが이었다。

詩本龍子がそれを奪い取ったことで、？ざまあみやがれ有吉？と思っているかどうかは、有吉たちには知るよしもなかった。

なにしろ龍子はその、超然とした無表情に勝利の笑みなどうかべはしなかった。

彼女は、唯、ほそい、優美な体躯をひらめかせて、窓際の自分の席へともどつていったのだから。もうすでに七人の女子たちのことなど、興味をなくしてしまった様子で。

45、アヌーク、来日

神奈川県、紅葉ヶ丘市。横浜市の郊外にひろがるベッドタウンだ。JR横浜線の紅葉ヶ丘駅を中心にして、繁華街が広がっていた。商店街を抜けると、やがて小高い丘陵地帯が顔を見せてくる。カエデ林の群生する緑豊かな林道を上っていくと、丘の頂上にその学院はあった。

聖ユリスモール学院。高等部と中等部がある。一駅離れた初等部とは違い、寮を完備したカソリック系スクールだった。女子部と男子部に分かれた別学の制度を採用していた。

学院までゆく林道の中腹に、その店はあった。学院生御用達の店である。

名前を ユリスモールカフェ といった。

午前中、有吉が龍子から祝福を言い渡されてから数時間後の昼休み。院生たちの待ちに待った九十分の休み時間がやってきた。きょうのユリザブの取れた、幸運な男女たちがぞくぞくと林道を降りてくる。男女、中、高等部共におなじ制服だ。ソフトグレイのブレザー、女子は同色のミニのプリーツスカート。男女とも、白のシャツ、襟首にはあざやかなオレンジのクロス・タイを巻いていた。

まだ少しばかり肌寒い丘陵地帯には霧雨が降り続けている。若い客たちは、傘を差して瀟洒な赤い煉瓦色のカフェのガラスドアに吸い込まれていった。

「イラッシャイマセ」

長身瘦躯の若い白人青年が客たちをドア口で迎えている。シックな黒いギャルソンエプロンを身につけている。黒髪、鳶色の瞳、ヨロツパの街並みの似合いそうなハンサムな青年だった。彼は、院生全員の顔とフルネームを憶えている様子で、客全員に挨拶をしながら、手にしたメモと客らの顔を見くらべた。予約済みであるかどうかのチェックだ。

店のまえのオープンテラス、一番人気のバルコニーテーブル三脚は、静かな雨のなか、キャンバス地の屋根に守られ、すでに満席だった。早くもこの店自慢のエスプレッソを味わって会話を弾ませている。

列を成した順番が、詩本龍子にまわってきた。

「イラッシャイマセ、リヨーコ？ 予約は入っていないが誰かと交代かい？」

「アルさんたら、あなたは何度いっても私をファーストネームで呼ぶのね」

キャンバスの屋根の下、龍子は傘をたたみながらいった。

「親愛の証あかしだよ、リヨーコ」

アルと呼ばれた青年は軽く微笑んだ。

アルさんたら、笑みをうかべればユリスの女子がみんな貴方あなたに好意を抱くと思っていたら、それは大いなる過信だわ 龍子の無表情からは、そう思っているかどうかはよくわからない。

龍子は小首をかしげた。有吉さんと交代したわ、彼女からの連絡は？ そう訊ねた。

入っていないな、アルがそういって不思議そうな顔をした。

「アルさん、キャンセルするわきゃないじゃーんっ」

店のなかから含み笑いととも声が届いてきた。

谷と有吉がカフェのエントランスに出てくる。薄笑いをうかべている。

「アルさん、そのコ、ウソが上手なんだから気をつけなよ」

有吉が露骨に龍子を睨んできた。

弱ったな、アルはいつて、谷と有吉ふたりを見る、それから龍子を見た。

龍子は、ブレザーの脇ポケットから掌てのひらサイズのICレコーダを出した。メタリックブルーに光るレコーダの再生スイッチを押した。

「有吉さん、あなたは？七つの大罪？のうち、三つも犯してしまったわ」

有吉の表情が一変した。てめえっ、この……声をあげようとして、沈黙してしまった。

龍子が再生をとめる。

「アルさん、有吉さんはとてもやさしいひと、馬鹿者だけれど、私のウソをきつと、きつと必ず、許してくれると思うの、馬鹿者だけれど」

アルは有吉を下の名前で呼ぶと、リョーコのウソを許してやってくれ、そういつた。

有吉と谷は怒りに震えながら、アルと龍子をせわしげに見る。完全に目が泳いでいる。

「アルさん、私いちどスタッフルームでカフェのまかない料理を食べてみたかったの」

「席が埋まっているから、仕方ないな、それとクラスメイトを悪くいうもんじゃないぞリョーコ？」アルは呑気な調子でそういつて、「ふたりともそういうことだ、みんなの事情はよくわからないんだが、まあ仲良くやってくれ」アルはなんともぼけた口調で谷と有吉にいいそえてくる。

ふたりはアルに対しては媚びた笑いでどうにかとり繕った。

「アルさん、詩本と呼んでね、龍子ではなく、詩本」

アルはうなずいた。わかったよ、リョーコ、茶目つ気たつぷりな笑顔でそういつて、カフェの奥のスタッフに威勢のよい指示を發した。

「一名様、まかない、スタッフルーム(S)ご案内ですっ」

チーフスタッフのアルの声にカフェのアルバイトたちが元気に復唱して応えた。

龍子は、有吉と谷の視線を無視して、存在すら忘れたようにふたりの横をとおりすぎていつた。

あのオンナ許さねえ、ふたりの女子のささやきも無視した。

カフェの一階、ぬくもりのある間接照明の下、店内は二十人くらいの入れる広さだった。ローズウッドや真鍮を多用した壁、テーブル

ル席、入って右側に長く伸びるカウンター席。一階に陣取った院生らがエントランスでの奇妙な出来事を見ていた。案内するスタッフのうしろをついてゆく詩本龍子の優雅な足取りを皆が眺めていた。いいなあ、Sでまかないのメシ、女子院生たちがそういつて興味津々の視線を龍子に送ってくる。あの子誰、美人だなっ、一年？男子院生等も気のある視線を投げてくる。

彼女はそんな好奇心の集中砲火のなか、カウンターまえの通路を足音もなく歩いた。カフェの奥のスイングドアからキッチンへと入っていった。

キッチンスタッフたちがせわしげに調理をしながら、龍子にきびきびとした挨拶をしてくる。龍子もとってつけたような微笑みで応じた。案内してくれた大学生の男子アルバイトが、どうぞ、そういつて、キッチン奥のドアを丁寧に開けてくれた。

龍子は彼にもお義理の微笑みで愛想をふりまくと、するっ、と体をひらめかせて入りこんだ。

そのスタッフルームは、四畳半くらいのひろさで、こぎれいなスモールオフィス、そんな雰囲気だった。型落ちの三二V型液晶テレビが壁に据えられている。

壁際のスチール製のデスクチェアにひとりの小柄な少年が陣取っていた。

少年は窓の外、西の方角を睨みつけながら、スマホで通話している。

「詩本龍子の鬼、悪魔、痴女、電波女、貧乳っ、でも俺はヒンヌー嫌いじゃないけどね」

「……………凜兄？」

凜がふりむく、慌てて通話を切る。

「……………あつ、詩本っ、なっ、なんだよユリザブ取れたのかよっ」

「いま、あり得ないこと、つぶやいていたわね」

「え、あれ、なんのことかなっ」

「……………まあ、嫌いじゃないのなら良いわ、ねえ、きょうのまかない

の味は？」

「ああ、旨えぞっ、OKツマジヤバいつ、台風バジルと激辛豚挽肉のセドンブリだ」

手にした陶器製の丼をうれしげに見せてくる。

「凜兄こそ、卑劣極まりないわね」

「うっせーなっ」

「今週に入って、まずエビの死骸、つぎに牛の死骸、おとといが鶏の死骸、きのうが羊の死骸、きょうは豚の死骸ね、？S？で毎日ひとり、魚介ないしは獣肉の死骸を味わいつづける常連の気分はいかがかしら？」

「まったく、食欲がさ、一気に消え失せるんだよ、おまえと話してるとき、いつつもいつつも」

少年が口を尖らせる。不機嫌さのかけらもなかった。もう慣れっこ、そんな感じだ。

詩本龍子は、凜兄、と親しげに呼ぶこの少年のまえでだけは、普段の無表情を脱ぎ捨てるのが常だった。なんてふうには話はうまくは転ばない。

龍子は、彼女の基本仕様である、鉄壁の無表情を崩したりは決してしなかった。

「ねえ、……きょうも、するの？」

「ああ、もちろんだ」

少年が、顔に不敵な笑みをうかべる。

「そう……」龍子の瞳に、少しばかり艶やかな色が宿った。

龍子が、うっすら、ようやく微笑みをうかべる。後ろ手に、ドアの鍵をかける。

少年が安物のデスクチェアから立ちあがる。スラックスのベルトを外し始めた。

「凜兄、手加減はしないわ」

「うっせー、されてたまっかよっ」

少年の吐息が緊張のせいかわ、荒く、浅くなってゆく。

詩本龍子が少年の目のまえに立つ。少年の、興奮で輝く両眼を見下ろす。

少年の背は低かった。

高等部一年のなかで背の高いほうの龍子よりも、二センチばかり低い。

「用意は、いい？」

「OKッ、こいよ、早くっ」

龍子は、少年の腰に目を落とした。すでにまえの外された革のベルト。少年が股間のファスナーに手をやる。

「早くしろよ、詩本っ」

龍子が凝視する。少年の股間を。目を細めて 瞳の煌めきがいっそう潤ってゆくのが見て取れる ゆっくりと唇の端をつり上げてゆく。

それは、うつくしい、魔性の 見ようによっては 笑みらしき表情ともいえた。

詩本龍子は、少年のまえにゆっくりとしゃがみ込む。

少年が、ごくり、真剣な様子でつばを飲みこむ。

「凜兄……」

「早くしろって、人がくんだろっ」

龍子は、じつ、と眺める。眼前の、少年の若い肢体を。

少年が、そのときに備えて、眼を閉じる。

時が、きた。

「……ダークレッドよ」

詩本龍子の声が小さく、けれど鋭く密室に響きわたる。

少年の瞳が、驚きに見開かれた。

「ちつきしよっ」

少年は叫んだ。スラックスのファスナーを一気に引き下ろした。腰のまえを全開にする。

少年の履いているインナーが見えた。

ローライズボクサーパンツだ。

色は、龍子のいったとおり、ダークレッド。

「なんでだよお、なんでおまえわかるんだよっ」
少年が情けない声をあげる。

「だから、いつてるでしょう、私には、見えてしまっただもの」
龍子は勝利の笑みをうかべた。

「凜兄ったら、これで何連敗かしら？」

ちきしょう、少年は小声で繰り返した。凜兄っ？ 龍子が容赦なく答えを求めてくる。

「くそっ、じゅっ……」

「十？ なに？ いくつ？ 聞こえないのだけれど」

「十九っ」

少年がやけっぱちに声を荒げた。

がちやりと音がした。ドアの鍵が開けられた。

少年が反射的に股間のまえを手で隠す。

開かれたドア口、アルが立っていた。

口笛を吹く。ギャルソンエプロンの腰に手をあてがう。

「オーダーとりに伺ったんだが、スマナカタ、ふたりとも、邪魔をしたようだなっ」

「当然よアルさん、鍵を勝手に開けるのは、マナー違反というものよ」

ひとつんちの店で、昼間っから、おまえらいったい全体何をやって
いるんだ、というツッコミを入れてしかるべき情景だった。龍子の
声は、ツッコミ？ 何をどこへ突っ込むというの？ とでもいわん
ばかりの難詰口調で全否定してくる。

「アルさん、ちがうんだって、あのさっ、賭けなんだよ賭けっ、履
いてる下着の色を当てるっていうさ」

少年の声を、アルの手が制した。

「わかってる、リンッ、リョーコを頼んだぞ、でもな、昼間っから
つてのは感心しないな」

「詩本よ、アルさん、詩本、下の名は嫌いだと何度いえば」

「

「詩本っ、どうでもいいからしゃがみ込んでないで立ち上がれっ」
「凜兄、なにをそんなにとり乱しているの、まるでサカリのついた
キツネリスのよう」

「意味不明なこというなっ」

「リョーコ、カレシは思春期なんだ、察してやってくれ」

「アルさん、だから、詩本よ」

龍子はいくまで澄んだ無表情を崩さない。

アルはウインクすると、胸に手をあてがい、丁寧にお辞儀した。
ふたりともごゆっくり、謳うようにいつて、ドアを閉めていった。

「……おいっ、完璧、アルさんに誤解されてっぞ」

「人の頭の上から、怒鳴らないでくれる？ 敗北者は自重じゆうじゆうが肝要よ」

「うるせえっ、つつつかいつまでもおれのまえでしゃがみ込んでね
えで立てよっ」

少年は半べそ状態でしゃにむにスラックスを履きなおした。

「凜兄」龍子が立ちあがる。

「なんだよっ」

「きょうも、ゴチになるわ」

「わかったよ、おごるよ、ったく」

少年はきょうも自分の従姉妹いとこに賭けを挑み、負けた。

この日、聖ユリスモール学院高等部の一年ナザレト組で、有
吉がまず一生涯残るであろうトラウマを経験した。谷は親友との友
情の再確認をする羽目になった。

そして、同学院高等部二年、凜兄 黒塚凜くろつかりんは、詩本龍子の？と
ある力パワーをまえにして、憐れなことに十九連敗を喫した。

三人の失敗経験値アップの犠牲の上に詩本龍子は、凜から十九回
目のメシ代をおごってもらうという成功体験をひとつ、人生に付け
加えることになったのだった。

そんな、とにもかくにも、悲喜こもごもながらも、きょうも騒が
しくも悩ましい高校生たちの昼下がりがすぎてゆく、ハズだった。

スタッフルームに男子院生が飛びこんできた。

日常の、破られるときがやってきた。

ふたたび、ユリスモールの平和な日常の破られるときが

「 あら、タツくん」

龍子がやっぱりお義理の微笑みをつかべる。

「タツちゃん」

凜が親しげに先輩の三年生に軽く頭を下げる。

杉浦達也は、やっぱりどこか、高等部三年になっても童顔っぽい、人当たりのいい顔をしていた。それがいま様子がおかしい、当たった三億の宝くじの券を無くした、そんな表情だ。

「て、テレビッ、テレビNHKにしてっ、なんでもいいからニュースッ」

凜が気圧された様子で、リモコンを手にとる、チャンネルをNHKにする。

ちょうど昼のニュース番組をやっていた。三人が液晶画面を見る。

「いま映しております映像は、現場に居あわせた一般の方の撮影した動画です」

男性アナウンサーの、興奮をおさえた声が流れてきた。

高級なリムジンハイヤーが一台、猛火につつまれて炎上している。映像は、ムービーカメラからとっているらしい、撮影者の興奮が伝わるように、上下左右に激しく揺れている。

炎上するハイヤーを遠巻きに見守る大勢の人々。空港職員、警察官らが、興奮した群衆を制止している。どんっ、と音がして車からさらに火炎と黒煙が上がる。人々の叫びも跳ね上がる。

テレビ画面がスタジオに切りかわった。アナウンサーが緊張した声でつづける。

『本日午前十一時すぎ、羽田空港国際線旅客ターミナル一階のタクシー乗り場で、ハイヤーの爆発事故がおきました、被害者の情報は、いま……どうでしょうか？……はい、たったいま、現場とつながった模様です』

「なにこれ、空港って、テロとかっ？」

凜が大声を上げる。しいつ、だまつてつ、杉浦達也の声は涙声で震えていた。

テレビがまた羽田空港の事故現場を映しだした。女性レポーターがカメラにむかってしゃべりだす。

『こちら現場です、炎上した車はハイヤー一台のみです、被害者は出ておりません、爆発時には、ハイヤーの運転手も乗客三名も降りていた模様です』

スタジオのアナウンサーの声が割って入る。

『乗客が外国の要人だったという情報は、ほんとうでしょうか？』

『ええとですね……はいほんとうです、乗客は老人一名、男性一名、少女も……一名、計三名です』女性レポーターの声に切迫感がワンランク上がってきた様子だった。テレビクルーらしき人物にむかってなにやらうなずいている。またカメラのほうを見る。

『最新情報です、危うく難を逃れた乗客のお名前です……イヴァン・ジシユカさん……この方が……チエコです、チエコ共和国の、元老院終身名誉議員でらっしゃいます、これはアメリカでいう議会の、いわゆる上院にあたる機関だそうです、イヴァン・ジシユカ氏、チエコの国会議員でらっしゃいます、それとお付きのボディガードの男性。それからもうおひとり、ジシユカ氏のお孫さんです、孫娘のアヌーク・エスターライヒさん』

「アヌークッ」

達也が叫ぶ、杉浦達也が、喪いかけた三億の宝くじをまた見つけたぞつ、そんな歓喜の声を上げてへたりこんでしまった。歓喜はすぐに消えて、わんわん泣きだし始めた。

詩本龍子が、そうっ、とそばに腰を下ろした。

龍子は、達也をあやすように、やさしく肩を抱いてやった。

「……詩本ちゃん、アヌークが、アヌークが帰ってきたんだよ、日本に、日本に五年ぶりにっ」

黒塚凜は、呆気にとられた状態だった。凜がテレビを見て、達也と龍子を見くらべた。

龍子は、ようやく落ちつきをとりもどし始めた達也を、じっと見つめた。

「タツくん、落ちついてくれてからでいいのだけれど、事情を説明してもらえれば、私も凜兄も、あなたといっしょに、ちゃんとよるこべるわ」

達也はうなずいた。何度も、何度も、うなずいた。涙を拭くと手に持っていたスマートフォンで時刻を見る。昼休みはもうすぐ終わりだった。午後の授業が始まってしまふ。

達也は、不安げに凜と龍子を見た。

「午後の授業は、サボリ、決定かい？」

ドア口から声がした。スタッフルームの三人がいつせいにふりむく。

アルさんが立っていた。にっこり、微笑んでくれている。

凜と龍子は互いを見た。うなずきあふ。ふたりは達也の肩に手を置いてやった。

「決定よ、アルさん」

龍子が涼しげに答えた。

46、砂丘に消えた記憶

学院は午後の授業の時間をむかえていた。ユリスモールカフェの店内からは、学院生たちの姿がきれいさっぱり、いなくなっている。キッチンも昼時の忙しさから解放されて、いまは静かなものだった。スタッフルームも静かだった。四人のあいだには、沈黙が降りていた。

達也の口から語られた、五年前の夏、不思議な思い出の記憶。閉め切られたドア口に、アルが腕組みをして立っている。

達也は、どうにか泣きやんでそれでも床の上へあたりこんだままだ。

凜と龍子は安手のオフィスチェアに座っていた。

凜は顎を背もたれに乗つけて、両腕で抱きしめるような格好になっている。

唸りながらも、となりのチェアの龍子を見た。

「五年前にさ、ノリさんが中二のときか、紅葉ヶ丘神社で外人の女の子助けたってのは、おれもノリさん本人からまえに聞いたことあったけどさ」

凜は混乱した様子で、龍子に救いを求めるように見てきた。

龍子は、その神秘の色の瞳を閉じて、口元へ思慮深げに握った拳を当てている。

考える人、のポーズだ。

「私も、凜兄とおなじくらいのことしか、ノリさんからは聞いてないわ、ともかく重要な点は、あの当時、ノリさん、タツくんふたりを襲った不可解な記憶障害、ノリさんとタツくんが紅葉ヶ丘の病院から数百キロ以上離れた鳥取砂丘で保護された件、たしかにマリア・エスターライヒ名義で短期留学してきたオーストリア人の女の子を

龍子は、いったん口を閉じた。

「どうして？マリア？が偽名で？アヌーク？を本名だと思ってしま
うのか、だな」

アルが言葉を引きついだ。龍子がうなずく。

「そう、それだよアルさんっ」

凜がおおげさに首をふって、達也のほうをむく。

「タツちゃんてばさ、大学は理工学部進学はもう決めてんじゃん？
ゴウリ主義つつつか、なんつつか、将来の科学者のタマゴとして
さ、その立場からどう思うわけ？」

達也は座りこんだまんま、凜を見上げてきた。視線を自身のスマ
ートフォンに落とした。

「たしかにね、僕らの経験したこと、尋常じゃないんだ、わかって
るよ、でもこのスマホでネットのほうから先に速報流れたの見たと
き、アヌークの名前がテロップで流れたとき、ああ、僕ら、まちが
えちゃいなかったんだっ、って……そう思えて……」

達也はのろのろとした仕草でどうにか立ちあがった。

「でもって、カフェの二階から？S？に飛びこんできたんだ？テ
レビでたしかめるために」

凜が上目遣いに達也をじっと見つめた。

達也は疲れた様子でため息をついて、うん、と一言ちいさくいつ
た。

「もう一点、不思議なことがあるわ」

龍子は、両の瞳を開けると、アルを見た。

「なぜ、アルさん？ ふたりが砂丘で遭難したといってもよい事態
のとき、なぜ砂丘にアルさんが居あわせたのか？」

アルさん？ 嘘はとおらないわ、についても無駄よ そう思って
いるかどうかは、詩本龍子の無表情からはわからなかった。

「なに、カンタンさ、リョーコ」

アルが、ひよい、肩をすくめる。

「五年前のあの夏にな、タツが病院からシツソウしちまった、でノ
リを勇気づけたくって、ノリのケータイにかけたことがあったんだ、

出てくれなかったよ、それで心配して紅葉ヶ丘署までいったらオバサンに行くわしてね」

「おばさん？」

凜が口を挟む。

「そう、オータニさんという人だ、ユリスの学食であの当時調理師をしていた人だよ、オレとおなじでノリとタツを心配して署に相談しにきてくれていたんだ、そこで第一報を聞いたんだよ、ふたりによく似た少年たちが砂丘で見つかったってさ」

「たしか……お盆の時期だったわよね？ 交通機関はどうしたのかしら？」

アルは片手を挙げて、人差し指を、くるん、ターンさせた。

「空の上、ケーサツのヘリに乗せてもらえたんだ」

「すっげえ、ヘリ？ アルさんマジかよっ、初めて聞いたぞそんなの」

凜が興奮しだした。

「……ずいぶん、特別待遇ね？」

龍子はいくまで無表情だ。

アルは、頭を掻いた。

「ふたりの親父さんの顧問弁護士が大物でね、その、口利きがあつてケーサツが動いてくれたんだ」

はっ、と達也がアルを見た。

川上徳人、杉浦達也、その両親 凜も、龍子も、兄弟と両親とがどれだけ冷え込んだ関係かは、なんとなく察している。親権の問題から、兄弟の苗字のちがうことについても。

「……そうだったの」

龍子はいうと、また考える人、のポーズをとった。達也に、ふらり、目をむけて、

「なににせよタツくんからノリさんに連絡をとらないといけないわね、それからそのアヌークって女性のいま現在の写真、入手しないと話は始まらないわ、五年の月日で当時の少女の容貌がどのくらい

かわってしまったているのかが、心配だけれど」

「あつ、そ、そうだよね……とつ、とにかく、真つ先にのり兄ちゃんに教えてあげなきゃっ」

達也がすぐにメールを打ち始める。

凜がみんなの顔を見て、

「オーストリアってさ、時差とかどうなんの？」

「中央ヨーロッパはこの季節サマータイムだ、いまウィーンはマイナス七時間だな」

アルが答えた。

杉浦達也は、丁寧にメールを打った。一語一語、真剣に考える様子で。兄の徳人のために。

せっかく今年進学したばかりの聖ユリスモール修興大学からすぐさまオーストリアの大学へと留学していった徳人。英語とドイツ語を猛勉強したけれど、お世辞にも上手いとはいえない徳人。

少女を捜すために日本を旅立った、ひと目、もう一度？アヌーク？という少女に逢いたいがために、オーストリアへとむかった徳人のために。

「不思議な縁よね、凜兄？」

「って？ どういうこと」凜は龍子の言葉を待った。

「アヌーク・エスターライヒ……同姓同名の別人でないとしたら、ノリさんとアヌークはゆきちがいになってしまったんですもの……皮肉だわ」

スタッフルームに、また沈黙が降りた。達也の真剣なメール操作以外、誰ひとりとして身じろぎひとつしなかった。達也が送信したスマホに放心状態の様子に視線を投げていた。

それから三人の顔を見渡す。

「五年前の、アヌークの写真……じゃないんだけどね、彼女の肖像画を撮った写真ならあるんだよ……アヌークのもっていた懐中時計の蓋の裏に、描かれていたんだ」

達也はそういって、自身のスマホに保存してある画像を三人に見

せた。

それは、円形の金属に嵌め込まれた肖像画を接写した画像だった。ふたりの少女の肖像画。

古風なドレスを身にまとったうつくしい少女たち。左側の少女は、眼力がつよい、肩ぐらいまでのプラチナブロンド、白く輝く髪に蒼い瞳の少女、小柄な少女だ、年の頃は中学生くらいといったところか？

右側の美女、背が高い、長い黒髪、黒い瞳、その瞳は、世界のすべての敵から左の少女を護ってみせる、そう宣言するよう、見る者を威圧してくる誇り高い眼差しをむけていた。その証拠に左の少女の肩に親しげに手をおいている。

「きれいだな、姉妹かなあ？ 髪の色とか全然ちがうけど……どっちがアヌーク？」

「左の小柄なほうの子だよ」達也が凜に答える。

「タツくんは、アヌークと面識はあるのかしら？」

達也が困惑げに表情を歪めてしまふ、龍子の問いに窮した様子だった。

「……………ないんだよ、彼女とは僕は、逢ったことがないんだ、でもわかる、左の子がそうだ」

「謎が増えたわ、そう断言できること自体、謎につつまれてる、タツくんの記憶がもどってくれば、その謎も解明できるわ」

龍子の静かな、語りかけてくる口調、励ましてくれているかのような、そんな言葉に、うなずいた、達也は強く、うなずいた。写真を見ながら。

スタッフルームの窓から、外のカエデ林が見えた。

神奈川の空。六月の梅雨時の霧雨は、いまま静かに紅葉ヶ丘の丘陵地帯に降りつづいていた。

47、イレーヌ

横浜の空にも、おなじように霧雨が落ちていた。

ホテルの四十階の窓の外、眼下には新横浜駅、その市街地がひろがりを見せている。

その少女は、うつくしく白く、金色に光り輝くプラチナブロンドのショートヘアを左手でさわった。たれ落ちる前髪を煩わしげにいじった。

その蒼い瞳は、獰猛な肉食獣が獲物をまえにして見せる、そんな光に充ち満ちていた。

右腕は金属製の杖の一種、ロフストランドクラッチの腕支え（カフ）にあずけられてあった。歩行に支障を来した人の使う杖だ。右脚を悪くしたからこそ使っているはずなんだろうに、両脚は、しっかりと、ホテル？グラン・パレス？の最上階、インペリアルスイートルームの高級絨毯を踏みしめている。ちいさな右手は、杖から突き出た取っ手を握りしめていた。

怒り、に打ち震えているといつてもいいくらい、強く握りしめていた。

その激した瞳、たたずまい……中学一年くらいの幼い、麗しい容姿とはおよそかけ離れている。その瞳がうしろをふりむく、身にとった質素なドレス 喪服といってもよいくらい、漆黒のドレスのスカートが、ふわり、翻った。

広々としたスイートのリビング、その壁際、シックなマットブラウンのソファに男がふんぞり返って笑いこぼしている。黒人の大男だった。携帯ゲーム機で遊んでいるのだった。

「黙れっ同志スカラワンガよっ」

ドイツ語で叫ぶ、幼い声にも、はっきり、怒りが滲みわたっている。

スカラワンガ、そう呼ばれた黒人は、一言、おっかねえ、そうい

ってニヤツと笑った。それでも？少女の命令？に従い、下品な笑い声を静めた。

スイートのドアの鍵の開く音がした。

ドアから老人が現れた。

陰鬱そうな、険しい顔つき。老人といってもよっぽど鍛えているのか、背筋はしっかり張っている。老人の背後に、屈強な日本人の男がひとり、若い女がひとり、つづいて入ってくる。神奈川県警察、警備部外事課の刑事たちだ。

少女は刑事の姿をみとめた途端、？演技？を始めた。

「おじいさま……」

「待たせたねアヌーク」老人がいたわりの声をつくる。

黒人の男、スカラワンガは直立不動の姿勢をとった。

「ミスター・ジシユカ、捜査へのご協力、感謝いたします」男の刑事がいった。

「ニッポン警察のため、当然の協力をしたままでのことです」
イヴァン・ジシユカはしわがれた日本語でしゃべった。

男の刑事は三人を見渡した。

「皆さん、日本語がお上手で我々としても助かりました、依然としてテロの危険性は残っていますので、警備は我がチームが嚴重にいたします、お任せください」

「このスイートには自分がありますので警備部のSPは入室を控えていただきたい」

スカラワンガが、先ほどとは打ってかわった神妙な口調でいった。
「ですが……ミスター・スカラワンガ、いくらあなたがプロのボディガードとはいえど……」

「この部屋では我がチェコ共和国の外交機密が扱われます、よって彼の言を呑んでいただきたい、SPの方々は、別室を拠点にして、警備をお願いしたい」

ジシユカはきっぱりと刑事にむかって宣言した。ここにいられては困る、と。

男の刑事は苦渋の面持ちをうかべてから、承諾した。一礼して退去しよう、としたが。

「どうした」

男が女刑事の肩を叩く。彼女が、窓辺で杖をつく少女を凝視していたからだ、正確には、少女の右腕のロフストランドクラッチを、驚きの眼で見つめていた。

「……その刀、日本刀？ レプリカのおもちゃか何かですか？ アヌークさん？」

女刑事の言葉に、上司の男が啞然となる。

少女は、意味がわからない、そんなふうにな首をかしげ、不安そうな顔をつくって見せた。

「お前、なにをいってるのかわかっているのかつ、あれは杖だろっ」

男の声は叱責も同然だった。

ジシユカが女刑事に近づく。

「孫は右脚を悪くしておりましてな、あれは歩行を助けるロフストランドクラッチという、松葉杖の親戚のようなものじゃが」

ジシユカがそういいながら、彼女の肩に手をおく、と、びくつ、と女刑事が肩を震わせた。

女刑事と老人の視線が交錯する。女の顔に怯えが走り、老人から目を背けるようにして、また少女の？杖？を凝視した。

杖、だ。たしかにそれは杖だった。

どこからどう見ても、歩行補助用のアルミ製の白い、ロフストランドクラッチ。

女刑事がすぐに深く頭を下げる。

「私の見間違いです……もっ、申し訳ありませんでしたっ」

ジシユカは、とり乱している若い女刑事にやさしい笑みを送った。それから上司の男を見た。

「君の部下は任務で相当緊張しておられるようだ、いや、無理もありませんがな」

「……部下の非礼をお詫びします、ミスター・ジシユカ、アヌーク

さん」

男がいつて彼女の肩を引つ張る。女刑事も平謝りで何度も頭を下げる。男が、そんな彼女の腕を引つつかみ廊下へ押し出す。ふたりの刑事は、色を喪つて退出していった。

スカラワンガがすぐに鍵をかける。少女とその杖を見て、いやらしく失笑した。

「あーあ、その？杖？のせいで余計面倒くせえことになってきやがつて、なあジイサン、いきなりハイヤーの爆発ときたもんだぜ、？十字軍？に俺たちの行動筒抜けじゃねえかよ、誰かさんが、その顔、その名前で入国してきたせいだよ、な？ その杖をひっさげてきてよっ」

最後の口調に嫌味がこもっていた。少女に対してむけた嫌味だった。

演技？をやめたスカラワンガは横柄にまたソファにふんぞり返った。

「馬鹿をいうなスカラワンガ、？内教院？は、何年もまえからすでに私が姉君の眷族であることを嗅ぎつけておった、それに……ヒトの女には、時折侮れぬ？靈感？の持ち主もいるものよ」

老人は少女に目を転じた。

「姉君、これはしかし……予断の許されぬ状況にございますぞ」

ジシユカは、少女にむかつて？姉君？という言葉を使ってきた。

「うむ、承知しておるわ」

少女も？演技？をやめた。自分の？杖？にむかつてなにかドイツ語でちいさく悪態をついた。

ジシユカは大型の旅行鞆からノートパソコンをとりだした。

「ジシユカよ、？エシユロン？に通信を悟られてはならぬぞ」

「御意、無線ではなく光ファイバー回線で連絡をとりますゆえ」

？エシユロン？ アメリカの誇る世界規模での通信傍受システムだ。その組織のスタッフたちに相当数の？教皇十字軍？の協力者が入りこんでいた。安易な無線通信はすぐさま傍受されてしまう恐れ

があった。このスイートに盗聴、盗撮機器の設置されている危険性のほうはなかった。チェックインしたあとスカラワングが徹底的に調べていたからだ。

老人が、スイートに設置された高速ネット回線設備とノートパソコンを接続、よどみなく操作する。ネットでテレビ電話の回線がつながった。

最初に通信士官と短い会話を終えて、薄暗い別室が画面に映しだされた。背景は木造の壁だった。民家の地下室、そんな印象を与える部屋だった。

少女、それにイヴァン・ジシユカ、スカラワングの三名が最敬礼する。

相手は若いアジア系の青年だった。顔中に赤い発疹が生じている。新しい？呪肉体？が早くも拒絶反応を示しているのだった。

カルマびとはヒトに呪肉すると、その肉体を再構築する必要に迫られる。

結果、かならず最初に？祖体？とつりふたつの容姿になってしま

う。

ちょうど五年前、アヌークが杉浦達也に呪肉したときのように。この男は、かならず祖体の容姿から呪肉した相手の容姿に変身するのが常だった。使役霊のパワーを使って、あたかもカメレオンのように。これを？擬態？と呼ぶ。

いま青年は、となりにいる若い女性看護師の手で、顔に医療用クリームを塗られていた。

ザマを見る、少女は思った。

クヴィスリング卿。？父祖の戦列？極東総軍司令官。序列第？列クヴィスリングは少女の姿を非難じみた目つきで睨んできた。

少女が先に口火を切って、

「閣下、閣下の？擬態？お見事でございます、小生いつもながら感服いたします」

『……君も……君も見事なくらい妹に擬態したものだね、同志イレ

「又」

「恐悦至極」

『私は、まったくの別人に擬態するよう……君に、命じたと思っていたのだがね』

「この姿、我が妹アヌークへのせめてもの手向け、十字軍への挑戦状とご理解賜りたい」

クヴィスリングは、デスクの上においた人さし指をコツコツ、神経質そうに叩いた。

『……特別、特別に不問に付そう同志イレヌ、さて、空港で手荒い歓迎を受けたと聞いたが』

「出迎えの車輛の運転手、十字軍の未熟な眷族でありました、小生が悪霊ゼータ・ウフシロン引導率20を見られぬよう手の奥に招喚した途端、この眷族めは、その霊波動に臆した様子で逃亡いたしました、故に我等もすぐさま車輛より離れた由にございます、爆発はその直後でございました」

『司令部では、十字軍から？悪霊ゼータの攻撃を受けたものと推測が立っていたのだが』

「否、ニッポン警察によると、遠隔操作による爆弾が車輛に仕掛けられていた、とのこと」

『ほう、あくまでテロリストの犯行と、そう印象づけたいようだね十字軍は？』

「小生も同意見であります」

ゼータ（ ）は使役霊の一種、悪霊ディモンを意味するギリシヤ文字の符丁だ。ウプシロン（ ）が20の引導率を表している。21を最強とする引導率の体系において、彼女の配下のこの悪霊は凶悪さを極めているとあってよいだろう。

クヴィスリングは、ニッポン警察のイレヌたちへの身辺警護が彼女らの？任務の邪魔？にならないよう、手をまわしておこう、そうイレヌに告げてきた。

「閣下、それは我が父祖の戦列もニッポン警察内に有力なる眷族な

いしは現地協力者の確保に成功している、と考えるよらしいのでしようか」

『それは君の知る必要の無い情報だ』

クヴィスリングは実に素っ気なくイレーヌの質問をふりはらうと、『では、本作戦の詳細は別ファイルにあるとおりだ、同志イレーヌ、序列第？列の実力、期待させてもらうよ』

「まだ、問わねばならぬ儀がございます」

卿は、また人さし指で、コツコツ、デスクに音を刻み始めた。気の触れた通信士の打ち出すモールス信号かなにかのように、それははるかシベリアの彼方から、日本の横浜まで伝わってくる、耳障りなまでに。

『……なにかね？』

イレーヌは、すうつ、とそのちいさな体躯に呼気をため、吐きだすようにしゃべりだす。

「我が未熟なる妹アヌーク、五年前の一大反攻作戦？オペラツoperat
ion ヴォルモントvollmond?への参加という大役、なにゆえ、先に
申したよう、なにゆえ未熟なる愚妹に大命が下ったのか？なにゆ
え小生が幾たびも進言したニツポン再侵攻がその都度延期の憂き目
に遭い、ついには五年もの時が経ってしまったのか？」

『のちほど正式な回答を用意しよう』

「では、一点の曇りなきお答えを頂戴いたしたく存ずるっ」

『私は序列第？列なのだが、君は、君は、序列第何列かね？』

「第？列の序階の栄誉を賜っております」

『そういうことだ、うん？　あまり私を』

イレーヌが、右腕を直角に曲げる最敬礼をする。

「父祖よ永遠なれっ」

よりによって卿の叱責の言葉を遮り、戦列への忠誠を誓う合言葉
を述べた。

クヴィスリングの怒りが　おそらくいままでたまりに溜まっていたの
だろう、彼女の不遜極まりない態度に対する怒りが　頂点

に達した様子を見せる、唇を震わせ始めるほどに。

イレーヌはちいさな手をノートパソコンにやり、回線を自分側から切ってやった。

スカラワンガは、回線の切れてすぐに、下卑た大笑いを始めだした。

少女は、自分の左後ろに立つ黒人を睨み上げた。彼女の右後ろに立つイヴァン・ジシユカも冷たい視線を黒人に送った。スカラワンガが、まだ笑いの余韻もさめやらないうちに口を開く。

「傑作だぜ同志、いつか卿の旦那とおっぱじめると思ってたけどよ、こつも早く」

「口を慎むがよいじゃろう同志スカラワンガ」

「あ？ 眷族のジジイが？カルマびと？の俺様に意見すんじゃないやねえよ」

「儂も貴殿も序列はおなじく第？列、遠慮はせんぞ」

老人と黒人は睨みあった。

「……それが気に食わねえんだよ、眷族の分際で？列つてのがなあ……」

「控えよイヴァン・ジシユカよ」

老人は、少女の言葉に対しては、御意、とその一言ですんなり一礼して、押し黙った。

黒人は両手を自分のスキンヘッドにやり、頭をかきむしった。？ファック？と悪態をつきながら。老人のほうは、すでにスカラワンガなど眼中にない、そんな態度をとっている。

少女は、ふうつつ、と吐息をついた。

「？擬態？を解くぞ」

「御意」

ふたりがスカラワンガに一瞥をくれた。

「……つんだよ？俺はボディガードだぜ？いいじゃねえか別にアタのヌードくらい」

「小生は貴様ごときに、我が裸身を晒すほど安くはないぞ」

「……へっ」

黒人は、オーバーアクションで両腕を伸ばして、降参のポーズをとった。

携帯ゲーム機をひったくると、足早にスイートルームから出ていった。

少女が、ブラックで統一されたドレスを乱雑に脱ぎすてる。上下ともに黒のブラジャーとショーツも引きちぎる勢いで捨て去った。

一系まとわぬうつくしい、白い裸身が露わになる。

イヴァン・ジシユカの両眼には、好色の色は一切なかった。

唯、己の主人^{あるじ}への絶対的服従と超越者？カルマびと？への畏れの色だけがあった。スーツの懷から、丸い小瓶をとりだす。純金のキヤップを開けて、小瓶の純水を少女の肩にふりかける。

使役霊の一種、守護霊招喚のための？水？だ。

純水が少女の肩からゆたかな胸のふくらみへと伝い、流れ落ちていった。

老人が呼気を溜めて、静かに、おおきく吐きだした。吐息が少女にかかる。

おなじく使役霊、憑依霊招喚のために必要な？風？を少女に送ったのだ。

老人の右の掌に使役霊がふたり、招喚されてきた。

蒼白に煌めく魂の光。暗緑色に昏い色をした魂の光。

いっぽうが守護霊、もういっぽうが憑依霊だ。

「姉君、失礼つかまつります、何卒ご寛恕の程……」

「うむ」

少女の左手が、すらり、老人の右手にさしだされる。老人がその手を握る。

ふたりの使役霊が一気に少女の裸身に襲いかかる。

「っ」

少女が嗚咽を、悲鳴をこらえる。全身を襲う苦痛、髪の毛から、脚のつま先までそれこそ体細胞のひとつひとつが、守護霊の力で爆

発的に分裂、増殖してゆく、憑依霊が少女の脳細胞に働きかける。

成長せよ、と。

背骨、両手両脚、すべての骨格から、みしり、音さえ鳴り始める。すべらかな白い肌、筋肉もそれに負けじと増殖、骨格の成長に追いついてゆく。

その裸身は、ほそく、たくましく、まだ幼かった中学一年くらいの体型から高校二年ほどのそれへと急速に？成長？し始めた。蒼白の光、暗緑色の昏い煌めきが少女のうつくしい白い肌の上で、渦を巻く、プラズマのスパーク現象のような稲光が照らしだす、蒼と、白と、暗緑の霊たちの饗宴が踊り狂う、広大なスイートルームを異空間に変貌させてゆく、その部屋の隅々までを。

少女の脳内から激痛に対抗して、脳内麻薬様物質の一種 - エンドルフィンを始め、おおくの化学物質が分泌されだした。

少女は頬を赤らめ、四肢を痙攣させた。激痛から陶酔の快樂へと刺激は急変していた。脳内モルヒネとさえいわれる、エンドルフィンが少女を性的興奮へと導いてくれた。

医学博士として人体構造を知悉しているからこそできる、憑依霊の使役命令だった。

イヴァン・ジシユカ。単なるイレエヌの眷族ではない、チェコ共和国とヨーロッパ社交界、その上流階級に君臨すると同時に、医学博士、考古学者としても名を馳せる名士だった。

イレエヌの、最も篤い信頼を勝ち得ている、彼女のもつ眷族のその大半は五年前のウラジオストク攻防戦で十字軍に滅ぼされた生き残りにして最強の僕しもであるといえた。

成長は、やんだ。

長く、うつくしい黒髪。幼さを脱し、妖艶にして？女？のもつ美麗な曲線のみで構成された白皙の肢体。それでもどこか、未だ十代の少女のもつ初々しさ、？男の穢れ？を知らぬ清廉な？美？を兼ねそなえていた。全身に火照りと、快樂を味わった残り香、余韻の玉の汗が光り輝いている。それでもイレエヌは、膝を決して屈したり

はしなかった。激痛と快樂の奔流をのりきつて、両脚で立ちつづけていた。ロフストランドクラッチを支えにしながら。

イレーヌは、妹アヌークに変貌していた擬態を解かれ、本来の容姿をとりもどした。

？ 祖体？の容姿を。

イレーヌは祖体保持者だった。

切れ長の大きな両の瞳、燐光を放つ艶やかな黒い瞳が右腕のロフストランドクラッチを睨めつける。

「同志ファレ・スよ、このうつけめがつ、時間であるぞっ」

？ 美女？に変貌を遂げたイレーヌが　いま発した言葉も変声しており　その身長に不釣り合いになった短い杖をベッドの上に、そうつ、とおいた。彼女に、ふわり、老人の手で深紅のバスローブがかけられた。イレーヌが、ジシユカのうやうやしい手つきとともに、両腕に袖をとおしていった。

杖に……ロフストランドクラッチに……ある、変化がおきだした。白っぽいアルミ製の杖。その全体が、暗緑色に輝きを放ち始めたのだ。

強い輝き、それは、使役霊の一種としての憑依霊ではない、憑依霊と化したカルマびとの魂、その霊体が杖から溢れ、出現したのだ。つた。

同時に、杖だったものは、鞘に収まった？ 中巻野太刀？に一瞬で変貌を遂げた。

物質が変化したのではない。カルマびとの擬態とはちがう、それは最初から刀だったのだ。

たた、周囲の見る者に？ロフストランドクラッチ？であるという幻覚作用を与えていたにすぎなかった。

その、暗緑色に輝くカルマびとは、ハンサムな青年の姿になった。皮肉っぽくほのかに笑んだ容貌、女と遊び倒してきた男の表情に見える。

ただし、彼の身長は二〇センチちょっとしかなかったけれど。

「貴様先ほど手を抜いておったであろうっ」

「すまん、イレーヌ、疲労のあまりついうたた寝をしていたのだよ？」

「……貴様っ、小生を愚弄する所存かっ」

イレーヌが怒気を露わにする。ジシユカも、ファレ・スの言葉遣いに顔を顰めた。

「悪気はないのだよ、まあ、以後は幻覚作用を切らさないよう注意するさ？」

「……もう、よい、天界に封印してやるゆえ、ゆるりと休め……」

イレーヌが投げやりに右手をさしだす。

ファレ・スという名のカルマびとは、待つてましたとばかり、ふいつ、とイレーヌの腕に跳びのつた。

「おやすみイレーヌ、天界できみの夢でも見てくるとするよ？」

ファレ・スは笑みながら、イレーヌの美しい胸元にダイヴした。

胸にむしゃぶりつくように密着して、すうつ、と消えていく。

ファレ・スは、イレーヌの精神世界を通過して、天界に封印されていった。

「痴れ者が」

イレーヌはもう相手をする気の失せた様子だった。この男、一事が万事、この調子なのである。怒るほうが馬鹿を見るといつてもいいぐらいだ。まったくもって厳格な？父祖の戦列？戦士には似つかわしくない、あまりにも場違いともいえる男だった。

イレーヌ、ジシユカ、スカラワンガ、ファレ・ス。メンバーは、今回の作戦に備えるため、シベリアの無名の小村に去年集結した。以来、この情弱なくせに自由放埒な？列のカルマびとには手を焼くばかりだ。

イヴァン・ジシユカはそんな疑問を率直に述べるのが常だった。いまもそうだ。

「常々考えるに……この者、序列第？列ながら姉君の霊波動に怖れを成さぬ……いささか尋常ならざるカルマびとにございますな、現

世での呪肉にも執着せず、天界でのうのうと惰眠をむさぼりたがるなど……言葉を失いますぞ、恐れながら姉君とおなじカルマびとのひとりとは思えませぬ」

「ふむ……ただのうつけ、と見てとるべきか？ ジシユカよ？」

老人は首を横にふった。

「うむ、わたしもそう思う、このファレ・スという輩、得体が知れぬ……」

「では、クヴィスリング閣下の息のかかった者、でございますか」「否……」

こんどはイレーヌが首をふった。

「仮にクヴィスリングの手の者であるならば、その意を受け、いまますしそれらしい態度をとるものよ、ちがうか？」

「御意、たしかにそのとおりにございますな」

「いずれにせよ、気を抜いてはならぬ、ファレ・スにも、スカラワングにも、な」

老人はうやうやしく首肯した。

イレーヌはバスローブの襟元を強く締めあげた。見事な形をした胸の谷間ができあがる。

健全な男が見れば、鼻息を荒くするどころではすまない、そんな艶やかな仕草、たたずまいだった。あくまでその内に秘めた獐猛な？野獣の牙？を別にすれば、の話ではあったけれど。

美少女は己の愛刀を手にした。

しやらん、鞘鳴りをかるやかに響かせながら、刀身を抜いた。

太刀の一種、中巻野太刀。

刀身はおよそ四尺 約一二〇センチ からなる大ぶりの野太刀だった。

銘は、？妖刀・黄泉洲行路義光？

美少女は、無機質な、けれど輝く瞳を愛刀にそそいだ。中世の騎士のように、不吉に白く光る刀身を垂直に掲げる。捧刀の礼だ。一騎打ちの相手に、これから斬り殺す相手にせめてもの礼を尽くす、

そのため、そんな荘厳な立ち居振る舞いに見えた。

美少女の眼前の凶刃、数多の十字軍団員の肉体を斬り捨て去ってきた、野獣の牙。

麗しい使い手のもつ性さがとあわせて、それは文字どおりふたつの美貌の牙と違ってよかった。

「愛しき妹よ、いましばし待て、そなたの祖体、このイレーヌが復活させてくれようぞ」

美少女と老人は、凶刃にむかっていつそう、居ずまいを正した。

アヌークの霊をなぐさめようとするかのように。

48、チマブエとマティルダ

深夜。日付はかわった、土曜日。横浜の雨はやんでいた。ホテル・グランパレスの三九階からは、陰鬱な雨雲に覆われた空の下、湿気の溶けこんだ闇夜のひろがっているのが見える。

その白人の男は、湿気が大嫌いだった。ロンドン時代を思いだすからだ。

霧雨に煙るロンドンを。

男は、スイートルームの主賓客の座るハイバックチェアに深々と体をあずけて、スマートフォンに耳を傾けている。中肉中背、年齢は四〇代くらいに見える。黒の高級なブランドスーツ、それに引けをとらない、黒く艶光りした本革の紳士靴を履いている。

少女がひとり、男のまえにひざまずき、その革靴を丹念に磨いていた。ちいさな手には、少女自身の使ってきた古いパンティストッキングを切ったものが巻かれてある。革靴のワックスがけは、パンストを使うと光沢がすぐに出てくる利点があるからだ。

手の動きにあわせて、かわいらしいロングの金髪が左右に揺れる。見た目は小学生くらいだ、ふたりは、傍目からは白人の父娘にも見える。

少女のひざまずくその姿は異様なものだったけれど。

スマートフォンのもこう、通話の相手が男に罵声を浴びせるのがきこえた。

男が苛立ち、片足で少女の体を蹴りあげた。

どん、と少女がしりもちをついてしまう。白い、フリルのついたドレスが翻る。

スカートがめくれ上がる。

少女は、即座におきあがり、直立不動の姿勢をとる。パンストにつけたワックスが、少女のドレスに染みをつくっていた。

その愛くるしい貌には、怯えの表情は見当たらなかった、ほんの

少したりとも。

電話の相手は怒鳴りつづけていた。

『いいかねっチマブエ少佐っ、外赦院の戦力には頼らないぞ、絶対にだ、我々だけでイレーヌを封印刑に処するのだっ、内赦院の意地をつ、プライドをつ、見せてみたまえっ、ニッポンに侵攻したすべての破門者に封印刑を執行し、私のまえに勝利の報告書を提出したまえっ』

壮年の男らしき通話者は、チマブエと呼んだスーツの男にさらに罵詈雑言をならべた。

チマブエ少佐は、顔面をチック症のように震わせ始めた。反論のため口を開く。

「先ほどから申し上げているように、我が内赦院の現有戦力では破門者イレーヌには」

『八個カンブグルツペ（KG）（戦闘団）で？ 八個KGでか？ 貴官の意見具申を聞き入れ、二個増派してやったのにだぞっ、私の権限を使ってだ、それでもまだ不足だというのかっ？』

「不足です、我が内赦院は、ウラジオストクでの敗戦から教訓を

「もっつんざりだっ」

相手が回線を切りかえたようだ、電話の奥に異変がおこった。グループ通話に切りかわる、無線通信のように慌ただしく人々の声が飛びかいた。それからひとりのオペレータが大音量で通達を発し始めた。

『本作戦参加全戦力に通達、内赦院隷下KGは本未明 一時に予定どおり作戦を開始せよ、くりかえず、本未明』

「っ」
チマブエは絶叫を喉の下に押し殺して、スマートフォンを少女の貌に投げつけた。

少女の唇が切れ、血が一筋、幼い顎につたわってゆく。少女は、無表情を貫いた。

「内敎院議会の……戦争狂どもめつ……あれだけイレーヌに手痛く犠牲を強いられて、まだ懲りないとみえますっ」

ハイバツクチェアからおきあがる、両手をふりあげる。

「わかりますか？ マティルダッ？ 議会は、私たちに、犬死にせよと、命じているのですよ……私は御免被る、東アジアのこんな辺境の島国で、破門者に封印されるなどまっぴら御免なのですよっちがいますかマティルダッ？」

マティルダと呼ばれた少女は、ちよこん、と頭を垂れた。

「仰せのとおりです（イエス）、御主人様マイロード」

チマブエは両手で顔を覆った。独り言をいいはじめ、外敎院のアルフォンス・カミュ、彼ぐらいの戦力が……そのクラスで四個Kは必要です……っ、独り言はつづいた。

「八個KGなど名ばかり、私以外のカルマびとたちは皆、野心だけが一人前の無能者ばかりです……せいぜい使えるのはKGブルーノぐらいというところでしよう、なんとしても……」

チマブエが天井のシャンデリアを見上げる。視線の先には、四〇階のスイト、イレーヌたちのインペリアルスイートルームがあった。腕時計で現時刻をたしかめる。

午前零時十三分だ。

「なんとしても私たちだけでもこの大戦を生き延びねば……ちがいますか？ マティルダ？ それが？ 政治？ それが処世術というものです」

「仰せのとおりです（イエス）、御主人様マイロード」

また、眷族の少女は、己に血を分け与えてくれたカルマびとの主人に頭を垂れた。血の滴を唇から流しながら。その瞳には絶対服従する者だけの放つ不思議な悦びがあった。

49、イレーヌ、すべては復讐のために

イレーヌは、？最後の指？を切り終えた。

左手の指、五本の指。親指、人さし指、中指、薬指、小指……テーブルの上のアロマキャンドルの火がうねり、微妙な陰影をつくりだす。スイートのベッドルーム備えつけのテーブルにあらんだ指、イレーヌの肉体の一部、それはいわば彼女の？分身？だった。

彼女が、指の切断に使った己の愛刀をスイートの床に突き刺す。刀身には悪霊ゼータ・ウラシロン引導率20を憑依してある。難なく厚手の絨毯を突き破り、鉄筋コンクリの床面に数センチ、切っ先が潜りこむ。悪霊の破壊力のまえには、コンクリート材など発泡スチロールにも等しかった。

イレーヌはキャンドルの火を見つめ、精神をまた集中しだした。火は悪霊の招喚の？触媒？の作用を果たす。一瞬で右手に五人の悪霊が招喚されてきた。暗赤色の、おぞましい光。

五人とも形状を蛇のようにならせている。

「ゆけ」

イレーヌがつばやいた。

五人が、五本の切断された指にそれぞれ憑依していった。

アロマキャンドル同様、五本の指に業火が宿ったかのような光景だ。

彼女は、指を喪った左手をすらり、横へのばした。

そばに控えるイヴァン・ジシユカがその手をとる。小瓶の水をふりかけ、また守護霊を招喚した。その治癒能力でイレーヌの左手に指が再生され始める。骨、筋繊維、血管……。

おかげで数分のうちに再生は完了した。ほそく優雅な彼女の指が元通りになっていた。

イレーヌは、深紅のバスローブを乱暴に脱ぎすてた。白く、透きとおるような肉体、その肌のいたるところに脂汗の流れができてい

る。切断の苦痛をこらえた証だ。

「貴様の守護霊たちに苦勞をかけた、短期決戦でゆくぞジシユカよ」
「御意」

擬態の解除、それに指の再生治癒のためにジシユカの使役下のふたりの守護霊は、その引導率と霊力を完全にすり減らしてしまっていた。

彼女がバスルームでシャワーを浴び始める。

ジシユカはスーツのポケットに五本の指を隠した。丁重な仕草で一本ずつ。悪霊たちは素手のジシユカに危害を加えたりはしない。イレーヌの使役命令は万全だ。隙の無い精神集中の下、殺す敵を求め、猛り狂って呪詛の言葉を吐き散らす？五人？を完全にコントロールしていた。

老人はバスルームのほうに一礼し、ベッドルームから出ていった。リビングを素通りして、廊下に出る。

神奈川県警警備部SPチームの待機する隣室へとむかった。

50、内教院、総攻撃

土曜日。午前一時　〇一〇〇時　。作戦開始時刻。刻はきた、殺戮の刻だ。

三九階、スイートルームの集まる階　四〇階のインペリアルスイートにくらいれば、ワンランク落ちるレベルの　フロアにフォーマルな装いの老若男女が集まりだしてきた。

集団は計四つ、ホテルの北側と南側、南東側にひとつづつ。最後にホテルの一階ロビーに布陣している、予備兵力のKGブルーノである。

以上が前線の戦闘部隊だ。さらに三四階のホテルの展望ルームに救護班、証拠隠滅のためのスイーパー班などのバックアップが後方部隊として控えている。ホテルの客に変装しながら。

北側の集団、先頭に、チマブエ少佐とその眷族、マティルダの姿があった。手をつないでふたりは父と娘の演技をしている。

マティルダはおおきな花束を抱えていた。六月の誕生花、白い花弁のアンスリウムの花束。

花言葉は？無垢なる心？

すぐうしろにつづくのが内教院のカルマびと、肥満体を揺らして歩くマルケッティとその眷族六人からなるKG。もうひとり、下手をすれば一〇代にもまちがわれかねない青年のカルマびと、リッツオとその眷族四人のKG。

計三個の内教院隷下キャンプグループ、総勢十四名。本作戦？オペラツィオーネ・デーライ（作戦名・復讐の女神）？の第一班、チマブエ少佐を分隊長に仰ぐ主力部隊である。

リッツオの携帯電話に内教院日本司令部から連絡が入った。チマブエが若僧のカルマびとに視線をくれる。

「第二班、第三班、予備班すべて配置良しっ、追加情報、秘跡認定局の占星官が、破門者イレエヌの擬態の解除を霊視確認っ」

リッツオが自信にみなぎる笑みをよこす。ハイスクールだったら、さぞや女の同級生にウケがいいだろう、そんな笑みだ。

チマブエは、優雅にハンカチで額をぬぐった。

イレーヌは擬態を解いた、あの女は、本気だ。

それゆえに？封印される？かもしれない恐怖からくる汗がとまらないのだ。

「御主人様、イレーヌが擬態を解いた理由……解けません」

「なにをいうのです？ 窮屈な擬態のままでは使役霊を操るのに支障を来すからです」

「ですが……ニッポン警察の護衛から見れば、？孫娘アヌーク？が忽然と消えて、突然見知らぬ少女が出現したことになります、不審に思われるのでは……？」

「……」

マティルダの言もたしかに一理ある。チマブエは黙りこみ、洗面をつくった。

ともかくも、このメンツで主力となつて正面攻撃とは……。

マルケッティ、リッツオ、ともにこのKGは数ヶ月まえの戦闘で破門者の封印刑執行に成功している。相手はたかだか序列第？列級に過ぎなかった。この時期がいちばん危ないのだ。？？列級の破門者どもを蹴散らせる実力のついたせいで、自分の戦闘能力に過信を抱き始める頃合いだからだ。

第一班はオールカーペットの廊下の上を音もなく進んでいった。

広く開けた三九階の噴水広場が見えてくる。左手に噴水、涼しげに落水を見せるウォーターウォールのモニュメント。静かなせせらぎの音がホールに響いている。

右手には壁に沿って嵌め殺し窓がならんでいる。外は闇夜につつまれていた。

正面にはおおきな階段、漆黒の石材でつくられた大階段、左上方にカーブを描いて四〇階へとつづいている。

階段のまえにはガードマンがふたりいた。いずれも初老の老いば

れだ。ふたりのあいだには緋色のロープでつながれた、真仕切りのパーティションポールが二脚。

ふたりの古いぼれは、あきれたことにシャンペンのボトルをもっていた。もうずいぶんと呑んだらしい、顔を赤らめていた。

マルケッティが嘲笑をつくり、携帯で各班に報告をする。

チマブエの顎の下、スーツの襟に隠れて骨伝導スピーカが命令を伝えてくる。

『司令部より通達、ガードマン二名は適切にあしらせ、酔っぱらいの雑魚にかまう暇はないぞ』

チマブエが小声で反論する。

「KGチマブエより司令部へ、目前の二名が破門者の（憑依霊による）洗脳被害下かどうか霊視確認を要請する」

『要請は受理しない、占星官四名は総員イレーヌに対する霊視任務で手一杯だ』

また、チマブエの顔面が小刻みに震えた。

全員の服にはピンホールカメラがセットされている。状況は内赦院日本司令部に逐一動画像となつて、リアルタイムで流れている。

チマブエがガードマンたちのまえに立つ。黒いボトルに目をやった。

「サロンブラン・ド・ブラン、これはっ、九六年物っ、これはこれは豪勢ですね」

「ああ、この階の客に新婚さんがいましてねえ、金持ちだよっ、披露宴のおっそわけをもらいましたねえ」なあ、と同僚を見る。相方もチマブエに笑って見せて、また三万円はするシャンペンをひと口呷った。どうやら敬語を使う理性は残されている様子だ。

マルケッティとリッツォが目配せをしあう、馬鹿なジジイだ、そう、目がいつている。

配下の眷族たちにも、幾分やわらいだ空気の漂うのが見える。

「私はダリオ・チマブエ、駐日イタリア大使館二等書記官です、インペリアルに宿泊する友人にお祝いをいたしたくうかがいました」

きれいな日本語でいうと、外交官の身分証を提示する。
ふたりの老人が物珍しげにのぞきこみ、愛想のいい笑みをうかべる。

左のガードマンが軽く会釈をして、ポールを右側にどける。
チマブエが花束に手をつきこみ、突然、ちいさな水風船を階段にぶちまける。

ふたりの守護霊を召喚する、ひとり自分を、片方をマティルダに憑ける、一気に階段を駆け上がる。少女の小柄な体を引きずるように。

『一般人の前で使役霊を行使するとは何を考えて
司令部からの罵声。』

「少佐ついついたいなにを？」

？でぶつちよ？マルケッツィの間抜けなダミ声　　するんですかつ、
とまでは発声できずに、声が途切れる。

左の老いばれガードマンが、マルケッツィたちにむかってシャン
ペンのボトルの口をむける、そこから赤い　　九六年物どころか、
数百年モノの怨念の集大成のように赤黒い　　光が爆発的にひろが
った。

マルケッツィの頭蓋骨が、バスケットボールのようにずんぐりとしたものが、赤い光の一閃で血飛沫を上げて吹っ飛ぶ、光はデブを貫通して、背後の眷族たち、中年の白人男性や若いアジア系女性らの頭部にも直撃、でぶつちよの主人とおなじ末路を与えてゆく。

「ブサイ：ガード守護霊結界っ」

リッツォの若い、悲鳴に近い防御命令の声　　遅い　　右のガードマンもボトルの口をむける、また光が、イレーヌの？悪霊？の光が煌めいた。

レーザー光のような直線の輝きが周囲をなぎ払う。

KGリッツォ全員の胴体が真っ二つに引き裂かれる、くずおれるリッツォの上半身、右手には純水の入った小瓶が握りしめられたままだった。使われることなく、床に落ち、小瓶は砕け散った。

カルマびとの、マルケツティとリツツオの魂が霊体を成して、滅ぼされた肉体から飛び出す。

祖体を喪ったふたりは絶叫を上げながら、天井をすり抜け、遙か上空へと退却していった。

チマブエたちはその間に四〇階に駆け上がった。

「御主人様マイクロドつ？」

なぜわかったのですか？ との問いに。

「基本ですつ、ふたりの呼気から酒の匂いが微塵もしませんでしたつ」

あの黒いボトルは最初から空瓶だったのだ、憑依霊に憑かれた被害者がアルコールを摂取してしまうと、精神操作に支障を来すからだ。

マティルダにも、納得がいった様子だった。

あのふたりのガードマンは、憑依霊の洗脳攻撃を受けていたのだつた。酩酊状態に見えたのは、憑依霊に憑かれたせいで正常な意識を喪失していたためだった。

マティルダがおおきな花束を投げ捨て、中からイスラエル製超小型サブマシンガン、マイクロウージーをちいさな掌に収める。

チマブエは四〇階の壁の死角に身を隠す。

マティルダは、己の主人の後背を守るべく廊下中央、カーペットの上に腹ばいになる、マイクロウージーの銃口を、長く伸びる四〇階の廊下の先へとむける。伏射の姿勢をとつた。

チマブエはスーツの懐から、二丁あるSIGザウアーP二二二のうちペイント弾装備のほうを出す。

ふたりとも、心得ていた。

ガードマンは無関係な一般人だ。殺害してはならない。？教皇十字軍？の戒律に抵触してしまうからだ。

チマブエとマティルダはペイント弾に憑依霊を憑けた。

階下の老いぼれたたちが、ケタケタ、場違いな笑い声、奇声を上げながら階段を上がってくる。

チマブエの憑依霊弾が二連射、ガードマンたちに直撃する、ふたりはもんどり打って階段から転げ落ちていった。

ガードマンたちの制服の襟元から、暗緑色の光が、ぬるり、這いでてきた。銃弾に憑いた憑依霊に襲いかかる。おなじ色の光同士が衝突、その輝きを明滅させる。破門者に憑けられた憑依霊とチマブエの憑依霊とのあいだで？使役霊同士の闘い？が始まった。

ふたりの老人は四肢をばたつかせ、口角泡を吹き出し始めた。

廊下の先、インペリアルスイートルームのうち、一部屋の扉が開いた。

三人のガタイのいい男たちが飛びだしてきた。

全員、目が血走っている、憑依霊に洗脳されている。

「敵は洗脳被害者、ニッポン人被害者への実弾攻撃は許可しない、くりかえすニッ」

いまさら内赦院からの正式なご命令ときた。

チマブエはチック症のようにまた顔を痙攣させる。

マティルダのウージーが火を噴いた。

ペイント弾の憑依霊が三人を精確にとらえる。

男たちの苦渋の雄叫びが四〇階の廊下に満ちる。

それでもひとりの、そのうちのひとりの手のうちから悪霊がまたしても炎を吹いた。

「御主人様っ」

マティルダの叫び、同時にチマブエが身を翻して廊下のカーペットに身を突っ伏す。

赤い奔流は、数瞬まえまでチマブエの上半身の存在した空間をねじ曲げ、壁の角を粉碎し、大階段の手すりの上半分を文字どおり蒸発させた。チマブエの背中に壁の人造大理石の破片が舞い落ちる。異臭と白煙が大階段周辺に漂った。

チマブエとマティルダが顔を上げる、男たちのほうを見る。

三人の男たちは全身を痙攣させながら、廊下に倒れている。

こちらでもマティルダの憑依霊弾と破門者の憑けた憑依霊とのあ

いだで、霊たちの鬨いが始まったのだ。

通信に複数のスタツフたちの怒鳴り声、あきらかに作戦失敗を自覚し始めた焦燥だろうか？ 何人ものオペレータの声が錯綜する。

『第一班、マルケッティ、リッツォ、祖体喪失つ 救助班急げっ』

『 第二班応答せよっ』

司令部からの怒号が連なつた。

『……こちら第二班、KGスカラワンガと交戦中………敵着族数依然不明、四名以上と交戦中つ 予備班の支援を求むっ』

『司令部より第二班へ通達、現有戦力に対応せよ』

チマブエが階下を霊視する。

顕現した悪霊、守護霊、ともに霊波動の反応は、無い。

ヒトの脳内に、巧妙に憑けられた憑依霊だけは厄介だ。

その霊波動を霊視で察知するのは、よほどの霊視能力者でなければ困難を極める。

『司令部より、第三班応答せよっ、第三班 』

『こちら 三班 破門 イレーヌと交戦中つ……エレベータに乗りこまれたっ 支援を要請 』

第三班からの通信はそれっきり、ぷつつり、途絶えた。

『御主人様っ、第三班はっ？』

『南東、シャトルエレベータ方面、のはずです……』

司令部から第三班へ、階下へ一時的に退却せよ、との命令が聞こえてきた。

応答する者は、いなかった。

『司令部より予備班へ通達、イレーヌがエレベータに乗った模様、伏撃準備に移れっ』

『予備班KGブルーノ了解した』

チマブエはスマホをとりだした。

『チマブエより第二班へ通達、速やかに撤退せよ』

冷酷無比な声で、第二班通信手からの応答もたしかめず通話を切つた。チマブエとしては、今年度の年俸すべてを賭けてもよい心境

だった、第三班は、十中八九総員戦死、二階級特進だ。

「我がKGチマブエも撤退しますよマティルダッ」

「仰せのままに（イエス）御主人様^{マイロード}」

小柄な少女はおきあがり、マイクロウジーをまた花束のなかに突っ込んだ。

階下で異変がおこった。

ガードマンたちの高級シャンペンの 三万円以上する九六年物の
の サロンブラン・ド・ブランの黒光りする瓶の口から赤い光が
飛びだしてきたのだ。

マティルダがわずかに無表情を崩す、うつくしい瞳をいつぱいに
開く。

「^{ゼータ・シグマ}悪霊引導率18？もう一方は？^{ゼータ・シグタ}悪霊引導率16？……遠隔操作する
には途方も無い精神集中を要する、凶悪なまでに高い引導率だった。

そのふたりの化け物は、噴水とは反対側、三九階の嵌め殺し窓を^{フィックスウインドウ}
軽くぶち抜いて闇夜へと消えていった。さらに廊下で転がりまわる
三人の体からも、赤い光が残光を残しながら、飛びだしてゆく、そ
のままSPたちの拠点としていた部屋に入ってゆく、部屋の窓ガラ
スの粉碎される大音響が響きわたった。

「御主人様^{マイロード}、いまのは……」

「やはり……指を使いましたね、イレエヌ……」

赤い、獐猛な光を帯びて飛翔していった合計五つのそれは、若い
女性の指、だった。

つづいてふたりのガードマンの制服から、三人のSPたちの安手の
のスーツから暗緑色に光る呪符が飛びだした。彼等に憑いて、行動
を操っていた憑依霊たちだ。窓を破壊する力を持たない五人の憑依
霊は、悪霊の壊した窓の大穴から、するり、悪霊のあとを追うよう
にして退却していった。

チマブエは階段を駆け下りた。少女があとに付き従う。ふたりは、
ペイント弾に憑けた憑依霊たちにも帰ってくるよう、撤収の使役命

令を念じた。緑の光がもどってくる、ふたりの体に吸いこまれ消えていった。五人の憐れな日本人たちは、憑依霊から解放され、失神した。

チマブエがまたスマホをとりだす。？秘蹟認定局？のとある調査官への直通回線を開いた。

「貴官だけでも御無事でなによりです、チマブエ少佐」

いかにもインテリ、そんな伶俐な声が響く。相手は待ちかねていたかのようにすぐに応答してきたのだった。こういうあたり、この調査官の有能なところであり、相手を極限にまで不愉快にさせる欠点でもある。そこへ、司令部から最新情報が飛び交いだした。

「第三班……損害大……損失はKG」

女性オペレータが、祖体を滅ぼされた第三班のカルマびとたちの名を読みあげてゆく。損害大などといわず、素直に壊滅といえはいものを軍隊とは融通が利かないものだ。士気にかかわるので致し方ない部分ではあつたけれど。

「皮肉はけっこうです、タチバナ調査官、至急カミュ中尉に伝えていただきたい件があります」

「なんなりと、少佐」

立花の声はどうにも愉快げな調子を若干帯び始めてきた。

無理もない、内敎院議会の戦争狂、ウォーモンガー強行派どもが小賢しい策を弄したつもりで、またしても、ウラジオストクにつづいてまたしても大敗を喫したのだから。

チマブエは、恥辱を感じて盛大な舌打ちをしてから、一息にしゃべった。

「イレーヌは指を使った、とそれだけいえばおわかりでしょうっ」

「了解です、少佐、情報には情報をもって報います、実は」

立花の言葉に、チマブエは絶句した。

「囧……私たちが……囧部隊……」

チマブエが礼もいわず、通話をぶった切った。

「……御主人様？」

マティルダにはチマブエのいった意味がわからない様子だ。指を使う？ 囃部隊？

「イレーヌは指を切断してそれに悪霊を憑けていたのです、指は肉体の一部、だから悪霊どもは攻撃直前まで隠れていられた、霊視にも反応せず、あの三万円のシャンペンのビンに入った指の中に隠れていたのです……ですが……」

チマブエは顔面をまた震わせた。

こんどのそれは、よろこびの震え、だった。

「ですが擬態の解除につづいて、喪った五本の指の治癒のために眷族のジシユカか、あるいはイレーヌ自身の守護霊を激しく消耗させてしまったはず……K G イレーヌはいま、主力クラスの守護霊の引導率を極端に落としてしまっているはずなのですっ」

「でも……イレーヌのように狡猾な者であれば、指の欠損を放置しているのでは？」

少女のひかえめな疑問を主人は手でさえぎった。

「あの女のメインウエポン、ヨミスコージというニッポン刀は両手で持つタイプの剣なのです」

マティルダの幼い顔に、理解の色がひろがった。

「御主人様マインロード、あの、囃部隊……というのは？」

少女のおずおずとした質問を、チマブエがまた手でさえぎる、さも不愉快そうに。

少女はすぐに口を閉じた。

ふたりは用心深く、もう一度霊視で警戒してから、ようやく身にとどまっていた守護霊を封印しなおした。

三八階のほうから客たちの声が漏れ聞こえてきた。客が騒ぎ始めるのも無理はない。防音設備の完璧な高級ホテルといえども、これだけの爆音を頭の上で聞かせられては当然だった。

主人たるカルマびとが駈け足で三九階の廊下をゆく、眷族の少女もそれ以上の駈け足で、か

わいらしい太ももをスカートから露わにするくらいの全速力でつい

てゆく。

「反撃するならば、いまが好機ですよマティルダッ、外赦院のカミユ中尉にもせいぜい働いてもらおうといたしましょうかっ、それが？政治？というものですっ」

「はい（イエス）、御主人様マイロードっ」

少女は、自分の主人へ全幅の信頼を滲ませる声音で応えた。

51、イレーヌVS・内教院KGブルーノ

ホテル、グラン・パレスの一階南東の隅に、そのシャトルエレベーターはあった。

全周囲三六〇度が、天井も強化ガラスでつくられたそのエレベーターは、床面だけは真つ当にステンレスステールで覆われていた。横浜の街並みを一望できる展望エレベーターだった。

一階ロビーと四〇階のインペリアルスイートとを往復するので、途中階にはとまらない。

エレベーターの？カゴ？はいま、四〇階に停止していた。

ガラスの扉の前で、威つい男と若い女性が、その表情を凍りつかせている。

神奈川県警のSPだった。女性は、イレーヌの？ロフストランドクラッチ？を見抜いた、あの彼女だ。男のほうはジシユカにその非礼をわびた上司である。

ふたりはスーツのピンマイクで四〇階の同僚たちに盛んに呼びかけている。

応答は、もちろんなかった。

男が短く指示を出す、女性がうなずく、男は走っていった、ホテル中央のエレベーターホールにむかって。四〇階の異変をまえにして、現場に駆けつけるつもりのようなのだ。

女性はドアまえに張りつき、県警本部と交信を始めた。堅い声で応援を要請している。

ソファに座りながら、一部始終を見ている白人の男ふたりがいた。青々と茂る観葉植物越しに、残った女性SPを注視している。ふたりが立ちあがった。そこはオープンフロア形式の喫茶店だった。レジで会計を済ませ、シャトルエレベーターへと歩いていく。奇妙なことに、十数人いる喫茶店の客のうち、約半数が一斉に立ちあがり、ふたりのあとを追うように歩き始めた。

女子大生っぽいウエイトレスが呆気にとられて、その一団を見送った。

男たちの先頭に、禿頭の男がいた。立派なカイゼル髭をたくわえている。

女性SPが一気に緊張して一団を睨んでくる。

禿頭の髭男はなごやかな表情を崩さなかった。

「失礼、カナガワ県警のSPでらっしゃいますね？」

女性SPは驚きを顔にうかべた。

「私は？アメリカ国防情報局（DIA）？のブルーノといいます、彼等は全員私の部下です」

左右の一団に眼を走らせていった。スーツのポケットからDIAの？本物の身分証？を提示する。内赦院のカルマびと、ブルーノの表の職業は、DIAのエージェントだった。

「……ミスターブルーノ、拝見します」

女性SPが強張った口調でいう、わたされた身分証をたしかめる。納得した女性が身分証を返すと同時に、ブルーノはきりだした。

「時間がありません、イヴァン・ジシユカ名誉議員を狙った相当規模のテロが発生しています」

「ミスターブルーノ、情報をお持ちなら日本側には是非提供をお願いしたいのですが」

ブルーノはうなずいた。

「もちろんです……おおつ、エレベータが下降を始めましたっ」

ブルーノが左手で手信号を出す、部下たちが　KGブルーノの眷族たちが　左右に素早く散開する。

「貴女は、一階ロビーの客の避難、誘導をお願いしたい」

ブルーノの言葉に女性SPが首肯する、顔面蒼白の状態で喫茶店へと走ってゆく。ちょうど副支配人、ガードマン数人がこちらへやってくるころだった。

日本人たちの手で、喫茶店の客たちが避難を始める。皆、不安や戸惑いを表情に出していた。

シャトルエレベータまえにブルーノと三人の眷属が残った。

ブルーノの骨伝導スピーカに、司令部からの情報が入る。

『司令部よりKGブルーノへ通達、シャトルエレベータにイレーヌの霊波動を霊視確認、当初の予定どおり貴KGの総力を挙げ、イレーヌの封印刑を執行せよ』

「KGブルーノ了解した」

ブルーノが小声で応答した。

カゴが、二八階を通過する、分速一二〇メートルの猛スピードで降りてくる。

眷属のひとり、屈強そうなアジア人がアタツシエケースから物騒なモノをとりだした。フランス軍の制式アサルトライフル、FAMASだ。ブルパップ式の特異な形状だ、大型光学照準器がマウントされている。

横にいる別の眷属がおおきめのキャリアバッグから軍用ヘルメットを出す。片眼鏡式のヘッドマウントディスプレイの装着されたヘルメット。

フランス陸軍の誇る？未来歩兵・FELIN？の装備だった。

アジア人がヘルメットをかぶり、ケーブルをFA MASに接続、その間にブルーノがタバコに火をつけ、悪霊を招喚、ガラスドアの下半分を難なく切断する。大人サイズの穴が開いた。

いつのまにか、シャトルエレベータは停止していた。

二三階付近だ、途中階にはとまらない。逃げるドアは各階にはなかった。ガラス張りのカゴは、逃げ場のない密室と化した。

ブルーノとアジア人がドアの穴から昇降路の縦穴に進入する。ふたりが小瓶から水を撒き、守護霊を招喚、身を守る結界を展開する。ブルーノが懐から弾倉^{マガジン}を出してアジア人の眷属に渡す。強力な悪霊十一人の憑依した弾丸が装填されてある。

ブルーノに通信が入ってくる。

『ブルーノッ、私たちを囿に使いましたねっ？』

チマブエの怒りの声。ブルーノがほくそ笑む。

「すまんなチマブエ、イレーヌの首級は　　霊体の隠語　　我がK
Gブルーノの獲物だ」

エレベータの機械室には、本作戦予備KGブルーノの眷族が配置されていたのだった。カゴの停止は故障ではなく、眷族の工作によるものだった。

イレーヌが擬態を解いていれば、神奈川県警SPの目がある、いつまでもインペリアルスイートにはいられない、戦闘になれば、かならず階下に降りてくる。もっとも素早い手段は、途中階の客らに邪魔されない、このシャトルエレベータをおいてほかにはない。

この作戦は、最初からイレーヌを密室に閉じこめ伏撃する計画だったのだ。

「撃てっ」

ブルーノが叫ぶ。アジア人狙撃手が、ヘッドマウントディスプレイの精密照準で真つ暗な昇降路の頭上にフルオート連射した。悪霊の赤い光弾が、残光の尾を引いて暗闇を奔ってゆく。

ブルーノの顎髭面に勝利を確信する笑みがひろがり　　。

それは、目を疑う事態だった。

昇降路の上方、蒼白い光が見えてきた、それはどんどんおおきくなり　　落下してきているのだ　　イレーヌだ、守護霊を身にまとい、抜刀した彼女が切っ先をむけて落下してくる。

彼女の直上、地上約九〇メートル付近にあったエレベータのカゴが悪霊の直撃で爆発した。

「　　つつっ?」

ブルーノの笑みが引きつる。

イレーヌは、悪霊弾の直撃するまえに自ら床を刀で引き裂き、落下してきたのだった。

イレーヌの守護霊は無傷、悪霊弾は命中してはいない。

彼女は昇降路の側壁、角ぎりぎりのところから落ちてくる。

十一発の悪霊弾とはすれ違っただけだった。

イレーヌが守護霊の結界に守られ、一階に降りたつ、愛刀、黄泉

洲行路義光の切っ先が、アジア人着族の守護霊結界を一撃で引き裂いていた。

アジア人の守護霊が引導を渡され、イレエヌの悪霊と化す。

男が悪霊の光につつまれ、FELIENの最新装備一式とともに爆死する。

「ひっ　っ」

ブルーノが昇降路から逃げだそうとする。

「我が刀下の鬼となるがよいっ」

イレエヌが叫ぶ、獲物は逃がさない、アジア人の守護霊だった悪霊をブルーノに憑ける、両者の引導被い、ブルーノの守護霊がそれなりに強い引導率を誇っていたけれど　削られ、霊力も落とす。さらに加えてイレエヌの斬撃　黄泉洲行路の刀身の悪霊が、引導率20の怪物的な悪霊が咆吼をあげる、ブルーノの体を、弱った守護霊ごと真つ二つに切り裂く。

ブルーノの守護霊も、イレエヌの悪霊と化した。

ガラスドアの上半分を斬りわけ、悪霊を憑けたままのブルーノの亡骸を刀に突き刺し、外へと放り投げる。

ブルーノの霊体が怨嗟の声を上げながら、滅んだ肉体から離脱していった。

霊体を失った上半身が、エレベータを包囲していた着族たちの右翼側へと宙を舞っていく。

着族たちの悲鳴、ブルーノの上半身がひとりの着族に真つ正面からぶつかった。

着族たちは愚かにも　ホテルの客に目撃される危険を考えれば賢明　結界のための守護霊を招喚していなかった。

悪霊の爆発、数人の着族の体が吹っ飛び、一階の床がえぐり取られる。爆風、煙、ヒトの肉と脂の焦げる匂いがあふれかえる、喫茶店の観葉植物たちがなぎ倒された。

イレエヌが一階の廊下に躍りでる。

彼女がドアから出た直後、総ガラス張りのカゴが一階に落下して

きた。昇降路の床に激突、爆風とともに無数のガラスの破片と灼熱を帯びたステール材がドア口から、廊下や喫茶店に溢れ、降りそそいだ。イレーヌの体を覆う蒼白の結界に破片が当たり、跳ね返されてゆく。

その身にまよっているのは、美しい守護霊の蒼白の光、着衣は黒のタイトなフォーマルジャケット、黒の細身のネクタイ、白いブラウス、黒のプリーツミニスカート、ほそい腰に巻いた黒革のベルトには黄泉洲行路義光の鞘を差している。

妹の弔い、そのための喪服。そのための闘いなのだ。

左翼の眷族たちは土気喪失した様子で総崩れになる、廊下を走り逃亡してゆく。

彼女が守護霊と刀の悪霊を封印する。刀身を鞘に収めた。

ブルーノは中空を舞い、天井をすり、通りぬけて逃亡してゆく。イレーヌには、？封印の儀？の呪文を唱えて、彼を封印刑にする気はない様子だった。

無視した、とでもいうべきだろうか。

「ファレ・スよっ」

彼女の叫びとともにファレ・スが天界の眠りを破られ、招喚されてくる。

妖刀・黄泉洲行路義光に憑依、ロフストランドクラッチの幻覚を及ぼしだした。

イレーヌは白煙の立ちこめるなか、敵右翼側の、ホテルの南側廊下を疾走し始めた。

両手で握りしめていた？ロフストランドクラッチ？を右手に持ちかえ、ベルトに吊り下げていた小型の発煙手榴弾を数発ロビーに投擲した。手榴弾から非殺傷性ガスが四方八方、勢いよく噴出する。

エレベーターホールから、フロントの長く伸びるカウンターから、ロビー全体から客たちの悲鳴が上がる、火災報知器のベルの音が、悲鳴を圧する大音響で鳴り響いた。

ガスの充満するなか、人々の影が右往左往している。人同士がぶ

つかり、転倒する者が出る。

イレーヌは一階正面エントランスから悠然と、しかし右脚の不由な演技をしつつも外へと歩いてゆく。逃げだす客たちが彼女の左右を横切り、走り去っていった。

イレーヌの美貌、その貌に現れているのは、無、だった。

無表情、なんら勝利の悦び、その一片たりとも見せず、イレーヌ・エスターライヒは闇夜の横浜市街の中へと姿を消した。

湿気にむせ返りそうな空気をつんざき、遠く彼方から消防車輛のサイレンが聞こえた。

52、龍子のパンストと天使の翼くん

神奈川県の内陸部、小高い丘陵地帯の連なる紅葉ヶ丘市でも午前中の霧雨はすっかりやんでいた。聖ユリスモール学院高等部の男子寮。消灯時間の過ぎた午前三時過ぎ、それでも寝ないでいる、寮規違反の院生がふたりいた。

黒塚凜と杉浦達也である。

ふたりとも、凜の個室の小型液晶テレビに釘付けになっている。

NHK深夜の臨時ニュース番組だ。部屋の灯りを消した六畳程度の個室ではテレビの灯りだけが部屋のなかをぼんやり照らしていた。

「ほかに情報はないのかなっ？ 最新情報」

「タツちゃんはおれのノートブックでネットをチェックしてみてもよ」「わ、わかつたっ」

達也が凜のデスクに座ると、勝手知ったる凜のPCのキーボードをたたき始めた。

『ジシユカ氏を狙ったテロ関連のニュースは、最新情報が入り次第お伝えします』

キャスターが頭を下げる。番組が終わってしまう。画面が天気予報に切りかわった。

凜は自分のベッドであぐらをかいて、上目遣いにテレビを睨みつけていた。

テレビに映る今日のお天気速報、そんなもんなんぞ、どうでもいい。

チェコの名士、イヴァン・ジシユカ議員がかなりの規模のテロリストグループに襲撃された、よりによって大胆なことに横浜市街地のど真ん中、高級ホテルで大惨事がおきたらしいのだ。テログループは、ジシユカ議員の部屋までは入れずに黒人率いる民間ボデイガード数名に撃退された。議員は無事だけれど、ホテルの施設は爆発物で相当な被害を出しているという。

それよりも。

孫娘のアヌークに関する情報がなにひとつ、入ってこないのだ。

凜と達也は昼からずっと、ネットでジシユカ議員と孫娘アヌークに関する情報を集めていたのだった。ネットは広大というけれど、チエコの元老院議員のプライベート情報ともなると、いくら検索しても見つからなかった。めばしい情報は見当たらないところへ、突然この凶報が飛びこんできてしまった。

「僕のり兄ちゃんになんていえばいいんだろう、アヌーク、ケガとかだいじょうぶかな……」

凜はなんとか声をかけようとして、口を開きかけた。

カチャリ ドアからなにか音がした。

ふたりが顔をむける。

鍵をかけたはずのドアが開けられてしまった。

詩本龍子が入ってくる、後ろ手に鍵を閉める。昼の制服姿のままだ。

「おおよその話は途中からだけれど、すべてしつかり聴かせてもらったわ」

途中から？　すべてしつかり？

し、詩本？　詩本ちゃんっ……ふたりが口をあんどぐり開ける、急展開についていけない。

「詩本、おまえ、どうやって、あの……」

「なぜ鍵を開けられたのか？　女子寮と男子寮を隔てる悪名高い壁、通称？ユリスの壁？をしかもこんな深夜にどうやって突破できたのか、どうやって男子寮の二階に侵入できたのか？　そう聞きたいのね？」

男子ふたりして、うんうんっ、とうなずいた。

「教えたいたのは山々だけれど、凜兄の今夜のアンダーパンツの色が気に食わないわ」

「おっ、おまえっ……っっっ」

スエットを履いた股間に慌てて両手をやる。

達也がどきまぎしながら、ふたりを交互に見る。

「詩本ちゃん？ ア、アンダー？……それってあの例の？透視能力？？」

「タツくんは気にしなくてもいいわ、それよりノリさんはこのテロ事件を知っているの？」

「詩本おまえっ」

「黙れ黒パン」

凜が赤面して黙りこむ、金魚さんのように口をぱくぱく動かして、意味もなくタオルケットを下半身に巻き付けた。上目遣いに龍子を、じとつ、と睨んでくる。

龍子が達也をうながした。達也は、男子更衣室とまちがえて女子の入ってきちゃった一年坊主のような表情になっていたけれど、詩本龍子の静かな声に諭され、なんとか説明し出す。

「あのね、何時間かまえにスマホで話したんだけど、ウイーン空港に到着したって……アヌークのことは、来日してるってことしかまだ話あってないけど……」

「タツくん、賢明な判断ね、ウイーン・シュヴェヒャート国際空港からなら、成田へ国際線が乗り入れているわ、それで成田へはいつ到着予定なの？」

「もうすぐ搭乗手続きの締めきる時間のはずなんだけどね……」

「連絡してみてくださいね？」

龍子にいわれて、達也はスマホを慌ててとりだす、無料のビデオ通話ソフトを使って、オーストリアの徳人に連絡をとってみる。

相手はすぐに出た。

『おい、タツツ、おう黒塚元気か？ あれ詩本ちゃんも？ 日本は何時だったけー？』

昔と変わらない、元気な、どこか初対面の相手でもホツとさせるような、そんな声。

大学一年、今年十九歳になる川上徳人が、スマホの画面のなかでぶんぶん手をふっている。

デスクチェアに座る達也の横に龍子が、つづいて凜も顔をくつつけ寄せあってくる。

「見たところスタバのようね」

徳人の背後には、スタンド形式のスターバックスの店内が見えた。『そうなんだよっ、空港でスタバ見つけてさ、最後にエスプレッソ飲んでこーかと思ってっ、ああ、ようやくアヌークに逢えるんだなっ』

徳人の脳天気な笑顔に、達也が哀しみを押し殺した顔になる。

龍子があごに拳を当てる、考える人、のポーズになる。

「空港の地図、分かる？ たしかその空港のスタバは西ピアのC四二ゲートのそばになかったかしら？」

『ちよつとまって……ああっ、そうだよっ』

「Cゲートの集まる西ピアは、シエンゲン協定加盟国とのあいだの便専用のはずよ？」

「シエンゲン？ なんだそれ？」

凜が、ようやく気力を盛り返した様子で聞いてくる。

「ECとかヨーロッパの加盟国の集まり、出国審査なしに国際線を飛ばしあえるんだよ」

達也がいった。

『なんか知んねーけど、日本も入ってんだろ？ アハハッ』

徳人がにこにこ笑っている。

「いいえ加盟してないわ、日本の成田へいく国際線は、正反対の東ピアのほう、出国審査の必要なDゲートのほうよ？」

『……………マジ？』

徳人の顔が強張っていく。

「ノリさん？ 成田行きの便は？」

龍子の言葉に、徳人がチケットを食い入るように見つめる。

『あともうちよつとで出国審査が』

「ノリさん？ マッハよ？」

『ああああっ、うん、わ、わかったーっ』

徳人が通話を切った。

個室に言葉にしようのない、取り返しのつかない？ やっちまったな、感？ が漂った。

「タツくん？ あなたの大好きなお兄さんは、行き方は知っていても帰り方の分からない人だったようね？」

達也が半べそをかき始める。

「神様、どうかのり兄ちゃんを無事日本へお返してください、アヌークをお護り下さい、どうかふたりを逢わせてあげてください」

胸元からクロスペンダントをとりだして、健気にも祈りの言葉をつぶやきだした。

「アヌークのことなら、心配無用よ」

「どーゆー意味だよ？」

凜が龍子の顔をのぞきこむ。

「女子寮のテレビの有料チャンネルでCNNが見られるのだけれど、夕方のニュースで羽田に降りたったアヌークを見たわ」

凜と達也が、文字どおり固まった。

「……し、詩本ちゃんっ、アヌーク、どんくらい大人っぽくなってた？」

龍子が静かに首をふった。

「不可解なことに、あの写真のまま、すこしも成長してはいなかったわ、それに」

「？ それに？」

凜がいぶかしむ。

「アヌークというあの少女、右脚が不自由なようなのだけれど、彼女の持つ杖から不思議な気配を感じたの」

凜と達也が顔を見合わせる。

それって？ 男子ふたりが訊ねようとしたとき、寮内に緊急放送が流れた。

『非常事態発生、二一六号室、黒塚凜の部屋にカンガルー、くりかえす』

龍子がさも不愉快そうに、鼻にしわを寄せた、かどうかは、後ろ姿しか見えない男子ふたりにはわからなかった。

「女子が子袋を持っていてるからって、有袋類の隠語とは……好意に値するネーミングセンスね」

「どっ、どうすんだっ、バレたじゃねーかつ」

凜が血相を変えている。達也は顔の血の気が引いてしまっている。

「しょうがないもの、寮に侵入するとき、トイレにいく一年の男子に見られたんだもの」

「それをさきに言えー……」

廊下を走る音がする、女子を招き入れた？裏切り者？には、主として非モテ三年生有志一同による血の粛清が待っているのだ。

「あけるー……黒塚ああああー……」

ドアが乱打され始める。

「まったくしょうがないわね」

龍子がため息をつく、突然脚に身につけていたパンティストッキングを器用に脱ぎ始めた。

「うわああー」

達也が顔を真っ赤っかにする、凜はベッドにのけ反った。

「詩本ー……ってめ、なにやって」

「パンストをロープのかわりにして、窓から逃げるのよ」

「あっ危ないよっ」

達也が血相を変える。龍子はパンストの片方を手に巻きつけながら、

「だいじょうぶ、私、殺されても死なない体みたいだから」

それでも達也は、

「交通事故の話でしょ？ 僕も知ってるけど、偶然だよっ 幸運が重なっただけだよっ」

「四回もダンプロックに轢き殺されそうになったり、家が大火事になったりしたのに、私死ななかつたもの、だいじょうぶよ」

うつすら、笑んだ。達也は、うーん、といって黙ってしまった。

龍子が出窓に一瞥をくれる、黒のパンストを脱ぎ終えると、片一方をさしだしてくる。

「強くもっていてね」

男子ふたりは、ごくり、つばを飲みこんで 脱ぎたてほっかほかの パンストを握った。

すばらしい、まだぬくもりの残っている、それはすべらかな感触だった。

いまさつき、龍子の死なない発言のシリアスムードもどこへやら、健全な男子ふたりはそれはもう脊髄反射的に、つい、ほんの出来心で、スケベ心で、

「タッチちゃん匂い嗅ぐなよっ」

「りっ、凜ちゃんこそっ」

思春期の小僧同士が不毛な言い争いを始めるのを尻目に、龍子が乱暴に出窓を開け放つ、もう片方を手にもって、さっ、と身を華麗に翻し、窓から飛び降りていった。

「うぎーっ」

女子高生ひとりの体重はけっこう重いものだ、ふたりは引っ張られて出窓の壁際まで前のめりになる。重みが、ふっ、と消える、下を見ると。

常夜灯の明かりの下、ゆうゆう、詩本龍子が芝生の上を全力疾走で ミニスカートから露わに見えるふたつのけしからん白い太ももはともかく、それはともかくとして 女子寮へと突っ走ってゆくのが見えた。

凜と達也はパンストをもって、窓際にへたりこんでしまった。

そこへ、合い鍵でドアが蹴破られる勢いで開け放たれた。

非モテ三年有志軍団、通称？風紀憲兵隊？の面々が、血走った目で龍子のパンストを見つめてくる。

「あつ、あの隊長、これはあああああつ」

凜が、それこそ血の悲鳴を上げる。

憲兵隊長十八歳（童貞歴年齢におなじ）が一筋の涙を流した。

53、根津と憑依霊の“みどりちゃん”

その店のソファはお世辞にもいいとはいえないシロモノだった。アヌークのように、高級なコンテツサチエアを偏愛する椅子フェチからすれば、好かぬ、の一言で一蹴される座り心地といえる。

根津充邦はそんなソファに座って、この店自慢の激辛カシミールカリーを旨そうに喰っていた。赤トウガラシばっちりの赤茶色のルー、黄色いサフランライス、大盛りだ。あまりの辛さにハンカチで額をぬぐう。ネズミのように愛嬌のある顔に汗がつきからつきへと浮きでてくる。

「マスター、生中おかわり」

根津は、ボックス席からカウンターにいるマスターにむかって五杯目のオーダーをした。

インド人と日本人のハーフのマスターが生ビールの中ジョッキを運んできた。

よけいな世辞はふりまかない、だから根津は、そんなマスターがひとりで仕切るこの店が好きだった。唯一気に入らないのは、生意気にも店内全面禁煙というところだけだ。

神奈川のタクシー会社に勤めていたときは、営業所の同僚たちといつしよによくここを夜食に利用したものだ。さらにその昔、根津たちの組のたまり場、でもあった店だ。

十人も入ればいっぱいになる店内には、いまはこのふたりしかない。

根津のボックス席から斜め右、入り口のすぐ右に設置してある薄型テレビには、BS放送でメジャーリーグの試合中継が映っていた。宿命のライバル対決、ニューヨークヤンキースVS・ボストンレッドソックスだ。○対○のまま緊迫した投手戦となっている。試合は九回裏、ヤンキースの四番打者がいまバターボックスに入ってきた。

「賭けはやっぱり……もうしてないんですね」

マスターがビールジョッキを拭きながら聞いてきた。

「……ああ」

「やっぱり、？諭吉のみどりちゃんですか」

根津はマスターの問いにうなずいて、ジョッキをくいっ、と呷つた。

「賭けはたいがいにしろってねえ、うるさくってねえ、あの子」

「千円札に取り憑いた、緑に光るお化けの女の子……ですか……いまでもうしてます？」

「……」

根津は、空になったジョッキの泡をじっと見つめていた。

「五年のうちに……だいぶん弱ってきちまってなあ、最近じゃあ？声？がちいせえんだよ」

根津はジョッキをおいて、しゃにむに激辛カリーをほおばった。

「俺が見せびらかしたせいだ、手品師気取りでよ、万札ゆまきに一瞬見える？千円札？つてね」

「……不思議なこと、あるもんですね、ホントに人に見せたせいで？みどりちゃん？が弱ったんでしょうか」

「まちがいねえよ、あの手品、人に見せるたんびに？みどりの声？が弱っちまっていくんだ、俺がもっと早く気づいてあげてりゃあ……」

「まあ、誰も信じねえけどな」

「ですが、誰にもみどりちゃんの姿を見せたことないでしょう？ただ、お札が緑色に光るだけですし、見せれば信じる人も出てきますよ」

「駄目だ」根津は首をふった。「女の子の姿になると、衰弱が早まるんだ、誰にも見せねえ」

テレビの横、招き猫の置物の上の時計が午前四時を告げた。

「チャンネルかえてくれ、ニュースの時間だ」

「根津さん？ 宿命の一戦は？」

「ニュースが先だ」

マスターが、リモコンでニュースをやっているチャンネルに切りかえた。

ちょうど四時の速報が流れた。ホテルグラン・パレスのテロ事件関連の情報だ。

根津が鳥取県の実家で聞いた第一報、羽田のリムジン爆破事件についてアナウンサーがしゃべっている。それからグラン・パレスでの大惨事の詳細。

根津の顔が見る間に険しくなっていく。

「ここで最新情報です、ジシユカ元老院議員と孫のアヌーク・エスターライヒさんは無事東京、広尾のチエコ共和国大使館に避難しているとのことです、現在大使館は警視庁機動隊による厳重な警備体制が敷かれています、大使館前から中継をお送りします」

画面が切りかわる、広尾のチエコ大使館から数十メートル離れた路上、レインコートを着込んだリポーターがテレビカメラにむかってしゃべりだした。リポーターのうしろには、臨時の検問所がつくられている。

この時間、東京では本降りの雨が降っていた。

茶色と白のモダンな大使館の建物周辺には、機動隊の車輛が何両も警戒態勢をとっている。

青と白の塗装の小型警備車、窓はない、銃眼のついた、まさしく装甲車だ。大使館を囲むように、機動隊員たちが配置されている。手前の検問所で、雨に打たれている隊員たちが両手にもっている武装はH&K社の高性能サブマシンガン、MP5Jだ。

「……外人巫女ちゃん」

根津は、思わずつぶやいていた。外人巫女ちゃん　なつかしい響き。

五年前、出会った少女、そしてツレの少年。

根津充邦に、故郷の鳥取県へ帰ることのできるきっかけを与えてくれた、踏ん切りをつけるチャンスを与えてくれたあのアベック……

……アベック。

根津は眼を閉じた。

「若えアベック相手に、いやカップルってのかい今風は??」

甦る、白いカローラでの、車中の会話が。

「すまねえな、辛気くさくつてな？」

少年は、自分の懺悔を聞いてくれた。祈りの言葉で応えてくれた。

あの、ユリスモールの中学生。いまごろ、どうしているんだろうか？

根津は、猛然と、何か吹っ切れたように残りの激辛カシミアルカリーとの格闘を始めた。

食い終えると勘定を済ませる。唯一の手荷物のボストンバッグをつかんだ。

マスターが名残惜しそうに出口まで見送りに出てくれた。

「二年ぶりなんです、これから呑みにいきませんか？」

根津は、マスターの誘いに、照れくさそうな笑顔になった。

「すまねえけどな、いかなきゃなんねえんだ」

「ケーサツのウジャウジャいる、大使館へ、ですか？」

「俺みてえな前科モンに……もう一度会ってくれっかねえ、いいとこのお嬢さんが、どうかねえ、五年も前の話だしな、覚えていてくれるかどうかも、なあ？」

マスターは、答えるかわりにただ、寂しげな視線をドア口のマットへ投げやった。

マスターに別れを告げ、階段を下りてゆく。

雑居ビルの三階にある店、インド料理&バー？タージマ春夫？をあとにする。二階と一階の階段の踊り場のところで、外が土砂降りにかわっていることに初めて気づいた。

「めえつたな」

梅雨時だというのに、折りたたみ傘すらもつてこなかった。きのう、昼のニュースを見て、すぐさま羽田行きの航空券を買った。旅の準備などろくにせず、旅客機に乗りこんだのだから。

踊り場に座りこんだ。ウインターコート胸元から、首にぶら下

げた神社のお守りをとりだした。薄い袋の口を開ける。中から、ていねいに折りたたんだ千円紙幣をとりだした。

そのお札は、お守りから出た途端、ふわり、ほのかに光る緑の輝きに覆われた。

「みどり、すまねえ、寝ていたところにな」

緑の輝きは、輪郭を徐々につくりだした。

髪をサイドテールにした、ちっちゃい女の子の像を結んだ。浴衣を着ている。手のひらサイズの女の子、ひろげられた千円紙幣の上で、ちよこん、と正座している。

「お。おい、無理すんなって、そのカツコすつと霊力つてのがヤバくなんだろう」

? ネズミ いつも ありがとう お守りの中なら

霊力、だいじょうぶ、すり減らないよ だいじょうぶだよ?

「そんなこといっても、よう、おめえほら、あれだインド リツつてのは? いまいくつだ?」

女の子が考えこむ。

? よつつ、くらい、かなあ??

「えっ? おめえ、このまえ七つっていつてたら、下がっちゃったのかっ」

? ……うくん、むつつ、くらい かなあ……?

「どっちだよっ?」

? ……よく わかんないや?

女の子が、ころころっ、とかるやかに笑った。

「ったくおめえってやつはよお……」

根津が困りはてた顔になる。みどりを見守るやさしい目がすこし潤んだ。鼻をすすり、目をしばたいてごまかした。

? ねえアヌークさまは? ほんとに ほんとに 無事なんだよね??

「おうつ、ニユースでたしかめた、安心しろみどりっ」

? わあ、よかったっ ネズミ、ありがとうね ?

「礼なんかいいって、なあ、もうすぐ会わしてやるからよ、アヌークによっ」

？ うれしい、アヌークさまに また、会えるんだね？

「モチだぜ、それまで消えるんじゃないやねえぞ、な？」

？ うんっ、あのね、アヌークさま、ほんとのほんとにね、ノリトのことが大好きなんだよっ かながわから、とっとりまで楽しかったよね ドライブ なつかしいよねえ？

みどりがエメラルド色に、緑色に輝く瞳を閉じて、何度も顔を震わせた。

その都度、サイドテールが、ぷらんぷらん、左右に揺れ動くのだった。

「ああ、わかった、わかったからもう無理すんな、休んどけ」

根津は顔をくしゃくしゃにしながら笑顔を見せた。

女の子の、みどりの生前の姿をした憑依霊の輪郭がまた、ふわり、ぼやけてゆく、お札の表面を覆うほのかな光の形にもどった。

みどりは形を崩す際に、根津にささやいた。

？ノリトはとつても怖い悪霊だったよ、でもね、アヌークさまとタツヤがね、いっしょうけんめい、引導抜いをしていたからきつとね、きつと守護霊にね……？

そう、衰えた霊力を、それでもふりしぼって伝えてきてくれた。

根津は愛おしげに、実の娘を見るように、掌のなかのお札を見つめていた。

アヌークの憑依霊？みどりの？の 根津がつけた名前 の憑いた千円札をまたきれいに折りたたんで、お守りに封入する。

踊り場に座りこんで、しばらくのあいだ、お守りを大切そうに握りしめていた。

みどりは根津に説明してくれた。お守りの中は？聖域？ってやつらしい。使役霊がパワーを発揮できず、依り代の中に、みどりの場合、千円札だ、この中に閉じこめられてしまう。パワーが顕現できないかわりに、引導率と霊力の消耗も抑えることができる、そう教

えてくれた。

五年前のあの日、コインパーキングで神奈川へもどろうとした瞬間、自分の財布から突然、飛びだしていった？九枚の諭吉？……慌てて追いかけて、ようやくつかみ取れた唯一の？諭吉？それが？みどり？の憑いた千円札だった。

根津の携帯が鳴る。メールの受信だ。オフクロから、安西夏子からだった。

「おはよう、これから魚市場に買い出し。みどりちゃんを他人に見せびらかしたりしてないだろうね？あの子を弱らせたなら私が承知しないよ！」

「まったく、オフクロのやつ」

根津は、どうしようもなく、切なく、こみ上がってくるなにかを苦労しておさえこんだ。

みどりをあの外人巫女ちゃんに、アヌークに返したら、もう、鳥々軒での息子と母と、ひとりの幽霊の女の子、奇妙だけれどかけがえのなかった三人の生活の日々も、もうおわりだ。

けれどそれでいい、夏子は納得して送りだしてくれた。

未練を引きずっているのは、俺だ、俺ひとりだけなんだ、根津は思った。

右手が勝手にセブンスターをさがした。踊り場で外の大雨を睨めつけながら、一服した。

気分がすこし、ほんのすこし、やわらいだ気になる。吸い殻を雨の流れ込む側溝に投げ捨てる。握りしめていたお守りをシャツの中にもどす、頭つからコートをはひつかぶった。

「……あ、やべ、ヤンキースの試合結果見逃しちゃったなあ」
恨めしげに雨の降りそそぐ空を見上げる。

ビルから飛び出し走りだす、すぐに全身ずぶ濡れになってしまふ。夜明け前のまだ暗い横浜の繁華街を足早に駆けぬけていった。

54、アヌークの懐中時計

夜が明けた。六月の土曜日の朝。紅葉ヶ丘の空模様は、あいもかわらず霧雨だった。

ユリスモールの学院寮は、週末、土日には自宅へ帰ることが許されている。

学院の正門から、中等部、高等部の院生ら男女が坂道を下って続々とおりていた。

途中にあるユリスモールカフェに寄ってはしゃぐ者、JR紅葉ヶ丘駅へと丘陵の道をおりていく者、誰の顔にも解放感が漂っている。

黒塚凜は、居残り組となった。

「気をつけてっ」

凜が杉浦達也に元気よく手をふった。

「うんっ、あとのことはよろしく頼むねっ、僕のり兄ちゃんのためにも、絶対アヌークに会ってくるっ、色々、とにかくたしかめてくるよっ、五年前のことっ」

達也も 表情には、不安の気色が濃いけれど 勢いよく手をふって返した。

傘をさすと、高等部男子寮のイントランスから、外へ奔ってゆく。達也の後ろ姿は、遠くなっていた。タマアジサイの咲き誇るプランターのならんだ校庭を走って正門のほうへ、おおくの院生たちの群れのなかへと消えていった。

凜は、じっと、祈るかのような視線を、思い詰めたような視線を送っていた。

ぼんやり、西の空を、彼方を見つめた。スマホをとりだす、詩本龍子の番号を押しした。

彼女も居残り組だった。すぐに電話に出てくれた。開口一番に、
『タツくんは？』

「いま学院を出てったよ」

『東京の広尾の大使館、途方もない厳戒態勢よ、タツくん、アヌークに会う秘策でもあるのかしら』

「なんか、警察の偉い人に知りあいがあるっていった、たしか、立花、って名前の」

『了解したわ、じゃあ私たちも聞き込み捜査といきましょうか』

凜は返事をして、通話を切った。

詩本龍子はまもなく男子寮へとやってきた。学院本部棟でもらった男子部入院許可証を身につけている。

白いブラウスの胸のポケットにバネつきの留め具でぶら下がっていた。

それにつけても、なんにつけても龍子の、その、ぶら下がったブラブラと、

「誰がブラいらすの貧乳よ」

「え？ ええっ？ おれなんかいったかなあーっ？」

「目は口ほどに物をいうものよ？」

ふたりはギリシャ様式の列柱廊を歩きだした。立ち並ぶ列柱の外で、霧雨が時折風にあおられて、シルクのカーテンのように波打って見えている。

凜は列柱の外に視線を泳がせながら、

「……ったくさあ、おまえは自意識過剰ってやつなんじゃねーかなあ」

「だって無理もないわ、パンティストッキングの匂いを舐めしゃぶるように蹂躪され、あまつさえあの夜以来、パンストは行方不明なのよ？」

「……………そうだね、難しい問題だねっ」

「馬鹿いわないで、いったいどこへ隠したの？」

龍子の問いにしばらく間をおいてから、

「風紀憲兵隊に没収されちゃった……………」

「バツが悪そうに舌を出す。」

龍子も、視線を外に投げる、遠い目になった。

「いまごろ、私の黒のパンスト……いつたいなにに使われているのかしらね」

「あのさ、先輩たちだって悪気が……悪気……があつて……やつぱり弁護できねえ……」

「酷い………それを知っていながら？ 私のパンストを守りきれなかつた凜兄つて………それでも私の従兄なのかしら」

「あつ、あのなあつ最初に脱いだの誰だあーっつ？」

「それよりいま問題なのは、凜兄の味わつた？ 天使の翼くん？ 羞恥プレイの快樂に関して」

凜が龍子の口をふさごうとする。

「やめろつ、それは、それだけは口にすんなつ」

「もう、乱暴ね………まあいいわ、いずれあの風紀憲兵隊おばかさんたちにもほんとうの肅清を教えてあげなくっちゃ」

「………おまえ、なんつーかほんと、自由つつつか先輩後輩カンケ無しな？」

「あそこね、ついたわ」

龍子が凜の指摘をスルーして、指をさす。

その建物は高等部と中等部、それぞれの男子寮のちょうど真ん中あたりに建てられてあつた。

ふたつの寮同士をつなぐ列柱廊のそばにある、木造モルタル、平屋の質素な家屋。

ドアのとなりにおおきな名札が備えつけられてある。

聖ユリスモール学院・男子寮監部集会所

集会所、のところにいたずら書きの消されたあとがある。

いたずら書きは、？ おいちゃんの家？ とかすかに読みとれた。

そう、五年前、中等部寮監を勤めていた、あの、おいちゃん、である。

いまでは寮監部相談役、というけつこうな肩書きの、要するに幽体離脱、いやいや、勇退したおいちゃんの根城であつた。永年勤続者に対する、学院からのささやかなプレゼントだった。

凜は元氣よく開き戸のドアを開けた。なかは八畳一間の和室になつている。

「おいちゃんっ」

おいちゃんは、掘りごたつに座つて、お茶を飲んでいた。無駄に豪華な四六V型プラズマ大画面テレビには、NHKの朝の将棋番組が映つていた。

「おうっ、黒塚くんっ詩本くんっ、元氣でやつてつかつ？」

このおいちゃん、ただ者では無い、アルと同様、全卒業生、全現役院生のフルネームを憶えていると、もっぱらの評判だった。頭髪はだいぶん、薄くはなつていたけれど。

凜がうれしげに挨拶した。龍子もこの老人に対しては、なぜだか自然体で頭を下げた。

「詩本くんっきのうの夜這い、ありゃあ、イカンのうっ」

「さすがはおいちゃん、情報が速いですね」

あの龍子が自然な笑顔になった。

「まったくのう？ユリスの壁？を突破する女子部の秘伝は門外不出じゃ、ワシにもさっぱり解らんわい」

三人は、男子部と女子部の寮を隔てる、恋路の邪魔の権化、通称ユリスの壁についてひとしきり話して笑いあつた。龍子は侵入経路に関して決して口を割らなかつた。

「で、ワシに話つてえのはなんじゃっ？」

「うん、おいちゃんっ、五年前中等部の川上徳人先輩とマリアって留学生の女の子の話なんだけどね」

「むっ、王手飛車取りかつ」

「……おいちゃん？」

「ん？ なんじゃっ？」

「五年前の」

おいちゃんがまたプラズマ大画面を見た。

「むっ、名人が長考に追いこまれたぞいっ」

凜が何かいいかけるまえに、龍子が動いた。

ぐいつ、とおいちゃんの頭を両手で挟んで無理矢理ふりむかせる。
「おいちゃん？ ごまかしは無しょ？」

「詩本くんはええ 香りがするのう、ほっほっほっ」

龍子は、怯まない。

「五年前、ノリさんとマリアっていう子のこと、すべて教えてほしいの」

おいちゃんは、突然、真顔になった。

龍子はそれを見て、おいちゃんの頭からようやく両手を離れた。

「……………そこまでして知りたいか」

それは、おいちゃんの、初めて聞く声音だった。なにかをもっている、そう、秘密を。

まちがいなく、含みをもたせた、そんな声だ。

凜と龍子も、自然、真顔になっていった。

ふたりがうなずく、躊躇いを見せずに。

おいちゃんは、じっと、湯飲みに視線を落としたり。しばらく、湯気をながめていた。

掘りごたつから立ちあがる。少年と少女は、目で動きを追った。

老人は、仏壇のまえに飾ってあった？ 赤い木箱？をとってきた。

「これ、は？」

凜が、心底不思議そうな貌になる。

龍子は、ひたすら、その神秘の瞳で視線を投げかけてくる。

「……………マリアちゃんはこのう、懐中時計を大切にしておつたんじゃ……………」

少年と少女が目交わす、老人は、それは、なつかしげに瞳をほそめた。

「タツちゃんの見せてくれた、あの写真？ ふたりの映っていたあの写真の絵が描かれてる、あの懐中時計……………」

凜の問いかけに、老人は唯、哀しげな笑顔で応えた。

すつつ、と高価な桐の木箱をふたりのまえにさしだしてくる。

懐中時計が？ この箱の中に……………。

龍子が受けとる、凜を見てくる、少年がうなずく。

龍子の優美な手が、木箱の蓋を開けた。

中には、ていねいにたたまれた、黒い布が入っている。

この、布の中に　　？

龍子は布を持ち上げた。

びろおおおおおおおおおおおおおおおおおー

ー

「詩本くん、あなたのパンストじゃあつ、奪い返してやったぞいつ、ぞいつぞいつ」

ジジイは誇らしげに笑んだ。両手でVサインをつくりやがった。

「なにがぞいつぞいつだあジジイツてめえとうとうボケやがったかあああああああつっ」

凜が馬乗りになって、思いっきりつかみかかる。頭髪をひっ掻きむしってやった。

「うおおおおおつ、ろつ、老人虐待じゃああああああああつっ」

龍子は、びろおおおおおん、を指先につまんでもったまんま、表情をなくして硬直していた。めっちゃ、使われちゃった痕、感がバリバリ、目にもあざやか、四六V型プラズマの鮮やかさに負けないくらい、利用者たちの邪な意図が旗幟鮮明だったからである。

55、ハツカビー博士とラムゼイ

午前十一時過ぎ、一台の高級車が国道を走っていた。

東京方面から紅葉ヶ丘の丘陵地帯へむけて疾走している。

やはり霧雨がぱらついていた。ワイパーがフロントウインドウの水滴をのんびり拭いている。

日産のセドリック。ドライバーはこの古い型式の車輛を気に入っている様子で、おだやかな表情を見せている。この車のオーナーのほうはちがった。

核物質を、防護服無しでキャッチボールする刑罰を与えられた囚人の顔をしている。しかも刑務官がマシンガンの銃口をむけて、監視している、そんな極めつけの極限状態だった。

その白人の博士は、リアシートに大柄な体をあずけていた。

彼の教皇十字軍専用端末に着信が入った。ビデオ通話機能を開く。「ドクター・ハツカビー、ご無事でよかったです」

有機ELEDディスプレイに映った青年がいった。心底安堵した、そんな口調だ。

アルフォンス・カミュだった。

「ですが、こんな大役、私には無理ですよ、カミュ中尉」

ハツカビーは、アルの顔を見た途端、泣きつかんばかりに前のめりの姿勢になった。

「オータニ少尉の霊視によれば、目下、イレーヌは西東京市内に潜伏、移動中です」

「あ、あの……イレーヌの悪霊ゼータ・ウランシロン誘導率20ですね、まちがいは？ 霊視誤認確率は？」

「ご安心ください、シツエ・オータニの霊視には全幅の信頼をおいでいただいじょうぶです」

ハツカビー博士は、盛大なため息を吐きだした。

刑務官のマシンガンが、これで消えた、そんな様子になってくる。

「よかった、た、助かりました、カフェに着いたら私の護衛はしていただけるんでしょうね」

『はいもちろんです、自分と内赦院隷下KGチマブエがエスコートに加わります』

ハツカビーは泣き笑いのような顔になり始めた。

これで防護服も着せてもらえるぞ、そうとも、いい感じになってきた。

ハツカビーはハンカチで安堵の涙と冷や汗を同時に拭きまくった。博士とアルは詳細な打ち合わせをおこない、最後にドクターの護衛任務に当たっている外赦院隷下KGミラボーの話になった。

『できればミラボーと直接通話したいのですが、許可は願えますか』
「待ってくれたまえ」

ハツカビーはイギリス人を見た。赤毛の髪のイギリス人が自分の回線を開いた。

「こちらKGミラボー麾下着族、ラムゼイ曹長です、おひさしぶりです中尉」

『よおラムゼイ、奥さん元気にしてるか』

アルが旧知の着族をまえに、くだけた笑顔を見せる。

「おかげさまで憎らしいくらい元気です、ミラボーの旦那ですが、自衛隊ヘリで上空から護衛任務に就くため、移動中でありませ、通信コードは自分にはまだ通達されておりません」

『残念だな、あの筋肉馬鹿に伝えておいてくれ、鶏のササミのいちばん旨い喰い方なんてもんはな、この世には存在しないってな』

「うちの大将の生きがいを奪わんでください」

『おとなしくホエイプロテインを飲んでろ、ってね』

「大将の結論はかわりませんよ、最高の喰い方は、ニッポンのヤキトリです、ワサビつけて粗塩まぶして、半生に焼いたササミの串ですよ」

アルとラムゼイは、互いにミラボーの筋肉フェチをネタにして笑いあった。

ハツカビーはこの非常時に不謹慎な、そんな不快な感情を目に露わにした。

アルとの通話が切れた。

「ドクター、あまりそついう様子を見せると、現地協力者から解任されちゃいますよ」

ラムゼイは皮肉げにいつてくる。

「君にはわからないんだ、私たちがこれからなにを受けとりにいくのかをね」

「はあ、核ミサイルですか？ それともウイルス兵器で？」

「もつとたちの悪いシロモノだよ」

忌々しげにいつたとき、一台のパトカーがサイレンを鳴らして後方から近づいてきた。

「なんだ、いつたいなんだっ」

「ドクター、ニッポンのポリスです」

「停まるのかねっ、スツ、スピードオーバーかっ」

「ええ、若干ですけどねえ、まったくこれだからニッポンのポリスは勤勉すぎるんだよ」

イギリス人の着族は舌打ちした。いいながらも、ベテランらしく周囲を警戒する、左の掌に素早く悪霊ゼータ・ミュー引導率12を招喚した。

「こちらKGミラボー麾下ラムゼイより司令部へ通達、警察障害（PA）二〇一発生、KGミラボー本隊との直通回線を開きたい」

『外救院日本司令部（PJHQ）よりラムゼイへ通達、KGミラボーには急遽東京方面へ転進命令が下達された、貴官だけで対処されたい』

初めて、ラムゼイの皮肉げな笑みが消えた。

国道の周囲には、まばらに家屋、駐車場、ビニールハウスなどがひろがっている。

セドリックを路肩に停める。パトカーもすぐうしろに停まった。

ひとり、若い警官がおりてやってくる。

ドライバースートのウインドウをノックする。ラムゼイが開け

ると、

「失礼ですが、外国人登録証と免許証を拝見します」

はつらつとした調子でいつてくる。

ハツカビーは威厳をとり繕って、スーツのネクタイを締めなおした。

「私は国連のユネスコ、世界遺産発掘支援局、日本支局長のドクター、ドクター・ハツカビーだが、公務で大至急移動中だ、便宜を取りはからっていただきたいのだが？」

ラムゼイは 自己紹介にドクター二連発ときたもんだ しかし、笑みを見せない。

この眷族は、アルとの通話中の余裕をなくして、完全に周囲を警戒しきっている。

「これは失礼しました、ハツカビーさん」

警官もにつこり、笑みをうかべた。

パトカーから、ふたり、人がおりてきた。その体は、霧雨を自然に弾いていた。

56、外敎院の危機

アルフォンス・カミュはユリスモールカフェの一階奥の席に陣取っていた。

アル以外に誰もいなかった。カフェのスタッフたちも土日は休みをとっている。

そう、土曜日である、ユリザブに殺到する院生たちはいない、誰もが我が家へと帰宅していったのだから。

アルが教皇十字軍専用端末で回線を開く。相手は外敎院日本司令部（PJHQ）にいる大谷しづ彥少尉だ。

『中尉、事態は深刻かも知れませんが』

しづ彥は開口一番、ディスプレイ上で不安な表情を見せてきた。

「わかってる、イレーヌが悪霊ゼータ・ウランロン引導率20を罠に使った可能性だらう」

「はい、たしかにあの悪霊は西東京市で霊波動を巧妙に隠蔽しながら移動中ですが、破門者イレーヌ自身も、あの悪霊といっしょにいるとは限りません」

「ああ、だがKGミラボーがドクター・ハツカビーをエスコート護衛している、ヤツなら安心だ」

しづ彥が息を呑んだ。

『ミラボー中佐は西東京市へイレーヌ追撃を命じられ、転進しました、連絡はいつてないのですか？』

「聞いてない、いつだっ」

アルがウインザーチェアを蹴って立ちあがる。

『お待ちください……日本政府からです……正式要請が外敎院日本司令部（PJHQ）に発布されています』

しづ彥の言葉に、アルは唇を噛みしめた。

「じゃあ、なぜオレに連絡がこなかったっ？」

ディスプレイのしづ彥の背後では、司令部オフィスのスタッフた

ちが激しく行き交っている。

『確認をとります』

「遅いつオレとチマブエがアレを持ってドクターのセドリックを迎えにくつ」

『外赦院日本司令部よりK Gカミュへ通達、准将より直通回線をつなげます、どうぞ』

日本人才ペレータの女性の声が割って入ってきた。

『中尉、聞こえるか？』

「准将、大変な失策です」

『ちがう、在日米軍司令部から要請があつた、貴官を神奈川から移動させれば、万が一イレーヌが神奈川に來襲したとき、米軍施設を守るK Gがいなくなる、とな。貴官に教えていれば飛びだしていくだろう？ ふたりを助けるために、ちがうか？』

「ドクターとラムゼイが危険です」

『発掘支援局日本支局には、現地協力者がまだ何人もいる、ドクターのかわりはいくらでもいるが、貴官のかわりはおらんだ』

アルは天を仰いだ。英語で汚いスラングを飛ばした。

「ラムゼイは、見殺しですか？」

『ラムゼイは信頼できる、彼はベテランだ、イレーヌかスカラワンのガの強襲でもないかぎり』

「奴らが強襲してきたらっ？」

『アウトだ』残酷な、准将の回答だった。『がしかし、強襲されればイレーヌたちの作戦目標がわかる、？あの箱？だ、奴らの目標はあの箱の奪取ということを意味する』

『おそれながら准将閣下、友軍の士気にかかわるか』

しづゑは怒気を抑えた調子で意見具申した。

『君もわかっているはずだ少尉、戦争の勝利は、政治の勝利に換金できなければ意味はない、換金できない貨幣に価値はない、そしてラムゼイは今も価値のある貨幣だ』

しづゑは、黙りこんだ。

『貴官たちの気持ちはわかる、これは機密事項だが特別に開示するぞ、ニッポンはいま本州全域でイレエヌとスカラワンガ以外の複数
の破門者から侵略をうけている、敵の第二波がきたのだ、そのため
我が外赦院隷下六個KGは本州各地に展開を余儀なくされている』
アルは耳のイヤホンマイクに手をやった。聞き間違いなのか、そ
う思ったような仕草で。

『内赦院隷下KGは、貴官らの知っているとおり、チマブエをのぞい
て壊滅状態だ、ニッポン政府は、このふたつの事実をまだ知らん、
外赦院としては開示するつもりも無い、この国の安全保障スタッフ
は、いつも国家的危機に陥ると異常なまでのパニックになり機能不
全をおこす、歴史がそれを証明してきた、この国の歴史がな、パニ
ックになった味方ほど邪魔な者は無い』

「タチバナに、聞かしてやりたいセリフです」

『あの調査官ぐらい使えるコマがニッポン政府トップのラインとス
タッフ両職に多数いれば、事態は変わったかもしれないが……』

准将は、若干、トーンを落とした声でいうと、回線を切った。

「シズエ、いつ来れる？」

アルは、たじろがなかった、決して。

『直ちにむかいます、立花さんにも至急連絡します』

アルは通話を終わると、カフェの裏手のドアを開けた。

テラコッタの石畳が奥のほうへとつづいている。周囲には常緑樹
のブルーヘヴンが緑豊かな林をつくっていた。七メートル近い高さ
の細長い木々だ。

彼は、その先に見える、古風な洋館へと走っていった。

57、マティルダ、龍子を嘲笑う

アルが消えて、それからちよつと経つてから、ふたりが、午前中をまったくの気疲れですごした龍子と凜がユリスモールカフェにやってきた。

凜が先にエントランスをとおって入ってくる。龍子が傘を閉じてあとにつづいた。

「アルさん？」

凜が、がらん、とした一階を見渡す。

ひとつこひとり、いない。

地元の商店街のマスコットキャラのポスターが寂しげにふたりを見返してくるだけだ。

ふたりは疑問を口にしながら、テーブル席とカウンターとのあいだの廊下を進んでいった。店の奥、螺旋階段の上、二階にも人の気配はしなかった。

「どうしたのかしら、アルさんまでいないなんて」

凜は口をとんがらせて、首を横にふった。

すると、龍子がキッチンを見た。

カウンターのうしろには対面形式のキッチンが見える。こぼこぼ音がしてくる。

ふたりはうなずきあい、スイングドアからカウンターのなかに入っっていった。

キッチンに、少女がいた。

小学生くらい、小柄、金髪碧眼の少女。エスプレッソマシンの陰になつて見えなかったのだ。

ゆで玉子をつくっている。ちょうど熱湯のなかで三個、白い玉子がくるくると動いていた。

キッチンタイマーが鳴った。

少女はタイマーを消すと、トングで玉子を取りだした。

ガスコンロのとなりにおいたボウルの水につけて、じっと見ている。

「貴女、どなた？」

龍子が英語で訊ねた。

少女は無視している。水面をじっと、見つめている。

龍子の顔にすう、と、白い肌のなか、険しいものが張りつめていくのがわかる。

「え、ええっとっ君、アルさんの知りあいの子かな」

凜がおずおず、訊ねてみる。

少女は凜にふりむいた。こくん、とうなずく。

「私、マティルダ」

凜に対しては、抑揚のない声でそう答えた。

凜が龍子を、ちらり、見る。少年はソッコ目を背けた。

マティルダという美少女は、玉子をとりだして、殻をむき始めた。つるん、ときれいにむけていった。三個むきおわると、平たい小皿に一個ずつおいた。

キッチンのクレイジーソルトを皿の脇にふりかけて添えた。

マティルダは無言で凜に小皿をさしだしてきた。

「あ、ありがとう」

凜が皿を受けとる。マティルダは龍子にも皿をさしだしてきた、ただし、超投げやりに。

凜がとりあえずは、ほうっ、と安堵のため息をつこうとした瞬間だった。

龍子は、皿を真上から、ぱしんっ、と音を立ててはたき落とした、少女の手から。

ゆで玉子は、キッチンの床のタイルに落ちて潰れてしまった。

龍子が腕を組む、超絶上から目線で、無表情にマティルダを睨み下ろす。

マティルダも負けてはいない、龍子をじとっ、とした目で睨み上げた。

凜は、聞こえた気がした。

ゴングの音。

決戦、無表情キャラかぶり一本勝負のゴングの鳴る音が。

ふたりの少女は、猛然とゆで玉子をつくりはじめた。

「……いつたい、これはなんだ？」

凜は自問自答せずにはいられなかった。

そのゴングが鳴ってから十分ほどだろうが、経過したころあいになかった。

キッチンでは、詩本龍子とマティルダがゆで玉子を茹でていた。

凜はパイプ椅子に座らされて、ふたりのメスの獣の動きを唯、暗澹たる様子で見くらべている。そうこうするうちに、マティルダのセツトしたタイマーが鳴る。七分からカウントダウンしていたのだ。トングでとりあげ、素早く冷水につける。

龍子もすぐに熱湯から出そうとして、トングをさがした。どこにもない。

マティルダのもつトングをじっと見た。

マティルダは、思いつきりアカンベーを、事もあろうに詩本龍子にむかって、アカンベーをしたのだった。

ざあーっつ、と凜の頭から血の気が引いてゆく。

龍子は、こめかみに、白いなめらかな肌に、青筋を立て始めた、はつきりと。

龍子は水の入ったボウルをシンクにおいて、やけっぱちの様子で熱湯ごとゆで玉子を流し込んだ。

マティルダはすでに、きれいに玉子をむき始めている。

龍子もむき始める、が、まったくきれいにむけない。殻の内側に白身がごっそり、張りついてこそげ落ちていってしまう。

マティルダのゆで玉子は、つるんとした美人な玉子だ。

龍子のゆで玉子は、隕石の残骸のようになっていた。

ふたりが皿に玉子を盛った。

龍子は六個、うち一個は黄身がむき出しになっている。

マテイルダは四個。完璧な仕上がり。
試食タイム、である。

凜はカウンター席に移動して、美人玉子と恐竜の化石のなり損な
いを見くらべた。

意を決して　そう、ここはやはり先に　龍子の作品をほおば
った。

不味い。黄身はぼそぼそ、紙粘土を口に押し込んだような不愉快
な食感だ。

「どうなの、凜兄？」

「……………美味しいよ」

「なら、なぜそんなに声が暗いの？」

マテイルダが、ずいっ、と、自分の皿を凜のまえにさしだして
くる。

「じゃじゃあ、遠慮なく……………」

これは、旨い。黄身が半熟トロトロ、ねっとり感の至福さがハ
ンパないのである。

マテイルダがちいさな顔をかしげ、答えを催促してくる。

「……………スゲえ美味しいっ」

凜は素直にいつてしまった。

マテイルダが龍子の顔をのぞきこんだ。

「ダツサ」

一言、ただ、その一言だった。

龍子は口の端をつり上げ、鬼も逃げだす形相　あくまで無表情

のままだけれど　になった。そう、途轍もない殺気が漂っている
のである。

逃げだしたいのは凜のほうだったかも知れない。

龍子は、めげなかった。

冷蔵庫の卵、残り二八個を全部もってくる。玉子のむき方、半熟
トロトロにできる茹で時間をスマホのお料理サイトでチェックし始
めた。

58、おいちゃん、再び。

二〇分ほど経って、アルフォンス・カミュ中尉とダリオ・チマブエ少佐が裏の洋館からカフエへとやってきたとき、カウンターのの上には、ゆで玉子をドカ盛りした大皿がおいてあった。

「……あ、アルさん、助けて」

凜は、唇の端に玉子の黄身をべっとりつけながら、涙目で助けを求めてきた。

「なにをやってるんだ、おまえたち」

アルはキッチンに入って行って、玉子の殻の残骸の山に遭遇した。龍子とマティルダは、カウンターのなかでぎんぎんに睨みあっている。

チマブエが咳払いをする。

「マティルダッ」

少女は、途端、直立不動の姿勢で己の主にむかいあった。

チマブエは首を呆れた様子でふりながら、

「またつまらないことをしましたね、あなたという子は……」

「ですが御主人様、この女は部外者です、作戦遂行に支障を」

チマブエが右手を上げる、言葉を制する。

少女が押し黙る。

凜と龍子は、この突然現れた中年の白人を不審げに見ているばかりだ。

「私の子が無礼をしたようです、申し訳ありませんでした、お嬢さん」

チマブエは丁重に龍子に謝った。

「私こそ、お子さんに大人げない真似をしました」

顔にも、表情にも、謝罪の色は一切なかった。

チマブエはほのかに笑んで肩をすくめた。

マティルダがウエットティッシュの箱をもってくる、凜にさしだ

した。

「あ、ありがとう」

凜がとろろとすると、龍子が横からひったくった。凜の唇をがしがし、拭きまくった。

「あ、詩、詩本、自分でできっから」

マティルダはそんな様子を見ていると、ティッシュを一枚引き出して凜の左の指の汚れを拭き始めた。

龍子にまた、青筋がもどってきてしまった。

「……貴女、私の従兄に何を馴れ馴れしいことをしているの？」

「黙れ、部外者」

龍子は憤然と、凜の右の指を拭き始めた。

「あ、あのふたりとも？」

両手を、がしがし、美少女ふたりに拭いてもらって、なんだコイツ、状態な凜であった。

顔は、ちつともうれしそうでは無い。

いやむしろ、美しい猫二匹に嬲られているハムスターさん状態だった。

アルがキッチンからもどってくる。

「まったくリョーコ、お料理教室してる場合じゃないんだ、すまないが学院に帰ってくれないか」声は努めて冷静さを保っている。

「ごめんなさいアルさん、弁償して退散するわ」

龍子は目をほそめている。アルの言葉に、とても微妙なニュアンスを、なにかを敏感に感じとったようだった。

「いきましよう、凜兄」

「ああ、うん」

龍子がカウンターから出る。凜といっしょにエントランスへと歩いていった。

ガラスドアの外、なだらかな坂道に車の上ってくるのが見えた。

セドリック。日産の高級車、セドリックだ。

あの車体のカラー、まちがいはなくドクター・ハッカビーの車輛だ

った。

アルは、車を一目見るなり、凜と龍子に、
「外に出るなふたりともっ」

アルが、薄いブルーのサマージャケットの懐から巨大な拳銃を出す。

五〇口径のマグナム弾を五発装填できるリボルバー。

龍子や凜のしているまえで、悪霊五人を手の先から招喚する、弾丸に憑依させる。

「これ、どうゆうこと？」

さすがの龍子も、色素の薄い両の瞳に、恐怖？ パニック？ それとも防衛本能？ 様々な感情を一瞬のうちにめまぐるしく宿らせた。

咄嗟に凜をかばおうとして、右手を出す、その手は逆に強く握りしめられた。

凜の手で、握りしめられた。

「リンッ、リョーコを頼むっ」

「OKッ」

凜が龍子の手を引いて 驚くくらいの力強さで 店の奥へと彼女を連れてゆく。

避難するかのよう。

凜兄っ、龍子が叫ぶ、凜はかまわず歩いてゆく。

アルがチマブエを呼びつける。リボルバーを構えながら、ガラスドアの左側の壁に陣取る。

チマブエはドアの右側の壁に張りつく。マティルダに手信号を出す。

マティルダがうなずき、螺旋階段を駆け上がってゆく。

「どうゆうこと、説明がほしいのだけれどっ」

龍子がめずらしく 不安がっているように 苛立ちの声を上げた。

凜が首を横にふる、静かに、と龍子にささやいてくる。

凜はしばらく逡巡を見せてから、螺旋階段を上がり始めた。マテイルダのあとを追うようにして二階へむかう。龍子はガラスドアのほうを気にしながら、引つ張られていった。

ふたりの少年と少女を、チマブエは苦々しげに見ていた。

「中尉、あの子等は一応、未だ一般市民のはずですが？ 十字軍法典違反ですね」

チマブエは黒のスーツから、教皇十字軍の制式拳銃SIGザウアーIP二二二を出した。

「皮肉をいうな少佐殿」

アルは携帯端末を出して、メールを打った。外赦院日本司令部に状況報告を、それと大谷しづるにユリスモールカフェ周辺の使役霊の霊波動の霊視を命じたのだ。

ガラスドアから見える外には、カフェから出て左側のほう、学院のあるほうだ、カフェのすぐ脇にセドリックが駐車している。反対側、なだらかな坂道の下ったほう、カフェから車二台分くらい離れたところに、神奈川県警のパトカーが停まっている。

アルフォンス・カミュは霊視能力に関しては、からきし駄目だ。

「どう見た？」

つまらぬプライドなどおかまいなしに、チマブエの霊視鑑定を聞いた。

「……セドリックには霊波動無し、県警パトカーから憑依^{ケサイ}霊二名……いずれも微弱」

「洗脳か？」

「不明ですな」

二台の車輛からは誰も降りてはこない。打ち合わせた手順どおりだ、最初にドクター・ハツカビーから、アルの端末に無事到着した旨、連絡がくることになっている。

それが、きた。着信音が鳴った。

『いやあ、カミュ中尉っ、無事着きましたよっ』

端末のディスプレイに映るドクター・ハツカビーは、安心しきつ

た様子で、リアシートにふんぞり返っている。顔をしきりにハンカチで拭いていた。

「ドクター、カナガワ県警のパトカーを説明していただきたい」

わかりました、ドクターがいつて、端末をドライバーに渡す、ラムゼイが画面に出た。

「中尉、私のミスです、交通違反で停車を命じられましたね、相手は運悪く、県警交通部のエラいさんを乗せていたんです、若いポリスマンが張りきって取り締まりをしてきた、つてわけです」

「チマブエ少佐が憑依^{グサイ}霊二名を霊視したぞ、洗脳操作か？」

ラムゼイは恥ずかしげに首をかいた。

「ええ、ドライバーに憑^{グサイ}けたら、事故られちゃいますから、そのエラいさん二名に憑^{グサイ}依霊を憑^{グサイ}けてね、逆手にとって護衛を依頼したつてわけです、どうにか上手いこといきましたよ」

チマブエが、ふうっ、と深く緊張を解く吐息をついた。P二二二二を構えていた手を下ろす。

アルは、まだ疑念を抱いている、そんな怪訝な顔を見せている。

「中尉？ もうよいのではないですか」

画面にまたドクターが映る。

「カミュ中尉、早く済ませましょう、？ カツパドキアの箱？ を金庫から、さあお早くっ」

ハツカビーが満面に笑みを見せてくる。

「……まず、その県警の幹部二名に会わせてくれ、念のためウラをとりたい」

アルの要望に、いいですともつ、とハツカビーは笑みを見せながら応えた。

「さあ、外へいらしてください中尉」

ハツカビーの、笑み。

アルが自身の愛銃を見る、巨大な拳銃、五〇口径の？ マテバE五〇マセラツイオーネ？

まちがえても、ニッポン警察に、それも幹部に見せてはならない、

取りかえしがつかなくなる。銃刀法違反の現行犯で、即逮捕、だ。外へ、丸腰のまま、出ていかざるを得ない状況だった。

「中尉？」

チマブエがしびれを切らしてきた。

「顔を、パトカーのウインドウから幹部に顔を出してもらおうよ、使役命令を出せ、ラムゼイ」

チマブエが呆れて、中尉っ、と声を荒げ出す。

そのとき、アルの携帯端末にメールの着信が入った。

立花からだ。秘跡認定局調査官、公職 表の職業をさす隠語は警察庁、次席監察官。

《念のため報告、神奈川県警の巡回中のパトカー一台が消息を絶ちました。乗っていたのは巡查一名、車輜ナンバーは》

アルが外のパトカーのナンバープレートを見る。

消息不明のパトカー、だった。

乗っていたのは巡查一名

アルは、立花からのメールをハツカビーに転送した。

ドクターの表情が見る間に凍りついていった。

『こっこれは、どういうことですか？ なにがどういうことだかっ？』

ドクターがラムゼイにも端末を見せる、この赤毛の着族も啞然とした顔になった。

チマブエがまたSIGザウアーを構えなおす、顔に緊張がもどっている。

「ドクターッパトカーの乗員は破門者の怖れがありますっ」

アルが怒鳴ったとき、

「アルさん？」

うしろから、声がした。

ふたりのカルマびとが、一斉にふりむく。

詩本、だ、詩本龍子が、立っている。そのうしろには凜もいる。

龍子は、無表情ながらも、いくぶん青ざめた面持ちを見せている。

「リョーコ、すまんが避難してしてくれ、いまは」

「死んでるわ、その赤毛のイギリス人、まるであやつり人形みたい」
端末画面にむかって、指をさしてくる。

アルフォンスは、じっと、食い入るように、龍子を見つめた。

チマブエも、だ。

さらに着信が入った。こんどは大谷しづゑ少尉からだった。

『中尉っ、屍鬼の儀の反応を霊視っ、二名の憑依霊のうち一名は魔法陣に安置された屍鬼の魂ですっ』

屍鬼　？ 血文字魔法陣、屍鬼の儀？

ヒトの魂を役霊にして、魔法陣に安置、その屍体を数日間だけ自由に操れる外法。

「　　チクシヨウツ」

アルが怒鳴る、全身に守護霊を招喚、結界を張る、チマブエも即座に招喚させてくる。

チマブエがイヤホンマイクにむかって、

「マティルダ、掩護射撃準備っ」

『イエスマイロード
はい御主人様』

セドリックのサイドウィンドウが開く、銃口がのぞいた。

凜が龍子の手を引っぱる、少年は少女をフローリングの床に押し
たおして、自分がかばうように覆いかぶさった。

「くるぞっ」

アルが叫んだ、そのとき

ちりん、ちり〜〜〜ん……………、ママチャリ

のベルの音が鳴った。

自転車が一台坂道をおりてくる。カフェのエントランス、ガラス
ドアの正面に停まった。

おいちゃん、だった。

「お〜〜〜い、アル元気かい？ 昼飯喰いに来てやったぞいっ」

おいちゃんは、ママチャリの両足スタンドを立てて、ガラスドア
を開けてきた。

ふたりのカルマびとが武装を隠す。

「おいちゃん、いや、きょうはな、臨時休業で」
アルが説明すると、

「なんじゃなんじゃっ、黒塚さんと詩本くんは客としておるじゃろう？　ってゆーか、おふたりさん床に寝そべってな〜にをやつてるんじゃ？」

心底不思議そうなおいちゃんに、

「い、いやあのねおいちゃん……」

凜がおきあがった。それから龍子を助けおこしてやる。

セドリックとパトカーのドアが開いた、何人もが降りてドアのまえにやつてくる。

アルとチマブエがまた緊張を極限に漲らせる。

先頭に、ドクター・ハツカビー、その左にラムゼイ。

パトカーからは警官の制服を着た、若い日本人の男がやつてくる。

「おお、なんじゃなんじゃっお客さんが多いのう〜」

おいちゃんは勝手知ったるカフェのなかを歩いていって、カウンターのゆで玉子の巨大な山を見つけた。

「おおっ、ゆで玉子かいつ喰ってええんかのうっ、アルや？」

「あ、ああ、自由に喰ってくれ」

おいちゃんはうれしそうに、カウンターのウインザーチェアに陣取った。

そんな光景を、ガラスドアの開けっぱなしのエントランスの手前で破門者たちは見ていた。ドクター・ハツカビーが、

「アルフォンス？　テメエもたいがい、疑り深くってイケねえな」
下卑た半笑いをうかべだした。ドクターのうかべる表情ではなかった。

「呪肉か……スカラワンガだな？」

ハツカビーがおおげさに両手をひろげる。

「擬態してまで芝居打ってこのザマとは、イヤんなるぜ、ったくよ
う」

アルはちらり、ラムゼイを見た。

赤毛の眷族は、屍鬼は、おだやかに笑っていた。

それからハツカビーに擬態したスカラワンガに視線をもどした。

「よくもやってくれたな貴様……あの？外科医のジシユカ？はトーキョーにいるはず」

「へっ、遠隔操作だよ、あのジジイの使役霊どもに体中メタクソに改造されてよ、超痛えのなんの、胸糞が悪りいんだよ、テメエを封印刑にしてやらねえと気がおさまんねえな、アア？」

「こっちのセリフだ、ラムゼイの恨み、貴様の魂で償ってもらうぞアルとスカラワンガが睨みあう。

ハツカビーが スカラワンガが エントランスに唾を吐いた。

「ウルセえ、クソツタレの教会の番犬どもがっ」

「なんじゃなんじゃ、お行儀の悪い外人さんじゃのうっ」

おいちゃんがけっこうマジモードで怒りだした。

凜がおいちゃんのシャツの袖を引っぱった。

「あのさ、おいちゃん、いまね、あのね」

「ムカつくジジイだな、殺すか、あ？ いまやってもいいんだぜ？」

おいちゃんは英語の会話についていけない、ゆで玉子を小皿にとって、エントランスにもどってくる。

「外人さんや、腹減ってるとな、人ってもんはなあ怒りっぽくなるもんじゃて」

と、ゆで玉子をスカラワンガにさしだしてくる。

「な？ 喰え、喰えっ」

スカラワンガは、まじまじと、おいちゃんを見つめた。

「どうしたんじゃっ、そうかつ、塩かつ、ワシとしたことが塩を忘れておったわい」

おいちゃんはカウンターにもどっていった。

三人のカルマびとが、その後ろ姿を見送った。

スカラワンガが、アルをまた睨みつけた。

「？カッパドキアの箱？はもらうぞ、てめえら一匹残らず封印刑に

してやったあとに」

「お〜〜いつ、塩はどこじゃあつっ？」

おいちゃんが怒鳴ってくる。

アルが天を仰いだ。チマブエは、ルーヴル美術館へいくためタクシーに乗ったら、ストリップ劇場前で下ろされてしまった美術評論家のような顔をしていた。

「おいちゃん、空気、読んでくれる？」

龍子が、情景をじっと見ていた龍子が、アドバイスをしてきた。

「なんじゃ、くうき？ 喰う気？ 喰う気なら満々じゃぞいつ、ぞいつぞいつ」

アルがなにかを口にしかける。チマブエが状況のシュールさに耐えられない、そんな様子で顔をチツク症のように震わせ始めた。

「殺すか、なあ殺すか？ クソツタレのクソソウルセエジジイだ」
スカラワンガがいまにも切れそうな雰囲気身をまとい始める。

「やれるもんならやってみる」

アルが応酬する、ふたりが至近で睨みあう、スカラワンガの両眼に明らかな怒りがわきおこり、

「お〜〜〜いつ塩っ、だからっ塩はどこじゃあ〜〜っ」

おいちゃんがまた怒鳴った。

三人のカルマびとが顔を引きつらせる、まるで認知症の老父の遺産相続で揉めている三兄弟のところに、老父自身が乗りこんできて、遺産はお前らにはびた一文たりともやらん、いつも卵を産んでくれるニワトリのコツコちゃんにくれてやることに決めたわいつ、ジジイにそう宣言されちゃった息子たちのような、まあ三人の表情からはそんなフィーリングが読みとれる。

三人が、びしっ、と一点を指さした。

おいちゃんの死角、ゆで玉子の山の裏っかわに、クレイジーソルトのビンが置いてあった。

「おおなんじゃ、ここだったかつ」

おいちゃんがうれしそうに手にとる。すると詩本が、

「おいちゃん、だから空気を読まないよ」

「そうじゃ詩本くん、コイツを忘れておったぞいつ」

と、いって、スラックスのポケットから、

びろおおおおおおおおおおおおおおおおおー

んんんんんんんんんん、

と伸ばしながら龍子の、

「殺すわよジジイ」

パンストを出されたもんだから、龍子が、極限まで冷えきった声
音でいって、自分の憐れなパンストを指先で引っつかんだ。

つかむと、またいっそう、びろおおおおおおおおお

んんんんんんんんんん、

と伸び出して、收拾がつかなくなり、

「おいアルフォンス、あのジジイはニッポンの大道芸人かなんかか、

あ？」

スカラワンガが妙にまじめくさって、質問してきた。

「……たぶんそれに近い」

アルがぶつきらぼうに応えた。

龍子がパンストをくしゃくしゃに丸めて、スカートポケットに
押し込んだ。二階へと三段飛びの勢いで上がっていった。

おいちゃんは、用事は済ませたとばかり、美味そうにゆで玉子を
ほおばりだした。

エントランスのカルマびとたちは、しばらくおいちゃんの食事風
景を眺めていた。

おいちゃんは三個目のゆで玉子を平らげ、四個目にはキッチンか
らもってきたマヨネーズをたっぷりかけて頬張りだした。手に五個
目を握りしめる、この老人、どこまで喰う気なんだろうか？

59、イレーヌの宣戦布告

場に、妙な沈黙のおりたときだった。

「中尉っ、ミラボーの旦那の楽しみ、奪わんでくださいっ」

突然、いった、屍鬼が、ラムゼイがいった。

アルが見る。スカラワンガが奇妙な顔をする。チマブエが用心深げにエントランスに集まる男たちを見渡す。

ラムゼイは、生きていたところとおなじ笑顔で、

「中尉っ、旦那とまた三人でヤキトリ喰いにいきましょっつ、でもやっぱり、旦那はササミしか喰わないでしょっつがねっ」

アルは、ラムゼイの表情を見た、その笑顔を見た。

「ああ、いこうな、ラムゼイ」

「ミラボーの旦那、ササミにはアレしかつけないんですよっ」

「そうだな、ササミには、ワサビなんだろ？」

「ええ、ワサビですよ、実はね自分もニッポンのワサビに最近ようやく慣れてきたんです」

また、ラムゼイは、笑った。

恥ずかしげに頭に手をやり、赤毛を掻きながら、いった。

「おい」

スカラワンガが、左にいる自分の眷族に 警官の扮装をした日

本人に 顎をしゃくった。

眷族はうなずくと、スカラワンガの背後を回って、ラムゼイの首根っこを引っつかんだ。

そのままパトカーへと引きずっていく。早くも？壊れ始めた屍鬼？を、壊れた電化製品を処分場へともっていくかのように。

アルが両手の拳を握りしめる。

アルはじっと、見つめていた、唇を噛みしめながら。

「どうしたアルフォンス、悔しいか？ え？ 悔しかったら闘^まってもいいんだぜ？」

アルは鳶色の両眼を、切れ長の眼をいっぱいに見開いて目の前にいる男に、

「おい、？列の屑野郎」

言った、怒りのあまり、逆に声は、凍てついた湖水の水面のように抑揚がない。

「？列はおとなしく？列のあのオンナの足の裏でも舐めさせてもらってる、ああ、テメエ嫌われてるからそれすらできないだろうな？」
スカラワングの、ハツカビーの顔に血の気が上りつめてくる、頬が、紅潮して、気色の悪いピンク色に染まった。

「　　ツ野郎ッ」

そんなスカラワングをチマブエが横目で見ながら、

「中尉、いまは自重したまえ」

ふたりのカルマびとのあいだに、仲裁するかのように踏み込んだ。アルとスカラワングが睨みあう、間合いを詰める、チマブエのことなど目に入っていない様子だった。

パトカーのリアドアが開いた。

着族は、パトカーの手前で足をとめた、硬直した様子になり足をとめる。

パトカーから、ひとりの美少女が、降りてきたのだ。

着族があからさまに怯えた顔になり、直立不動の姿勢をとる。

スカラワングが気配をすぐに察して、少女を見る、顔に緊張を走らせる。

少女は、イレーヌは、ホテルグラン・パレスから逃走したときとおなじ服装だった。

黒のフォーマルジャケット、プリーツミニスカートの上下に黒の細身のネクタイ。

霧雨のなか、長い黒髪に、肩に、水滴が舞い落ちてくる。

おだやかな風が吹いて、黒髪をたなびかせていった。

女王の、闇の女王の風格をたたえながら、カフェへとゆっくり、やってくる。

右手にはロフストランドクラッチ。右脚の不自由な演技は、いまはしていない。

チマブエの霊視したもうひとりの憑依霊の正体、それはこの杖に憑いているファレ・スのものだった。

スカラワンガが、威圧されたようにドアのまえから身を退いた。アルの右にいたチマブエもうしろに後退する。尻をテーブル席にぶつけ、全身を硬直させる。

アルフォンス・カミュとイレーヌ・エスターライヒは数十センチの距離で、対峙した。

「久しいなアルフォンス」

凜々しい声でいうと、アルが、

「わざわざオレに封印されにニッポンまで来たか、そういうのってストーカーっていうんだぜ」

「ふん、笑止」

イレーヌは、薄く笑んでいった。

「同志イレーヌっ、いまからでも遅くねえっ、おっ始めようぜ
っ」

スカラワンガの怒りを頂点にした濁声に、イレーヌは、

「小生は、民間の少年少女、老人は殺生せぬ」

アルから眼を逸らさず、応えた。

「甘えって、それが甘えんだよ同志っ」

「？ カツパドキアの箱？ はもらいうける、貴様を封印刑に処し、我が愛しき妹アヌークを冥界より救い出す、かならずな」

「あいもかわらず、クヴィスリングの忠実な下僕か」

「？ 箱？ は……あの下賤の輩には渡さぬ、アヌークのために使う」
青年と美少女のカルマびとのあいだ、視線の火花が散る、場の空気は時間の凍りついたように、堅く、凝縮されてゆく。

すると、トン と、アルの肩がうしろから叩かれた。

おいちゃんである。手に、小皿に乗せたゆで玉子をもっている。アルがゆっくりふりむいた。

おいちゃんは、つい、とアルと、のけぞり気味のチマブエとのあいだに割って入ってきた。

「別嬪さんじゃのうっ、ほれ、美味いぞ喰いなされや」

イレーヌはおいちゃんを見て、艶やかな笑顔をつくった。

「かたじけない」

小皿からゆで玉子をとった。クレイジーソルトをつけて、ひと口嚙った。

「うむ、美味である、御老体」

ゆで玉子は、当たり前、だった。マティルダのつくった半熟トロトロのほうだった。

イレーヌは残りを口に入れて美味しそうに味わった。

「別嬪さんや、あんた、鬼を、背負うておるのう、背におおきな、鬼を背負うておる」

おいちゃんは、心からいたわるように、イレーヌにいった。

おいちゃんは目をつぶり、ナンマンドブ、ナンマンドブ……と両手を合わせて、真剣そうに念仏を唱え出した。

イレーヌがうつくしい瞳をほそめる。ほそい頸を優雅に傾げた。

じつと、念仏を唱えつつける老人を見つめた。

それから、目を伏せ、老人に会釈をする、アルにまた瞳をあわせた。

「また来る、今夜中にな」

踵を返して、パトカーへと引き返していった。

スカラワンガはまた殺気を漲らせて、

「決めたぜ俺がオメエを封印刑にしてやるから憶えてやが」

アルはドアを閉めた。ドアのロールスクリーンを有無をいわず下ろしてしまった。

スカラワンガのシルエツトが、スクリーンの布越しに映る。

数十秒間、微動だにせず立っていた。やがて、その影はドアから姿を消していった。

チマブエがとめていた息を吐きだす、そんな感じで深呼吸する。

おいちゃんは念仏を唱え終わると、ごちそうさんじゃ、ツケで頼むぞアルッ、そういつてようやく学院へ帰っていった。

龍子がエントランスのふたりのカルマびとのまえへと歩いてゆく。「詩本っ」

凜が螺旋階段からおりてくる、龍子呼びとめた。

龍子は凜をふり返った。

「私には知る権利があると思うの」

「だって、おまえ、相手はなんつーか……」

龍子は凜をなだめるように、ちいさくうなずく、それからアルを見て、

「アルさん、私役に立ちたいの、友人の仇、討つんでしょう？ ラムゼイという人の」

アルは真っ直ぐ、龍子を射すくめるように見てきた。

龍子は正面から、受けとめた、彼の、カルマびとの、四〇〇年間暗殺をつづけてきた青年の眼差しを。

アルは不意に視線を和らげた。龍子から視線を外し、ひよい、と肩をすくめる。

壁によりかかり、チマブエを見た。

「外教院を代表して、カソリック教徒のリン・クロツカ、リョーコ・シホン、二名の民間人の人身保護計画を貴院に正式に要請する」

チマブエは、おなじ塾に通う他校の学生から、それも受験競争の相手から、ある日突然、試作品の核爆弾を預かってくれ、そう頼まれた学生のような顔になった。

「……内教院は、貴院の要請を受理します……マティルダッ」

『はい御主人様』

「ふたたりを？裏？の館に案内してさし上げなさいっ」

60、知らされる真実

龍子と凜は、マティルダを先頭にして、テラコッタの石畳の道を歩いていった。先ほどアルが走っていったあの道だ。霧雨の降るなか、傘とかどうでもいい、と行ってかまわないだろう、三人は霧のような雨にくるまれながら石畳を踏んでいった。

きれいなね、龍子がつぶやいた。ほそい高木の常緑樹、ブルーヘヴンが道の左右に群生している。そうだな、凜もうなずいていった。

「ちがうわよ」

「え？」

「この森の空気よ、ユリスカフェは空気清浄機の澄んだ匂い、こっちの森はまるで神聖な……」

「……」

「お墓の香りがするの」

「墓かよーっ」

思いつきり突っこむ凜を無視して、龍子は神聖な森の空気を胸一杯、吸いこんだ。

「その女の言は的を射ています」

マティルダが歩きながら、

「ここは表のカフェの建物とはちがい、？聖域？の中」

龍子が、聖域？ とつぶやき数回、瞬きする、そのなにもかもを見透かすような瞳の目力が強さを増すように光った。

そこへ古びた洋館が見えてきた。三階建て、赤茶色のレンガ造りの壁面、びっしり、西洋木蔦の一種のイングリシユアイビーが蔓を伸ばしてレンガに絡まっている。玄関は両開きのおおきなドア、電子ロックされていた。

マティルダはテンキーパネルを素早く操作して解錠する。

三人は一階の大広間へと入った。床の絨毯には埃はなく、清潔だ。大広間はダイニングルームのようだ、ロングテーブルが部屋の中央

にあった。椅子は全部で十二脚。

絨毯の上、凜が土足で入っていく、スゲえなあ、豪華だなあ、とやたらと感嘆しながら。

「凜兄、土足でいいの？」

「え、ああ……いいんじゃないかなっ」

「かまいません、土足で」

マティルダがちいさくいった。

三人は広間左手の螺旋階段を上がって、三階へとむかっていく。

「スパイラルね、目が回りそう」

「気分でも悪りーのか」

気遣ってくる凜に、龍子は、

「だってここも、ユリスカフェも、ユリス学院の校舎も寮も、みんな螺旋階段なんですもの」

三階の廊下、やはり美しい絨毯に覆われている、マティルダに入室を案内された。

その部屋は畳十二畳くらい、広い部屋だった。ロココ調の家具で統一されている。

スゲえなあ、ホテルみてーだな、凜がいいながら、西に面した窓に寄りかかる。

じつと、西の空を見つめだした。不安げに。

龍子はちらり、そんな凜を見てから、

「マティルダ、さあ説明してもらおうかしら」

龍子の有無をいわさぬ命令口調に、

「教えない」

「なぜ？ アルさんも、あのチマブエっていう貴女の御主人も別れ際に、説明するようになって命じたでしょうに」

「でも……オマエは、部外者だっ」

マティルダは、小声で吐き捨てるようにいった。

龍子は、ドアの横の壁に背中をあずけている少女に、つい、と間合いを詰めた。

真正面から、上背を利用して露骨に見下ろしてやった。睨みを利かせながら、

「いいわないと、恥ずかしい恥ずかしい貴女のプライベート、大声でいっちゃうわよ」

「ふん、なにを馬鹿なことを」

マティルダが、おませな、大人ぶった口調でいうと、龍子は、すうつ、と息を吸いこみ さあ、始まりだ、詩本龍子、個人のプライベートすっぱ抜き靈視大会のゴングが鳴った、

「まず貴女シヨーツ何それ？ 大人をなめてるの？ 黒のセクシーランジェリー、透け感たっぷり黒いレースのブラジャーがド貧乳に引っかかっているだけの滑稽さは」

「　　っっ」

マティルダがしゃにむに龍子の口をふさごうと背伸びをする、つま先立ちになる。

両手はすげなく龍子にふりはられ、暴露の嵐は続行されて、
「シヨーツはこれまた上とおそろい、黒いレースのローライズシヨーツ、ガーターベルトの下に履いちゃって、白い清楚なドレスを脱げばまるで妖艶な幼い娼婦のご登場という演出」

「しゃっ、しゃべる、しゃべるからっ」

あたふた顔を真っ赤にするマティルダに、
「貴女、御主人様想いなよね？」

きつい駄目押しをして、マティルダの顔をさらに上気させてしまった。

マティルダは、しどろもどろになりながらも、しゃべりだした。
カルマびとの不死不滅の魂のこと。自分たちがローマ教会の支配下にあること、教皇十字軍と呼ばれる軍隊の内教院に属していること。友軍ではあるけれど外教院とは犬猿の仲で、諜報機関、秘跡認定局が漁夫の利を得ようとしていること。

他方、その仇敵、ヴァチカンから破門された者ども、？父祖の戦列？のこと。

先ほどの襲撃者たち、あの美少女イレー又は強力な破門者であること。

両軍は、世界中の遺跡から出土する謎の古遺物、？父祖の叡智？を奪いあっていること。

父祖とはいったい何者なのか？ それを知るために、奪いあつてきたこと。

四百年の永きにわたり、真実を知るため、追究しつづけてきたこと。

四百年前の？大いなる眠り？以前の記憶が部分的にしかないこと。カルマびとのオリジナルの肉体？祖体？のこと、それを捨てる捨肉、ヒトの体への呪肉、その呪肉の被害者になりすます？擬態？を、マティルダ自身は、眷族と呼ばれる、カルマびとの血を飲んで超常の力を得たヒトであること、本来ヒトでしかない眷族は、死んだら最期おしまいなこと。

三種の使役霊、火で招喚する悪霊デイモン、水の守護霊シユッツ、風の憑依霊サタノフアニのことを。

使役霊となるまえの自由霊、いわゆる幽霊のことを、そうはならずこの星の輪廻転生の流れに還ってゆく霊たちのこと。

ここが？聖域？すなわち、ヒトの信仰の集まる場所であること、聖域では使役霊の行使は不可能、すべての霊体は依り代の中に閉じこめられてしまうこと。

「この土地は遙か昔、ニッポンのナラ時代という古代において、ヒトのあがめる土地だったと聞いている、故に十字軍は、ここを避難所、カナガワ地区の有力なシェルター拠点として利用しているのだ」

61、アヌークと徳人の愛

龍子は、神妙な面持ちで少女の言葉を聞いていた。

「さっきの説明だとカルマびとは、捨肉すると基本、自分の霊体を憑依霊にしてつぎの呪肉先の相手を捜すわけね」

「破門者どもはそうだ、我等十字軍はちがう、正義の執行機関だからな、自殺して捨肉するのも、呪肉も絶対に厳禁しているっ」

「ここは聖域だというのはわかったわ、仮に貴女の主、チマブエが聖域内で、戦闘に敗れて捨肉したら」

「我が御主人様マクロンは負けたりしないっ」

「だから仮に、の話よ、チビ、聖域で捨肉したらその霊体はどうなるの？ すべての霊体は聖域内では依り代のなかに引きこもるんじゃない？ やなかつたかしら」

「……その場合、カルマびとは来世に転生していく」

「転生？」

「そうだ、何十年後か何百年後になるかもわからないが、時空を飛びふたたび祖体を得て甦ってくるのだ」

「なら、カルマびとがみんなそうすれば良いじゃない？ 私たち人間は呪肉されずにすむわ」

「我が十字軍はそうしているっ、破門者どもは現有戦力の低下を怖れて、逆にヒトへの呪肉を義務づけている有様だ、これでわかったろう？ どちらが善でどちらが悪か？」

凜は、西の午後の空、霧雨の煙る、モネの描いた水彩画のようにきれいな空を眺めながら、ときおり龍子を心配げにふり返っては見てくる。

「そういうことだったの、私自身人類の規格外、貴方方のいう？ ヒト？ からすこしばかりずれているけれど、そのすこしどころか、おおきく斜め上をゆく人外ヒトの存在があったとは……」

凜がマティルダをこっさり見た。

コイツ、すこしばかりずれているなんて、可愛いもんじゃねえよな、そう口だけで訴える。

マティルダが目で同意した。

龍子はそんな凜に背をむけたまんま、

「チャコールグレイのボクサーパンツはすこし自重しなさい、マティルダのショーツのことを聞いた途端何よそれ？ パンツのまえのそのマグマの隆起、青春期のリアクション、それはさながら煮えたぎる核分裂の如し」

「ゴメンツ、おれが悪うございましたーっっ」

凜とマティルダは顔真っ赤のレベルをワンランク上げてしまった。マティルダは両手でドレスの上から上下に手をやった。じとっ、とした目で凜を睨む。

「そ、空が、きれいだなーっ……………」

凜は西の空、どんより濁った雨雲の空をひたすら見た。

「さあ、話を真面目にもどすわ、あのイレーヌのいつていた？箱？とは何？」

「……………血文字魔法陣……………？降臨の儀？を成し遂げるための？父祖の叡智？の古遺物だ」

「降臨の儀とは何？」

「……………」

マティルダは観念した様子で、口を開いて、

「カルマびとの……………喪った祖体を復活させる儀式」

「イレーヌは、我が愛しき妹アヌークに使う、そう、いったわね」

マティルダが不承不承、うなずいた。

凜が、横目で龍子をじつと見てくる。

「答えてマティルダ、理屈に合わないわ、あの来日した？アヌーク？は、五年前と同じ容姿を保ったままのアヌークは誰？」

「擬態した、イレーヌだ」

「ふーん、スカラワングとかいう、あのいかにも雑魚のやられキャラって感じの破門者のいつていた、例の変身能力ね」

マテイルダがこくん、うなずいた。

「イレーヌの妹、アヌークは祖体を喪った、父祖の戦列の戦士、なわけね？」

「そ、そうだ……」

「最後の質問、川上徳人と杉浦達也、ふたりの兄弟とアヌークの関係を教えてくれない？ 五年前の真実を……お願いマテイルダ」

「それは、私の口からは……」

「なら、貴女の可愛らしい頭蓋骨の中身に聞くまでのこと」

龍子は、両手をマテイルダの頭に押しつけた。

マテイルダが、驚きに蒼い瞳をおおきく開ける。

「ダ、ダメだっこれは極秘事項でっ」

「どうしても知りたいの、川上徳人は、記憶を部分的に喪つていても苦しんでいるのだから」

その言葉、龍子の言葉、聞いた途端、マテイルダの両腕の動きが、やんだ。突っ張って、龍子の体を押しもどそうとしていた腕が、ぱたん、と下におりてしまう。

龍子は、その瞳を輝かせ始めた、澄んだ薄い色素の瞳、さらに透明さを増してゆき、より一層、ヒトのもつ瞳の色とは別の何かにとつてかわる。それは妖しく光る、満月の魅せる光、人を幻惑して離さない、あの幻想世界に棲む聖霊？ それとも悪魔？ いずれとも判じがたい色を帯び始めてきた。

「満月……白銀の満月が見える、そう？ アヌークがタツくんに呪肉した瞬間、交通事故に……ノリさんは、アヌークの屍鬼となつて復活して……」

マテイルダも、震え出しながら、瞳を閉じた。

「ネズミ顔の運転手？ ふたりはカローラで逃亡して」

龍子は言葉を切った。

マテイルダを両腕で抱きしめてやった。

抱きしめられた少女は、嗚咽をこらえている様子だった。

「砂丘？ 月の砂漠のような……鳥取県へ？……ふたりは、愛しあ

っていた……………」

マティルダは何度もうなずいた。

「……………福音の儀、またこんどは、異界の？ 月の砂漠で三人は再会した……………アヌークだけが残った……………兄弟の記憶を消して……………二度とカルマびとの戦争に巻きこまれないために……………」

マティルダは涙をこらえていた。

龍子はやさしく、少女を抱きしめてやった。

「こころを開いてくれて、ありがとう、だからすべて見えたわ、マティルダ、ありがとう……………」

「ふたりは、こころから……………愛しあっていた……………ヒトと、破門者なのに……………それなのに、なのに、ほんとうに愛しあってしまったの……………破門者のはずなのに……………あの、女の子……………」

「ごめんなさいね、もうだいじょうぶよ、こころを閉じてだいじょうぶよ、マティルダ……………」

「あり得ないことが……………おきたの……………」

マティルダは、龍子に護られながら、龍子の腕のなかで、静かに泣き始めた。

凜は、険しい瞳を上目遣いに、西の空に喧嘩を売るように、ぶつけていた。

左手でカーテンをきつく、きつく握りしめながら。

頼む、早くしてくれ、時間がもう無えんだよ……………そう、凜の唇が動く、それは声にはならず、唇だけの、つぶやきとなって消えていった。

62、黒塚凜と詩本龍子の正体

アルとチマブエは、ユリスモールカフェの二階、ネットのできるカウンターに陣取っていた。

ふたりとも立ったまま、カフェの備えつけのノートブックのうち二台のモニタで、三階の三人を監視している。あの部屋には監視カメラがとりつけられていたのだ。

「恐れながら内敎院各議員におかれては、ご覧になられて如何でしたかな」

画面が三階の様子から切りかわる、ウィンドウが四分割されて、男たちが映った。

ヴァチカン本国を始め、イタリア各地と回線がつながっているのだった。

犬猿の仲たる内敎院と外敎院の議員が緊急招集をうけて、各自の自宅にいるまま、両院協議会を久方ぶりに開催したのである。

『まったく、信じられませんっ』

右下の画面、パジャマにナイトガウン姿の男がとり乱していった。内敎院議会の有力な議員だった。左上下のふたりが反駁する。

外敎院議員たちだ。皆私服のまんまだ。未だ寝癖を整えていない者もいた。

『リヨコ・シホンはあきらかに正確無比な霊視を、読心術をおこなったっ』

『左様、動かし難い事実ですな』

右上の男は、手を震わせながら、

『この数年間、過去四回の我が軍の暗殺作戦にもかかわらず、リヨコ・シホンは生きのびてきた……：：～』
『この数年間、過去四回の我が軍の暗殺作戦にもかかわらず、リヨコ・シホンは生きのびてきた……：：～』
『この数年間、過去四回の我が軍の暗殺作戦にもかかわらず、リヨコ・シホンは生きのびてきた……』

画面の四人が、別の議員たちにとってかわってゆく。誰もが恐慌状態だった。

アルは画面を冷めた眼で見ている。チマブエが非難じみた視線を向ける。小声で、

「はっ、見ていただきたい中尉、この？ウイーン会議？のように踊り迷走する、ヨーロッパの最高の名士たちの醜態を」

そうささやくと、両手をオーバーアクション気味にふりまわす。

チマブエは、内赦院の、パニックになっている議員たちを、そう、憎悪している、といっても過言ではないくらいの視線を連中に飛ばしている。

「中尉」

チマブエがうながした。アルは画面を見たまま、発言のため音声回線をつなげて、

「内外両院各議員に意見具申いたします、一点目、リン・クロツカの前世に関する最終見解、二点目、リョーコ・シホンの前世に関する最終見解、三点目、リン・クロツカを？鏡の継承者？と判じた場合、即座に？鏡の解放？を要請します、四点目、目下進行中の危機です？カツパドキアの箱？移送作戦への友軍戦力増援の可否、いま、すぐに、この場で採決をお願いしたい」

アルの具申をつけて、画面の喧騒がいつそう激しさを増してきた。内赦院は、断固としてふたりの少年少女を認めないと、転生したカルマびとは認めるが、そのなかでも最強の？鏡の継承者？たるカルマびとは認めない、そう叫んでいた。

「なぜならっ、このふたりは前世の記憶をまちがいに保持していないからですっ、もし持ちあわせていたなら、ふたりの行動監視記録にその影響が顕著に出ているとおかしくないっ」

外赦院も負けてはいない。リン・クロツカこそが、鏡の継承者だと、外赦院のカルマびとたちのパワーの源、？えんしゅうぜんいのかがみ円周縁善意之鏡？の継承者であり、外赦院の最強のカルマびとであると、そう力説している。外赦院議員のひとり、

「本人が転生したと、リン・クロツカはたしかに四年前、当該学院中等部に入學してきてアルフォンス・カミュ中尉に申告したのだっ」

すると内赦院議員たちから失笑がおこった。そのうちのひとりが、
『外赦院の議員諸君はなにがなんでも継承者を出現させたいらしい、
強大な戦力が手に入るのだから、妄想たくましくなるのも無理はな
い』

内赦院議員の老人が真面目に語りだして、

『虚偽の申告であると思われる、クロツカなる少年は、転生まれの
記憶をほとんど失念しているとカミュ中尉に告白したそうではない
かつ、こんな都合のよい話があるうはずはない、まずまちがいに
虚偽の申告をしていると見て』

画面が、真っ黒のウインドウひとつになった。

『そのときは、リョーコ・シホンのほうが？善意之鏡？の継承者だ
ったということになるう』

重苦しい老人の声がスピーカから響いてきた。遙かヨーロッパの
彼方から。

英語で《音声のみ》と表示された、ノートブックの黒い画面。

チマブエが、ぱんっ、と手を叩いて喝采を上げる。

「これはこれは、内赦院院長閣下、御自らのご発言ですな、これは
おもしろいっ」

アルの表情は、動かない。

『畏れながら、最悪のケースを申しあげますが……』

内赦院のある有力な議員が発言しだした。

チマブエがすぐさま顔に怒りを見せる。なぜならこの内赦院議員
こそがホテルグラン・パレスにおいて、チマブエに罵声を浴びせた
あの議員だったからだ。

髪をオールバックにした、壮年の男。抜け目のない、用心深げな
目をぎらつかせた男。

すでにしゃれたイタリアのブランド物のスーツで全身を固めてい
る。

『発言を許可する、ケヴィン・ザッカ 議員』

許可を頂戴し恐悦至極です、ザッカ と呼ばれた内赦院議員は、

そう挨拶を述べて、

『議長閣下、仮に、クロツカが破門者の手の者であり、尚且つ、リ
ヨーコ・シホンが……彼女はまだ、未だ覚醒してはおりませんが、
あの忌まわしき鏡、？三角縁さんかくぶちあくいのかがみ悪意之鏡？の継承者……すなわちあの
父祖の戦列の？女王陛下？を僭称する女の転生した姿だったとした
ら？』

『ザツカ 議員、そのケースに於いては、この議論も、善意之鏡の
解放も徒勞に終わる、それだけのことに過ぎぬ』

『おお、畏れながら偉大なる内赦院院長閣下ともあるうお方が、い
ささか果敢すぎるご決断、ご発言ではないかと思考する次第でござ
います』

『そうです、その通りですつ、内赦院議員たちがまた、氣勢を上げ
ました。』

『クロツカ少年の真偽、たしかめるには、今し方議長閣下の仰せら
れたように、善意之鏡をサン・ピエトロ大寺院から持ちだし、ヴァ
チカン市国の、聖域の外へと解放せねばなりません』

この内赦院側の発言に、外赦院議員たちが、

『それだけのことだつ、出せば良い、最強の警備を鏡の周囲につけ、
すぐ近隣のサンタンジェロ城にでも安置しようではないかっ、この
堅固な城までは、ヴァチカン市国からたかだか六百メートルの距離
を移動するだけだ、造作もないぞっ』

別の外赦院議員が賛同して、

『左様、善意之鏡を城の天空に向け、鏡面を外気に触れさせればよ
ろしい、クロツカ少年はその瞬間、前世の姿の容姿と偉大なる継承
者の御技、父祖の魂の御技をとりもどすでしょうっ』

ケヴィン・ザツカ も負けてはいない。

『そうですね、クロツカ少年が本物の継承者であり、しかも
』

ザツカ 議員は、一拍間をおいた。

『しかも、あの？アムイルの議定書？の記述が正しければ、

に限つての話でしょうか？ 万が一ミスがあれば？ ローマ市内に仮に破門者の第？列級が複数潜伏して、この機を、善意之鏡の移送中に、奪う機会を虎視眈々と狙っている怖れは？ いかがでしょうか？ それに城にいったい、どれだけのあいだ鏡を外気に晒すおつもりですか？ 鏡をふたたび屋内にしまい込めば、クロツカなる少年は、瞬時に現在の姿に逆戻りですな』

外赦院の長老議員が、？アムイールの議定書？という奇妙な言葉に飛びついて、

『議定書によれば、善意之鏡と悪意之鏡の継承者二名は、常に同時代、近い場所で転生、誕生してくるとの記述がありますぞ、リヨーク・シホンはまちががなく継承者です、未だ覚醒していない継承者ですぞ、ということとは常に行動を共にするあの少年も継承者である可能性はもうまちがいようのない』

ザッカーが老人のしゃがれ声を手を上げて遮ってから、

『破門者どもも、？アムイールの議定書？を所有している事実をお忘れ無きように、あの狡猾な破門者どもの諜報機関？参謀総局？は確実にリン・クロツカの情報をつかんでいるはずです、この機を果たして座視するでしょうか？ 善意之鏡の移送からふたたび大寺院にもどすまで、貴殿に安全を担保できますかな？ 貴殿の議員生命を賭しても？』

老人は、議員生命、との言葉にすぐさま顔色を喪つていった。

別の外赦院議員は、堅固なサンタンジエ口城にともかく移送だけでもすべきだ、と進言してきた。それに対して、ザッカーが、

『我が親愛なるイタリー軍の防空能力は如何ほどでしょうか？ 城へ地対地ミサイルが放たれた場合如何でしょうか？ 最悪の想定を申せば、仮に破門者によつて？戦術核ミサイル？が使用されたなら、鏡は？ たしかに未知の元素でつくられた鏡です、核すらも耐えるかも知れませんが、耐えられず破損した場合、善意之鏡が破損したらどうするおつもりですか？』

その議員は押し黙った。それでもザッカーの執拗な催促にとうと

う、

『そ、それは……我が、外赦院が……墓碑の血の生産能力を喪失して……』

『そうでしょうとも、外赦院議員諸君、カプセルの成分を生み出せるのは、鏡の鏡面からのみ、なのです、外赦院の軍団員たちに与えるカプセルを生産できるのは、外赦院のもつただ一枚？円周縁善意之鏡？のみつ、おなじく我が内赦院の軍団員のカプセルを生産できるのは、我が院がもつ？円周縁無欲之鏡？……ただ、一枚ですつ、これを喪えば我々教皇十字軍は、現状の優勢を覆されますつ、もしこの大戦に負けて、ヴァチカンに破門者が乗りこんできたとき、奴らは私たち議員の命乞いの声に、果たして……果たして、耳を傾けるかどうか……』

ケヴィン・ザッカーは悲嘆にくれたポーズをとって、両手をおおげさにひろげてみせる。

たいした役者っぷりであった。

両院議員たちのあいだに動揺が走った。身の保身を計る、そんな動揺だ。

「ザッカー、あいもかわらず弁だけは立つ男ですつ」

またチマブエがチック症のように頬に波を立てる。

アルは辛抱強そうに、画面を見つづけている。

ザッカの発言で、両院協議会の議論の行方は暗転してきた。

やはり鏡を持ちだすのは、早計に過ぎる、そんな流れになつてくる。

外赦院議長が、癌を患い、長期にわたり療養しているいま、内赦院のただでさえ強い発言力のまえに、外赦院議員たちは防戦一方の展開だ。

チマブエがアルに耳を寄せて、

「私は以前よりリン・クロツカを本物とみてきましたが中尉は？」
アルは黙って、うなずいた。

「そうでしょうつ、あの少年は信頼がおけます、霊波動が私にそう

ささやくのですよっ、鏡さえ聖域の外の外気に触れさせれば、鏡の？霊道？が開きますっ、あの少年は一〇〇%、鏡の御技を發揮できるっ、イレーヌをかならずや撃退できますっ、一分、いや三〇秒でも良いっ、それだけの時間、鏡面を外気に触れさせればっ」

アルが、ようやくニヤリと笑んだ。

「それが本音か、少佐殿」

「そうですっ、？政治？という奴ですよ」

「好きだね、あいかわらず政治つてのが」

「当然ですっ、私は封印刑にされるなど絶対に御免なのですよっ、もしも私やマティルダのまえにあの女が立ちはだかったならば、どんな理由をつけてでも我がKGは退却しますよっ」

「敵前逃亡か、聞かなかったことにしよう、少佐殿」

「生きのびることこそが？政治？の本質、処世術ですっ」

「その前にリョーコが覚醒しちまったら、かならず破門者に迎え入れられてオレたち、ボッコボコにやられんだろっな、ニッポンがいまこんな有様だしな」

「……君はっ、すこしは真面目になったらどうですっ」

チマブエがスーツのネクタイを緩める、全身に汗をかいている様子だった。

「五年、クヴィスリングは五年をかけて、極東に戦力を集め、？カッパドキアの箱？奪取のため今回の侵略作戦を発動したのですよ、奴は、絶対に自分の祖体をとりもどすため、血眼になって？箱？を奪いにきますっ、私たちは、我がマティルダと貴官と、たったの三人で迎撃せねばなりませんっ、クロツカ少年さえ……戦力になればっ」

「イレーヌは万全じゃなかった、タチバナの情報によれば、ホテルから逃走直後守護霊の引導率に余裕のなかった可能性が高かった、オレがそのときホテルで強襲できていれば話は違った」

「ハッ、彼の情報は、そもそも私が与えたものですっ、まさか貴官が？箱？の移送作戦に動員されていたとはっ、これだから我が十字

軍の軍政はダメなのですよ」

使役霊の引導率は、基本的に一時間につき1ずつ回復していく。きょう、土曜未明のホテルでの戦闘から、すでに半日以上も経過してしまっていた。

「いい材料もある、？ 外科医ジシユカ？ はトーキョーの大使館に缶詰なんだ、それにあの怪物だ、あの悪霊ゼータウフシロン引導率20を手放してる、ミラボーの筋肉野郎をカナガワから遠ざけるためにな」

「ミラボー中佐のKGがいま、いてくれたら、どれほど……」

「あの旦那がいなくても、アンタがいる、オレもいる、マティルダもいる、ちがうか？」

「それで？ 勝てる、と？ 本気で思っているのですか中尉？」

アルは真正面から、ダリオ・チマブエ少佐を見た。

「思っているとか無いとかそんなんじゃないんだ、勝つんだよ」

チマブエはあんぐり、口を開けた。

「それ以外に選択肢をお持ちか、少佐殿は？」

「わっ私をからかうのも大概にっ」

突然、内赦院院長の声が響いてきた。皆のなじりあいなど、吹き飛ばすほどの重々しさをもって、スピーカから流れてきた。

『内赦院院長の権限をもって、これより指揮権を発動する、私は本協議会において、内赦院議員全員に対して、議員拘束をかける、私は本外赦院議会案には賛成票を投じる。各議員諸君も同調するよう要請したい、従わない場合、議員職の辞職勧告を私の名に於いて発動し』

ザツカ 内赦院議員は、愕然とすると同時に、歓喜の笑みをもたらした。

ザツカーが、となりにいる若い女性秘書に思わずこうつぶやくのが、画面上で見える。

？ 議長の指揮権発動を引きだしてやったぞっ、議長が正しければ指揮権を一回分消費させた、私の派閥が次の選挙で有利になる、議長がまちがえていたら、即失脚だ、次の議長は？

私の番だ たしかにそう読める唇の動きだった。女秘書も笑み
をもらっていた。

内赦院が全員、賛成票を投じれば、議案は通る。

外赦院議員よりも彼らの方が議席数が多いのだから。

鏡は、ヴァチカンの外に持ちだされる。

リン・クロツカの？パワー？が遺憾なく発揮される。

内赦院議員たちの沈黙するなかで、ザツカーの派閥の議員たちか
ら賛同の声が上がり出す。

『議長閣下。その御決断、このケヴィン・ザツカー、感銘を受けま
したっ』

私ですつ、自分も賛成いたしますつ、続々と烏合の衆の意見が
固まりだした。

外赦院議員たちは、内赦院院長の 政治生命を賭した 指揮

権発動にただ、呆然としていた。それも外赦院に有利に働くほうへ
と、発動したのだから。

チマブエも、そうだった。

「わ、私の最高指揮官の椅子が、来年ザツカーに？ どちらへ転ん
でも？ ザツカー内赦院院長の……誕生……」

アルは、ぼん、とチマブエの肩を叩いた。彼は、叩かれただけで
よろめく有様だった。

「見事な政治だな、少佐、これがアンタの大好きな政治だ」
アルは笑みながら、二階をあとにした。

63、達也とネズミ

東京、広尾の空は荒れ模様だった。

雨はときおり小雨になり、かと思うと本降りになって地面に激しく降りそそいでくる。

杉浦達也のさしている傘ではどうしようもなく、デニムの膝から下とスニーカーは雨と泥汚れでぐっちゃぐちゃの有様だった。

「だから、あ、あの、おまわりさん、僕は、警察庁次席監察官の立花警視長さんと懇意の仲なんです……五年前からなんですけど、なんとか取り次いでください、あの、アヌーク・エスターライヒさんとも知りあいでのう、お、お見舞いをしたかった、大使館に……」

目の前の機動隊員は、中肉中背、それでもけっこういいガタイで鍛えていそうだった。

「あのな坊主、さっきからいつてるようにな、そういうエラー……いい、人とはなアポをとろうと思ってもそうは上手くいかねえんだよな、いい加減わかってくれや、なあ？」

H & K社のサブマシンガンは装備してはいない、この機動隊員は検問所の分隊長だった。

警察庁の立花を出せ、その一言で慌ててどんなVIPが雨のなかやってきたのかと思えば、神奈川県のエリート高校のお坊ちゃん、というオチだったわけだ。

この分隊長、念には念を入れて、指揮車輛にある現場本部に打診してみたのだった。

なぜなら、立花監察官はこの現場に偶然きており、監察官として前線の警官たちの動きに目を光らせているからだ。煙ったいっただらありゃしない、そう、まさに監察官とは憎まれ役だ。

立花監察官の返答は、絶対に会わない、大使館へも近づかせるな、だった。

長年の直感で何かあるな、そうは思ったけれど、命令には絶対に従うのが、警察の世界だ。

「もう帰れ、な？ お母ちゃんが心配してっからよ」

「それが……僕、母ともう何年も会っていないんです、両親は離婚して、僕、兄がいるんですけど、兄とは苗字もちがうんです、いま、僕、ひとりぼっちで、だからアヌークに……一目会いたくって」

達也は、泣いた、雨のなか、泣きだした、ときおり自分の目の前の警官の表情を、ちらっ、と盗み見しながら。

分隊長も、鼻をすすった。

「……………ホントか……………それ、マジなんか坊主っ」

「はいっ、ほんとうですっ、こっ、これをつ」

達也は傘のなか、スクールバッグから一枚の書類をとりだした。

「うん？ これは？」

「我が家の住民票ですっ、とくとごらんくださいっ」

「うんうん……………坊主っ、おんめえ、マジでぼっちじゃねーかよっ」

「はいっ、僕っ、ぼっちですっ、だからアヌークにひと目だけでも

っ

「いんや駄目だなあ」

「……………」

「あんな坊主、俺もよう、長ーえこと、ケーサツやってんだっ、お前さんのその目っ、チワワみたいになつぶらな純真な目っ、こりゃあ、たいそうオンナツタラシの目だなあ、おめえ、アヌークちゃんもなんだかんだって五年前たぶらかしたんじゃねーだろな？」

達也は心底憤慨して、

「僕、そんなことしてませんっ」

「うん、タラシはな、みーんな、そういつて嘘をつくんだベツさ」

分隊長は鼻をハンカチで、ちーん、とかみながら、方言の地を出して、くどくどくどくど、ついには説教攻撃を開始した。

達也は傘の下、うなだれながら、

「ごめんのり兄ちゃん」

つぶやいた。

するとそこへ、遠巻きに見ている野次馬のなかからひとりの中年男性がやってきた。

「ようっ、おめえこんなとこにいたのかよっ」

達也に元気よく手をふって近づいてくる、透明なビニール傘をさしてやってきた。

「……………」

達也は見知らぬ中年男相手に不審げになった。

その中年、根津充邦は、ばっしばっし、遠慮することなく達也の肩を叩いてくる。

「すいやせんねえ、うちの甥っ子がメーワクかけちゃって」

「え、あ、あのおじさんは？」

「そうだよ、俺だよ叔父貴のコータローだよっ」

「なんだ坊主、おんめえやっぱ嘘つきだなあっ、親戚の人いるじゃんよおうっ」

「えっ？ いや、あのう」

戸惑う達也に、根津が耳元で、

坊主、俺もアヌークに会いにきたんだ、話を合わせてくれ、ささやいた。

「つ、あっ、ああコウタロウ叔父さあーん、何処いったんですかあっ」

「悪い悪い、近所の蕎麦屋でな、カレー喰ってたんだよっ」

達也と根津は、肩をたたきあつて互いを笑った。

「ああ、アホクサツ」

分隊長はヘルメットに手をやりつつ、検問所へと引き返していった。

根津がちらり、うしろの機動隊の列を見る、根津の？元天敵？ケイサツの怖い人たちが二個分隊、十数人近くがMP5Jサブマシンガンをもって、整然と陣形を整えている。

それから背の低い者同士、ふたりは互いの肩に腕をまわしあった。

「俺は根津充邦ってんだ、坊主、おめえの名は？」

「杉浦達也です」

声をひそめささやきあう。

「スギウラ、タツヤ　？　おめえさんが、あの、タツヤ……あの
子が呪肉したつつう相手？」

「……？　おじさん？」

根津は文字どおり、タツヤという名の幽霊かなにかに出くわした、
そんな眼になっている。

「おめえが……みどりのいったた、タツヤ？」

「みどりって、誰ですか？」

根津はまた、周囲を見た。

「ここは場所がイケねえ、落ち着けるトコいこうぜタツヤッ」

達也は釈然としないながらも、アヌークという共通目標を持つ、

この奇妙な中年男についていってしてみる決心を固めた。

ふたりは肩を組みながら、足早に大使館から離れ、野次馬のなか
に紛れこんでいった。

64、立花の闘い

そんなふたりを見ている警官がいた。

首からさげた双眼鏡で、達也と根津を見ている。

警察庁の立花次席監察官だった。

チェコ共和国大使館から数十メートル離れたマンションの屋上、下の階には警視庁機動隊の狙撃チームが部屋を借り切って監視任務に就いている。

立花はひとり、雨にスーツをずぶ濡れにしながら、屋上に立ちつづけていた。

すぐ脇には、開いた傘がコンクリの床面におかれている。傘の下、大雨から守られながら、ガスライターの火がつけっぱなしになっている。

イレエヌのあの最強の眷族、イヴァン・ジシユカの動きを封じるため、立花の使役する悪霊を招喚するためである。

それにしても双眼鏡で見た光景に、我が目を疑った。

なぜ、なぜなんだ、どうして根津充邦と杉浦達也が親しげに肩をまわしあっているのだ？

根津は五年前、アヌークと川上徳人の退却を幫助した。イレエヌの？擬態？をニューズかなにかで見たのだろう。杉浦達也もおそらくはそうだ。

ふたりは、面識は一切ないはずなのだ。

逃避行中、杉浦少年は、アヌークの守護霊となり、天界に封印されていたのだから。

考える、立花はいいきかせる、自身に。何かを見落としているはずなのだ。

根津充邦に杉浦達也の存在を知らせる何かとは？

達也は元、アヌークの使役霊。彼女の使役霊が生きのこってれば、その者が達也の存在を根津に知らせた……？

いや、それは無い。彼女の使役霊は、川上徳人、杉浦達也をのぞいて、全員、？追放の儀？をおこなわせたのだから。そう、自分が命じたのだ。その結果、悪霊、守護霊、憑依霊、すべてを天界に封印した。立花が封印した、たしかに。

追放の儀を執り行えば、アヌークが依り代を使い放った？使い魔？ 主たるカルマびとや眷族から離れて、あらかじめ組まれた使役命令に従い動く使役霊たち もかならず追放されてしまう。極端な話、南極にいようと、日本の裏側、アルゼンチンにいようと、すべての使役霊は追放されてしまう。この儀式の執行の際、指名した相手に使役権はすべて託されるのだ。五年前の場合、その相手は立花だった。

自分が全員、あの夏、回収した、たしかに。

唯一逃れる術があるとすれば、使役霊が聖域内にいた場合、これだけだ。使役霊は聖域に入ると、依り代のなかに閉じこめられてしまう、いかに追放の儀といえども、効力はおよばない。

「己の魂から霊力を削り契約を成す貴重な使役霊たち……そんな無駄な使い方をするはずがありませんが」

いいかけて、脳裡に記憶が甦った。

根津は、複数枚の、憑依霊を憑けた千円紙幣をアヌークから渡されたのだった。

万札に見せかけた買収工作だ。

鳥取県到着後、根津の実家？鳥々軒？は霊視した。使役霊の反応は皆無だったはず。

しかし。

「そうでしたかっ」

思わず叫んでいた。

仏壇 それ自体がちいさな聖域 だ。

あのちいさな中華料理店の奥の和室。仏壇があったはずだ。

仏壇へ千円紙幣を置いていたとしたら。

霊視の監視網から逃れることができる。

根津は、ひとり、ないしは複数名のアヌークの？遺臣？ 主を失った使役霊 を後生大事に匿ってきたのではないのか？ 仏壇に安置したのち、たとえば神社のお守りの袋のなかに入れれば、霊力の経年劣化も防げる、五年、五年間だ、根津は生きながらえさせてきたというのか？ アヌークの？遺臣？を？

立花は防水仕様の携帯電話を出した。自分の子飼いの組織犯罪対策第三課の刑事たちに連絡をとる。十字軍の現地協力者もいれば、買収が成功して、その一歩手前の者もいた。

根津充邦の身柄を確保せよ、との命令を発した。

そこへ、秘跡認定局専用端末に着信が入る。相手は認定局の占星官だった。

「つぎからつぎへとっ」

愚痴りながら応答する。

こんどはジシユカだ、また奴が？使い魔？を放ったとの報告だった。

イレーヌへの増援の使役霊たちだ。

いま、大使館の窓の隙間をすり抜け、天空へと舞いあがってゆく、ジシユカの呪符を、立花も霊視した。

立花は、スーツのポケットに入れておいた呪符をとりだす、すでに呪符には悪霊を憑けて待機させてあった。全部で十四名分、十四枚の呪符を大雨の降る午後の空へと解き放つ。

悪霊の使い魔十四人は猛スピードで大空へと駆け上ってゆく。

獰猛な、赤い火の玉となって空を疾駆していった。

ジシユカの放った使い魔 フサイ・ロー 守護霊引導率17、フサイ・オミクロン 守護霊引導率1

4、この使役霊たちは強力だ、絶対に潰さねばならない。ほかにデコイ 囮の守護霊たち、9未満の引導率の守護霊たちが四名。

厄介なのは、悪霊たちが護衛としてついてきている点だ。引導率6から8までの比較的弱い悪霊が六名。ジシユカの守護霊、悪霊計十二名を、立花の悪霊十四名が猛追し始めた。

闘いの様子を、空を睨み上げる。その顔には疲労を押しつけ、断

固たる意志がうかがえた。

「カフェには決して行かせませんっ」

短く叫んだ。ジシユカを抑えるためにこそ、自分は屋上に立ちつづけてきたのだから。

65、イレーヌの笑顔

『面目ございませぬ』

相手はジシユカだ、機密の保持されたバースト暗号無線機からの声にイレーヌは、

「己を責めるなジシユカよ」

ねぎらいの言葉をかけた。

『自分は墓碑の血を使い果たしましたゆえ、補給待ちにございます』
「貴様、魂は？ 無理をするな」

『あとひとたび、？自由霊招聘の儀？を執りおこな……っ』

ジシユカが激しく咳きこみ始めてしまった。

「休めジシユカ、これは命令であるぞ」

咳はなおもつづき、しばらくしてから、御意、と無念をこらえた老人の声が聞こえてきた。

ジシユカは、大使館の自分に割り当てられたゲストルームに籠もりきりで、不眠不休、儀式を執行していたのだ。自由霊招聘の儀で自由霊を集め、使役霊としたのち、？血文字魔法陣・使役霊援兵の儀？をおこなってきた。

自分の使役霊を、イレーヌの使役下にする、主を鞍替える儀式である。

援兵の儀で、呪符に憑いた使役霊たちは、大使館から神奈川県上空へとフルスピードで飛翔したものの、敵の眷族の放った悪霊たちに追撃されてしまったのだ。

フサイ・ロー
守護霊引導率17は7にまですり減り、霊力も消耗している。

フサイ・オミクロン
守護霊引導率14はわずかに2となってしまう、霊力はゼロ、イ

レーヌの元へとたどりついたものの、そのまま彼女の身のうちに逃げ込み、天界へと封印されていた。

この二名の守護霊たちには、期待するところ大であった。

故に落胆はおおきい。

『ニッポン警察は、行方不明の？アヌーク・エスターライヒ？を誘拐の線で捜査し始めております』

「いましばらくアヌークが大使館内に保護されていると、そう見せかけることは可能か？」

『この国のマスメディアには、誘拐事件に関して報道協定なるものが存在します、メディアが行方不明を報道することはまずございませぬ』

「あいわかった」
通信が終わった。

セドリックのゆったりとした車内、上質な空間だった。ドライバースシート周辺の、ラムゼイの残した血痕をのぞけば、の話だった。いま、その席にはスカラワングの眷族、あの警官の役をして最初にセドリックのサイドウィンドウを叩いた男だ、彼が座っている。

ナビシートにいるのは屍鬼と化したラムゼイだ、表情を消して、微動だにせず前方を見つめていた。

リアシートの左にイレーヌがいた。プリーツミニスカートから、すらり、なまめかしく伸びた、美しく鍛え抜かれた両の太もも

男を誘うかのように、すこしばかり股を開いた恰好、艶やかに白いそのあいだに屹立するのが、妖刀・黄泉洲行路義光。長めの柄の部分が、華奢な頸筋からしとやかなふたつの胸の谷間のところで支えられてあった。

イレーヌの呼吸で胸の上下するたび、黄泉洲行路も生きているかのように、それにつられて微かに動いた。ファレ・スはいま、天界へと封印されている。

眷属の若い男は、ラフなパーカに着替え、顔を左にむけていた。屍鬼と化した？捕虜？のラムゼイに目を光らせていた。表向きは、である。

目は、横目で食い入るように、リアシートを、白い太ももを見つめていたけれど。

イレーヌが通話を終えて、双眸を閉じた。

「アリトウよ、視姦を好むか？」

アリトウ、と呼ばれた着族の日本人は、全身をびくり、と震わせた。

舌で乾いた唇を舐めて、

「ど、同志イレーヌ、自分は決してそのようなっ……………」

イレーヌが漆黒に輝く双眸を露わにして、

「貴様、最後に女を抱いたのはいつ頃であるか？」

「あっ、その……………」

「臆せず申せ」

「きよ、去年…………ボスの、スツ…………スカ、同志スカラワンガの麾下に加わったとき以来……………」

「なるほどな、では無理からぬこと」

そういつて、ジャケットの懐からマネークリップで留められた万札の束を出してきた。十万円分を指でつまんでアリトウの鼻先に見せる。

「下の街で遊んでくるがよい」

「同志、じ、自分はっ……………」

イレーヌは、アリトウを睨みすえた。

「小生は、未だ男の体を知らぬ知ろつとも思わぬっ、我等カルマびとは子を成せぬ故な」

アリトウが息を呑む。

「故に貴様のその血走った眼、虫酸が奔りよるっ、かかる視線を小生にむけるなっ」

「もう、申し訳……………」

ふと、イレーヌの峻烈な瞳がやわらいだ。

「小生は鬼に非ず。いつてくるが良いぞ、戦の前である、英気を養うがよい」

我が子を護る、母親のように優しげな声になった。

アリトウが、震える手で万札を受けとる。

イレーヌに頭を下げ、ドアを開け、逃げるように坂道を走ってい

った。

いま、セドリツクは、紅葉ヶ丘商店街とカフェのあいだの坂道に路駐していた。

雨はいまもなお、降りつづけている。

イレーヌが左を見る。ウインドウの外、カエデ林の草陰で大柄な黒人が嘔吐していた。

スカラワンガである。二時間ほどまえ、ジシユカの遠隔操作で？擬態？を解かれて元の容姿にもどってから、吐きつづけていた。無理もない、全身を破壊され、再生される激痛をあじわって、そのあと平然としていられるほうがどうかしているというものだ。

「ボスが斯様な有様では、戦は始められぬっ」

ラムゼイが、表情を変えた。皮肉な笑みをうかべる。

「ミラボーの旦那は、吐いたこと一度もないんです、ええ、いくら酒を呑んでも、見たことがないんですよ」

イレーヌは、前にむきなおった。捕虜を、ラムゼイの後頭部を、しげしげと見つめた。

「なつかしい、？大熊のミラボー？……アルフォンスとはいまも親交を？」

「はいっ、会ったび酒を呑んではアームレスリングをやり合ってますよ、旦那が負けると、いっつも第二ラウンドですよ、カミュ中尉と大喧嘩です、ええ、そりゃあもうしょっちゅうっ」

ラムゼイは皮肉げに笑んだ。

壊れかけの屍鬼は、それでも従順にナビシートに座りつづけている。

イレーヌは、どこか、遠くを見つめる、儂げな視線をフロントウインドウのむこう、カフェの方角へとむけた。

フロントウインドウ、ワイパーがゆっくり、動いていた。

物憂げな、それでいて、やさしく降りそそいでくる午後の霧雨。

「……男とは、まっこと不可思議な生き物よ、いくら齡を重ねても、童子の性を棄てはせぬ、かと思えば、隙を見せると、我等女に襲い

かかってきよる……憎き、まっこと憎き……生き物であるな」

「ミラボーの旦那はちがいます、自分の筋肉と結婚をしまし
たから」

「……………色気よりも」

「ええ、色よりヤキトリ、ですよ。それもササミの串だけなんです、
半生に焼いてね」

「ワサビをつけるのであろう？」

「ええっ、あの大熊がね、小さじ一杯のワサビでのたうち回ること、
あるんです」

「鼻に、くるのであるう、あの香辛料は、一步まちがうと」

「」名答っ」

捕虜が、心の底から愉快そうに笑い出した。それはうれしげに、
笑い出した。

あのでっけえ、大男がね、小指の先ぐらいのワサビでノック
アウトなんですよっ、そういって腹を抱え、笑い出した。

カルマびとの少女も、つられて、くすり、笑顔を見せる。

素の、少女っぼいすこやかな笑顔。

ええ、あのでっけえ大熊がですよっ、痛えっ、鼻が痛えっ、
つてね、ヤキトリ屋から飛び出していって、七転八倒っ泣きだすん
ですよーっ、そういって、大笑いする。

少女は何度も、これ以上の笑いの発作をこらえている様子で、

「やめる……………やめぬか……………」

声はもう笑っている。数度目の笑いの発作でとうとうこらえきれ
なくなつて、かるやかに声を上げて笑い出した。

笑った、ふたりは笑った、車内に笑いがあふれた。

外は六月の雨、エアコンの利いた快適な車内、ふたりはいつまで
も、笑いあっていた。

66、龍子の提案

カフェの裏の洋館、一階の大広間ではささやかな夕食が開かれようとしていた。十人掛けのロングテーブルの左隅、玄関側に凜と龍子がならんで座っている。

その対面にチマブエとマティルダ。壁のアンティークな振り子時計、古風なシェードランプのほのかな灯り、ここは 聖域は 闘いとは無縁のようにすら思えるほど、落ちついた、時間の止まったような、そんなゆつたりした雰囲気にくるまれていた。

龍子は 凜の目から見れば あからさまに不愉快そうな顔になっていた。

正面玄関の正反対、螺旋階段の右横に両開きのガラスドアがある。ガラスをとおして外には中庭パティオが見える。呑気に白くつやややかな噴水が水を吐きだしていた。

アルが料理を運んでくる。

みんなでメシを喰うときは、スパゲッティだ、大皿に盛ったスパゲッティなんだ、アルがそう力説して運んできたのは、美味そうなポルペッティネ イタリア風トマトソースの肉団子 の たっぷり乗ったトマトソーススパゲッティだ。それに炭酸水のペリ工。

アルはいったとおり、二枚の大皿にドカ盛りのスパゲッティ、それをテーブルワゴンでとなりのキッチンから運んでくる。アルが左端に座った。

みんなが、それぞれ木製のおおきなフォークで大皿から自分の皿へと料理をとり始めた。

龍子が、口火を切った。

「この館を中心に森一帯が？聖域？だということね？ ここではアルさんの見せた不思議な光、使役霊？ とやらの超常のパワーは一切発揮できない、そういうことね？」

「ああ、そつだ」

アルが早くもスパゲッティと格闘しながら答えた。

「森の周囲には、聖域に入ってから高いフェンスにぶち当たるようになってる、フェンスの上の有刺鉄線には高圧電流を流してる」

「電気の供給、切られる怖れはあるかしら？」

「自家発電装置があるから問題はないな」

龍子は、アルと会話をしながら、器用にスパゲッティをふんだくっていった。正面のマティルダが肉団子をもっていこうとするたび、それを器用に木製フォークで横取りしている。

マティルダが、じとつ、とした蒼い瞳で睨んでくる。

彼女も負けてはいない、龍子がスパゲッティをとろうとすると、木製フォークを、がつんつ、とぶつつけてくる。

凜は、右に座る龍子を横目で見ていた。どうやら、このふたりの少女、オンナ同士の友情が成立した、そう思ったのは凜の早とちりだったようだ。

龍子が、マティルダのとうとうとした肉団子をまた奪って　　これで五個目だ　　アルを見た。

「ここが安全だとして、私と凜兄はいつまでいけばいいのかしら？ 月曜には学院の寮にもどらないと、それがいままでの日常だったのだけれど」

マティルダが反撃して肉団子を一個ゲットした。龍子があからさまに舌打ちする。

するとチマブエが、

「あのイレーヌという破門者の女は、決して引き下がったりはしません、かならず強襲をかけてきます」

「私と凜兄の身は、安全ではない、そういうことかしら、ミスター・チマブエ？」

「はい、お嬢さん、イレーヌは民間人には手を出さない、そういういました、けれどスカラワンガはちがいます、あの野獣のような輩は、自分たちの、カルマびとの存在を知ってしまった者を生かしてはお

かないでしような」

「そう？ 私は、とんだとばっちりを受けた被害者のようね、凜兄はともかく」

「なっ、なんでおれのほうは、ともかくなんだよっ？」

「私の見るところ、凜兄はおそらくカルマびと」

全員の目が、龍子に集中する。

「もしくは、？ 眷族？ と呼ばれる存在、または十字軍の現地協力者だわ」

「なぜそう思うのだ？」

マティルダの怒ったような問いかけに、

「あなた、私だけを、部外者、そう呼んだじゃない？」

マティルダがしまった、そんな表情を一瞬見せる。

龍子がそんなマティルダを見下ろす、くすつ、と優雅に笑んだ。

「それから凜兄の行動、なぜ彼はアルさんとこんなに懇意なのかしら？ なぜスタッフルーム（S）でひとりいつもまかない飯を食べるといふ恩恵にあずかっているのかしら？ なぜ彼はときおり西の方角の空、ヨーロッパのヴァチカンのある方角ね、しきりに恨みがましい眼で見るのかしら？」

凜の、スパゲッティを口に運ぶ手がとまる。銀製のフォークに乗せた肉団子がぼろり、皿に落ちた。

龍子はつづけて、

「彼はなぜ、カフェの異常な事態に巻きこまれて、的確な行動をとれたのかしら？ アルさんはなぜ、リンッ、リョーコを頼む、そう命じたのかしら？」

アルが、ひよいつ、と肩をすくめてくる。

「凜兄はなぜ、この洋館に足を踏み入れたとき土足でOKだと知った行動をとれたのかしら？」

「そ、そうだっけ……かなー？」

「いまさらしらはつくれようとしても無駄よ」

アルがテーブルナプキンで口を拭いて、

「リョーコ、白状するよ、リン・クロツカは」

「アルさんっ」

アルは、凜の食ってかかろうとするのを、やんわり片方の手で制しながら、

「リンは、オレが血を分け与えた、オレの眷族なんだ」

凜の動きが、とまる。

少年は、じっと、上目遣いにアルフォンス・カミュの表情をうかがった。

アルは、飄々とした、本心のなんともとらえがたいポーカーフェイスをうかべている。

チマブエが肉団子を口に運びながら、アルと凜をちらり、様子を見る視線を送った。

「……そう？　ありがとうアルさん、答えてくれて、で、つぎが本題なのだけれど」

全員の視線が、また龍子に集まった。

「イレーヌは、誤解をしているのよ、オペラツイオン・フォルモントがアヌークを犠牲にした陽動作戦だったことを知らないわ、アルさんに封印刑に処されて、いまこの瞬間も冥界で苦しんでいる、そう信じこんでしまっている、悲劇だわ」

「……リョーコの、いうとおりだな」

「アルさん、提案があるの、イレーヌに父祖の叡智？　カッパドキアの箱？　とやらを渡して、アヌークの祖体復活に協力しましょう？　それをもって一時的にせよ停戦交渉を試みては？」

67、カツパドキアの箱

大広間に、重たい沈黙がおりてきた。

振り子時計が七回、チャイムを鳴らしてくる、土曜日、午後七時を告げる真鍮の鐘の音。

これは、これは　　チマプエが面白げにつぶやき、しかし首を横にふった。

「小賢しい、平和主義者の妄想」

マティルダの言葉の選びように、龍子はまたしても無表情を守りつつ、こめかみに青筋を立て始めた。すうつ、と眼をほそめながら「マティルダはどうなのかしら？　アヌークに好意的ではなかったの？」

「アヌークという破門者の子は、ヒトと破門者との架け橋になれる、私はあの子が好き、でも姉のイレヌという女は別」

「どうということ？」

「あの女が、どれだけ我が軍の仲間を封印刑に貶めてきたのか、どれだけの眷族を虐殺してきたのか、リョーコは知らないから、そういう非現実的な平和主義を口にできる、あの女とは話しあいどころにかできると考えるのは、おおきなまちがい」

マティルダがいいおわって、スパゲッティと肉団子をかっさらおうとする。

龍子がしゃにむに木製フォークで反撃する。

でっかいフォーク同士が大皿の上で空中戦を演じあった。

「リョーコに知ってもらわないとならない事実がある」

「何？　アルさん」

空中戦から、木製フォークを引っこめる。

マティルダが残っていた肉団子にトマトソースをたっぷり絡めて、自分の皿にぶんどった。

「なぜオレたちが、ドクター・ハツカビーに箱を渡そうとしたのか

？ ドクターとは昼間リョーコを見た白人のことだ…… スカラワンガに呪肉されてしまったが」

「ハツカビー氏とは何者なの？」

「国連のユネスコに属する世界遺産発掘支援局のおエライさんだったんだ、今回の破門者たちによるニッポン侵攻に対して？箱？を奪われないよう、支援局経由の正式ルートを通じてニッポン政府からアメリカへ箱を移送、避難させる計画だった」

「日本の政府が絡んでいたの？」

「そうだ、？カツパドキアの箱？コイツの正式な所有者は現在トルコ共和国政府だ、カツパドキアはトルコの名のある遺跡だが、そこから出土したこの？化け物？を最新のテクノロジで解析するため、極秘裏にニッポンに持ち込まれた、それが四年前の話になる」

「それで、その四年間の成果は？」

龍子の問いに、あるはまた、ひょい、と肩をすくめる。

「ゼロだ、リョーコ、なにも無し。その？化け物の箱？はな、箱それ自体を眼で見た者をかならず悪霊の光で攻撃するんだ、それもとびきりの引導率と、これは詳細が不明だが歳月を経ても消耗しない膨大な霊力で、周囲の敵を破壊し尽くす光を放つんだ」

チマブエがアルの言葉を引きついで、

「父祖の叡智によるとこの破壊光は桁外れのパワーをもっています、通称？聖女のささやき？そう呼ばれています」

マティルダが、聖女のささやき、その名を聞いただけで、ぞくり、ちいさな体躯を震わせる。

聖女のささやき……聖女のささやき、龍子はずぶやき、反芻した。

「聖女のささやきのせいですべての観測が分析機器頼みになっちまったんだ」

「結果は？」

龍子が気をとりなおしたように聞いてくる。

「機械じゃ駄目なんだ、その箱の中身は、人の目には見えるが、精

密機器の監視カメラや超音波、放射線、どんなアプローチでも中は？ただの宝石の入った箱？としか認識されない」

「宝石、が……入っている？」

「ああ、そうらしいな、どうやら使役霊が複数、宝石に憑依して箱に封入されているって話さ」

「納得いかないわ、カットパドキアの遺跡から発掘されたとき、発掘隊員たちは？ 見た瞬間、悪霊に、その聖女のささやきとやらに全員瞬殺されたのかしら」

「箱の形状は完全な正立方体、材質はダイヤモンド、おおきさはおよそ一辺が十一センチ……その表面は羊皮紙で嚴重に包まれた状態で一九世紀に発掘された、紀元前二〇〇〇年頃の地層からな」

アルの言葉に、龍子はまたいつもの？考える人？のポーズになる。あごに拳を当て、思案げにうつむいた。

「まさにオカルティックね、ダイヤモンドを正立方体の形に加工して、中に宝石を詰め込んだの？ で、どうやって封をしたのかしら？」

「封をした痕が、ダイヤモンドの立方体のどこにもその痕跡がないんだ」

「……可能なの？」

「詳細はわからない、オレたちの集めた、いまわかっている父祖の叡智だけでは、まだ実現不可能だな」

「……ロストテクノロジーという奴ね」

「ああそうだ、オーバーツって奴さ、リョーコ」

「いやはや、オーヴァーテクノロジーとでもいうべきでしょうかな」
チマブエが、まさしくナンセンスです、そうつぶやいて首をふった。

「別の父祖の叡智の粘土板によれば、？カットパドキアの箱？が？降臨の儀？の要になるのはまちがいない、だがその肝心の箱が見ることすらできないときてる、お手上げなんだ」

アルはペリエを一息に呑んだ。チマブエが、

「解析できていれば、イレエとも交渉の余地があったかもしれないが」

「少佐殿はいつもどおり厭戦気分満々だな」

アルの嫌味に、それでも、

「それが、政治です」

「やれやれ……さあ、喰ってくれ、せつかくのスパゲッティが冷めちまうぞ、シエフの本日の気まぐれパスタ、スパゲッティ・ポルペッティーネだ、カリオスト口の城でルパンと次元が城下町のトラットリアで奪いあった、あのパスタを再現したんだ」

「あ、道理で見たことがあると思っただぞ」

凜がそういつて、口にスパゲッティを詰めこむ。となりのふたりの少女を、ちらり、見る。

マティルダは、料理を口に運ぶ手をとめて、ペリエの炭酸の泡がグラスのなかで踊るのを、ぼんやり見ていた。

「アヌークが報われない、このままでは……」

彼女が、ぼそり、つぶやいた。

「十字軍がとつと解析しないせいよ」

龍子が唇を尖らせる。

ふたりの少女は、睨みあった。

龍子は最後の対決を　瞳に宿る色は、敵意、焦燥、悔しさ

マティルダに挑んだ。

マティルダも可愛い瞳を、きつ、と見開き、スタンバイ完了だ。

ふたりの腕が動く、怒りを叩きつけるかのように。

ふたりの木製フォークが、大皿に残ったスパゲッティとトマトソース、ポルペッティーネの肉団子に喰らいついた。龍子が素早くフォークに巻きつける、マティルダが横からかつさらおうとする。龍子が団子を一個だけわざとらしく落とす。マティルダの注意がそれに一瞬、むけられた隙に、龍子が巻きつけた獲物を全部ゲットして自分の皿に盛りつける。

ふたりの哀しみに　やり場のない憤りに身をまかせた　そん

な勝負にケリがついた。

「……………リョーコ・シホン、あの靈視力……………オマエはいつたい何者だ？」

うつすら、涙をうかべはじめたマティルダに、

「ポルペツティーネの奪いあいで貴女に勝った女、それ以上でもそれ以下でもないわ」

龍子が無表情のままいった。

心底、不快そうだ、すくなくとも生まれたときからの付き合いの凜には、そう見えた。

アルフォンスとチマブエは、ただ、黙々と料理を平らげていた。

68、達也、真相を知る

「……そんな、こんなことって……ほんとうにあるんだ」

杉浦達也は、テーブルの上の千円紙幣を見ながらいった。

千円札の上に、？みどり？が、ちょこん、と正座をしている。

？ほんとだよっ、ネズミのいったこと、ぜんぶほんとお、わたしが教えたことだからねえ、タツヤは最強の守護霊さまだったんだよっ、どうしてヒトにもどれたのかわたしバカだからわかんないけど、アヌークさまの誇りだよっ、わたし……タツヤに会えて……うれしくって……？

みどりが早口にまくし立てるようにいって、くらり、ちいさな体をぐらつかせる。

「おい、みどりっ」

達也の正面に座っていた根津充邦がすぐさま千円札を両手でそっと、もちあげる。

「無理すんなって、な、みどりよ」

？ うん ごめん ネズミ……？

みどりは具現化していた可愛らしい容姿を崩していった。

根津がお札を丁寧に折りたたんで、首から下げたお守りの袋にまたしまい込む。

？……ごめんね、ちょっと……つかれちゃったよねえ ？

みどりは別れ際にそういって、また？聖域？の中、安息の眠りに落ちていった。

達也は、そんなふたりをじっと凝視しているしかなかった。

インド料理&バー？タージマ春夫？のマスターは動ぜず、騒がず、ただ黙々とタンホールチキンの火加減を見ている。

いま、店のドアには臨時休業のプレートが掲げられてあった。

根津がどうにもたまらない、そんな調子で、

「マスター、セ」

「セブンスター吸うなら、店の外でお願いしますよ」

顔は微笑みながらも、断固とした口調だ。

「ったくよう、こんなときにもゆるーづーの利かねえ野郎だなあ、ったくっ」

達也を見て、

「なあタツ坊っおめえもそう思うだろっ」

「そんなことよりもおじさん、アヌークとのり兄ちゃんは、鳥取砂丘へむかったあとどうなったんでしょ」

「ん、んん？ そりゃあ、おめえ、あのニイちゃんによ、徳人に聞いてみるつきや」

「駄目です、のり兄ちゃんもアヌークのこと、顔と名前、それと懐中時計のことぐらいしか憶えていないんです」

根津は、呆然となつてしまい、

「じゃ、じゃあ、俺が助けてやったことは？ 白のカラーラで、それつくらいなら」

達也は首をふった。

「のり兄ちゃんから、おじさんの話聞いたことないです、でもそんなことよりも」

「そんなことつて、よう、おめえもたいがい冷てえヤツだな」

「だって、おじさん、僕の体が今ここにあるんなら、アヌークは、いまのアヌークの体はどうなっているんでしょう？ 僕はどうして甦ることができたんでしょう？ 元の体に？ のり兄ちゃんは？」

僕ら兄弟は、使役霊からどうやって普通の人間の体にもどれたのかな？ どうして記憶を、いちばん忘れちゃいけない大事な、大事な記憶を無くしてしまったんだろう？」

根津は、しばらくのあいだ、固まっていた。

達也が、どうにもやりきれなそうに、哀しそうにしている。

「そ、そういわれてみりゃあ」

「僕の推理なんです、砂丘で何かアクシデントがあった、敵の十字軍に追われていたんだから、まちがいなく十字軍がらみ、おじさ

んが厚木のあの心霊スポットで見たっていう外人さんと警察を名乗る日本人？ の二人組、彼らが敵の十字軍、と考えていいですね」
「おうっ、俺はそうだとニラんでるっ」

根津がうなずく、マスターも同意見だとばかり、首をおおきく上下にふった。

「……だからアヌークは僕の体から逃げて、えっと」

達也は逐一、スマホで根津とみどりの説明をメモしていた。そのメモ画面を見ながら、

「？捨肉？ですね？ 捨肉するには？カルマびと？はいったん死なないといけない、だからアヌークは捨肉せざるを得ない事態に陥って、いまの体に呪肉している、ってことになります」
「うんうん」

根津がうなずいた。マスターも、タンドールの大釜とにらめっこしながら、うなずいている。

達也が鼻をすすりだした。言葉を切つて、とつくの昔に食べ終わっているサグマトンカリーの空いた皿に視線を落とした。

「……アヌークが……別の誰かを犠牲にする、犠牲にして呪肉しつづけなくっちゃいけない、生きていけない……アヌーク……あんなりにも彼女にとって、残酷な人生で……」

達也は、安物のテーブル席のソファの上、くたびれた様子で背もたれに身をあずける。

店に到着してからというものの、根津のなんとも要領を得ない過去話を一時間以上聞かされ、トドメとばかりに使役霊の証拠、生きた証拠 死んでいるのだけれど みどりが登場して、補足の解説をしてくれたのだった。

幼女の、なんとも可憐なサイドテールのお化け、みどりを目の当たりにして、シヨックも手伝ったのだろう、

「みどりちゃんにしたって……あんな、弱っていく一方……おじさん、どうして世界ってこんなに……」

達也が片手を目にやった。体が震えている。涙が頬を伝わり出し

た。

「……こんな、残酷にできていたんでしょう？ 僕ら、知りもしないで……」

根津はそんな達也を見て、両手で頭を抱えこんでしまった。

69、達也と根津の逃亡

いたたまれなくなつたようで、頭を掻きむしつてしまつ。

どうにもいけねえな、こいつぁー、そう、自分にいいきかせるよ
うにつぶやいた。

それからすこしばかり、考えこんだように沈黙してから、

「マスター、せー」

「清酒なら久保田の萬寿が入荷しています」

「おつ、わかつてんじゃねえかつ」

マスターはカウンターを出て、日本酒の一升瓶をもってきた。根津のコップになみなみと注いでやる。

「ありがてえ、タツ坊つ、おめえも呑むか？」

「……僕は高校生だから……遠慮しときます」

根津は、じゃあ悪りいけど、ひとりでいただくぜ、そういつて旨
そうに、ちびり、と久保田を舐めるようにして一口飲んだ。

ふう、と一息ついて、

「なあタツ坊、よくわかんねーけどよ、でもよ、俺は思うんだ、カ
ルマびとも、俺らヒトも、自由霊たちも、使役霊たちも、みんな、
不幸だ、人の業ごうつてモンを背負おしつてんだよ」

「業、ですか」

涙をハンカチで拭いて、はれぼつたい両眼を根津にむける。

「そうだ、カルマびとは強え、でもよ、ヒトの体がなきや、日干し
になつちまう、ヒトのユーレイさまがいなけりや、使役霊を使えね
え、使えねえカルマびとは、ただのヒトとおんなじよ、そのアレだ、
聖域つてのにいるときとか、子分の使役霊がみんなやられちまつた
ときとかな」

そういつて、また呑んでから、

「カルマびとはヒトを利用して、ところがどっこい、ヒトもカル
マびとを利用してやがる、？眷族？つてのがそうだろ？ この国の

お偉いさん方も、アメリカのエライさん方とか、それこそ世界中の国の上の連中だよ、そうだろ、？現地協力者？つてえもんになつてよ、みんな、十字軍と父祖の戦列、どっちかの側についてうま味を吸つてんだ」

達也は真剣な表情で聴きいつている。

マスターも大釜のまえにもどつて、またうなずいている。

「どいつもこいつも、大なり小なり薄汚れてんだよ、業つてモンを背負つてんだよ、そんなでもさ、自分を守るためや自分の大切な親兄弟、恋人、仲間、そいつら守るため、なんとかしてこのクソツタレの世の中をよ、渡つていくつきやねえだろう？」

根津の真剣な眼、達也を真つ直ぐ見つめて語りかけてくる。

達也はいつのまにか居ずまいを正していた。

「タツ坊、五十歩百歩つて言葉、な？ あんだろ？」

「はい」

「百歩は五十歩の倍もある、フツーは百歩が笑つ側だ」

達也がうなずく。根津がまた呑んで、

「けどよ、もしも歩けば歩くほど不幸も幸せも両方背負つていくんだとしたら、どうなんだろうな、いつてえホントは誰がマジで幸せなんだ？ 千歩か？ 一万歩か？ 百万歩の幸せと不幸背負つたヤツなら幸せつて自慢できるんかい？ 正々堂々と、よ？」

達也は、百万歩、と根津の言葉をつぶやいた。

「なあタツ坊、ヒトはフツー、テメエの前を歩いてるヤツ見ると好きになつたり、憧れたり、嫉妬したりしてな、憎んだりする奴だつていらあな」

「はい」

「後ろ見りゃあ、嘲笑つか、憐れむか、気にも留めねえ、まあそんなとこだ」また酒を呑んで、「そう思つちまうもんだ、ヒトつてもんはしょうがねえ生きモンだからな、思つなつつても、俺たちはそういう感情もつようにできちまつてる」

「でも、他人を悪く思つのはっ、いけないことですっ」

根津はうなずいて、

「いちばんいけねえのは、そんなこと思ってるあいだに、自分が歩くのやめちまうことなんじゃねーかな？ 歩くのやめるとよ、テメエと手をつないでる大事なヤツも、歩くの止めなきゃいけなくなっちゃう、テメエの後ろ歩いてるヤツらの邪魔にもなっちゃう、なんつったって、後ろがつつかえちまうからな」

「後ろが、つつかえる……」

「前のヤツの背中ばっか見てねーで、地面見ろよ、ってね、後ろのヤツ気にしてふりむかねーで、地面見ろ、テメエの歩いてる足元を良く見てろよ、ってよ、そういいなくなっちゃう」

「……うん、わかります、僕っアヌークがかわいそうだ、ってそればかり思ってたっ」

「おいっ、そこはよっ、？ ガラにもなく元ヤーさんが説教かよっ？ っ突っこんでくれなきゃあよっ、徳人みてーにっ」

「えっ、のり兄ちゃんが？ それ、僕の知らない記憶ですよね？」

根津が、口を滑らした、そんな顔になる。

「いや、すまねえ、コツチの話だ、だ、だからよ、前を見てよ、前見て歩いてくしかねーだろ？ ゴールに何が待っていようと、な」

「おじさん、ゴールって？」

達也が身を乗りだす。

根津はコップ酒を、極上の久保田のコップ酒をそれは旨そうに飲みほした。

コップを、たんつ、とテーブルを叱りつけるようににおいて、

「アヌークだ、あの女の子だ、あの子に逢って確かめるっきゃ他に無えよ」

達也はもう一度、ハンカチで目元を拭いた。

「歩くのをやめない、事……やめない事……っ」

「おうよ、解いてやるうぜ、タツ坊のさっきいった謎ってもんをよ、謎解いてよ、手をつなぎにいこうぜ、アヌークとっ、五年前みてえにもう一度手をつなぎにいこうぜっ」

達也が、童顔にようやく微笑みをとりもどした。

「おじさんっ」

マスターが、

「根津さん一階っ」

短く叫ぶ。

根津の血相が変わる。

「なんだい、現役時代に逆戻りかよっ」

根津が一升瓶を引っつかんで、ボストンバッグに無理矢理突っこんだ。

「お、おじさん？」

根津が立ちあがる、ボストンバッグをもって、

「ズラかつぞタツ坊っ、サツのっ、ご登場だっ」

「警察っ？」

達也も立ちあがる。マスターを見ると、テレビの液晶画面を指さしてくれた。

テレビは、監視カメラの映像に切りかわっている。一階と二階の様子。

数人のスーツ姿の男たちが上がってるところだった。厳つい表情、雰囲気、身のこなしは訓練された者の動きだ。

一階のビル出入り口にも、でかでかど？臨時休業？の看板がおかれているにもかかわらず、さらにこの雑居ビルに現在入居しているのはこのタージマ春夫だけなのに、である。

「タツ坊こっちだっ」

根津が出入り口と逆、店の奥へと走る、達也がつづく。

店の奥、インド綿のルンギーがカーテンがわりに垂れさがっている、そいつをかき上げ、

「足もと気いつけろっ」

頼りない照明の下、見るとビールケースや食材の入った袋、バケツなどがおいてある。

根津に手を引かれて、ひょいひょいつつ、とジャンプしながら突っ

切る。

一番奥、非常階段が四階へと伸びているのがわかる。

一気に駆け上がった。

「おじさん、上にいったら袋のネズミ」

「ははっ上手なことというなタツ坊っ」

根津は意に介さない。

四階に上がると、窓を開ける。

目前、となりの雑居ビルが隣接している、数十センチと離れていない、根津が手を伸ばし、そのビルの窓も開ける。

「お隣さんにうつつぞっ」

「はいっ」

ふたりはかんたんに移動した。その雑居ビルは空き部屋だった。

達也が一息ついて、

「警察が追ってくる？ 十字軍の？ 現地協力者？ でしょうか？」

「五年も経ってんのかい」

「アヌーク来日にあわせて、五年前の関係者をしらみつぶしに……
つて考えられませんか」

「……あり得るぜ、タツ坊っ」

根津が、おつといけねえ、そういつて元どおり、両方のビルの窓を閉めてから、

「あ、やべえ店にっ」

「あ、そついえばお勘定」

「ちげーよタツ坊っタンドーリチキンを食いつぱぐれちまったっ」
ふたりが非常口から出る、空きビルの外壁、非常階段を駆け下りていく。ビルの裏手、うまいことほかの林立する雑居ビルの陰になつて、姿を隠せるようになってる。

「チキンかあ、フライドチキンより美味しいかな？」

「おうっ、アメリカのフライドチキンよりか、ぜつてえ旨えぞっ、
こりゃ請け合いだっ」

「……なら、食べてみたいかも」

「なんだ、チキンは嫌いか？」

「うーん……フライドチキンにちょっとだけイヤな思い出が」

達也がちょっとばかり、昔を思い出したように苦笑いをうかべた。ふたりはほそい路地を疾走していった。小雨がまだ、降りつづいていた。

70、闘いの前の静けさ

「はい、すみません、連絡遅れて……お願いします」

凜は学院事務室との通話を切った。スマホをベッドに放り投げる。自分と詩本龍子、ふたりの週末の帰宅届けを電話連絡ですませたのだった。窓辺によった。窓から見える、左の方角　西の方角、クソツタレの内外両院のある方角　をじっと、眺めやる。

「頼むよ、？鏡の解放？……とつとと決断してくれよ外赦院のおエライさんたちっ」

外は、いまも霧雨が静かに降りそそぐ雨雲の夜空がひろがるばかりだ。

凜はスマホでこんどは別の相手に電話をかけた。すこしばかり言葉のやりとりを交わしてから、すうーっ、と息を溜めて一気呵成に、

「詩本龍子の鬼、悪魔、痴女、電波女、貧乳っ、でも俺はヒン又嫌いじゃないけどねっ」

ドアがノックされた。

凜がドアを見る、すぐに通話を切った。

どうぞー、と窓を見たまま投げやりに返事をする。

マティルダが入ってきた。

「マティルダ？」

しいー、つとマティルダが人さし指をちっちゃい口にあてる。

「リン・クロツカ、貴殿を？善意之鏡の継承者？と見こんで頼みがあるのだ」

「……なあ、一応さ、それ外赦院の極秘事項らしいから、内赦院の眷族のおまえが軽々しく口にしたらヤバくね？」

「我が御主人様^{マイト}はただひとり、わたしはあの御方の御命令に従うのみ」

「おまえ、ホント一途な？」

「クロツ力殿？ あのリョーコ・シホンとはそもそも何者なのだ？」
「いや凜でいいよ……それよか、おれにはなんのことやら」

「隠さなくとも、噂が軍内部にひろまっているぞ、あの女は？ 悪意之鏡の継承者？ ではないのか、と……口に出すのもおぞましい、破門者どもの女王陛下なる人物ではないかと」

凜は、ベッドの上であぐらをかきながら、すこし笑って、

「そ、そりゃあー無ーわ、そしたら破門者たちが黙ってねーだろ？ 箱も重要だろうけどそれよりなにより詩本に接触してさ、頭下げてるスカウトするんじゃないの？ 土下座して、うちにお帰りください女王様あーっ、ってさ」

「……破門者どもが未だ、悪意之鏡を入手できていない、としたらどうだ？ 私の推理は」

「うーん、まあ、それは考えられるな」

「そうだろう？ 鏡もないのに、継承者らしい、というだけで拉致をしたら、リョーコの心証を害するだけだろう、？ 父祖の戦列？ の長になってくれ、といわれて、はいわかりました、と話が運ぶこともない、上手くいく話もいなくなる怖れがある」

「そりゃわかつたけど、どうしたんだおまえ急にさ」

マティルダが、ついっ、と身をよせてくる。ひそひそ声で、

「だから、あの女に復讐するならいまのうち、ということだリンッ」

「おまえまだ根にもってんのかー」

「当然だっ 御主人様を侮辱したのだからな」

凜が首を傾けて、

「……あ、ああ……あれかあ、おまえの黒い透けショーツとガーターベルトな？」

マティルダが真っ赤になって、

「それを言っなっ」

「チマブエの趣味だもんないあいつも大概ロリコ」

マティルダが凜の口を無理矢理ふさいだ。

「ごっ、御主人様は変質者では無いぞっ、無礼なことをいうなっ」

凜が迷惑そうにうなずいた。ジェスチャーで、この手をどける、
といつてくる。

マティルダが怒り心頭の様子ながらも手をどけてやった。

「わあつたよっ、ったく、で復讐ってどうすんだよ」

「目には目を、歯には歯を、だ、リョーコのショーツを隠してやる
のだ」

凜は頭を掻いた。

「おまえさあ、いまがどういうときか分かってる？ あのイレーヌ
が強襲してくっかも知んねーんだぞ」

マティルダがニヤリ、笑って、

「心配には及ばない、KGミラボアの来援が決まったぞ、一時間ほ
どで到着の予定だ」

「おっ、あの筋肉野郎くんのかよっ」

「そうだ、しかもイレーヌはあの悪霊ゼータ・ウランロン引導率20を手放しているの
だ」

凜が腕組みをした。マティルダが顔をよせてくる。

「見たくはないか、リョーコのショーツを」

「ん？ んん、いや、そのー……」

凜が顔を右にむける。マティルダが凜の顔を追うように、凜の右
側にまわりこむ。

「ホントは見たいのだろう、ずっと見たかったのだろう、何年もそ
ばに居つづけて？」

「ん……………うん……………うん……………」

「ほーらやっぱりっ」

マティルダが、ころころ、勝ち誇ったように笑った。

隣室では 詩本龍子の泊まっている部屋だ つい数分前から
シャワーの音がかすかに響いてきている。ふたりが壁のほうを見た。

マティルダの作戦は、こうだ。

まずマティルダが龍子の部屋を激しくノックする、敵襲だから早
く地下のシェルターに避難して、と。慌てた龍子がバスローブ姿で

浴室から出た隙に、凜が隠し穴から脱衣所に侵入、シヨーツをゲツト。

「おい、隠し穴ってなんだ？」

「その冷蔵庫をどけるのだ」

マティルダの指さした先、隣室とのあいだの壁側、部屋の角に冷蔵庫がある。

ふたりがどけると、床のすぐ上、壁に人ひとり出入りできそうな穴が開いているではないか。

「こっから侵入すんのかよ」

「では手筈どおりに頼むぞ」

マティルダが、につこにこ笑みながら、廊下へ出ていく。すぐに、龍子の部屋のドアを乱打する音が聞こえてきた。

どうしたの？ 詩本だ、詩本の声がかすかにした。

リョーコツ、敵襲だつ、マティルダの声。

ちよつと間をおいて、ドアの開く音がした。

凜は床の絨毯の上、腹ばいになって穴をくぐり始めた。

穴のむこう側、小物を入れる家具がおいてある。ロココ調の四つの猫足に支えられている。凜は猫足をふたつもって、せーのつ、で左にずらしていった。タイル地の床の上、するつ、と家具がスライドしていく。

凜は体をまえに進めていった。

侵入成功。薄暗い。照明が落ちている。脱衣所だった。左に開けつぱなしのカーテン、奥にヨーロッパアンティストの白亜のバウタブ、お湯の出つぱなしのシャワーがある。

脱衣カゴは見あたらなかった。目当てのモノを捜したけれど、あの布きれはどこにもなかった。

暗がりのなか、そうつ、と抜き足差し足で脱衣所のドアを開ける。リビングも暗かった。先が見えない。

二、三歩歩いたところで脱衣カゴらしきものに足が触れる。

「これかな？」

暗がりのなか、手探りで……あつた、それはあつた、中にあつたのだった。

まだあたたかい、シヨーツが。

とりあえず、香りを味わってみる、良い香りだった。

だが問題が。

暗闇の中まったく何色なのか、見えないときている。

凜は手探りで、壁伝いにスイッチをさがしていった。すぐにスイッチに指先が触れる。

押すと照明が煌々としてくれた。

眩しいなか、凜は細目を開けて見てみた。

黒、ローライズシヨーツ、サイドは紐状、花柄刺繍の透け透けではないか？

「ったく、詩本のヤツこんな過激なモンを履いてやがって」

凜の目のまえ、詩本龍子とマティルダが突っ立っていた。

ドアのすぐそばにマティルダ。涙目で震えている。顔が真っ赤っか。両手をホールドアップしている。

龍子はあるう事か、マティルダに拳銃を突きつけていた。

コルトパイソン三五七マグナムだ。

凜は、素^{すっ}の表情になって、目のまえの光景をどうにか理解しようとしていた。要するに、男子生徒が女子更衣室にイタズラで侵入したら、お先に貧乳の銀行強盗が人質を盾にして、女子更衣室に立て籠もっていたっていうわけなんだけれど、要するに意味がわかりません。

「誰が貧乳強盗よ？」

「お、おれはなんにもいってねーっ」

「護身用にアルさんから渡されたのだけれど、早速役に立つとはね制服姿のまんまの龍子が無表情にいった。

凜は、呆気にとられてふたりを見くらべる。

「あの、これって、どういう？」

「か、返せっ、それは私のシヨーツだっ」

マティルダが半べそで叫んだ。

「そうよ、私が脱がせたの」龍子が拳銃に一瞥をくれて、「これを突きつけてね」

「じゃ、じゃあ、シャワーはっ？」

凜の疑問の叫びに、龍子は、

「嫌な予感がしたの、だからシャワーを全開にして、ドアの脇で侵入者がこないかどうか見張っていたのよ」

「し、詩本っダメしたなっ」

「下着泥棒が何をほざいているの？」

龍子は拳銃を凜のほうへとむけて、

「一度、拳銃って撃つてみたかったの」

「ちよっ、タンマッ、詩本ーっ」

龍子がためらうことなく、凜の頭上めがけて発砲する。

弾丸は、脱衣所のドアの上のあたりにめり込んだ。

「っーっーっーひっ、人殺しっ」

凜がしりもちをついて叫んだ。

「凜兄、静かにして」

「だって、おまえっ」

「嵐の予感がする」

龍子のいった途端、洋館の中サイレンが鳴り響き出した。

凜がおきあがる、マティルダが泣きやむ、眷族の貌をとりもどす。

『リン、リョーコ、マティルダ？ 聞こえたら返事してくれ』

アルの声、天井のスピーカーから聞こえてくる、三人が返事をした。

『窓際から離れる、装甲シャッターを下ろす、カフェに？お客さん？だ』

三人が窓を見る。

龍子の部屋、窓ガラスは閉まっている、その内側、黒っぽい板

均質圧延鋼装甲 が降りてくる。きゅらきゅら、という擦れる

音が、洋館のいたるところから響いてくる。すべての部屋の窓、正面玄関を閉鎖しているのだった。

「アルさん、消防隊か警察を呼んでみては？ 破門者たちもその存在を知られたくはないのでしょうか？ ミラボーさんというカルマびとがくるまで時間稼ぎにできるわ」

『そうもいかない、やってきた連中に憑依霊を憑けられて、帰されちまうのがオチだ』

「なら私たちが箱をもって市街地の人混みに紛れてしまえばよかったのに」

『民間人を巻きこむ怖れがある、十字軍法典違反になっちまう』

三人とも一階に降りてきてくれ、そうやってスピーカからの通話が切れた。

龍子はまたしても青筋を立てていた。両手を腰にあてがう。

「十字軍って凄まじく面倒臭いわね、父祖の戦列とかいうほうが楽そうじゃない？」

「おめえそういうこというなっ」

凜が叫ぶと、マティルダが彼の陰に隠れて、

「やはりこの女、あ、あっ、悪意のっ……」

顔が蒼白になっている。凜はマティルダの手を引いて、

「とにかく詩本、アルさんの指示どおりに一階へおりようぜっ」

「なによ、ふたりして仲良く手をつないじゃって」

龍子が、世界のすべてが気に入らない、そんなふう片っぱの頬をふくらませる。

三人が部屋を出たとき、

「なんだっ？」

凜がいった。

音が、なにかの爆発するような音が聞こえてきた。

71、イレーヌ、強襲開始

スカラワンガとアリトウはカフェ二階の天井を悪霊でぶち抜いて、屋根の上に立っていた。

ふたりとも狙撃を怖れて守護霊結界を展開している。

スカラワンガが肩に細長い物を担いでいる。

ロシア製、携帯式対戦車ロケット擲弾発射器、RPG 二九だ。

砲身長一八五〇ミリ、口径一〇五ミリ。暗視式照準器を装着していた。

「初弾、洋館一階、玄関左の窓に直撃、装甲破壊を確認したぜ」

アリトウが無線機のマイクにむかって復唱した。

『つづける』

イレーヌの声、彼女はいまカフェの一階に配置に就いていた。

アリトウが円筒形の発射器後部から次弾を装填する。後方爆風の危険区域を逃れ、スカラワンガの右へとまわりこんだ。

トリガーが引かれ、発射。爆風が後方から放たれ、砲弾が轟音を残し飛翔していく。

こんどは玄関右の一階窓に直撃。さらにおなじように装填、発射。三発目が正面玄関に下ろされた装甲板を貫いた。

悪霊で叩き壊して平らにした足場、無線機や砲弾の格納容器で足の踏み場はほんのわずかだ。

夜の闇のなか、霧雨はいまだに降りつづいている。

四発目、ふたたび玄関左の窓を直撃、装甲は跡形もなく、人ひとり通りぬけられる大穴ができていた。

イレーヌがロシア製KBPグレネードランチャーを片手に、カフェの裏口から出てくる。全身に守護霊結界を張っている。数歩、テラコッタの石畳の上を歩いたところで立ち止まる。

聖域の気配を察したのだ。もう一步前進すれば、守護霊は天界に封印されてしまう。

グレネードランチャーを構える。しゃこんつ、音がして回転式弾倉が回った。

一発目が玄関前に着弾した。猛烈な勢いで非致死性ガスがひろがり出す。

洋館側からの狙撃を防ぐための、煙幕だった。二発目、三発目、回転式弾倉が回り、次々と発射されていく。洋館正面はガスが壁となりもうもうと立ちこめている。

その美貌の上から無骨なガスマスクを装着する。黄泉洲行路義光を腰に帯び、バックパックを背負った。防弾盾を 四枚重ねあわせて軍用粘着テープで固定した物を 左手にもつ。

総重量二〇キロ以上の四枚盾を軽々もちあげ、体の前方へ、盾の下端を斜めに突き出し、直撃を和らげる姿勢をとる。

中腰の姿勢、一〇〇メートル一秒を切るかどうかきわどいくらいの素早さ、両の白い太ももがミニスカートを撥ねのけ、華麗に躍動する、ブルーヘヴンの林を抜ける。

洋館の正面玄関が迫る。目前。

殺気、イレーヌは殺気を感じて

正面玄関の銃眼が開く。

玄関エントランス、アルフォンス・カミュが配置に就いていた。

頭に片眼式の暗視スコープを パッシブ遠赤外線暗視型を

装着していた。

分厚い煙幕をとおして、物体の発する熱、遠赤外線を可視化する装置だ。

白黒画像、イレーヌの奔りよる姿は鮮明だった。

二脚に載せた対物狙撃ライフル、H&K社のPMG 一、全長約一二〇〇ミリ。

発射した。

七・六二ミリ×五一NATO弾を至近距離から発射、イレーヌの防弾盾をめり込ませる、斜めに倒された盾の表面、えぐり破碎し、跳弾となって、カフェの上空遙か彼方へと消えてゆく、オートマテ

イックで次弾を装填発射。

イレーヌがぼろぼろの盾を棄て、左へサイドステップ。

次弾が彼女の右頬をかすめる、鮮血を吹き出させる、NATO弾はブルーヘヴンの木立に直撃、ハメートルの幹を粉碎、なぎ倒してゆく。

イレーヌが、玄関左窓に開いた大穴へ手榴弾、催涙弾を投げこんできた。

アルが後方へステップ、殺傷距離から数瞬早く離脱する。

手榴弾が炸裂、爆風、振り子時計が潰れて落下、天井のシェードランプが粉々になって降りそそぐ。つづいて激しい咳や涙、嘔吐を催すCNガスが大広間にあふれ出す。

スカラワンガとアリトウがマスクを装着、装備を担いで、屋根から真下に飛び降りる。石畳の上に着地した。ふたりも四重防弾盾をカフェからもちだし、走り出す、途端、守護霊たちが封印され消えていった。

林の聖域内に入ったのだ。

そのままイレーヌのあとを追い、駆けよった。洋館正面にへばりつく。

ふたりも催涙弾をつぎつきと投げこんでいく。

アルが早くも咳きこみながら、左奥螺旋階段の地階に避難するところだった。

チキシヨウ、六〇〇〇ユーロ以上したんだぞつ、青年のカルマびとがつぶやく、今年納品されたばかりだったKGカミュの虎の子の対物ライフルもこれで一巻の終わりだ。

サヨナラ、外教院の乏しい予算で購入した六〇〇〇ユーロ。

手榴弾で無残になぎ倒されたPMG一ライフル、それを尻目に、汚いスラングで愚痴りながら階段の手すりに尻を乗つけて滑りおりた。

玄関の左、大穴の開いた窓、イレーヌがブービートラップの有無を確認、するりと大広間に侵入する。

催涙ガスの立ちこめる大広間、左右に横切るロングテーブル、正面、ガラスドア、その先に噴水のある中庭^{パティオ}。

敵の気配……無い。

イレエヌの手信号　危険無し　スカラワンガ、アリトウの順に侵入。

洋館は凹の字の形をしていた。底面の画にあたる部分に正面玄関。スカラワンガが左翼棟、アリトウは右翼棟へ偵察。無線交信で異常なし、確認しあう。

洋館一階にCNガスが満ち始めた。

三人が大広間の左隅、螺旋階段前に集合する。

イレエヌが、自分の投げすてた四重防弾盾をもってくるよう、アリトウに命じる。

「同志イレエヌ、頬から、血が」

「捨ておけ」

アリトウは気圧され、すぐに盾をとり、前庭にむかった。

スカラワンガは上階に睨みを利かせている。上がるうとはしない。

二階頭上から手榴弾を落とされたら最後、自殺行為になるからだ。

イレエヌは、螺旋階段の右隣にある、隠し扉の開かれた穴を見た。地階へとおりる縦坑だった。バースト無線通信でジシユカを呼び出す。

「侵入成功、参謀総局の入手した極秘情報を送れるか」

老人が画面上、操作している。父祖の戦列・参謀総局の入手した地図情報の開示請求をしているのだ。三人が撃破される危険性を考慮して、情報は侵入成功まで秘匿されていた。

『開示請求通りましたぞ、送信いたします』

まもなく、イレエヌの携帯端末の　十字軍のそれよりも性能は優れている　有機ELEDディスプレイに参謀総局からダウンロードされてきた。洋館の下、地下坑道のひろがっているのが見てとれる。

正式名称？外教院日本戦区・カナガワ第一聖域内基地？KGカミユの本拠地だ。

地下坑道が高精細のディスプレイに余すところなく映しだされている。

「ふん、たいそうな拠点を築きよる」

イレレーヌの美貌を、一瞬、凶悪な獣が舐めるようにしてよぎっていった。

「この縦坑の隠しドア、閉めたらどうなる仕組みかつ？」

スカラワンガが、壁に隠されていたテンキーパネルをチエックして、

「マズいぜ、下手に閉めちまうと解錠できねえ仕組みだ」

イレレーヌを見上げてくる。いまにも嘔きだしそうな憎悪で両眼が血走っている。

アリトウがイレレーヌに盾を手渡す。スカラワンガが忌々しそうに、「同志イレレーヌツ、上に十字軍どもがいやがったら挟撃されっちまうってわけだっ」

ファツクツ、叫ぶ黒人にイレレーヌが、

「貴様の着族は如何した？」

「アリトウ以外の六人はふたりがトーキョーの夕チカワ市で陽動作戦中、残り四人がこっちにむかつてる、あと一〇分もあれば到着だぜ、ミラボーのクマ公よりは早く着くぜっ」

「あいわかった、上階制圧射撃っ」

イレレーヌの命令、男ふたりが盾を構えながら、階段の吹き抜け二階へむけサブマシンガンで射撃を始めた。

中型S M G、イジエマツシ・モデル・バイソン二挺からトカレフ弾薬が火花を散らす。

階段、手すり、つぎつぎと蜂の巣になってゆく。

彼女が頭上を盾で防護しつつ、縦坑を降り始めた。地下一〇メートル近くは降りたろうか？ 地階の坑道に降りたつた。坑道の幅、およそ一メートル。狭い、そして高い天井。換気口が要所に配置され、パイプ類が無数に天井を這いずりまわっている。

防弾盾を構える。数メートル歩いた。正面、左右に坑道がわかれ

ている。T字路だ。

真上から見ると、広間左隅の螺旋階段から中庭前のガラスドアの直下に移動した恰好になる。

T字路の右へゆけば、林とカフェの方角、左へゆけば、中庭の直下。

特殊部隊用の投げナイフを右手にもった。

スカラワンガがおなじようにして地階に降りてきた。

T字路の交差点、少女が右通路奥を、黒人が左のほうを柄付きミラーでチェックする。

イレーヌのミラーに、映しだされた、敵。

立っていた、アルフォンス・カミュが。右通路およそ三五メートル先、十字路の交差点に立っている。守護霊をその身に招喚していた。

洋モクの？ガラム？を口にくわえ、地下道の所々にできた水たまりのひとつを片足で踏んでいる。

立射の姿勢である拳銃を構えている、両手持ちで、構えている。

？マテバE五〇マセラツイオーネ？

外教院が極秘裏にイタリアのマテバ社に発注した五〇口径、五連装リボルバー。

マセラツイオーネ イタリア語で虐殺の意 を冠したアルフォンスの愛銃。

イレーヌの美しい体躯にいくつも風穴を開けてきたアルの愛銃。

数多の同志たちを封印刑にし、眷族らを殺戮してきた、そう、それはまさに？虐殺者？。

左敵影無し、そう告げた黒人の顔、イレーヌの言葉に、怒りを暴発させる。

「野郎オつ、聖域外から狙い撃ちかよっ」

「大熊ミラボーの到着まで時間を稼ぐ所存か、アルフォンスよ？」

イレーヌが不敵な笑みをうかべる、獲物をまえにした雌の舌なめずり、美貌の野獣がいまにも咆吼をあげんばかりだ。

「同志イレーヌツ、あの番犬、カフェの直下まで退いてやがるぜっ」
イレーヌは天井を、じつと、見た。

スカラワンガに瞳を転じささやく。黒人が、ニタリ、嫌な笑みを
うかべる。

「わかつたぜ同志っ」

黒人が四重盾をもって廊下に飛び出す。

アルの射撃、悪霊弾が一発火を噴いた。聖域に入った途端、弾丸
に憑いた暗赤色の禍々しい光がなりをひそめる、弾丸の中に身を潜
めてしまう。

盾に直撃、盾の装甲に食い込んだ。

震動がスカラワンガの全身を襲う。

「痛えっ、野郎っ」

黒人は、イジエマツジ・モデル・バイソンの弾倉^{マガジン} このサブマ
シンガンはバレル下部に円筒状の特異な形状をしたスパイラル・マ
ガジンをもっており そいつを交換した。

引導率3から12まで、中級以下の悪霊三〇名の憑いた、六四発
装填された弾倉を装着したのだった。

セミオートで悪霊弾の射撃を開始する。悪霊弾数発が聖域内の通
路を飛ぶ。

アルが十字路の右通路に避ける。

悪霊弾が聖域を出ると、邪悪な息を吹き返し、赤黒い光を帯びた。
通路の最深奥部へ飛翔して突きあたりで爆発を起こす。

コンクリート製の坑道内で大音響がこだました。

「チキシヨウ、耳も痛えっクソツタレめがあっ」

「その調子だ」

イレーヌは無線機で一階のアリトウを呼び出す、命令を下した。

黒人はこんどは銃身の仰角を上げて、機関部右についたおおきな
セレクタースイッチを下段に押し下げる、フルオート射撃だ。

悪霊弾がアルの遙か頭上、カフェ直下あたりの天井のダクトやパ
イプ類を破壊し出した。

破片がアルに降りそそぐ、守護霊に跳ね返されて、床に四散してゆく。

アルがまた発砲した。こんどは通常弾だった。

盾の銃眼、すぐ間際に着弾した。

黒人がのけ反った。

「クソツ野郎つ狙い撃ちしやがってっ」

さらにフルオート射撃、アルを牽制するため狙って数発、それから一端やめ、また奥のほうの天井をフルオート射撃。アルのいる聖域外の坑道の床に、コンクリや鉄くずの破片がつぎつぎ降りそそいでくる。

アルの射撃、通常の五〇口径マグナム弾が銃眼付近で炸裂した。

「　　　　　つ、ぎゃああああ　　　　　」

弾丸の破片、スカラワングの左耳を直撃、吹っ飛ばしていた。

たまらずに右の坑道に退いた。

肩で息をする、動悸がとまらない、全身の血が、脈打っている。

「痛え、ファック、いまに見てるファッキンツ野郎、アルフォンス、教会の番犬がつ、犬つころがあーっ」

下卑た雄叫びを上げた。

72、アルフォンスVS・イレーヌ

アルはまた左半身を、右に伸びる坑道から慎重にのぞかせてみた。悪霊弾の射撃はやんだ。天井に悪霊弾が多数被弾、換気ダクトを破壊していった。足場のないくらい、アルのいる通路付近は天井からの落下物だらけとなっている。

三階に陣取るKGチマブエが縦坑に致死性神経ガス弾を投げこむ作戦、見抜かれたのか？

敵は聖域内、守護霊結界は展開できない、ガスの餌食になる、一方こちらは聖域外だ、全身を覆う守護霊結界でガスを遮断できる。挟撃する作戦だった。

アルが携帯端末のイヤホンマイクに、

「チマブエ少佐、螺旋階段付近の様子は？」

『依然としてあのスカラワングの眷族が上階を見張っていますよ』

「ガス弾は？ 階段付近に近づけないか？」

『防弾盾をバラして隠しドアをふさいでいます、忌々しいことです』

「アツくなるな少佐殿」

イヤホンから、またフルオート射撃の音が聞こえてくる。

さらに加えて三階付近で爆音が響いてきた。

「どうしたチマブエッ？」

『っ？ 砲撃ですつまたカフェ屋上からRPGの砲撃が再開っ』

「新手の眷族か」

『ええ、お、おそらくは……スカラワングの眷族が集結してきたようですよっ』

またひとときワデカい音がイヤホンから轟いた。

「チマブエッ」

『三階に……集中、爆　　っ待避しま　　ミラボ……の増援を待っ　　』

通話が切れた。

アルがイタリア語で悪態をついた。端末の通話をリンに切りかえる。

「リンッ？」

『アルさんっ、そっちは？』

「だいじょうぶだ心配するな？箱？はもってるな？」

『うん、アタツシケースに厳重に保管してもってるっ』

「よしいいぞ、場所は予定どおり到着してるか」

『ええっと、西側第四シエルター分室、ってヤツに詩本といっしょにいるっ』

「それでいい、ミラボーの筋肉野郎が来援したら、反撃開始だ」

『OKッ作戦が終わったらさっ、みんなしてカフェで呑もうぜ酒っ』

「高校二年が何いつてる？」

『こっちは四〇〇年生きてんだよ、すこしは呑ませろってのっ』

アルは笑って通話を切った。ミラボーのバカやろうの酒癖、リンに移ったか？

「どいつもこいつも飲んだくれやがって」

そういうアル自身、ワインを呑ませるとキリのないほど底抜けに呑むクちなわけだが。

アルコールとタンパク質摂取が生きがいという、健康管理の矛盾したカルマびと、ミラボーの無精髭とスキンヘッドを思いだす。

アルは苦笑いして、やれやれ、そんなふう^{ゼータ・シート}に首を横にふった。

残りの使役霊たち。悪霊^{ゼータ・シート}誘導率16、彼がいま、アルの使役下で最強の悪霊だった。

護りの要は、守護^{サイ・ニュー}霊誘導率13である。こちらはいささか心許ない。

しかし、彼らを信じなければ、最期の瞬間まで……。

それが主たるカルマびとの、自由を奪った者としての、責務だ、ヒトの霊に捧げる、せめてもの贖罪だ、アルはいつもそう、己自身にいいきかせるようにしてきた。

「頼む、おまえたち」

アルが笑いかけると、悪霊が笑って応えてくる、

？

つつつ？

良いだろう、悪霊はいつてくる、俺のまえに生け贄をさしだすがいい、そういつて哄笑してくる。守護霊のほうは、ただ、おだやかにアルのことを慈悲深く、温かく見守ると、かすかな声で告げてくるばかりだ。この守護霊はアルのまえだと照れるらしい、いつも声がちいさい。

アルがT字路のほうを見る。

動きは、ない。

手詰まり感の漂った、その時。

T字路に二名、敵が出現した。防弾盾を構えながら、一メートルの通路いっぱい、横に並ぶ。

そのうしろを黒人の大男が後方へ　リンとリョーコのいる、西側第四シェルターの方角にむかって　ひた走っていった。

「野郎っ」

アルがE五〇マセラツィオーネを構える。

T字路からイレーヌの声が朗々と響いてきた。

「アルフォンスよ、停戦交渉を申し込みたいっ」

イレーヌの信じられない申し出。

「らしくねえぜ、女ストーカーっ、オレの魂奪いに来たんだろっ」

「それよりも交渉だ、KGミラボーが到着してはさすがに分が悪い、ラムゼイの魂、貴様に返そう、浄霊の儀をしてやるなりなんなり、好きにするがいい」

ラムゼイ……。

「そいつはありがたい、でオレたちは破門者に何をさしだせばいい？」

「？カッパドキアの箱？を頂戴したい」

「バカをいえっ、どこの世界に　」

アルは唇の切れるほど噛みしめながら、

ラムゼイツ

ツツツ。

「……どこの……どこの世界に、貴重な？父祖の叡智？それも超弩級の大物と、たったひとりの眷族の魂を交換するバカがいるもんか」

「箱は、西の第四シエルター分室だったな？ 昼間の民間人の少年たちにもたせるとは、貴様どれだけ戦力が不足しておるのだ？」

「どうして？ それを？」

「教えてやろうか？ ダリオ・チマブエ少佐だ、スカラワンガの眷族が催涙ガスで追い立ててな、三階西の先の部屋に追い詰めたぞ、砲撃の停止を、停戦を自ら申し込んできた、箱の在処を教えるのと引き換えにな」

アルは右の拳をコンクリの壁に叩きつけた。

チマブエの裏切り野郎っ。

「ふざけるんじゃないやねっオレは闘うぞっ」

「ならばラムゼイの魂、冥界の最下層に沈め、封印刑に処してもよいのだぞ」

アルフォンスの怒りが頂点へと加速してゆく。

「やれるもんならやってみるよ、イレーヌ」

アルの見ているまえで、彼は、立ちあがった。

防弾盾に隠れていた左のほう、螺旋階段へつづく坑道側にいたほうの男が立ちあがった。

ラムゼイだった。

眼と、鼻から流血を始めていた。もう屍鬼の体が保たなくなっていたのだった。

壊れる寸前で、それでも、

「中尉っ、こんどいっしょに旦那とヤキトリ、呑みにいきましょっつ」

「……待ってる、ラムゼイ、魂、解放してやるからな、いま……」

「中尉っ、気を、つけて、ください……ワサビですよ……いつ、ど

っからどかんとくるか……」

ラムゼイ？

ラムゼイの両眼から血だけではなく、本物の涙も流れ始めていた。

「中尉、ワサビは………危ない………ですっ」

本能で、アルは本能で、弾倉に悪霊ゼータ・シート引導率16を装填。

アルは、真後ろを

っ。

ふりむく、イレーヌが、いた。

アルの真後ろにいた。

黄泉洲行路義光の斬撃　悪霊の憑いた刀身　袈裟斬りにくる。

アルが右手の坑道へ避ける、至近からマセラツイオーネを発砲。

一発目は通常弾。

イレーヌの守護霊に弾き返され、跳弾となって壁を跳ね返ってゆく。

イレーヌが刺突してくる、アルが守護霊跳躍でバックステップ、イレーヌも跳躍してくる、踏み込み　速い　刺突の切っ先、アルの右頬をかすめる、悪霊の光と守護霊が接触。

一瞬、引導抜いがおきる。

イレーヌの悪霊、強い、引導率17だ。

マセラツイオーネ、二発目　あの悪霊弾だ、彼女の右脇に命中した。

17の悪霊の刀身、イレーヌが右から薙ぎ払ってくる、コンクリの壁、障害にもならず、悪霊のまえに溶解、破片がアルに降りそそぐと同時に、黄泉洲行路がアルの左の脇の下を斬撃する。

引導抜いがおこる。

アルが守護霊に魂の増援を送る、ありったけ、送ってやる。

全身が、脈動する、この一撃に勝負を賭ける、魂を削れるだけ注ぎこむ。

アルの口から、鼻から血潮が吹く。

激突は、凄まじかった。狭く、天井の高い坑道に霊たちの悲鳴が

こだまする、悪霊と守護霊との接触面から、黒く、歪んだ炎のようなものが見える。星と星のぶつかり合うとき、地上の生き物たちの泣き叫ぶ声などなんら省みられないように、その黒い光は 死んでゆく霊力たちの最期の発する光だった 無慈悲だった、無慈悲にただ、空間をねじ曲げ、床面の砂埃を舞い上げ、爆発的におおきく成長していった。

アルの守護霊は一撃で黒い光に飲みこまれてしまい 。

保たない 。

アルの守護霊が引導を渡される瞬間、

「我、汝を追放するっ」

弱った守護霊を切り離す、追放する、バックステップ、水たまりを踏みつける、弱い守護霊を招喚、結界を張った。

イレーヌの切っ先、アルから追放された守護霊が悪霊に喰らいついている、そして、

？ さようなら？

アルの、守護霊の微笑み。

っ、アルがなにかいおうとして、

それを最期、守護霊の蒼白色が反転、黒一色になり、それから暗赤色に染まって、イレーヌの悪霊と化していった。

だが、イレーヌも、

「おのれええええ

っ」

彼女も、だった。

アルの悪霊弾がイレーヌの守護霊結界を破壊してゆく。

彼女も、魂を極限まで減らしていた、悪霊と守護霊、両者に魂を一気に送っていたのだ。

漆黒の双眸から血涙が流れ出す。

「っ 小生、汝を追放せんと欲するっ」

彼女も、追放の儀をおこなう、その弱りきった守護霊と悪霊弾が互いを引き裂きながら地上に落下する。彼女の守護霊は悪霊化した。もどれっ、アルが悪霊弾と新入りの悪霊に念じる、しかし、

「させぬっ」

イレーヌが地面の悪霊弾を切っ先で刺し貫いた。

悪霊VS・悪霊 引導被いにはならない？共喰い？がおきた。

先に引導率か霊力をゼロにされたほうが、有無をいわず浄霊されてゆく、それが悪霊同士の闘い、共喰いだ。

イレーヌの刀身の悪霊、引導率を17から12に減衰している、それでもなおアルの悪霊を打ちのめした。

彼女の悪霊は、12からさらに5にまで落としながらも、ふたりの悪霊を、アルの悪霊弾と自分の守護霊だった悪霊にとどめを刺したのだった。

ふたりは、浄霊されていった。

美しい光の乱舞する坑道、高い天井をさらに抜けて、光の粒子たちは火の粉から、光り輝く淡い霊体へとその姿をかえて、散り散りになり、宙へと、星へと還っていった。

アルの視界がかすんだ、両膝を屈してしまう、寸前、こらえた。吐血がとまらない、右の肩をコンクリの壁に押しつけ、姿勢を保つ。

ブルーのサマージャケットが血を吸い、濁った赤茶色に変色していった。

イレーヌが、血涙を拭きもせず、刀身の悪霊に、

「5、であるか？ うむ、よろしかろう」

構える、黄泉洲行路を右手で構え、左手を腰の鞘にやってベルトから引き抜いた。

刀身に宿った新しい悪霊、アルの守護霊だった悪霊を鞘に憑けた。水溜まりを踏む、彼女も弱い守護霊を招喚した。

黒のフォーマルジャケット、白いブラウス、襟元が鮮血に染まっ
てゆく。

両の胸、そのたおやかなふくらみが、血を吸ったブラウスの上から露わになってゆく。

「アルフォンスに問う、なにゆえ、我が愛しき妹、髑り、陵辱の果

てを尽くして封印刑を為したのかっ？」

くらり、イレーヌの上半身がわずかに傾げる、それでも不屈の精神で構えをもどす。

二刀流の構え、この女の剣からすれば邪道、それでもだからこそここで決着をつける、目の前の宿敵の女はそう、告げていた。

アルが血をひと口吐き捨てるど、

「オレに封印される、オレの本心を見せてやるよ」

ニヤリ、笑んだ。

イレーヌも玲瓏と笑みをうかべる。

「ならば……我が刀下の鬼となるがよい」

ゆらり、イレーヌがにじり寄る。

アルの視界、前方の坑道、スカラワンガと銃撃の応酬をしていた坑道、天井の悪霊たちがもどり始めていく。スカラワンガのところへ。

「へっ、丁字路から聞こえたためえの声、ケータイからの声……拡声器か、スピーカで垂れ流したってどこか」

イレーヌが足音を立てず、すり寄る、アルがよるめきながら、後ずさる。

「天井に……穴……開けてやがったな？ スカラワンガの悪霊、天井に、穴、開けるため、だったのか……そっから、坑道に、オレの背後に降りたったのか……」

イレーヌは、笑みをもつて返事にかえた。

カプセルを、墓碑の血を懐カプセルのピルケースからとりだし、一錠、噛み下せばそれでいい、魂を極限まで裂いた痛みは、消える。全身の生皮を剥がされ、溶鉱炉に放りこまれてのたうち回るこの苦痛、飲めば、快楽と激痛とが交互に押しよせ、いずれはおさまってくれる。敵さえ、目の前にいなければ、の話だ。

カプセルを飲むとする、その拳動、それだけでいい、そのわずかな隙さえあれば、その瞬間ケリはつく。

先に飲むとしたほうが、負ける。

カルマびと同士、技を磨き抜いた者同士の近接戦闘とはそうなつてしまう、それが宿命だ。

足音が坑道に反響して聞こえてきた。

坑道をこつちに駆けよってくる音。それはおおきくなり、十字路でとまった。

イレエヌのうしろ、十字路に男が現れた。

アリトウだった。イジエマツシ・モデル・バイソン S M G を両手に構えている。

勝ち誇った笑みで、銃口をアルフォンス・カミュにむけてきた。

73、鏡の継承者

黒塚凜は左の手首に手錠をつけていた。手錠のもういっぽうはア
タツシエケースの持ち手ハンドルにかけられている。黒っぽい塗装
のマグネシウム合金素材でつくられた物々しいケースだった。

いまそれを両腕に抱えている。

詩本龍子といっしょに、殺風景なコンクリ製の部屋にいた。二十
人ぐらいのパーティーの開けそうなおおきさの長方形の部屋。いま
は別の意味でのパーティーの真つ最中だった。

正面、鋼鉄製のドア、外でなにか音がしている。壁になにかを貼
りつけている、そんな感じの不可解な音。

「早くしてくれ外救院っ」

ちいさくつぶやく。

？鏡の解放？を早くっ、その言葉は口に出さず、吐息になって消え
ていった。

龍子は、どこかあいもかわらず超然としていた。

「ねえ凜兄、アルさんがあなたのことを、オレの眷族だ、とか、い
つていたわね」

「え……あ、ああっそうだったねーっ」

「忘れていたの？」

「じゃねーよっ」

「外、危険な状況かしら」

凜は鋼鉄のドアに顔をむけた。

「……たぶん」

「あら、そう？」

龍子は、ぐるり、部屋を見渡した。

おかしな音のしている出入り口の鋼鉄のドア、ふたりが避難する
とき坑道をとおって、このドアをくぐってきたのだ。正反対を見る。
やはりドア、赤茶色の、出入り口より一回りちいさい、けれど大

人ひとり楽にとおれる頑丈そうなドアがあった。

ドアには、日本語でこう書かれてあった。

警告 このドアの手前青い線からは聖域外

そして、まっさらなタイルの敷きつめられた床の上、青い線が引かれていたのだった。

どうやら、赤茶色のドアの手前、幅一メートルのところに描かれた線からは聖域外、ということのようだ。

ふたつのドアは、長方形の部屋のそれぞれ短辺側にある。

「ねえ、このドアからとっとと逃げる、ってのはアリかしら」

「開けてみつか？」

ドアのハンドルを動かそうとする。

ぴくりとも動かなかった。

凜が、なんともきまりの悪そうに頭をひっかいて、

「逃げ場無し、だな」

龍子が考えるポーズをとった。いつもの、あの考える人、のポーズ。

凜は凜で、こう考えていた。

ヤベえよなあ、この一メートルくらいの幅のエリアにいれば、死ぬことはないんだよな、だけど……だけど、龍子は女の子なわけであって、外にいるのはたぶん野郎なんだろう……マズい、めっちゃマズいぞ……死にはしなけど、それ以外は？ なんの保証もないじゃないか……かといって、聖域の内つかわだと、カルマびとだろうと鏡の継承者だろうと、自殺したらちゃんとして死んで、？ 転生？ しちゃうしなあ……何十年後だか何百年後だか知んねーけど、そんな未来に飛ばされんの、イヤだし、詩本と別れんのは嫌だし……。

ちらり、少年は、思案げに拳をあごにあてている少女を見る。

あの言葉が甦る、ふりはらおうとしても、嫌でも、甦ってくる。

あの老人、内敎院長の言葉が。

？リン・クロツカ、頼む、もし万が一彼女が三角縁悪意之鏡の継承者であったならば？

「 どうしたの凜兄」

「 え、あつ、いいやつそのつ」

「 考えたのだけれど、私、聖域の外にいれば絶対に死なない気がするのよ」

凜が龍子を見る。こんな可愛い子いたっけ？ こんな可愛かったっけ？ とそんな表情で。

真実をいいあてられて、凜は混乱の極みになってしまった。

「 あらなによ、いきなり褒めてもなにもあげないわよ？」

「 え？ いやあ、そーゆーんじゃないっつてだっつ、ど、どうしてそう思ったわけ？」

「 初等部のころ、一度だけ大怪我をしたの、憶えてる？」

「 …………… あ、あつ犬に噛まれた、アレかっ」

「 そうよ、お寺の境内だった、その犬、いつも人間を見ると噛みついてこようとして…………」

「 あつたな、うん」

「 で、私、とうとうブチ切れて殴りにいったのよね、あの犬を」

「 おまえも………… むかしっから大概ろくでもなかったよなあ…………」

「 そうしたら返り討ちに遭っちゃって、腕を噛まれて大怪我、高熱が何日間も引かなかったわ」

「 ……………」

「 あんなこと、後にも先にも、あれだけ、だから私神社や仏閣のそばに寄らないようにしていたのだけれど」

「 うん…………」

「 どうしてカソリックに、ミッションスクールに入学しちゃったのかしら？」

「 お、おれに………… 聞くなよなあーっ」

「 おバカさん、凜兄が入学したからに決まっているじゃない」

いま、なんと？

凜は数十秒まえよりもっと、こんなにコイツ可愛かったっけ？

こんな、絶世の美少女だったっけ？ そんな眼で いつものよう

に上目遣いで まじまじと龍子の顔を探った。

でもやっぱり貧。

胸に目線のいつてる凜に、

「しつこいわね、貧乳からいいかげん離れなさいよ」

「えっ、いあやちがうつ、？品？があるなあっ、つて、そーゆー話
っ」

爆発が、した。

ふたりが耳をふさぐ。轟音とともに室内に煙が押しよせてくる。

変な音の聞こえていた鋼鉄製のドア、ふたつの蝶番が破壊されて、
ドアがこじ開けられてしまった。

開いたところから顔をのぞかせたのは、黒人、スカラワングだっ
た。

龍子がなんの躊躇いもなく、制服のポケットから拳銃を出した、
コルトパイソン三五七マグナムだ、撃った、スカラワングの顔にむ
かって。

黒人がもんどり打って、廊下の坑道に倒れこむ、どうやら直撃は
避けられた様子だ。

「て、てめえーっ」

坑道で喚き散らしている。

龍子が、

「凜兄、手錠の鍵をかして」

「ん、ああ」

呆然としている凜から鍵をひったくる、凜の手首の手錠を解錠し
た。自分の手首にこんどは嵌めた。

「し、詩本っ」

凜の叫びを背にうけながら、龍子はアタッシェケースをひったく
り、すたすたと青い線をまたいでいく、赤茶色のドアのまえに陣取
った。

凜がそんな龍子を見て、それから怒鳴りつづけているスカラワン
ガを見る。少年もそそくさと、青い線をまたいで赤茶色ドアの横、

龍子のとなりに移動する。

黒人はドアを押しつけ、長方形の第四シェルター分室に侵入してきた。

「な、舐めやがってクソガキどもがああっ」

両手にイジエマツシ・モデル・バイソンSMGを構えた。

「おい、ガキどもおきてっか？ 死ぬ時間がきたぞ……なあ俺の二ツポン語、あつてっか？」

龍子がコルトパイソンを片手で構えながら、流暢な英語で、

「どうも言い回しが妙だけれど、それはそれでブンガクのだから良しとするわ、ところでスカラワング、貴方、いま自分がどんな状況におかれているか説明を受けたいかしら？」

「ああ、受けてみてえな、ネーチャンよっ」

「その一、このアタツシエケースの中に？ カツパドキアの箱？ が入っているわ、その二、このアタツシエケースには感圧式起爆装置につながれたC四爆薬が内蔵されているの、地面においた瞬間、半径三〇メートル四方は瓦礫の山になるわね」

「……………」

スカラワングの焦げ茶色の顔、不愉快そうに皺がよった。

「その三、このケースはほら、ここを見て」と、持ち手ハンドルの脇を見せる。電卓のようにテンキーパネルと液晶表示の小窓があった、「これよ、四桁の暗証番号を入力しなければ開かないわ、無理にこじ開けようとすれば、やはりC四爆薬が炸裂よ」

黒人がニヤリ、いやらしい笑みをうかべる。

「そうか、つまりだ、ガキのほうぶつ殺して、ネーチャン、おめえから番号聞き出しゃあ万事解決だ、そうだろ？ ああ？」

「何を聞いていたの馬鹿者、凜兄を殺してみなさい、すぐにアタツシエケースを床に置くわよ」

黒人がまぶたをおおきく開ける。見事なドングリ眼を見せて、

「ファックツ、クソツタレめ、ふざけるなこのファキンツ、ファッキンツビッチめっ」

全身を揺すって怒りを露わにしてくる。

「クソッ、憑依霊さえ使いりゃあ鍵のひとつやふたつ、解錠命令で
きんのによっ」

「やはり貴方馬鹿ね、憑依霊の使役には、最低限、その物体の構造
をイメージできる程度の知識が必要なはず、電子錠の構造の知識、
貴方にあつて？」

龍子の物静かな、けれど遠慮のない罵声を浴びせられて、ますま
す黒人の眉間の皺が深くなっていく。

花札ぐれーなら、あの皺にはさめっかな、凜は呑気なことを思っ
た。

「何がいてええんだ、このビッチの貧乳ファッキングがよ？」

「貧乳は余計よ、こんどいったら殺すから、でも貴方にひとつだけ
チャンスをあげるわ」

「ああ、チャンスだ？」

「そうチャンス、凜兄とボクシングで勝負をなさい、凜兄に？まい
った？とひといいわせたなら暗証番号を教えてあげるわ」

「ちよっ、おい詩本っ」

凜が龍子と黒人をせわしく見くらべる。

黒人が腹を抱えて笑い出す。

「傑作だっ、こんなジュニアスクールのガキ、アリの踏みつぶすく
れえわけねえよ、楽勝だぜ」

「だ、そうよ？ 凜兄、憎らしいくらい馬鹿にされているけれど、
勝負、私のために受けてくれるわね」

「だって、いやあ、おれ平和主義っつーか、痛い嫌いっつーか」
「凜兄が勝負を受けてくれなければ、私の体、あの黒人にさぞかし
蹂躪されることでしょうね」

「なっ」

さらに黒人が馬鹿笑いして、

「よせよガール、俺はロリコンじゃねえよ」

「……凜兄、眼をつぶっていて」

「え」

「早くっ」

凜は訳もわからず、眼をつぶった、けれど薄目をほんのちよつとばかり開いてみた。

龍子はいきなり、制服のミニスカートをめくった、コルトパイソンをもつ手で、ひらり、めくって丸見えバッチ来い状態にしてみせる。

凜がすぐさま顔を赤らめた。

黒人が口笛をかるやかに吹いた。

龍子がスカートの裾を下ろして、

「如何、やる気が出たかしら」

「おっもしれえー、誰かがいったぜ、イイ女ってのはヤラしてくれる女だつて、なあっ」

黒人がまた笑った。

龍子が凜を見て、

「なぜ？ 凜兄の顔が赤いのかしら？」

「えっ？ いやあそのっ」

「見たわね凜兄」

「見、見っ、見てねーしっ、っっーか、おれは駄目でなんであの黒人には見せるんだよっ」

「やっぱり見たのね」

と、こんどはコルトパイソンを凜の頭に押しつけた。

「し、詩本ーっ」

黒人がゲラゲラと笑った。

「さあ、勝負よ、凜兄、男のプライドにかけての一本勝負、いいことスカラワンガ？ KGミラボーという人たちの来援がきたら、貴方にもう勝ち目、ないんでしよう？」

黒人が真顔になった。

「ヤベえ、そういや時間が無えんだつたぜ」

「それにいまごろアルさんがイレーヌに勝っているかも知れないわ」

黒人がさらに神妙そうな表情になっていく。それから天井のLED照明をひと睨みして、

「はあ、勝負だクソガキ、相手になれや」

SMGをそうつと、破壊したドアのまえにおく、眼は用心深く凜と龍子を睨んでくる。

「いつとくがネーチャン、コルトパイソン程度じゃ、カルマびとの呪肉体は破壊できねーぜ」

「知ってるわ」

「けっ」

黒人が唇を歪める、凜にむかつて手で、ひょい、と手招きのジェスチャーをする。

「……………まいったねー」

凜が頭をひっかく。青線をまたいで、黒人に近づいていく。

スカラワンガが踏みこむ、いきなり殴った。

凜の顔にヒット、黒人のフックを食らって横殴りにぶっ飛ばされる、コンクリの壁に頭から激突する、そのまま倒れこむ。

「はあっ、おわりだ、ネーチャン、服脱げや」

黒人がニタリ、笑みをうかべ首の骨を鳴らして頭を左右にふった。

「馬鹿ね、勝負はまだよ？」

「あ？」

凜が、ゆらり、立ちあがる。

「痛えっ、頭蓋骨、いったかも？」

黒人がじつと、凜を見る。

「おい、おれまだ？まいった？つていつてねーぞっ」

「……………まいったっていわせねーとダメか？」

「そうよ、私のルールに従ってもらうわ、じゃないとケースを床に置くわよ」

……………ファキンビッチッ、黒人がつぶやく、ファイティングポーズをとる。

凜も両手でガードの姿勢になる。

黒人のボディブロー、顔面へのストレートパンチ、プロボクサー並みの速さで襲いかかってくる。

凧がヘタツピーなフットワークで逃げようとする、あっという間に餌食にされてしまう。

腹に強烈な一撃、くの字に体を曲げる、両膝を床に落としてしまう。

「オラ、クソガキ、とつととマイッタしやがれ、ああ？」

「うるせえ……ちきしょっ」

凧がまたしてもおきあがってくる。顔にアザをつくり、唇から血を大量に流していた。

「テメエ、いつたいなんなんだ？」

黒人が初めて、不思議そうに凧を見てきた。

「凧兄、がんばって、アルさんの眷族、なんでしよう？」

凧とスカラワンガが同時に龍子を見る。

「ま、いった、ね……痛え……」

凧がふらり、上半身をぐらつかせる。

スカラワンガは、ようやく納得がいった、街で東洋人のガキをいたぶろうとしたら、そいつはどっこい、かのブルース・リーの生まれ変わりの少年だった、そんな意外な顔になる。

「道理で、フィジカルが強えわけだ、アルフォンスの眷族だったとはな……こいついあ失礼を働いたようだぜ」

おどけて、日本流のお辞儀をしてくる。

「ちきしょっ」

凧が踏みこむ、殴ろうとした瞬間、スカラワンガのリードパンチ、またしても凧の顔面をとらえる、少年の小柄な体が後ろへ吹っ飛ばす。「アルフォンスの野郎、ジュニアスクールのガキをスカウトして眷族にしやがって、どんだけ人材に困ってやがるんだ？」

黒人のあきれかえったようなため息。それから、ふと、赤茶色のドアを見る。

「ネーチャン、そのニッポン語なんて書いてあるんだ？」

「このドアを開けた先が聖域の外って書いてあるわ」
龍子はドアに背をあずけた姿勢で、コルトパイソンをむけながら答えた。

スカラワンガが、じつと、日本語の文面を見る。龍子のほそい、優雅なシルエットで覆いきれていない部分の文字を見つめる。ステール製のドアの表面、白いペンキで表記された文言に、じつと見る。自身のスマホをとりだした。

「……おう、俺だよ、写真送るから……うるせえ、とにかく送るから書いてある言葉を訳して教えろっ」

自分の眷族に　それは三階でKGチマブエの立て籠もった部屋を包囲している連中だった　部下相手にわめき、怒鳴り散らしている。

なに？　うるせえ、そっちは停戦したんだろっがっ、ああ？　油断がならねえだと？　ファックツ、ファキンツサノバビツチツ
スマホ越しに自分の眷族と口論を始めた。

凜は青線の手前に倒れこんでいた。ふらふらと自分のスマホを制服のスラックスのポケットから出してきた。登録した相手にかける。相手は日本語で応じてくれた。年配女性の声だ。

『はいこちらホテル・アドリアーノです』

「外敕院……総司令部？鏡の間？管理……本部を、お願い……します。あー痛え……」

口から折れた歯の欠片を、吐き出しながらいった。

『あのう、おかけまちがいではありませんか？』

「まち、がいじゃ……ないです」

『外敕院総司令部？鏡の間？管理本部におかけですね』

「そうです……い、いてっ」

凜はタイル貼りの床の上、体を丸めて痛みに耐えていた。

『日本語でなにか伝言ならお預かりいたしますが』

「詩本龍子の鬼、悪魔、痴女……痛えっ、電波女、貧乳……でも俺は………ヒンヌー嫌いじゃ……ない……けど、ね」

龍子は、そんな凜をじつと見つめていた。

「やはり凜兄、その罵詈雑言、いままでときどきスマホにむかってつぶやいていたけれど、いったい、誰にむかってしゃべっているの？」

凜は龍子にちらり、目を向ける。

「……秘密なのだ、いて、いってえっチキシヨウ……」

『お待ちください……』

電話回線の切りかわる音、つづいて、音声ガイドダンスが流れ出る。

『声紋照合中……声紋確認しました……パスワード確認中……確認終了しました……オールクリア、回線をつなげます』

『はい、外救院総司令部？鏡の間？管理本部です、黒塚曹長、おわかりありませんか？』

たくましそうな、はきはきとした声。

「死にそうですっ」

『了解です、しばし、お待ちください』

オフィスの喧騒がバツクに流れている。人の行き交う足音、イタリア語で指示を飛ばす声。

『……朗報ですっ、曹長、いま、？鏡の解放？を準備中ですっ、ようやく念願が叶いましたねっ、おめでとうございますっ』

「……いや、あのね……いますぐお願いしたいんだけど、聖域で死ぬかもって、エライ人に伝えてくれない？ 転生しちゃうよこのままだと、おれ……」

スマホの相手が沈黙する、やや間があってから、お待ちください曹長っ、危険を察知した声になる、相手に事態の深刻さがようやく伝わったようだった。

「待てない、んだけど……ねえ……」

『……曹長っ、いま善意之鏡がサンタンジェロ城に到着しましたっ』

「へへっ、早く、空に……向けて、くれよ……」

龍子と目が合う、彼女は、哀しげに瞳を潤ませていた。

「やっぱり、ただの眷族、じゃなかったのね？」

スマホのカメラ、シャッター音が聞こえた。

スカラワングが写真を撮ったのだ。

「いま送るぞてめえっ」

黒人がスマホに怒鳴った。

74、戦士の生き様

アリトウがイジエマツシ・モデル・バイソンSMGを両手に構えている。

勝ち誇った笑みで、銃口をアルフォンス・カミュにむけている。アリトウは守護霊結界を張っていた。

「同志イレーヌどいてください、射線が確保できませんっ」
「なんの真似だアリトウよ」

「もちろん掩護射撃です、コイツを封印刑にして同志アヌークを、冥界から助けてやってくださいっ」

「……助太刀無用っ」
イレーヌがアルを睨んだまま、一喝した。

「……同志イレーヌ、妹さんを、あ、あの助けたくは、ないので？」
「……小生の……楽しみを奪うでないぞ、いま、もうじき、アルフォンスを斃し、妹の封印刑を解く……小生自身の手で、もうじきな」
「だって、もうふらふらじゃないですかっ」

「小生は……一騎打ちを楽しんでいると申しておる、邪魔立て無用っ」

アリトウが信じられない、そんなふうには呆然とする。

アルが構えをなおして銃口をむけようとしたとき、

アリトウが右を見た、自分の元来た坑道のほうを見た、いぶかしげな顔になる。

「邪魔だっ、貴様はむこうへいつてろっ」

誰かにむかって叫ぶ。

声は聞こえてきた。

「ヤキトリ、ミラボーの旦那は、ササミが好きなんです……」
アリトウがSMGを発砲した。

「なんだ、きつ、貴様っ」

アリトウが後退しはじめ、やがて、アルから見て、十字路、左

アリトウの最期の言葉だった。

二名の悪霊が、爆発した。

アルの視界に映ったのは、爆裂、四散するラムゼイと敵の眷族の肉体だった。

イレエヌが、アルが、霊力の死滅する霊波動の衝撃波で後方へと吹っ飛ばされていった。

75、封印の儀

スカラワンガが慎重そうに後ずさる、破壊したドア付近においた自分のSMGをふたたび手にした。前進をはじめ、龍子のいる、赤茶色のドアのほうへむかって。

「ダメしやがったな……よくもダメしやがったなっビッチッ」
ちらり、青い線を見て、

「青い線からそっちは聖域外じゃねーかよっ」

龍子は無表情を崩さない、アタツシエケースの底面を床に近づける。

「爆発させるわよ」

「けっ、ざっけんなっあっ、ひとつウソつきやがるビッチはなあ、
一〇〇個のウソをつくもんだぜー」

龍子がコルトパイソンの残弾、四発を連射する。

スカラワンガが両眼だけを腕でかばう、腹、脚、それから胸、かばう腕にあたる、黒人の巨漢の前進はとまらない。

「ふざけやがって、ファキンツビッチめがあっ」

血まみれになりながらもSMGを構え、青線を越えた。

黒人は、片手をワークパンツのポケットに突っこんだ、純粹の入った小瓶をとりだし、床に勢いよく叩きつける、水が飛び散る。

スカラワンガの体に、守護霊が招喚されてきた。

「ひゃっはあああああー……このときを待って
いたぜえっ」

龍子が部屋の角に追い詰められる。

「どうしたビッチ？ 床に置け、爆発させろ、もう構わねえっ守護
霊結界があっからよっ」

憎悪、そして色情に猛る獰猛な眼、龍子の肢体を舐め回すようにして見る。

凜がスカラワンガの足首をつかんだ。

「人の、女になにする……つもりだ……よっ」

スカラワングが足蹴りした。

凜が吹っ飛ぶ。

スマートフォンが凜のそばにぽとり、落ちる。

「クロツカ曹長　　っ、天空に鏡がむけられましたっ、

解放ですっ鏡が解放　　」

凜が笑う、ニヤリ、笑って、這いずる、青線のほうへむかって。

黒人が龍子の頭をわしづかみにする、SMGを彼女の傷ひとつない白い頬に押しあてる。

「服脱げ、テメエが自分で脱ぐんだあっ」

「お断りだわ、下衆野郎」

黒人が龍子の頬をひっぱたいた。

彼女の頭がコンクリの壁に当たった。額から一筋、血を流し出す。

「てめっ、おれのオンナ、の顔、傷っ」

凜が両手をまえにさしだし、肘を曲げる、体を前に、前にと動かしてゆく。

青線まであと、あともうすこし　　。

「あ？　死ねやクソガキがっ」

スカラワングがサブマシンガンで凜の頭部にむけた。

龍子が動く。

ふらつきながらも、サブマシンガンにしがみつく。

「凜兄っ、早くっ来てっ」

「うるせえビツチッ」

黒人が龍子の体を引き離そうとする、勢いあまってサブマシンガンが連射された。

凜の体を超えて、コンクリの壁に穴を穿つ、トカレフ弾数発が跳弾となって長方形の室内、壊れたドアのほうへとジグザグの軌跡を描きながら飛翔してゆく。

「このっ、野郎っ」

凜がさらに体をもちあげ、腕を伸ばす、もうすこし、青線まであ

と数センチ。

黒人が龍子の頸を引っつかむ、無理矢理引っぺがした。

凜の指先が、青線を越えた。

それは、瞬時におきた。

凜の体が暗緑色の　どんなエメラルドも、宝石の輝きもかなわないほどの輝きに包まれ出した。

「なっ、なんだ……こりゃっ」

スカラワンガが間抜けな声を出す。

遙かイタリーのヴァチカン市国はサンタンジェロ城から約九八〇キロメートルを？それ？は一瞬で駆けぬけ、凜の体に憑依しはじめたのだった。

霊道が、円周縁善意之鏡と黒塚凜の転生した肉体とのあいだで霊道が開いたのだった。

その憑依霊、いや憑依してくる霊体は、凜の体を前世の姿へと変えてしまった。

眩い光にくるまれながら、凜の黒髪は金髪へ、黒い両眼は蒼く透きとおった双眸へとかわる、日本人の素肌はシミひとつない白い肌へとかわってゆき　。

凜が、凜だった少年が、青線の聖域外の側で立ちあがる。

金髪碧眼、見事なまでの麗しい少年に変化していた。

身長は低いままだったけれど。

「凜兄、身長は、まんま……」

「それは余計だよ詩本」

少年がスカラワンガのつくった水溜まりに足を入れる、全身に守護霊を招喚した。

「て、てめえいつたい……ナニモンだっ？」

少年が艶やかに笑んで、

「ふっ、我が墓碑銘は無銘、故に我が拳を見切ることはできぬ」

スカラワンガは、悲鳴の凍った塊を喉の奥に詰まらせた、そんな顔になる。

「むっ、むむ？無銘のカルマびと？……だと、あの鏡の」
「そう、おれ鏡の継承者」

スカラワンガはシヨックから立ちなおった様子で、龍子の体を脇に抱える、片手のバイソンSMGの銃口を彼女の頭に突きつける、凄絶な笑みをうかべた。

「てっ、テメエのオンナ、なんだろ？ おとなしくしていやがれこのファキンツ化け物がっ」

「カルマびとのテメーからはいわれたかねーや」

どうする？ 凜は 金髪碧眼の美少年は めまぐるしく思考をめぐらす。

龍子も聖域外では不死だ、スカラワンガの脅しはまったくの無意味だった。

けれど、龍子の不死を破門者側に知られるわけには断じていかないのだ。

三角縁悪意之鏡の継承者、もしも、彼女がそうだと知られてしまつたら……。

破門者たちは、決して龍子を放つてはおかない、全力で誘いをかけてくる、父祖の戦列の女王として、迎え入れるために……。

……。
凜が歯ぎしりしたとき。

黒人が右のブーツを左のその靴底で、さっ、と引っ掻く、可燃性の物質が塗布してあったようだ、摩擦で右のブーツのつま先からちいさな炎が立ちのぼる。

スカラワンガはSMGの残弾に数十人の悪霊たちを招喚、憑依させた。

「へっ、へへえっ、いくらテメエが無銘のカルマびとでもこんだけの悪霊相手にやてこずんだろうよっ」

そういつて、SMGを赤茶色のドアに一発撃った。

ドアが悪霊の狂おしい光のまえに粉碎されてしまう。

残りの悪霊弾すべて、フルオート射撃で凜に、彼の守護霊にぶつ

放してきた。

凜の体がたじろぐ、聖域側に吹っ飛ばされないうつ、身を低くして悪霊たちの砲火の洗礼を浴びつつける。

黒人はドアの外、つづく長い坑道を守護霊跳躍の威力を借りながら、猛ダツシユで逃げ始めた。龍子を脇に抱えながら。

「ッ　　ッヤツロオオオオ　　」

凜が咆吼をあげる。体中に喰らいつく無数の悪霊たち　　大半はアルの頭上の天井破壊のため、霊力をすり減らしている　　に一気に呵成に引導被いを始めた。

一人目、霊力ゼロにつ、二人目、おなじくゼロツ、三人目、ゼロツ、四人目引導を被う、五人ゼロ、六人、七人被う、八人九人ゼロツ、十人被う、一一ゼロ、一二被う、一三ゼロツ、一四人目も

つ　　……………二〇人つ、ゼロツ、二人つ　　。

スカラワンガは必死の形相で地上めざして疾走していた、うしろをふりむいた。

いた、凜がいた、金髪の少年が、遠くドア口に立っていた、あれだけの悪霊たちを霊力ゼロにするか、引導を渡して自身の守護霊と化していた。

霊力をゼロにされた悪霊たち二〇人以上がスカラワンガに封印されるため、退却してくる。

「このファツキンツ役立たずどもがああっ」

己の使役霊たちに罵詈雑言を浴びせ、龍子を床のコンクリに放り出す。

少女は気絶していた。

アタツシエケースに、逃げてきた悪霊のひとり、ふたたび魂を削って霊力を与える、招喚して、ケースを慎重に破壊した。

中に、緩衝材にくるまれて、羊皮紙に覆われた？カツパドキアの箱？があった。

凜は、凜として転生して初めての鏡の解放をまえにして、精神的、肉体的にぎりぎりまで消耗、疲れ始めていた。

足を引きずりながら、

「龍子っ、いま助けてやつからっ、いますぐっ」
力をふりしぼり、声を枯らして叫んだ。

魂なら、霊力なら、いくらでも霊道を通り、鏡から供給されてくる。まるで人工の太陽を、核融合炉を背負った、そのエネルギーの使用を神から　もし、いるならば　使用を赦された化け物？

あるいはスーパヒーロー？　どっちだっていい、龍子を助けるんだ、初恋の、惚れた女を助けるんだ、脚を動かせ、黒塚凜、いや無銘のカルマびと　？アムイールの議定書？のカルマびとの？血の盟約者名簿？一覧にその墓碑銘が刻まれていない　故に無銘のカルマびと、そう呼ばれる存在だ、それが？鏡の契約者？なのだから……脚をほら、動かせ黒塚凜っどうしたっ、早くしろ無銘のカルマびとっ？……魂、霊力の供給量が途方もない量だ……骨折した脚でフルマラソンに参加してる、そんな体たらくだ、魂が痛み止めのために　まるでモルヒネのように　自分の体に、血肉にあふれかえってくる、体中が痛みと快楽のイタチごっこだ、殺される寸前から守護霊治療で甦らされる、そんな感覚……それでも、だからこそ助ける、あの子を、おれの、おれの大事な詩本龍子をつ……。

「龍子っ……りようこおおっ……りようこおおおおお
お　　っっっ」

スカラワンガが残忍な笑みをうかべ、震える手で羊皮紙をめくってゆく、見るなっ箱を見るなっ、自分にそう語り聞かせ、大粒の冷や汗を垂らしながら、黒人は羊皮紙を開いてゆく。

スカラワンガは、箱を直視しないよう、そっぽをむきながら、幾重にもくるまれた羊皮紙を剥がしていった。

やがてスカラワンガの褐色の指が、箱の表面に触れた、ダイヤモンドの硬質で滑らかな感触。

「見てやがれ、化け者っ、鏡の継承者っ善意之鏡か無欲之鏡のほうかどっちか知らねえが、ただじゃおかねえ、仕留めたら、封印刑にできたら俺はまちがいなく序列第？列、いや？列かっ、最高の栄誉

暗赤色の光があふれかえった。箱からあふれ出た。坑道が、視界が赤一色に染まる。

それは坑道いっばいにひろがって黒塚凜に襲いかかった。
？聖女のささやき？と呼ばれる悪霊が、黒塚凜の、鏡の継承者へと変貌を遂げた少年の守護霊と激突する。

暗赤色の膨大な負のエネルギーの光、それに対抗する、凜の守護霊の蒼白色。

両者のあいだで引導被いが始まる、瞬く間に両者の接触面から空間がねじ切れ、歪みを生じ始めた。床につもっていた埃が舞い、接触面の黒い光に吸いこまれてゆく。

それは、ブラックホール、だった。ブラックホールをあいだに挟み込んで、赤色に光る銀河と蒼白色の銀河、ふたつの宙同士、激突してつぎつぎと霊力が死んでゆく。

死んだそばからエネルギーの残滓が坑道の壁を削り取っていく。コンクリートが、スポンジケーキに張りついた生クリームみたいにとろけて、黒い光に吸いこまれてゆく。

そこからまた別の方角へ、吸いこまれていった空気が宇宙ジェットとの乱流のように、プラズマガスかなにかが吐きだされていた。

耳を聳する轟音、床面が震動する。稲光、放電現象の乱舞、四方八方へと飛び散ってゆく。

光、焦げる匂い、着ている制服の焼け焦げる匂い。
凜が、後ずさり始める、こらえきれない。

壊れたコンクリの欠片が降りそそいでくる。天井のパイプ類が崩落してきた。

鏡から霊力は無尽蔵に送られつづけてくる。

それでも、引導被いで守護霊の引導率は急落していく。

善意之鏡から新たな守護霊二名が送られてきた。

黒塚凜の体に舞い降りてきた守護霊たち。引導率を2にまで落とした守護霊と交代、凜の体に新たな守護霊結界を展開した。

凜は、一步、二歩、後退していった。

後ろ、聖域の清浄な空気に充ち満ちた世界の波動を感知する。

あと一メートルもない、これ以上後退すれば、聖域内になる。

「頼むよっおれの守護霊っ保ってくれよおおおおおっっ」

ふたりめの守護霊も、あっという間に靈力をゼロに近づける、つぎに守護霊を招喚しようとした、そのとき、

「ッ、ダメ、かつ」

間に合わない、守護霊が靈力を消失させて、凜のなかに封印されに退却してくる。

「ち、きっしょうっ」

手が焦げる、指が一本ずつ吹っ飛んでいく、激痛　子供のころガスコンロでイタズラして、ガスの蒼い炎に指を焼られた、あの激痛が襲ってくる。腕がもげる、吹き飛んでゆく。

両手が蒸発した、凜は息を吸おうとして、肺を焼かれた、口の中へ数千度のガスバーナーを突っこまれた感覚　守護霊の結界が完全に消失した。

凜の肉体に、聖女のささやきの悪霊が直撃する。

凜の、金髪の少年の肉体は、聖女のささやきの直撃を浴びて文字どおり破裂、肉片は蒸発していった。

そして。

凜は見た、異界ゲルマティアの上空、宙から地上にひろがる無残な廃都、残骸の群れを見た。

また、来ちまったか。

ここはわかる、見覚えのある風景、なつかしい？　原風景。

凜は、分厚く白い雲の層をかきわけ、真っ逆さまに墮ちてゆくところだった。

大海へと、白い霧の垂れこめた大海原にむかって墮ちていた。

遙か地平線のむこう、あいつらだ、？天を衝く脚長き者ども？たちだ、奴らの、獣どもの亡霊たちだった。全高数百メートル級の怪

物、細長い骸骨の六本の脚。

獣どもが数万匹もの群れをなして、地平線を埋め尽くしている。宙を墜落している凜から、はつきりと見える。

祝福をしていた、自分を、リン・クロヅカ？ を？

祝福。

それは、？父祖の福音？

聞こえてくる、あの声が。

我等、汝に福音を与えし存在也

汝、己の業を忘れる事なかれ

その肉体、幾度滅しようとも、業は滅せず

故に与える、新しき肉体、業を背負いし汝の為に

？アンタが、父祖……なのかよっ？

宙から、白い宙から墜落してゆく凜の、金髪の少年の問いに答える者はいなかった。

凜の体は大気をつんざき、大海へと墜落していった。

……やがて。

父祖の福音は成就された。またしても。

凜が両眼を開く。

……もどつてきていた。異界ゲルマティアから。

凜の体は、金髪の少年の肉体は、そこにあつた、たしかにあつた、坑道に、その肉体が再構成され、守護霊に包まれ、立っていたのだつた。

火花が舞い落ちてくる。

凜は火の粉を全身にまとい、浴びた。

「悪霊招喚っ」

九八〇〇キロの彼方、ローマ市内、サンタンジェロ城の善意之鏡から悪霊が招喚されてくる。

悪霊ゼータ・タウ引導率19、一名だ、来てくれた、充分じゃねーか。

「あの雑魚にはもったいないねーっっのっ」

スカラワンガがドアに阻まれ、立ち止まっている。ブーツを擦って、また炎を上げている。

凜が、守護霊跳躍した。

高く舞い上がり、天井に両手をつく、反動をつけ、一気にスカラワンガの真後ろに着地する。

黒人がふり返る、顔を恐怖に引きつらせながら。

「ひっ、あああああああああああああああああああ
っっ」

「おい雑魚、おきてっか？ 死ぬ時間が来たぞ」

凜が笑んだ、ニヤリと笑んで、

「さっきの、お返し、だあああああああああああああああ
あああああああああああ」

凜の右フック一発、悪霊の憑いた拳でスカラワンガの横
っ面をぶちのめした。

奴の巨体がコンクリの側壁に激突、壁が崩壊、体がめり込んでい
く。

引導は一撃で、被われた。

スカラワンガを守っていた守護霊が、凜の悪霊と化して黒人を包
みこむ。

「封印刑はっ、い、嫌だあっ

スカラワンガの肉体が爆発する、捨肉して奴の霊体が飛びだして
くる。

不格好な、中世の農夫のような服を身にまとった憑依霊が逃げだ

そうとする。

凜が十字を切って、唱えた、封印の儀、その呪文を。

外教院式典執行典範に則り、

我、汝を封印刑にせんと欲する者也

父と子と聖霊よ、我に呪われし古代ゲルマティア高等呪文の詠唱を赦したまえ

ダスイストヴォスフォラスクラークラムイールツ

汝、我が身のうちに入れっ

?ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ツツ?

スカラワングの断末魔の叫び、坑道中にこだまする。

「地獄に堕ちろ」

凜が吐き捨てる。

凜の胸のまえ、なにもなかった空間、像がひしゃげ、歪んだところから黒い小さな球体があった。それは十字を切って最初の文言を唱えた瞬間、すでに出現していたのだった。

スカラワングの霊体は明滅を繰り返しながら、強大な乱流に絡め取られていた。霊体を逃さない、霊波動の乱流、凜の体へとむかう乱流の流れ。

スカラワングは円を描きながら、渦の中心へと、沈没する宇宙船がブラックホールへと引きずり込まれるかのように、凜のほうへ吸い寄せられていった。

凜の胸のあたり、数十センチ手前の空間、ちいさな黒い球体はさながらそのブラックホールだった。

そこへと奴の霊体が吸い寄せられていく。

スカラワングは、絶叫を最期の瞬間まであげつづけながら、黒い

球体に吸いこまれた。

黒い球体は、一瞬、膨大な閃光を放つてから、消滅した。

乱流が、ぴたり、やんでしまう。

風の奔流も、光の饗宴も、耳を圧する、坑道に満ちた音も、すべては消えた。

あとは、唯、床のそこかしこにある埃が、砂塵が舞うばかりだった。

76、撤退

目の前に、アルフォンス・カミュが横たわっている。手足を動かしているが、おきあがってはこない。

イレーヌは朦朧とする意識の下、黄泉洲行路義光の鞘を杖がわりにして、立ちあがった。

いま墓碑の血を飲めば、^{カプセル}快樂と苦痛にのたうち回ってしまう、魂の回復は、後回しだ。

守護霊に身を包む宿敵ににじり寄ろうとした、そのとき、

『姉君つ、KGミラボーの到着した由にございますっ お早くお逃げをっ』

「……………目の……………まえ、いるのだ、アルフォンス、が……………」

『御身の安泰をおはかりください、それから霊視中に驚くべき者を察知いたしましたっ』

ジシユカは咳きこみながらも、興奮を隠さずいつてくる。

あの冷静な、イヴァン・ジシユカが？

「……………如何した？」

『妹君のっ、アヌークさまの？遺臣？の霊波動、たしかにこのジシユカ、霊視した由にございますっ』

「……………馬鹿を申せっ」

『ニツポンに……………妹君の遺臣がたしかに生きのこっていたのですっ、引導率、霊力、ともに微弱なれど、まちがいなく憑依霊一名、確認いたしましたぞっ』

イレーヌの、戦場で鍛えた決断は早かった。

踵を返す、十字路を右に曲がる、守護霊跳躍で跳んだ。

二〇メートル近くを跳んで、坑道の深奥へと着地する。

真上を見る、イレーヌが坑道侵入に使った縦穴が開いている。アールの背後に回るため、スカラワングの悪霊弾で、その悪霊たちが上へと破壊し登りながら開けた天井の穴。

遙か頭上、深夜の闇を抜け、雨のやんだ空が見えた。

この上はカエデ林だった。洋館と反対方向、ユリスモールカフェを通りすぎ、坂道をまたいで、むかいのカエデ林のなかに入ったあたりだ。

真後ろ、十字路をふり返る、睨みつける。

「アルフォンスよ、ラムゼイの最期、まっこと武人の誉れよ、奴に免じて今は一旦、矛を収めようぞ」

『姉君、お早くっ』

「あいわかつたっ」

イレー又は天空にむかい、守護霊跳躍した。

空、神奈川の丘陵地帯の澄んだそよ風、雨のやんだ空。

カエデ林に一度着地、ファレ・スを招喚する。

風が、長い漆黒の髪を優しげになでてゆく。

「ああ、おはようイレー又、乾いた流血の痕すら押しつけて、きみの美貌は健在だな？」

「痴れ者がっ、我が愛刀に憑くがよいぞっ」

「やれやれ、またお役目か？」

イレー又はフォーマルジャケットの懐から、銀製のピルケースを出した。墓碑の血を一錠、噛み下した。全身のショック症状、快感と苦痛、全身に痙攣の奔るのがわかる。それでも、それを押しつけ、ロフストランドクラッチ？を片手にもっ、また守護霊跳躍をする。カエデ林の奥、闇の夜空を疾駆していった。

77、救援

いま、坑道の中は静けさを取りもどしていた。

アルフォンス・カミュ中尉は、悪霊爆発による霊波動の衝撃波を受けて、数メートル坑道の奥へと吹き飛ばされた。

最初にもどってきたのは嗅覚、だった。ヒトの肉と脂肪の焦げる匂い、吐き気をこらえて、大の字になった体、両腕をもちあげる。つぎに聴覚、遅れて視覚も甦ってくる。

アルは霊視が苦手だ。イレーヌの姿、坑道の中を霊視、密閉空間のためすこしは霊視もやりやすい。いない。

イレーヌの霊波動は、見あたらない。すくなくともあの女はいま、坑道内では使役霊を行使していないってわけだ。

ブルーのサマージャケットの懐を探った。

しわくちやのタバコの箱、銘柄は？ガラム？だ、そいつをとりだし、中から墓碑の血を一錠つまみ出した。

口を含み、噛み下す。

多幸感、それに反発するかのように激痛の揺り戻しに襲われる。全身を震わせ、悪寒に脂汗を垂らしながらも、気力で立ちあがる。アルの強大な魂、その霊力はわずか一錠で全快復されていった。その代償が、この正常な判断力を奪う全能の快感、そしてその過ぎ去ったあとにくる激痛。両者は交互に訪れては、戦士の体力を、精神力を消耗させてゆく。

ぼやけた視界。

屍体、ふたりの眷族の　ラムゼイとたしかアリトウとかいう名前の　四散した亡骸が、あちこちに散乱している。

十字路にまでもどった。ふたりの死んだ？爆心地？だった。

アルは左右を用心深く見た。誰もいなかった。

十字を切る、ラムゼイの魂の為に。

声が響いてきた。Ｔ字路の、螺旋階段横の縦坑のある方角から聞こえてくる。

左手のマテバE五〇マセラツイオーネを構えなおした。着族がＴ字路に現れた。近づいてくる、見覚えのある顔、ミラボーの着族だった。

両手にへんてこな形をした個人防衛火器（PDW）を構えている。FN社のP九〇だった。

横から見ると、まな板に数力所、穴を開けたような長方形のシルエット、スマートではないけれど優秀なPDW　アサルトライフルとサブマシンガンのいいとこ取りをした機種　だった。

着族は銃口を下げ、

「カミュ中尉っ」

叫んだ、ご無事ですかっ、いいながら近づいてくる。

アルは足を引きずり、坑道を歩いていった。

着族の男が肩を貸してくれた。

「スカラワンガの着族たちがいるはずだ、地上の洋館に」

「敵は退却しました、残敵はいませんっ」

「リン、は……クロツカ曹長は……リョーコ・シホン、は……」

「先ほど通信をとりましたっ、ふたりの無事を確認済みですっ」

「そうか……」

アルは震える指先で？ガラム？を一本出してくる。着族がガスライターに火をともしてくれた。肺いっぱい、ニコチンとタールを流しこんでやる。

「……そういやあ、洋館は　」

「はい？」

「洋館のKGチマブエはどうしてる？」

「同僚たちが救援にむかいましたっ、チマブエ少佐、マティルダ少尉、ともにご無事です」

「……しぶといね、チマブエ、これも？政治？かね」

アルが独りごちる、くわえタバコでニヤリ、笑んだ。

78、我が御主人様

チマブエは怒り心頭に発していた。

「マティルダッ、あれしきの戦闘で傷を負うとはっ、何を考えているのですかっ」

「申し訳ありません、我が御主人様^{マヤロー下}」

マティルダは右腕に銃創を負っていた。鮮血がドレスを汚して流れ出ている。

ミラボアの眷族が治療に当たろうとしたら、チマブエに拒否されたのだった。

三階、左翼棟の二部屋のうち、正面棟から離れた部屋。

いまはふたりだけだった。

マティルダがベッドに腰をかけて座っている。

チマブエが絨毯に膝を屈して、丹念に彼女の右の傷の具合を診ていた。

それから救急キットで応急処置を施してやる。

チマブエは、やはり迅速に治療するには守護霊治療が必要のようです、そういった。

マティルダは、ほんとうに申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

やがて、止血の処置が一応上手くいったようだ、腕からの流血だけはとまってくれた。

「貴女の体に傷痕でも残ったらどうするのですっ」

「申し訳、ありません……」

我が主は本気でご立腹でらっしゃる、どうすればお赦しいただけるのかしら、そう少女は真剣に悩んでしまう。うつむいて、自分の両の太ももに視線を落とした。考えても埒は開かず、とうとう悲しくて、蒼い両の瞳に悔し涙をうかべ始めてしまった。

チマブエが立ちあがる。

「よいですかっ、私に無断で体に傷をつくってはなりませんっ」

「……はい我が御主人様^{イエス・マイロード}」

「貴女のからだに傷をつくっても良いのは、世界中で私ひとりだけなのですっ」

その言葉を聞いて、少女が、びくんっ、と体を震わせた。

「……」

咄嗟に言葉が出てこなかった。それでもちいさな貌を上げた。

「この腕のままでは、ゆで玉子^{ポイルトエック}はつくれないではありませんかっ、私の好物をっ」

「っ、わ、我が御主……」

「返事はっ、マティルダッ」

マティルダは、微笑みながら、

「仰せのとおりに御主人様っ（イエス・マイロードッ）」

マティルダは、うれし涙をこらえながら、元気よく答えた。

御主人様の言葉ひとつで、悔しさはきれいに洗い流されていた、こらえきれないくらい、いてもたってもいられないくらい、うれしくって、少女は泣き笑いの微笑みを精一杯、うかべたのだった。愛しい我が主にむかって。

79、徳人の帰還と“大熊”ミラボー

「帰ってえええええええええええええええええー」

川上徳人は、ひよる長い痩せた長身を折りまげて、

「来たー」

思いつきし、タメをつくってから空にむかつてジャンプする、右の拳を突きあげながら。

「ふうっ」

丘陵地帯の澄んだ夜気。雨上がり、しっとりとした水気をたっぷりと吸った、潤った呼吸を吸い、吐きだした。

なつかしい空の匂いを嗅ぎ、思う存分深呼吸をすると、また坂道を登り出す。

夜空の雨雲は途切れ途切れになって、すこしずつ晴れてきている。頼りとなる灯りは、等間隔で立ちならぶ道路照明灯のほのかな照明だけだった。

一步一步、ユリスモールカフェへとむかっていく。

車の路駐しているのがちらほらと見えてきた。

坂道の車道、二車線あるうちの登りのほうにミニバンやらセダンやらが何台も停車している。

「なんだなんだ、いったいどうしたんだ？」

そのまま歩きつづけると、セドリックの路駐しているのが見えてきた。

男がひとり、セドリックの真後ろ、車道にあぐらをかいて座っている。

大男だった。座っていても上背でわかる、それくらい、デカイ。まだ肌寒いというのに、上はTシャツ一枚の軽装だった。下は米軍の整備兵からかっぱらってきてそのまんま履いてるようなミリタリ

「パンツという恰好、米陸軍仕様の六個のポケットのついたヤツだ、通称、シックスポケット。」

「アルさんとどっちが身長高ーかな、徳人は思った。」

「おじさん、こんな夜中にどしたの？」

徳人が訊ねると、男がふりむいた。スキンヘッド、ごま塩のような無精髭の白人だった。

「あ、ヤツベ、おっかない人に声かけちゃったかなー、そう思ったとき、」

「お前、ノリト・カワカミかい」

「実際に乗りの軽い日本語で、気さくに声をかけてくる。」

「え？ おじさん、なんで俺の名前知ってんの」

「アルから聞いている」

「徳人は、ぱっ、と顔を輝かせて、」

「おじさん、アルさんの知りあいつ？」

「おう、まあ、な、呑み友達よっ、俺はミラボーってんだ」

「スキンヘッドの大男は笑うと子供のように天真爛漫な表情になった。」

「徳人が大男のかたわらにしゃがみこむ。」

「大男、ミラボーのまえの路面に、焼け焦げた紙？ のようなものがおいてある。」

「紙は、四隅をのぞいてほとんど燃え尽きようとしていた。」

「これなんですか？」

「おお、血文字魔法陣・屍鬼の儀、終わっちゃったあとの燃えかすだよ」

「徳人は心のなかで、つぶやいた。」

「？ しゃもじ魔法瓶、しぎやき……しぎ焼き？……… 鳴焼??」

「なーんだっ、おじさん、路上で鳴焼かよ、茄子を焼いていたの？」

「ミラボーは、徳人をじーっくりと見てきて、」

「お前、話に聞いているとおりだなあっ」

「がははっ、と豪快に笑った。徳人もつられて。うははっ、と笑っ」

た。

「屍鬼の儀が終わったんでな、浄霊してやったんだよ」

「鳴焼パーティー終わったの？　それで条例？　ああ、神奈川の条例のこと？　うーん、車道で鳴焼やんのって条例違反になんのかなあー」

徳人は真剣に悩み出してしまった。やっぱり、いい漢バカはいくつになってもバカのまんまで良いものだ。

ミラボーは笑った、また、がははっ、と笑った、うつすら、涙を両眼に溜めながら。

「お前さん、あいつかわらず、日本語ダメみてえだな」

「え？　おじさんの日本語のほうがおかしいよっ、ってか、フツ上路上で鳴焼なんて料理しないって、やるんならバーベキューにしときなよっ」

「俺はな、ヤキトリな、アレのササミしか喰わねえんだよ、粗塩ふってよ」

「ああ、アレね、大学の友達とチェーンの居酒屋いって喰ったことあるよっ、ワサビつけると美味いんだよな」

「お、わかってんなノリト、ササミにはワサビだ、身は半生に焼くんだぞ」

「だよね、おじさんっ」

ミラボーが、でっかい手で、ばしんっ、と徳人の背を叩いてくる。徳人もよろこんで、ミラボーの背中を、ばちんっ、と叩き返してやった。

ふたりして、大笑いしあった。

笑っているうち、徳人が気づいた。

「おじさん笑い涙が出過ぎだよっ」

「そうか、そうだなあ、さっきから、止まなくなっくなあ」
「そういつてミラボーは、ぶっとい腕で乱暴に目元を擦った。

ミラボーの両眼は、間近で見ると、号泣したあとのように赤く、泣きはらした痕が見受けられた。

「おじさん、どうしたの？　なんかあったの？」

徳人はなんだか急に不安になって、聞いてみた。

「そりゃあ、おめえ、決まってるだろ、シギヤキの煙がよ、目に沁みたんだよっ」

「あ、なーんだっ、そっかーっ」

そういつて、ふたりはまた、がしがしっ、と互いの背中を叩きあって、大笑いした。

徳人は、ホツとしていた。よかった、このおじさん、悲しくって泣いていたわけじゃなかったんだ、そう思ってた安堵していた。

ミラボーが、脇においていたビニール袋からコロナビールのビンを取本とり出した。

金属の栓を頑丈そうな上下の歯で挟みこみ、一気に瓶の口から抜いてしまう。

「うおっ、おじさんスゲーッ」

同様に何本か栓を抜いた。それからミラボーは、万能ナイフとみずみずしい緑色のライムを袋からとりだしてくる。八分の一にカットしてビンに落としこむ。

「呑むか」

「うん、いただきますっ」

徳人もあぐらをかいて座りこんだ。

ふたりはコロナビールを呑んだ。

ライトな感覚のコロナの味わい、炭酸とライムの酸味、清涼感がたまらなくいい。

「美味しいねっ」

「おう、旨えなっ」

大学生とカルマびとは、雨雲が徐々に晴れて、星のちらほら見えだした夜空を見ながら、コロナビールを呑んだ。

それからミラボーという男は、もう一本栓を歯で開けて、手にビンをもった。

なにか、そう、誰かに捧げるかのような仕草をしてから、ビンを

路上にそつとおいてやる。

この星へと還っていった男の為に、ミラボーは、英語でつぶやいた。

宙を見上げ、つぶやいた。

徳人が飲みほすと、ミラボーがかわりのビンを出してくる。

「もっと呑んでくれや、あいつもよろこぶからよっ」

ゴチになりますっ、そういつて徳人は屈託のない、酔った笑顔をつかべた。

ミラボーはただ、うれしそうにそんな大学生を見ていた。

いい感じに酔ってきた徳人は、手をサマーセーターの首元に突っこんだ。首からさげた懐中時計をとりだしてくる。リュースを押し、保護用の上蓋ハンターケースを開けた。

銀製の土台、ガラス釉の肖像画。エマイユと呼ばれる技法で描かれたふたりの美少女。

アヌークとイレーヌが、そこに描かれてあった。

「おじさん、この子きれいだろうっ」

そういつて、アヌークを指さして見せびらかしてくる。

「……おう、きれいな女の子だな」

徳人は、酔いのまわった、うっとり潤んだ目で、

「この子がねえ、日本にきたんだよ、だから俺、とんぼ返りで帰ってきたんだ」

やっとき、五年だよ、五年ぶりに逢えるんだよ、そういつてなつかしそうに、肖像画を見る。

「アヌーク、五年経ってどんくらい成長してるんだろっなあ、早く逢いたいな、早く……」

ミラボーはまたしても、まじまじと徳人をのぞきこんだ。

「おめえ………ニューズは見てねえのかい？」

「うん、飛行機ん中ずつと寝てたけど？」

徳人はテロ関連のニュースを一切見ていなかったのだった。

「まあ、いい……オラ、もっと呑めやっ」

「うんっ、いただきまーすっ」
ふたりはまた、コロナビールを飲み交わしあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270o/>

その少女破門者につき

2011年7月28日03時29分発行